

I

糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査

福岡県文化財調査報告書第58集

1 9 8 0

福岡県教育委員会

三雲遺跡

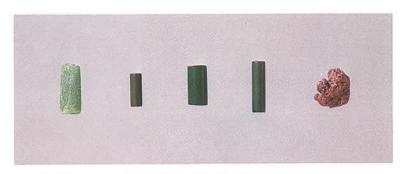
糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査



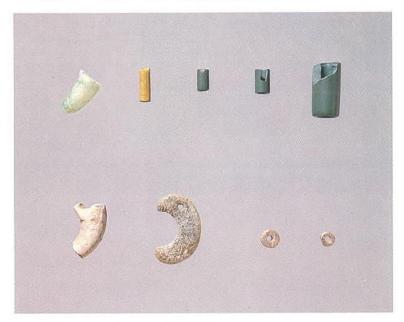
加賀石支石墓出土磨製石鏃



1 番上 II-6出土 ガラス丸玉(実大)



2 番上 II-6出土 管玉・水銀滓(実大)



3 加賀石 I -23出土 玉類(実大)

この報告書は、福岡県教育委員会が糸島郡前原町三雲地区圃場整備事業に際し、前原町土地改良区と協議の結果やむなく破壊される埋蔵文化財を昭和49年から発掘調査した記録の一部であります。

今回の報告は、前原町大字三雲地区の昭和49年度から昭和51年度までに実施した瑞梅寺川以西の予備調査と圃場整備で削平あるいは道路敷となる部分の一部を内容とするもので、『三雲遺跡』 I として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のいくものではありませんが、本報告書を 通して埋蔵文化財に対し、一層の御理解と御協力をいただければ幸いです。

なお、遺跡の保存と調査に対して御協力いただいた前原町土地改良区と地元の 方々をはじめ、関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊することができまし たことを心から感謝申し上げます。

昭和55年3月31日

福岡県教育委員会 教育長 浦 山 太 郎

例 言

1.	本書は,	昭和49年	三11月25日か	ら昭和54年	年3月31日	までに,	福岡県教	育委員会	きが
Ī	国庫補助を	そ受けて,	前原町三雲	東地区圃場	整備事業の	のために	一破壊され	る埋蔵文	化
1	財を発掘誰	関査した1	冊目の報告	書である。	1				

2	本書の	劫等な	ト北 はん	々の通	りであ	7.
/	本者の	単八里/ノ	114 (81	人の地	$() \cup (())$	~ ∩

1	章•			柳 田 康 雄
2	章•			小 池 史 哲
3	章	第	1	節橋 口 達 也
		第	2	節柳田康雄・森田 勉
		第	3	節柳田康雄・橋口達也・馬田弘稔
				小池史哲・川村 博
		第	4	節柳田康雄・児玉真一・小池史哲
				川村 博
	2	2 章·	2 章······· 3 章 第 第 第	2 章············· 3 章 第 1 第 2 第 3

第 5 節……橋 口 達 也

- 3. 遺物の整理・図面作成においては、担当者の外に岩瀬正信・荒武麗子・平田 春美・豊福弥生・田崎博之・印丸久美子が従事し、掲載の写真のうち遺物撮影 は九州歴史資料館の石丸洋主任技師の協力があった。なお、写真の撮影・実測 図の作成および製図は、図版目次・挿図目次に示すとおりである。
- 4. 本書の編集は、柳田康雄があたった。

本 文 目 次

序

第1章 調 査 の 経 過
第1節 調査にいたる経過・組織
1 経 過
2 組 織
第2節 調査方法と調査経過8
1 調査方法と区域設定8
2 第1次(昭和49年度)の調査10
3 第2次(昭和50年度)の調査13
4 第3次(昭和51年度)の調査16
第2章 地 理 的 環 境20
第1節 地 形20
第2節 地 質21
第3章 遺 構 と 遺 物22
第1節 三 雲 遺 跡 の 立 地22 ——第1次予備調査の結果について——
第2節 郡の後地区の調査23
1 はじめに23
2 弥生時代の遺構と遺物24
(1) 土壙状遺構24
(2) 甕棺墓と土器溜土壙26
(3) 住 居 跡31
(4) 土器溜•溝36

3 古墳時代の遺構と遺物40
(1) 住 居 跡40
(2) 周 溝
4 その他の遺構と遺物44
(1) 掘立柱列44
(2) その他の遺物44
5 Ⅰ − 6 • Ⅱ − 1 トレンチの調査46
6 小 結47
第3節 加賀石地区の調査47
1 はじめに
2 弥生時代の遺構と遺物48
(1) 支 石 墓48
(2) I-5石棺墓······53
(3) I-9甕棺墓58
(4) I-10 土器溜の土器65
(5) I -22 • 23 住居跡
(6) I -22 · 23 貯蔵穴
(7) 土壙とその他の遺構95
(8) ピット・包含層出土土器96
(9) I-22・23の石器・紡錘車・鉄器・玉類・鏡片98
3 古墳時代の遺構と遺物
(1) I — 1 トレンチ······· 112
(2) I — 8 • 9 住居跡······ 113
(3) I —23 住居跡 117
4 小 結
第4節 番上地区の調査
1 はじめに
2 弥生時代の遺構と遺物 129
(1) Ⅱ — 6 住居跡 … 157
(2) Ⅱ-6 土器溜······160
(3) Ⅱ-6包含層

(4) Ⅱ-6石器・鉄器・玉類	160
3 古墳時代の遺構と遺物	172
(1) Ⅱ—6土器溜······	173
4 歴史時代の遺構と遺物	190
(1) 土 壙 墓	190
(2) 柱穴様ピット	192
(3) その他の遺構出土の遺物	192
5 小 結	196
6 Ⅱ-2・3の調査	197
(1) 弥生時代の遺構と遺物	198
(2) 歴史時代の遺構と遺物	200
第5節 仲田・柿木地区の予備調査	206
1 はじめに	206
2 仲田Ⅲ—4トレンチ	206
3 柿木 3トレンチ	209

,

図 版 目 次

				本文対照頁
巻頭	図版	1		加賀石支石墓出土磨製石鏃(石丸洋撮影)50
巻頭	図版	2	1	番上Ⅱ-6出土ガラス丸玉(石丸撮影) 172
			2	番上Ⅱ-6出土管玉・水銀滓(石丸撮影) 172
			3	加賀石 I -23 出土玉類 (石丸撮影) ····· 109
図	版	1		曽根丘陵と雷山川・瑞梅寺川流域の平野(北澤廣撮影)20
図	版	2		瑞梅寺川・川原川と三雲遺跡(昭和38年撮影)(パシフィック航業
			材	式会社撮影)22
図	版	3		端山古墳・築山古墳以北の三雲遺跡(昭和38年撮影)(パシフィッ
			þ	. 航業株式会社撮影)23
図	版	4		南上空から見た三雲遺跡(昭和49年撮影)(北澤撮影)23
図	版	5	1	石ケ崎支石墓付近(柳田康雄撮影)22
			2	石ケ崎地区トレンチ(橋口達也撮影)22
図	版	6	1	大テキⅢ西地区トレンチ(橋口撮影)22
			2	大テキⅢ東地区トレンチ(橋口撮影)22
			3	三の坪Ⅱ地区トレンチ(橋口撮影)22
			4	ノマ・マイタ地区トレンチ(橋口撮影)22
図	版	7	1	ノマI―16トレンチ(橋口撮影)23
			2	ミソノ18トレンチ(橋口撮影)23
			3	ミソノ18トレンチ検出溝(橋口撮影)23
図	版	8	1	ミソノ18トレンチ南壁東溝土層断面(橋口撮影)23
			2	ミソノ18トレンチ北壁西溝土層断面(橋口撮影)23
			3	ミソノ18トレンチ溝出土遺物(柳田撮影)23
図	版	9	1	井田御子守支石墓原位置(柳田撮影)23
			2	郡の後・加賀石・仲田付近(柳田撮影)23
図	版	10	1	郡の後1V-2~4発掘区(柳田撮影)24
			2	郡の後Ⅳ-2~4発掘区(柳田撮影)24
図	版	11	1	郡の後IV-2~4弥生前期土壙(柳田撮影)24
			2	甕棺と土器溜土壙(柳田撮影)26
図	版	12	1	郡の後Ⅳ-2~4小児甕棺墓(柳田撮影)26
			2	甕棺北十器溜土塘下層(柳田撮影)27

図	版	13	1	郡の後Ⅳ-2~4 2号住居跡(柳田撮影)31
			2	3 号住居跡の位置(柳田撮影)33
図	版	14	1	郡の後IV-2~4 土器溜(柳田撮影)36
			2	南北小溝(柳田撮影) 38
図	版	15	1	郡の後Ⅳ-2~4 1号住居跡(柳田撮影)40
			2	周溝(柳田撮影)42
			3	周溝內土器出土状態(柳田撮影) … 42
図	版	16		郡の後 IVー4土壙状遺構土器(柳田撮影)24
図	版	17	1	郡の後甕棺(平島美代子撮影)26
			2	土器溜土壙土器① (平島撮影)28
図	版	18		郡の後土器溜土壙土器②(平島撮影)30
図	版	19	1	2号住居跡土器(平島撮影)32
			2	3 号住居跡土器(平島撮影)33
			3	紡錘車 (柳田撮影)31
図	版	20		郡の後土器溜土器(平島撮影)36
図	版	21	1	土器溜土器 (平島撮影)36
			2	小溝土器(平島撮影)38
図	版	22	1	郡の後1号住居跡土器(平島撮影)40
			2	周溝土器(平島撮影)43
			3	石器(柳田撮影)44
			4	Ⅱ-1須恵器(平島撮影)43
図	版	23	1	加賀石 I — 1 支石墓(柳田撮影) ······48
			2	支石墓下部敷石土壙と磨製石鏃(柳田撮影)48
図	版	24	1	支石墓下部敷石土壙(柳田撮影)49
			2	磨製石鏃出土状態(柳田撮影)50
図	版	25		加賀石 I 一 1 支石墓出土磨製石鏃(柳田撮影)51
図	版	26	1	
			2	石棺墓(柳田撮影)53
図	版	27		加賀石 I - 5 石棺墓周辺土器と石錘(柳田・平島撮影)53
図	版	28	1	加賀石 I - 7~10トレンチ(橋口撮影)58
			2	I-8トレンチ(橋口撮影) 113
			3	I -10トレンチ(橋口撮影)65
図	版	29	1	加賀石 I - 9 トレンチ全景(橋口撮影)58

			2	I-9 甕棺墓群 (橋口撮影) ······58
図	版	30	1	1 号甕棺墓(橋口撮影)58
			2	2 号甕棺墓(橋口撮影)62
図	版	31	1	3 号甕棺墓(橋口撮影)62
			2	4 号甕棺墓(橋口撮影)62
			3	5 号甕棺墓(橋口撮影)64
図	版	32		加賀石 I - 9 1 ~ 3 号甕棺 (平島撮影) ······58
図	版	33	1	加賀石 I - 9 4 · 5 号甕棺 (平島撮影) ······62
			2	I-10土器溜土器 (平島撮影)65
図	版	34	1	加賀石 I -23 1 号住居跡 (柳田撮影) ······ 117
			2	1号住居跡内土器出土状態(柳田撮影) 117
図	版	35	1	加賀石 I -22 · 23第 3 層遺構全景 (柳田撮影) ······ 117
			2	2号住居跡(柳田撮影) 122
			3	2号住居跡中央土壙(柳田撮影) … 122
図	版	36	1	3 号住居跡 (柳田撮影)
			2	加賀石 I -22 · 23第 4 層遺構全景(柳田撮影) ······68
図	版	37	1	4 号住居跡 (柳田撮影)68
			2	加賀石 I —22 · 23第 5 層遺構全景(柳田撮影) ······69
図	版	38	1	5 号住居跡 (柳田撮影)69
			2	加賀石 I -22 · 23第 5 層遺構全景(柳田撮影) ·····69
図	版	39	1	6 号住居跡 (柳田撮影)73
			2	7号住居跡(柳田撮影)77
図	版	40	1	加賀石 I -22 · 23第 5 層遺構全景 (柳田撮影) ······77
			2	8 号住居跡(柳田撮影)77
図	版	41	1	加賀石 I —22 · 23第 6 層遺構全景 (柳田撮影) ······78
			2	10号住居跡 (柳田撮影)78
図	版	42	1	10号住居跡柱穴(柳田撮影) 79
			2	11号住居跡 (柳田撮影)82
			3	1号貯蔵穴(柳田撮影)85
図	版	43	1	2号貯蔵穴(柳田撮影)88
			2	3 号貯蔵穴(柳田撮影)88
			3	4号貯蔵穴(柳田撮影)91
図	版	44	1	2 • 5 号貯蔵穴(柳田撮影)91

			2	6 号貯蔵穴(川村博撮影)92
			3	7号貯蔵穴(川村撮影)92
図	版	45	1	8号貯蔵穴(川村撮影)95
			2	9 号貯蔵穴(川村撮影)95
			3	P51 (柳田撮影) ·····96
図	版	46	1	1号土壙墓(柳田撮影)96
			2	2号土壙墓(柳田撮影)96
			3	P6 • P45 (柳田撮影) ·····96
図	版	47	1	加賀石 I -23 5 • 10号住居跡土器(平島撮影) ······70 • 79
			2	住居跡•貯蔵穴土器(柳田撮影)68~95
図	版	48		加賀石 I -23 2~5号貯蔵穴土器(平島撮影) ······88~92
図	版	49		加賀石 I -22 · 23 土器片(柳田撮影) ······68~98
図	版	50	1	加賀石打製石器(柳田撮影)98
			2	加賀石石器(柳田撮影) 102
図	版	51	1	加賀石 I —23石器(柳田撮影) 102
			2	加賀石 I —23石庖丁(柳田撮影) ······ 103
図	版	52	1	加賀石 I —23磨製石器(柳田撮影) 104
			2	蛤刃石斧(柳田撮影) 105
図	版	53		加賀石 I -21~23紡錘車(柳田撮影) 107
図	版	54	1	加賀石 I —23鉄器(柳田撮影) 109
			2	玉類(柳田撮影) … 109
			3	鏡片(柳田撮影) 111
図	版	55	1	加賀石 I — 1 トレンチ(柳田撮影) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
			2	I-1トレンチ(柳田撮影) 112
図	版	56	1	加賀石 I — 1 住居跡(柳田撮影) 112
			2	I-1土壙とピット(柳田撮影) 112
図	版	57		加賀石 I — 1 住居跡遺物 (柳田 • 平島撮影) ······ 112
図	版	58		加賀石 I — 8 住居跡土師器(平島撮影) 113
図	版	59	1	加賀石 I — 8 住居跡鉄器(柳田撮影) ······ 116
			2	I-7~9遺物(柳田撮影) 116
図	版	60		加賀石 I -23 1 号住居跡土器(平島撮影) ····· 117
図	版	61		加賀石 I —23 土師器·須恵器(平島撮影) 122
図	妝	62	(1)	番上付近空中写直 1 (柳田撮影) 125

			(2)	番上付近空中写真 2 (柳田撮影) 125	
図	版	63	(1)	番上Ⅱ-6東部全景1 (小池史哲撮影) 126	
			(2)	番上Ⅱ-6東部全景 2 (柳田撮影) 126	
図	版	64	(1)	番上Ⅱ-6西部全景1 (柳田撮影) 126	
			(2)	番上Ⅱ-6西部全景 2 (小池撮影)	
図	版	65	(1)	番上Ⅱ-6 1号住居跡(柳田撮影) 129	
			(2)	番上 $II-6$ 1号住居跡 遺物出土状態 (小池撮影) … 129	
図	版	66	(1)	番上Ⅱ-6 2号住居跡 (柳田撮影) 130	
			(2)	2 号住居跡 遺物出土状態 (小池撮影)	
			(3)	2 号住居跡 土壙 (小池撮影) 130	
			(4)	3 号住居跡 遺物出土状態 (小池撮影)	
図	版	67	(1)	番上II-6 4~6·10号住居跡 (柳田撮影) ······ 133	
			(2)	4 号住居跡(柳田撮影) 133	
			(3)	5 号住居跡(柳田撮影)	
図	版	68	(1)	番上Ⅱ-6 6号住居跡 遺物出土状態(小池撮影) 137	
			(2)	完掘後の6号住居跡(柳田撮影) 137	
図	版	69		6号住居跡 遺物出土状態 近景(小池撮影) 137	
図	版	70	(1)	番上Ⅱ-6 9~14号住居跡 (小池撮影) 137	
			(2)	14号住居跡 (小池撮影) 152	
図	版	71	(1)	番上Ⅱ-6 15号住居跡(小池撮影) 154	
,			(2)	16号住居跡 (柳田撮影) 154	
図	版	72	(1)	番上Ⅱ-6 17号住居跡 (小池撮影) 156	
			(2)	18号住居跡 (柳田撮影) 156	
			(3)	19号住居跡(柳田撮影)	
図	版	73		番上Ⅱ-6 1号住居跡出土土器 (平島撮影) 129	
図	版	74		番上II-6 1 · 2 · 3 · 4号住居跡出土土器 (平島撮影) ········· 131	
図	版	75		番上Ⅱ-6 5号住居跡出土土器 (平島撮影) 134	
図	版	76		番上Ⅱ-6 5 • 6 号住居跡出土土器(平島撮影) … 137	
図	版	77		番上Ⅱ-6 6号住居跡出土土器 (平島撮影) 137	
図	版	78		番上Ⅱ-6 6号住居跡出土土器 (平島撮影) 144	
図	版	79		番上Ⅱ-6 6 • 7 号住居跡出土土器 (平島撮影)	
図	版	80		番上II-6 8 · 9 · 12 · 15号住居跡出土土器 (平島撮影) ······· 148	
図	版	81		番上Ⅱ-6 17・18・19号住居跡出土土器(平島撮影) … 156	

図	版	82	(1)	番上Ⅱ-6 1号土器溜(柳田撮影)	157
			(2)	1号土器溜出土土器(平島撮影)	157
図	版	83		番上 $II-6$ 1号 土器溜出土土器 • 包含層出土土器 (平島撮影)	160
図	版	84		番上 $II-6$ 石鏃・削器・敲石・すり石・環状石斧(柳田撮影)	160
図	版	85	(1)	番上Ⅱ一6 石斧(柳田撮影)	167
			(2)	番上Ⅱ-6 石庖丁・石鎌・石斧(柳田撮影)	167
図	版	86	(1)	番上Ⅱ6 砥石(柳田撮影)	167
			(2)	番上Ⅱ-6 砥石(柳田撮影)	167
			(3)	番上Ⅱ-6 石剣・石戈(柳田撮影)	167
図	版	87		番上 $II-6$ 石製紡錘車・土製紡錘車・土製投弾(柳田撮影)	167
図	版	88		番上Ⅱ-6 鉄器(柳田撮影)	171
図	版	89		番上Ⅱ-6 鉄器・玉類・水銀滓(柳田撮影)	172
図	版	90	(1)	番上Ⅱ-6 2号土器溜 (柳田撮影)	173
			(2)	土器溜下石積(柳田撮影)	173
図	版	91	(1)	番上Ⅱ-6 3号土器溜(小池撮影)	188
			(2)	2号土器溜土器(平島撮影)	173
図	版	92		番上Ⅱ-6 2号土器溜土器(平島撮影)	173
図	版	93		番上Ⅱ-6 2号土器溜土器(平島撮影)	175
図	版	94		番上Ⅱ-6 2号土器溜土器(平島撮影)	175
国	版	95		番上Ⅱ-6 2号土器溜土器(平島撮影)	184
図	版	96		番上Ⅱ-6 2 · 3 号土器溜 · 包含層土器 (平島撮影) ····································	188
図	版	97		番上Ⅱ-6 陶質土器(柳田撮影)	189
図	版	98	(1)	番上Ⅱ-6 1 · 2号土壙墓(柳田撮影) ····································	190
			(2)	1号土壙墓(柳田撮影)	191
			(3)	2号土壙墓(柳田撮影)	191
図	版	99	(1)	番上Ⅱ-6 3号土壙墓(柳田撮影)	191
			(2)	土師器・磁器(平島撮影)	192
図	版	100		番上Ⅱ-6 歴史時代の石器類(柳田・小池撮影)	194
図	版	101	(1)	番上II-2・3Bトレンチ (柳田撮影)	197
			(2)	Aトレンチ(柳田撮影)	198
			(3)	Aトレンチ(柳田撮影)	198
図	版	102	(1)	番上II-2・3Cトレンチ(柳田撮影)	198
			(2)	番上II-2・3 Cトレンチ (柳田撮影)	198

図	股	反 10	3 (1)	Aトレンチ下層(柳田撮影)	198
			(2)	Aトレンチ下層(柳田撮影)	198
図	敖	反 10	4 (1)	番上Ⅱ一3 溝1と住居跡(柳田撮影)	198
			(2)	住居跡全景(柳田撮影)	198
図	別	反 10	5 (1)	Aトレンチ井戸・土壙墓・溝 2 (柳田撮影)	200
			(2)	Aトレンチ土壙墓(柳田撮影)	201
図	別	反 10	6 (1)	Aトレンチ井戸 (柳田撮影)	200
			(2)	Aトレンチ井戸(柳田撮影)	200
図	戕	页 10	7 (1)	住居跡石器と表採紡錘車(柳田撮影)	200
			(2)	溝2鏡片と住居跡玉類(柳田撮影)	205
			(3)	溝 4 土器 (平島撮影)	199
図	別	豆 10	8	Cトレンチ土師器(1~5)・Aトレンチ井戸土師器(6)・溝4	
			3	皮脚(柳田・平島撮影)	204
図	版	又 10	9 (1)	Cトレンチ輸入中国陶磁器(柳田撮影)	205
			(2)	Cトレンチ輸入中国陶磁器(柳田撮影)	205
図	股	又 11	0 (1)	仲田Ⅲ一4トレンチ(橋口撮影)	206
			(2)	仲田Ⅲ-4Aトレンチ (橋口撮影)	207
			(3)	柿木一3トレンチ(橋口撮影)	209
				挿 図 目 次	
第	1	図	糸島郡	耶と三雲遺跡の位置	2
第	2	図	三雲道	遺跡周辺の地形と主要遺跡	3
第	3	図	三雲道	遺跡地形図	折込
第	4	図	三雲坤	也区地籍及び地区割図	计図
第	5	図	三雲道	貴跡地区割図	寸図
第	6	図	三雲珠	品梅寺川以西航空写真(柳田康雄撮影)	10
第	7	図	番上I	I — 6 発掘調査風景(柳田撮影)	11
第	8	図	端山古	古墳葺石発掘風景(吉村耕治撮影)	13
第	9	図	南小路	客Ⅰ−6の銅鏡調査(吉村撮影)	··15
第	10	図	仲田]	- 16の発掘調査風景(柳田撮影)	17
第	11	図	仲田]	16の発掘調査風景(吉村撮影)	17

第	12	図	加賀石 I - 23の 8 号住居跡発掘風景(柳田撮影) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第	13	図	瑞梅寺川以西出土の遺物(橋口・小池史哲実測、橋口製図)22
第	14	図	第1次予備調査と遺跡の範囲(橋口達也作成)折込
第	15	図	郡の後Ⅳ−2~4地区遺構配置図(柳田・児玉真一・小池・池辺元明・高
			田一弘•日高正幸•小林義彦実測,豊福弥生製図)折込
第	16	図	土壙状遺構実測図(柳田・高田実測、豊福製図)24
第	17	図	土壙状遺構出土土器実測図(柳田・荒武麗子実測,柳田製図)25
第	18	図	甕棺墓と土器溜土壙実測図(柳田・高田実測,豊福製図)27
第	19	図	甕棺墓実測図(柳田・高田実測,柳田製図)27
第	20	図	甕棺実測図(荒武実測,柳田製図)28
第	21	図	土器溜土壙出土土器実測図①(荒武・柳田実測,柳田製図)29
第	22	図	土器溜土壙出土土器実測図②(荒武実測,柳田製図)30
第	23	図	紡錘車実測図(小池実測,柳田製図)31
第	24	図	2号住居跡実測図(柳田・小林実測,豊福製図)32
第	25	図	2号住居跡出土土器実測図(荒武実測,柳田製図)32
第	26	図	3号住居跡実測図(柳田・小林実測,豊福製図)33
第	27	図	3号住居跡出土土器実測図①(柳田・荒武実測,柳田製図)34
第	28	図	3号住居跡出土土器実測図②(柳田・荒武実測,柳田製図)35
第	29	図	土器溜出土土器実測図①(荒武実測,柳田製図)37
第	30	図	土器溜出土土器実測図②(荒武実測,柳田製図)38
第	31	図	土器溜出土土器実測図③(荒武実測,柳田製図)38
第	32	図	小溝出土土器実測図(荒武実測,柳田製図)39
第	33	図	1号住居跡実測図(柳田・高田実測,豊福製図)40
第	34	図	周溝と掘立柱列実測図(柳田・小林実測,平田春美製図)41
第	35	図	周溝出土土器実測図(柳田・小池・荒武実測,柳田製図)42
第	36	図	土師器・須恵器実測図(柳田・荒武実測,柳田製図)43
第	37	図	石器実測図(小池実測,製図)45
第	38	図	$I-2 \cdot 6$, $II-1$ 出土土器実測図(森田勉実測,製図) $\cdots \cdot $
第	39	図	加賀石支石墓実測図(柳田・小林実測,柳田製図)49
第	40	図	支石墓下部土壙実測図(柳田実測,製図)50
第	41	図	磨製石鏃出土状態実測図(柳田実測,製図)51
第	42	図	磨製石鏃実測図(柳田実測・製図)53
第	43	図	加賀石 I — 5 石棺墓位置図(小池·小林実測,平田製図) ······54

第	44	図	加賀石 I -5 石棺墓実測図(小池・小林実測,豊福製図)54
第	4 5	図	石棺墓周辺出土土器実測図①(柳田・荒武実測,柳田製図)55
第	46	図	石棺墓周辺出土土器実測図②(柳田・荒武実測,柳田製図)56
第	47	図	石錘実測図(小池実測,柳田製図)57
第	48	図	加賀石 $I-7$ トレンチ実測図(池辺元明・桜井康治実測,橋口製図)58
第	49	図	加賀石 $I-9$ トレンチ実測図(橋口・馬田弘稔実測,橋口製図)59
第	50	図	加賀石 $I-9$ 甕棺墓実測図(橋口・馬田実測,橋口製図)60
第	51	図	1 • 2 号甕棺実測図(田崎博之実測,橋口製図)61
第	52	図	3~5号甕棺実測図(池辺・桜井実測,橋口製図)63
第	53	図	加賀石 I -10トレンチ実測図(橋口・平島実測,橋口製図)65
第	54	図	加賀石 I -10土器溜土器実測図① (田崎実測,橋口製図) ·····66
第	55	図	加賀石 $I-10$ 土器溜土器実測図②(田崎実測,橋口製図)67
第	56	図	加賀石 I —10土器溜土器実測図③(田崎実測,橋口製図)68
第	57	図	加賀石 I -22・23第4層遺構全体図(柳田・丸山康晴・小田雅文・川村博
			実測,豊福製図)折込
第	58	図	加賀石 I -22・23第5 層遺構全体図(柳田・小田・丸山・川村実測,豊福
			製図)
第	59	図	3号住居跡実測図(柳田・小田実測,平田製図)69
第	60	図	4号住居跡実測図(柳田・小田実測,平田製図)70
第	61	図	住居跡出土器実測図①(柳田・荒武実測,柳田製図)71
第	62	図	5号住居跡実測図(丸山・川村実測,平田製図)72
第	63	図	6号住居跡実測図(丸山・川村実測,平田製図)73
第	64	図	7号住居跡実測図(柳田・川村実測,平田製図)74
第	65	図	8号住居跡実測図(小田・川村実測,平田製図)75
第	66	図	住居跡出土土器実測図②(柳田·荒武実測,柳田製図)······76
第	67	図	加賀石 I —22·23第6 層遺構全体図(柳田·小田·川村実測,豊福製図)…折込
第	68	図	10号跡実測図(小田・川村実測,平田製図)折込
第	69	図	石詰柱穴実測図(柳田・川村実測,豊福製図)79
第	70	図	住居跡出土土器実測図③(柳田・荒武実測,柳田製図)80
第	71	図	住居跡出土土器実測図④(柳田・荒武実測,柳田製図)81
第	72	図	円形住居模式図①(馬田作成,豊福製図)折込
第	73	図	円形住居模式図②(馬田作成,豊福製図)折込
第	74	図	貯蔵穴実測図①(柳田・小田実測,平田製図)86

第	75 図	貯蔵穴出土土器実測図①(柳田·荒武実測,柳田製図) ······87
第	76 図	貯蔵穴出土土器実測図②(柳田·荒武実測,柳田製図)·····89
第	77 図	貯蔵穴実測図②(柳田·川村実測,平田製図)······90
第	78 図	貯蔵穴土層実測図(小田・川村実測,豊福製図)91
第	79 図	貯蔵穴実測図③(小田·川村実測,平田製図)·····92
第	80 図	貯蔵穴出土土器実測図③(柳田·荒武実測,柳田製図)·····93
第	81 図	住居跡・貯蔵穴出土土器片実測図(柳田・荒武実測,柳田製図)94
第	82 🗵	土壙墓実測図(柳田・川村実測,豊福製図)95
第	83 🗵	加賀石 I 22 · 23 土層図 (小田 · 川村実測, 平田製図) ·······96
第	84 図	ピット・包含層出土土器実測図①(柳田・荒武実測,柳田製図)97
第	85 図	ピット・包含層出土土器実測図②(荒武実測,柳田製図)98
第	86 🗵	打製石器実測図(小池実測,製図)99
第	87 図	石器実測図①(小池実測, 製図) 100
第	88 図	石器実測図②(小池実測, 製図) 101
第	89 🗵	石庖丁実測図(柳田実測,製図) … 103
第	90 図	磨製石器実測図((柳田実測,製図) … 105
第	91 図	蛤刃石斧実測図(柳田実測,製図) … 106
第	92 図	紡錘車実測図(柳田実測,製図) … 107
第	93 図	鉄器実測図(柳田実測,製図) 109
第	94 図	玉類実測図(柳田実測, 製図) 110
第	95 図	鏡片実測図(柳田実測,製図) … 111
第	96 図	加賀石 $I-1$ トレンチ全体図(高田・小林実測,豊福製図)折込
第	97 図	I-1トレンチ土層図(小林実測,豊福製図)折込
第	98 図	住居跡出土土器実測図(荒武実測,柳田製図) 112
第	99 🗵	住居跡出土鉄鏃実測図(柳田実測,製図) 113
第	100 図	住居跡出土砥石実測図(小池実測,柳田製図) 113
第	101 図	I-1 住居跡混入縄文土器(小池実測, 手拓) ······················· 113
第	102 図	加賀石 I — 8 トレンチ実測図(池辺・桜井実測,橋口製図) 114
第	103 図	加賀石 $I-7\sim9$ 出土土器実測図(田崎実測,橋口製図) … 115
第	104 図	2号住居跡出土鉄器実測図(橋口実測,製図) 116
第	105 図	加賀石 $I-7\sim 10$ 出土遺物実測図(橋口・小池・田崎実測,橋口製図) … 116
第	106 🗵	加賀石 I - 23第3 層遺構全体図(柳田・小田・丸山・川村実測,豊福製図)折込
第	107 図	1号住居跡土層実測図(川村実測,平田製図) 117

第 108 図	1号住居跡実測図(柳田・川村実測,平田製図) 118
第 109 図	1号住居跡出土土器実測図(柳田・荒武実測, 荒武製図) 119
第 110 図	土師器・須恵器実測図(柳田・平田・荒武実測, 荒武製図) 120
第 111 図	2号住居跡実測図(丸山・小田実測,平田製図) 121
第 112 図	土師器実測図(荒武実測,製図) 123
第 113 図	番上Ⅱ-6 遺構配置図(柳田・橋口・上野精志・馬田・小池・桑田和義・
	平島実測,小池製図)折込
第 114 図	番上 $II-6$ 土層実測図(小池・桑田実測,印丸久美子製図)折込
第 115 図	1・17号住居跡実測図(小池・桑田実測,印丸製図) 127
第 116 図	1 • 17号住居跡出土土器実測図(小池実測,池辺製図) 128
第 117 図	1号住居跡出土土器実測図②(小池実測,製図) 130
第 118 図	2 • 3 号住居跡実測図(小池・桑田実測,印丸製図) 131
第 119 図	2号住居跡出土土器実測図(小池実測,馬田製図)
第 120 図	3号住居跡出土土器実測図(小池実測,製図)
第 121 図	4 • 5 • 11 • 13号住居跡実測図(柳田・橋口・馬田・桑田実測,平田製図)折込
第 122 図	4 • 5 号住居跡出土土器実測図(小池実測, 馬田製図) 135
第 123 図	5号住居跡出土土器実測図②(小池実測,池辺製図) 136
第 124 図	6号住居跡実測図(橋口・馬田・小池・平島実測,印丸製図) 138
第 125 図	6号住居跡出土土器実測図①(小池実測,柳田製図) 139
第 126 図	6号住居跡出土土器実測図②(小池実測,池辺製図)
第 127 図	6号住居跡出土土器実測図③(小池実測,池辺製図) 141
第 128 図	6号住居跡出土土器実測図④(小池実測,池辺製図) 142
第 129 図	6号住居跡出土土器実測図⑤(小池実測,池辺製図) 143
第 130 図	7 • 9 号住居跡実測図(橋口•桑田実測,平田製図) 145
第 131 図	7 • 8 • 9 号住居跡出土土器実測図(小池実測,池辺製図) 146
第 132 図	8号住居跡実測図(橋口・小池・桑田・平島実測,平田製図) 148
第133図	10・12号住居跡実測図(橋口・馬田・小池・桑田・平島実測,平田製図)… 149
第 134 図	10 • 12号住居跡出土土器実測図(小池実測,馬田製図) 151
第 135 図	14 • 15号住居跡実測図(柳田 • 小池 • 桑田実測, 小池製図)折込
第 136 図	14 • 15 • 16 • 18 • 19号住居跡出土土器実測図(小池実測,池辺製図) 153
第 137 図	16号住居跡実測図(馬田・小池・桑田・平島実測,平田製図) 155
第 138 図	18・19号住居跡実測図(柳田・橋口・桑田・平島実測,平田製図)折込
第 139 図	1号土器溜出土土器実測図(小池実測,池辺製図)

第	140 図	包含層出土土器実測図①(小池実測,池辺製図)	159
第	141 図	石器実測図①(小池実測,製図)	161
第	142 図	石器実測図②(小池実測,製図)	162
第	143 図	石器実測図③(小池実測,製図)	163
第	144 図	石器実測図④(小池実測,製図)	164
第	145 図	石器実測図⑤(小池実測,製図)	165
第	146 図	石器実測図⑥(小池実測,製図)	165
第	147 図	石器•土製品実測図⑦(小池実測,製図)	166
第	148 図	鉄器実測図①(柳田実測,製図)	170
第	149 図	鉄器実測図②(柳田実測,製図)	171
第	150 図	玉類実測図(柳田実測,製図)	172
第	151 図	2号土器溜実測図(橋口,桑田実測,豊福製図)	173
第	152 図	2号土器溜出土土器実測図①(荒武実測,製図)	174
第	153 図	2号土器溜出土土器実測図②(荒武実測,製図)	175
第	154 🗵	2号土器溜出土土器実測図③(小池・荒武実測, 荒武製図)	176
第	155 図	2号土器溜出土土器実測図④(小池・荒武実測, 荒武製図)	177
第	156 図	2号土器溜出土土器実測図⑤(小池·荒武実測, 荒武製図) ····································	178
第	157 🗵	2号土器溜出土土器実測図⑥(小池・荒武実測,荒武製図)	179
第	158 🗵	2号土器溜出土土器実測図⑦(小池・荒武実測, 荒武製図)	180
第	159 🗵	2号土器溜出土土器実測図⑧(小池・荒武実測,荒武製図)	181
第	160 図	2号土器溜出土土器実測図⑨(小池・荒武実測, 荒武製図)	182
第	161 🗵	2号土器溜出土土器実測図⑩(小池・荒武実測, 荒武製図)	183
第	162 図	2号土器溜出土土器実測図印(小池実測,荒武製図)	184
第	163 🗵	3号土器溜出土土器実測図⑫(小池実測,荒武製図)	185
第	164 図	包含層出土土器実測図②(小池実測, 荒武製図)	186
第	165 🗵	包含層出土土器実測図③(小池実測, 荒武製図)	187
第	166 図	陶質土器断面実測図(柳田実測,製図)	189
第	167 🗵	1 • 2 号土壙墓実測図(小池実測,平田製図)	190
第	168 図	3号土壙墓実測図(小池実測,平田製図)	191
第	169 図	歴史時代の土器実測図①(川村実測,製図)	192
第	170 図	歴史時代の土器実測図②(川村実測,製図)	193
第	171 図	歴史時代の石製品類実測図①(小池実測,製図)	195
第	172 🗵	歴史時代の石製品類実測図②(川村実測, 小池製図)	196

第 173 図	番上Ⅱ-2・3遺構実測図(高田・内田恵三実測,平田製図)折込
第 174 図	住居跡実測図(児玉・内田実測,平田製図) 198
第 175 図	出土土器実測図(児玉実測,製図)
第 176 図	出土石器実測図(児玉実測,製図)200
第 177 図	井戸実測図(高田実測,平田製図)201
第 178 図	土壙墓実測図(高田実測,平田製図)202
第 179 図	溝 3 · 4 実測図(高田·內田実測, 平田製図) ······ 203
第 180 図	出土土器実測図(児玉実測,製図)204
第 181 図	鏡片•玉類実測図(柳田実測,柳田製図) 205
第 182 図	仲田Ⅲ—4 a b c トレンチ実測図(橋口・森田実測,橋口製図)207
第 183 図	仲田Ⅲ-4出土土器実測図(橋口実測,製図)208
第 184 図	柿木3 fトレンチ実測図(橋口・森田実測,橋口製図)209
第 185 図	柿木3 bトレンチ住居跡内出土土器実測図(田崎実測,橋口製図) 209
	表 目 次
表 1	加賀石支石墓磨製石鏃計測表(柳田康雄作成)51
表 2	加賀石 I 一23 円形住居跡一覧表(馬田弘稔作成)85
表 3	加賀石 I -21~23 紡錘車一覧表(柳田作成) ······ 108
表 4	加賀石 I -21~23 ガラス小玉計測表(柳田作成) · · · · · · · · 110
表 5	加賀石 I 一23 住居• 貯蔵穴時期別一覧表(川村博作成) ······ 124
表 6	番上Ⅱ─6石器・土製品類計測表(小池史哲作成) 168
表 7	番上Ⅱ-6土師器計測表(川村作成)
丰 Q	仲田Ⅲ— 4 出土造構一覧表(棒口達也作成) ····································

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経過・組織

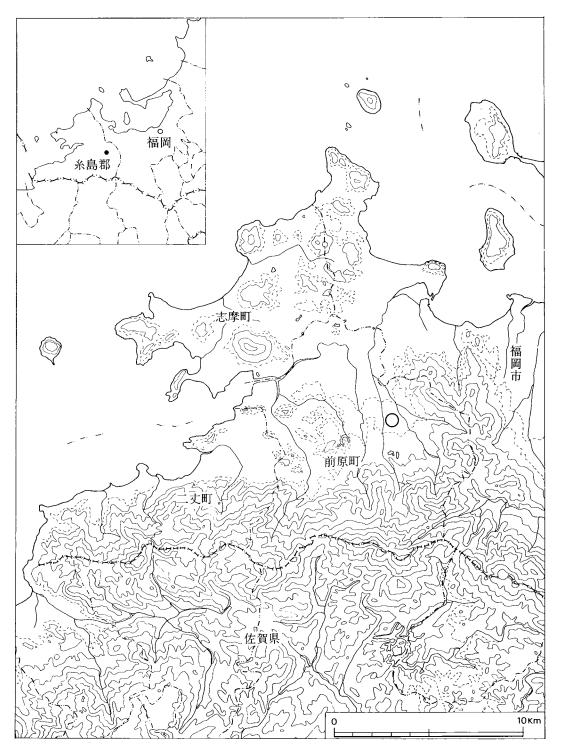
1 経 過

三雲遺跡は、福岡県糸島郡前原町大字三雲に所在する。 文献的には、青柳種信の著わした『柳園古器略考』(文政5年)に初めて登場する。『柳園古器略考』の中の「三雲古器図考」によると文政5年(1822)2月2日に三雲村の農長清四郎が南小路で土塀を築くため3尺ほど掘ったところ、有柄銅剣と銅戈を発見し、その下には小壷があり、さらに掘ると大甕2個があり口と口を合わせていた。これは甕棺墓で、その中には古鏡大小35面・銅矛大小2口・勾玉1・管玉多数があり、また鏡を重ねた間には径2寸8分の扁平で中間に穴がある硝子製品(壁)があったことを記録している。青柳種信は、これが石槨の代わりに甕を用いたものであること、さらにはこれらの出土品を図示して詳細な説明を加えている。文政6年(1823)にも『筑前国怡土郡三雲村古器図説』を著わし、その中に「筑前国怡土郡三雲村所掘出古器図考」があり同様な内容となっている。しかし、後者は写本と思われ、図などに変化が見られる。昭和54年に福岡市歴史資料館蔵の青柳種信資料が公開されたが、この中に三雲出土の3種類の鏡の原拓と銅剣・銅矛・銅戈の図があり、鏡の拓本といい、図も原物に最も近いものである。すなわち、文政5年本も図は原物を見て描いたものでなく写しであることが明らかで、『柳園古器略考』としてまとめる前の原本となる現地での聞書と多くの原拓が存在した可能性がある。

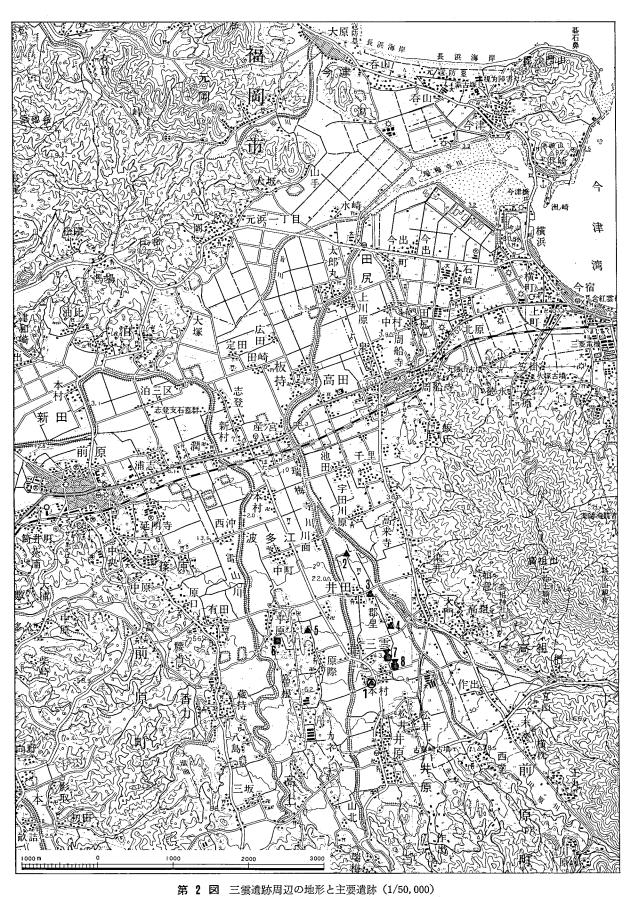
第4番目の記録は、文久3年(1863)にやはり青柳種信が手がけた『筑前国続風土記拾遺』でありこれが出土地点の最も正確な記録となっている。

第5番目には、『福岡縣地理全誌』(明治5年着手,末刊)の抜萃『怡土志摩郡地理全誌』 (大正2年,東京糸島会)に見えるが、これは先の『筑前国続風土記拾遺』から引用したもの のようだ。

また,『柳園古器略考』・『筑前国怡土郡三雲村古器図説』・『筑前国続風土記拾遺』には 三雲の南に接する井原村鑓溝でも天明年間(1781~1788)に溝岸を穿って朱が流れ出した一つ の壷を発見し,その中から古鏡21面・「鎧の板の如きもの」・「刀剣の類」・巴形銅器3個を 取り出したことを記録し,『柳園古器略考』の「同郡井原村所穿出古鏡図」には銅鏡と巴形銅器の拓本を,文政6年本には見取図を掲載している。出土地点は,「鑓溝(三雲村の接界)と いふ溝の中」と書いており,現在三雲と井原の境界は南小路の南方約120mのところにあり、



第 1 図 糸島郡と三雲遺跡の位置(○印) (1/200,000)



- 1 三雲南小路遺跡
- 2 井田用会支石墓
- 3 井田御子守支石墓
- 4 三雲加賀石支石墓

- 5 曽根石ケ崎支石墓 6 平原遺跡
- 7 端山古墳
- 8 築山古墳

同一遺跡内にあるといってよいだろう。

青柳種信が筑前考古学のくさわけであれば、この影響を受けたと思われる吉村千春と大倉種 教も三雲出土遺物にふれている。

吉村千春は、『石剣考』(嘉永6年)に「文化五年二月二日怡土郡三雲村にて地を掘ること三尺許にして銅剣一口を得たり、鉾を上にして植て埋めたり、又同じ銅板の鉾一口、古鏡四面小壷一口を掘出せり」(註1)と記し、「古鏡四面」は文政6年の黒川本にはないことから、文政5年本あるいは、草稿にふれたことが知られる。「古鏡四面」とは、棺外にも4面の鏡が副葬されていた可能性を推察できるものである。

大倉種教は、秋月藩の郷士で文政12年に生まれ、大正6年に没している。吉村千春と共に古器物の調査を行ったようで、『小図小言』を著わしている。『小図小言』には、20点以上の考古遺物と遺跡の図があり、三雲南小路の遺物のガラス壁・有柄銅剣・小壷・甕棺・雷文鏡と井原鑓溝の巴形銅器も含まれている。これは壁の説明文や雷文鏡の「大サ如図」の付記から文政5年の『柳園古器略考』を写したことが明らかである。

考古学的に最初に取上げて発表したのは、八木奘三郎であった(註2)。 八木奘三郎は、吉村千春の『石剣考』と『筑前国続風土記拾遺』を別に取上げているが、これは『石剣考』の年号の間違いと「古鏡四面」と「白銅鏡三十五枚」の違いからきたのであろう。

その後,高橋健自が『銅鉾銅剣考』(大正5年)に引用し、文政5年の黒川本『筑前国怡土郡三雲村所掘出古器図考』を紹介し(註3)、大正7年には古鏡の面から富岡謙蔵が取上げるところとなった(註4)。 以来中山平次郎を始め、多くの考古学者が注目するようになるが、『筑前国怡土郡三雲村古器図説』と『柳園古器略考』は昭和5年の出版まで待たなければならなかった(註5)。

このようにして世に知られた三雲遺跡は、『魏志倭人伝』の「東南陸行して伊都国に至る。官を爾支と曰い、副を泄謨觚、柄謨觚と曰う。千余戸有り。世々王有るも皆女王国に統属す。郡使の往来、常に駐まる所なり。」の記事と相まって、3世紀前半代の「世々王あるも」の「王」の前身として、南小路と鑓溝の2代の「王」がよみがえってきた。

中山平次郎は、三雲南小路の出土地点について、『柳園古器略考』(文政5年)の原本発見 以前に『筑前国怡土郡三雲村所掘出古器略考』に「南小路」の地名が見えるのと『筑前国続風 土記拾遺』の「細石社の西半町田間」を参考にして、南小路は細石神社の西方にあたることか ら数度にわたって現地を訪れ今回の発掘地点である「南小路 I — 6 」を推定していた(註6)。

この「伊都国」の中心地ともいえる「王」の居住する地域に、昭和50年度を初年度とする三 雲地区圃場整備が計画された。この計画が福岡県教育委員会文化課に持込まれたのは昭和48年 度であった。前原町土地改良区は、遺跡の重要性を知っていて、開発側としては異例なほど早 い事前合議となった。



第3図 三雲遺跡地形図(1/6000)

福岡県教育委員会は、これを受けて町土地改良区と数回にわたる協議の結果、遺跡の重要性からその性格および規模を確認し、埋蔵文化財の保護と圃場整備の調整を計るため、事前に緊急発掘調査を実施することになった。発掘調査は、昭和49年度に国庫補助を受けて福岡県教育委員会が主体となり、遺跡の重要性の再確認と同時に遺跡の範囲と深さを調査し、圃場整備の設計における切盛りを調整する目的をもったものであった。発掘調査をするまでもなく、この地域の水田区画は条里制が施行されていることを物語っているため、圃場整備の基本計画に方1町区画を乱すことなく条里方向に合わせることも要望した。 (柳田)

2 組 織

(1) 昭和49年度の発掘調査構成

福岡県教育委員会は,遺跡の重要性から発掘調査指導委員会を設置し,6人の委員を委嘱した。

委員長	原田	大六	考 古	日本考古学協会員			
副委員長	坪 井 氵	凊 足	同	奈良国立文化財研究所			
			,	埋蔵文化財センター長			
委 員	白木原	和 美	同	熊本大学教授			
"	藤田	等	同	静岡大学助教授			
"	西 谷	正	同	九州大学助教授			
"	永 井	昌文	解剖	九州大学教授			
発掘調査の構成は次の通り。							

福岡県教育委員会

総	括	教 育	長	森	田		實
		管理部	部長	西	村	太	郎
		文化課	課長	藤	井		功
		同課長	補佐	平	井	元	治
		同参	事	Ш	崎	隆	夫
庶	務	庶務信	系長	前	田	栄	_
		主	事	瀧		龍	=
		同		山	本	文	和
発掘	調査	調査	係長	松	岡		史
		技	師	柳	田	康	雄

同 橋 口 達 也 同 石山 勲 同 児 玉 真 一 同 小 池 史 哲 同 浜 田 信 也 司 森 田 勉 同 馬田弘稔 同 木 下 修 同 佐々木 隆 彦 同 上野精志 同 池辺元 明 孎 託 宮 崎 貴 夫

調査補助員として,桑田和義・平島勇夫・高田一弘・三津井知廣・小田雅文・丸山康晴・川村博・小林美孝・堀田秀茂・桜井康治の諸君が参加した。

なお,下記の協力があった。

清水利美・三島重三・山崎信行(以上前原町教育委員会)冨田浩・溝口茂(同同和対策室)中村信・吉住誠(同土地改良区)山田進・尾崎信貴・三島常登・白水建造・尾崎義基・樋口ハナ子・山下政次郎・水崎正実・宮崎竹臣・尾崎岩夫・小川武人・原野信次郎・平山正城・窪又男・中峯勇男・平山武美・木龍トヨ子・平山久太・水崎国雄・光山三祚・三島嗣・塩田鷹男・塩田稔・塩田正行・塩田義基・今井正己・窪正美・牟田憲次郎・浅田勝恵・浅田数市・鬼尾政雄・浅田春子・西木戸重蔵・原野明・原野栄・原野豊・新六郎・尾崎一雄・王野種規・王野一美・鬼尾清・山下澄基・水崎伊右エ門・富永マツエ・中村輝男・水崎勉・神武ヨシエ・木原俊枝・中村万里子・中村宗次・木龍勝己・窪盛雄・窪隆志・内川九州男・平山武児(以上三雲地区土地所有者)

(2) 昭和50年度の発掘調査構成

井原•三雲遺跡発掘調査指導委員

委員長	原 田	大 六	考 古	日本考古学協会員
委 員	白木原	和 美	同	熊本大学教授
同	藤 田	等	同	静岡大学助教授
同	西 谷	正	同	九州大学助教授
同	永 井	昌文	解 剖	九州大学教授

福岡県教育委員会

総 括 教育長 森 田 實 管理部部長 西村太郎 藤井 文化課課長 功 野 上 同課長補佐 保 川崎隆夫 司 龍二 瀧 庶 務 主 事 調査係長 松 岡 史 発掘調査 宮小路 賀 宏 技術主査 柳田康雄 技 師 同 馬田弘稔 宮崎貴夫 嘱 託

調査補助員として,小田雅文・丸山康晴・川村博・小林美孝・井上和人・内田俊和・内藤康 裕・松本修一が参加した。

なお,下記の協力があった。

清水利美・泊正義・山崎信行(前原町教育委員会) 溝口茂(同同和対策室)中村信・井上克己・吉住誠(同土地改良区)塩田源吾・浅田健一・三島正己・木龍トョ子・木龍勝己・須山政勝・窪又男・三島重助・三苫義信・中峰芳夫・平山久太・水崎国雄・中村萬義・中村照子・平山正城・平山昌子・平山武児・平山久子(三雲地区土地所有者と調査協力者)

(3) 昭和51年度の発掘調査構成

井原•三雲遺跡発掘調査指導委員

考 古 奈良国立文化財研究所 坪 井 清 足 熊本大学教授 白木原 和 美 同 等 静岡大学教授 藤田 同 九州大学助教授 西 谷 正 同 九州大学教授 解 剖 永 井 昌 文 福岡県教育委員会 實 総 教 育 長 森 田 括 西 村 太 郎 管理部部長 藤井 功 文化課課長

同課長補佐 川崎隆夫 同 武久耕作 同参事補佐 松 岡 史 庶 務 主 事 大 神 発掘調査 技術主査 宮小路 賀 宏 主任技師 柳田康雄

調査補助員として,丸山康晴・小田雅文・川村博・内田俊和・山野洋一が参加した。 なお,下記の協力があった。

清水利美・浜地哲輔・山崎信行(前原町教育委員会)中村信・井上克己・吉住誠(同土地 改良区)塩田源吾・浅田健一・山下繁雄・塩田義基・内川政雄・杉山日出利・西木戸政次 郎・波多江勝記・吉村耕治(三雲地区協力者)

第2節 調査方法と調査経過

1 調査方法と区域設定

昭和49年度の調査は,予備調査であったためトレンチ発掘法を採用した。したがって地区名は小字名を頭に付し,次に条里の方1町角ごとに $I \cdot II$ を付けた。さらに細分するために現況の水田・畑の区画ごとに番号を与えた。水田・畑の番号は,北東端を1にし北から南に進み,次に東から西に平行式坪なみ方式を原則とした(第4図)。この地区名で三雲南小路の甕棺墓所在地を示すと「南小路I-6」ということになり,発見者の農長(三苫)清四郎宅は「南小路 $I-1\sim4$ 」(註7)である。この方式の地区名表現法でいけば,遺跡(地区)の所在地と各地区間の関係は一目瞭然であろう。

さらに、各遺構間の正確な距離を出すためと遺構実測の基準とするために、三雲地区全体にグリッドを設定した。遺跡は瑞梅寺川以東に集中するところから、北端の井田の遺跡群の中心を通り、障害物の少ない井田 — 郡の道路に南北の基準線をのせ、「郡の後Ⅲ」・「仲田 I」・「加賀石 I」の交叉点に基点 0 を置いた。方向は第 5 図のように現況の条里に合わせて 100~m 方眼を大基準として、発掘区の小区分は 2~m グリットの小地区を設定した。すなわち、基点 0~m から北側は N、南側は S、東側は S 、 西側は S を頭に付し、基点 S から遠ざかるにしたがってメートルで数字を後に付した。たとえば、「仲田 S 、「中田 S 、「中田 S 、」の1号住居跡のファイアンスの出土地点は S 80 S 、

を表わすことにした。

ところが、昭和51年度までこのグリッドの基準杭が各地に残っていたのであるが、昭和52年度以後は耕作で基準杭が失われる以外に、圃場整備事業で南小路以外の基準杭が徹底的に失われる結果となった。したがって、昭和52年度以後は圃場整備の基準杭を使用することになった。これによると基点0は数センチメートルの差であるが、南北に800m移動すると東西に約4mの差が生じてしまった。次回の報告書からは、圃場整備基準点との差を正確に出し、圃場整備の基準線を利用した地区割りとしたい。

以上をまとめると,遺跡名はあくまで「南小路 I-6」を使用し,その中の遺構番号を付け加えることとして,「南小路 I-6の 1 号甕棺墓」と呼ぶ。しかし,現在の土地所有関係抜きで全面発掘調査をすることにでもなれば,I-6 などの数字は関係なくなるが,「南小路」などの字名は残したいものである。

次に字名の呼名を示しておく。

コアザ アザメイ	地番	コアザ アザメイ 地 番	:
金 口(カナグチ)	$1 \sim 7$	鬼 木 (オニキ) 343~3	360
高 柳(タカヤナギ)	8 ~ 14	流 田(ナガレダ) 361~3	367
大 町(オオマチ)	15~23	柿 木 (カキノキ) 368~3	378
柳井町(ヤナイマチ)	24 ~ 30	八反田(ハッタンダ) 379~4	100
平小路(ヒラショウジ)	31 ~ 48	宮の下(ミヤノシタ) 402~4	121
加賀石(カガイシ)	49 ~ 75	ヤリミゾ 422~4	138
向川原(ムカイカハラ)	76 ~ 83	上 覚(ジョウカク) 439~445・447~4	152
郡の前(コオリノマエ)	84 ~ 96	南小路(ミナミショウジ) 446・453~3	370
郡の後(コオリノウシロ)	97 ~ 136	中川屋敷(ナカガワヤシキ) 471~4	482
仲 田(ナカダ)	137~150	屋 敷 (ヤシキ) 483~!	508
石 橋(イシバシ)	151 ~ 159	井の川(イノカワ) 510~524・527・	529
サキゾノ	160 ~ 183	下 西(シタニシ) 526・528・530・53	1 •
イフ	184~190	533~562	
寺 口(テラクチ)	191 ~ 220	地蔵川原(ジゾウカハラ) 532・572~60	4•
八 龍 (ハチリュウ)	221~244	615 • 616	
堺(サカイ)	245~283	五反間 (ゴタンマ) 563~	570
楠木屋敷(クスノキヤシキ)	284 ~ 311	芝 原(シバハラ) 607~615・616~	646
塚廻り(ツカマハリ)	312~325	下川原(シモカハラ) 648~	667
番 上(バンジョウ)	326 ~ 336	二の坪(ニノツボ) 668~	678
深 町(フカマチ)	337~342	口の坪(クチノツボ) 679~	690

ミソノ	691~703	1 , -	005 045
~ / /	091 703	ノマ	837~845
マイタ	704~710	牛 首(ウシクビ)	846~861
ノソエ	711 ~ 728	深田(フカダ)	862~873
杉ソノ(スギソノ)	729~734 • 736	五反田 (ゴタンダ)	874~882
福 丸 (フクマル)	735~742	三の坪 (サンノツボ)	883~891
松の木 (マツノキ)	742~747	石ケ崎 (イシガサキ)	892~922
有 坂 (アリサカ)	749~774	ウトオ	930~971
堤 下 (ツツミシタ)	778 ~ 787	和 田 (ワダ)	980~991
香 才 (コウザイ)	788~800	原 (ハル)	992~1076
カイダ	801~808	ネンブツヅカ	6077~1107
二 股 (ニタマタ)	809~835	シムラヤシキ	1108~1121
The state of the s			

井 田 (イタ)

大テキ (オオテキ)

井 原(イワラ)

ヤリミゾ・上学・上覚・有坂

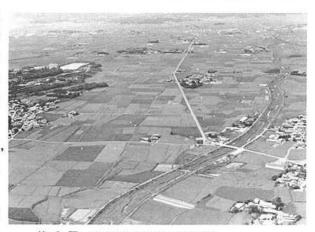
2 第1次(昭和49年度)の調査

昭和49年11月14日に第1回三雲遺跡発掘調査指導委員会を招集して,委員長・副委員長を選任し発掘調査計画と調査指導を受けた。第1次調査は,昭和50年度を初年度とする圃場整備事業に対し,遺跡の保護と圃場整備事業の調整を計る目的をもった予備調査に主眼を置いた。

これに前後して,福岡県教育委員会は,前原町教育委員会・土地改良区・同和対策室と共に地元関係役員と数回にわたり,遺跡保存と調査に対し協力依頼をして,その対策を協議した。

発掘調査は、稲刈の終了をまって、 昭和49年11月25日から実施し、昭和 50年3月15日で終了した。

発掘調査は,瑞梅寺川以西から進 めることになっていたが,事前の協



第 6 図 三雲瑞梅寺川以西航空写真

議なしに三雲地区簡易水道の工事着工が決定したので、前原町水道課と地元を含めた協議の結果、同時に発掘調査を実施することにし、工事着工を昭和50年1月に延期することになった。 とくに水源地となる「番上」の約900㎡は完全に破壊されるので全面発掘調査となり、配水管を埋設する道路敷も立合調査を前提とした。

- 11月25日 細石神社にて午前10時から鍬入式を行なう。原田大六指導委員長が鍬入。福岡県教育委員会文化課藤井課長・松岡係長・柳田・橋口・前原町2名・三雲代表2名・作業員約50名が出席。その後、井田大テキと番上の水源地の2ケ所に分れてトレンチを設定発掘開始。
- 11月26日 番上は幅2mのトレンチを地区の南辺近くに東西に1トレを設定し、それに直交する南北トレンチを2トレとした。さっそく弥生時代遺物を主体としたものが多数発見され始めたが、大テキは遺構・遺物の出土がなく、石ケ崎地区に移る。
- 11月28日 番上では、第5トレンチまで設定することによって遺物の分布の見通しがついたので、グリット方法により地区分けすることにした。三の坪Ⅱ区にトレンチ設定。
- 11月29日 原田大六委員長来訪。五反田Ⅱ区にトレンチ設定。
- 12月1日 三雲全体を方眼による地区分けをするために、郡里集落の南西隅の十字路南西隅を 原点とした基準杭打ちを行なう。
- 12月4日 原田大六委員長来訪。番上・深田Ⅱ区・五反田Ⅱ区を調査。
- 12月5日 □の坪II・ノマI・II・ミソノ・マイタI・II区のトレンチ設定をし、午後から端 山古墳の伐採を始める。
- 12月13日 大テキ・石ケ崎地区の写真撮影。端山古墳の伐採続行。原田委員長来訪。
- 12月16日 築山古墳の伐採を行なう。番上Ⅱ-6の調査続行。端山古墳の測量を始める。
- 12月17日 番上Ⅱ-6の6号住居跡から素環頭刀子出土。築山古墳の伐採続行。
- 12月20日 番上Ⅱ-6の6号住居跡からガラス管玉出土。大テキ・石ケ崎の埋めもどし。郡の後の水道配管工事に立合う。弥生前期から古墳初頭までの遺物が分布する。
- 12月23日 三の坪・五反田・深田の 埋めもどし終る。午後2時から発 掘調査指導小委員会を行なう。原 田・永井・西谷3委員と藤井課長 ・川崎参事・松岡係長・柳田・橋 口・小池3技師が出席した。委員 会では、調査経過を報告し、現地 を案内して指導を受けた。
- 12月27日 瑞梅寺川以西の埋めもど しを終了。仲田Ⅲ-4のトレンチ



第7図 番上11-6 発掘調査風景

- の表土剝ぎを行なったところ住居跡 3 軒ほど確認。番上Ⅱ—6 は遺物の出土状態の写真撮影し、年内の作業終了。
- 1月6日 新年の作業開始。番上Ⅱ-6・仲田Ⅲ-4は昨年の続行。柿木3にトレンチ設定。
- 1月7日 流田Ⅱ-8・10, 芝原Ⅲ-9にトレンチ設定。柿木・仲田・番上は続行。
- 1月10日 番上Ⅱ-6の全景写真撮影。八反田の伐採作業始める。
- 1月16日 番上Ⅱ-6の遺構実測が終了して,番上の水道関係の緊急調査を完了した。端山古墳の前方部と周溝確認のため、塚廻りと八反田Ⅰ-1にトレンチを設定した。
- 1月19日 八反田・中川屋敷地区に方眼の基準杭打ちを行なう。
- 1月24日 築山古墳の墳丘写真撮影の後,前方部・くびれ部・後円部周溝確認のためのトレンチ設定を行なう。
- 1月31日 端山古墳のくびれ部葺石追求続行。八反田 I 1 の中世溝と古墳期甕棺写真撮影。 郡の後 I ・ II 地区にトレンチ設定。築山古墳・端山古墳・中川屋敷 I は続行。
- 2月5日 加賀石 I 地区のトレンチで弥生前期の甕棺群と古墳期の住居跡を確認する。中川屋 敷・南小路地区の水道配水管工事に立合う。郡の後・中川屋敷 I — 8 を続行。
- 2月8日 端山古墳の両くびれ部の写真撮影。八反田 I-1の中世溝石積の実測。
- 2月10日 堺 I-13にトレンチを設定し、弥生終末の甕棺を発見。中川屋敷 I-11の木棺墓の写真と実測。南小路の水道工事立合い。
- 2月12日 原田委員長来訪。加賀石 I 9の写真撮影。端山古墳前方部の葺石追求。
- 2月14日 南小路の甕棺出土推定地である I-6 に 5 $m \times 7$ m のトレンチを設定する。
- 2月16日 南小路 I 6 で近世遺物に混って銅鏡片や朱が検出された。
- 2月17日 原田委員長と藤井課長来訪。ガラス勾玉・管玉・鏡片が続出。
- 2月19日 南小路 I − 6 で金銅製金具が出土し、4 個体分となる。南小路 III・端山古墳続行。
- 2月20日 第2回発掘調査指導委員会が招集され、今回の調査結果を報告した後、現場視察した。委員会では、南小路の継続調査と委員会の存続を決議し、2月23日に一般向けの現地説明会を実施することになった。
- 2月23日 午前10時から三雲公民館で現地説明会を行なったところ, 200人以上の見学者となったために2回に分けてスライド説明を行なうことになった。
- 2月26日 原田氏テレビ撮影のため来訪。ガラス勾玉2個となる。端山古墳前方部撮影。
- 3月1日 八反田Ⅱ・柿木を埋めもどし。端山古墳土層図・葺石平面実測。南小路Ⅰ-8写真撮影。南小路Ⅲ地区の写真と実測。
- 3月5日 上覚Ⅰ-6の甕棺・石棺の実測。端山古墳葺石の実測続行。
- 3月8日 南小路I-6で雷文鏡の乳の部分を発見する。各遺構や攪乱穴の切合いを略測。
- 3月15日 本年度の作業を終了する。

昭和49年度の調査は,番上II-6 に設置された水道施設の緊急調査が含まれたが,全体としては三雲地区 間場整備事業に先だち,同地域の埋蔵文化財の重要性とその範囲を確認するところに主眼をおいたものであった。その結果,調査対象地域の約半分を占める瑞梅寺川左岸には条里以外の遺構はほとんど発見されず.



第 8 図 端山古墳葺石発掘風景

重要遺構は瑞梅寺川と川原川に狭まれた地域に限定されることが判明した。しかもその規模は 東西幅が郡の後地区で約0.2km,上覚・堺・八龍地区で0.75kmの広範囲におよぶものであった。 さらに南北の限界は、北側では井田用会支石墓を頂点とした井田遺跡群に続き、南側の上覚・ 堺・八龍の墓地群を含む遺跡群が南側の井原遺跡群に連続している可能性を含んでいる。

井原鑓溝には、1本のトレンチしか設定できなかったので結論は出せないが、三雲のヤリミゾを含めて近年まで「谷」であった可能性が強い。ヤリミゾの東西にある上覚・堺の両地区は耕作土と床土を除去すれば、20~30cmで包含層が遺構を検出できるが、両ヤリミゾに設定した4本のトレンチは1m前後掘り下げても包含層にも当らない。これ以上の深さは水田である関係上断念した。とくに「溝」の横を掘ることは承諾がとれなかった。「井原鑓溝」の確認は、現在の溝の石垣の改修を待たなければならないだろう。

3 第2次(昭和50年度)の調査

昭和50年度の調査の概要は、『井原・三雲遺跡発掘調査概報』(昭和50年度)に詳しいので 再録する。

昭和50年度の調査は、本年度から始まる 國場整備事業が遺跡のない瑞梅寺川の左岸に限られることから前年度の指導委員会で答申のあった南小路の甕棺墓・井原鑓溝の確認調査に主眼をおくことになった。しかし、ここに 7月、8月、10月と予期しなかった緊急的な調査をせざるをえなくなった。それは個人的な新築工事で、八龍 I-7 の牛舎建築と中川屋敷 I-7・堺 I-2 の住宅建築に伴うものである。このため米収穫後の10月に計画していた調査開始を変更し、八龍 I-7 の約 200㎡ の調査を 7月の梅雨あけに実施することになった。したがって、急遽 7月 8日、昨年行なったように県文化課・町教育委員会・町同和対策室・町土地改良区に地元役員を交えて会議をもち、本年度の発掘調査計画を発表し、土地借上・作業員賃金等を協議

することになった。

八龍 I — 7 は、大字三雲字八龍 234 番地に所在し、三雲遺跡群の東端にあたり、この周囲ではかって道路工事や耕作で石棺墓や甕棺墓が発見されている。この工事は国庫補助による県営畜産経営環境整備事業で、県農政部畜産課と町産業課がタッチしていながら事前協議されていないものである。牛舎は東隣の金口にわたって建築されるが、八龍との比高約 1 mの低地で、川原川の氾濫原であるためと盛土造成すること、および緊急性を考慮して、八雲 I — 7 の建築物敷地 210㎡ を発掘調査することになった。

調査は、7月23日から8月10日まで実施した。遺跡は川の氾濫原に隣接するためか、近世の整地層が厚く、遺構の大半が礫層の中に含まれ、遺構検出のむずかしさと、作業困難に悩まされた。結局、遺構面が現地表から70cm以上ある北東側の礫の最も多い地区の一部を調査から除外した。検出された遺構は、弥生終末から古墳時代初頭の甕棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓各1基、弥生後期住居跡1軒・古墳時代住居跡3軒、中世土壙墓1基で、西側ほど遺構検出面は浅く約50cmとなる。したがって、ここの牛舎建築は現地表に30cm以上の盛土を行ない、計画どおりの地下50cmの基礎工事を行なうことで、遺跡保存を地権者と協議のうえ決定した。

中川屋敷 I-7 は、479 の 2 番地に所在する住宅新築工事に伴う調査である。ことの新築工事は八龍 I-7 の調査中に察知したもので、急遽継続調査となった。南隣する地区は前年度の予備調査で弥生時代住居跡や中世土壙墓が検出されており、I-7 もこの種の遺構検出が予想された。しかし、横を通っている県道工事の際に地下げを行なっているので遺構の遺構の遺存があやぶまれた。調査は、8月23日から8月29日まで実施した。

調査は東西と南北の交差する2本のトレンチによる遺構確認を行ない、検出された遺構付近を拡張する方法をとったが、南北トレンチには南北に延びる中世の浅い溝状遺構、東西トレンチの東端に近世の溝、西端に貯蔵穴状竪穴を確認しただけであった。結局、拡張して調査したのは、この竪穴付近のみであった。調査の結果、地下げされていたにもかかわらず、遺構の残りはよかったが、この新築工事も50cm以上の盛土造成になっていたので、トレンチ調査で終ることになった。

堺 I-2,細石神社の東側で 270 番地に所在する。土地所有者が昨年から発掘現場に訪れては,土地を売却したいとの相談があったが,今年秋急に新所有者になる予定の人が11月から住宅建設に着手することになり,急遽掘調査することになった。細石神社の南側付近は,石棺墓・甕棺墓の発見が伝えられており,昨年度堺 I-13のトレンチでも弥生後期の甕棺墓が検出された。

調査は、10月23日から11月21日まで、主として住宅敷地のみ実施した。現場は豚舎があったためコンクリート敷が残り、さらに試掘の結果、遺構面まで約60cmあるところから、ブルドーザで表土剝ぎを行なった。その後約20cm程残った近年の整地層をベルトコンベヤーを投入して

除去した。

最初に発見したのは箱式石棺墓で、この面ではさらに古墳時代住居跡・溝状造構が検出されたがこの上層には中世の包含層があったらしく、少量の青磁・白磁片などが発見された。発掘区の西側にある古墳時代溝状造構の下層からは弥生中期の住居跡2軒も検出された。中央付近には、弥生終末と思われる箱式石棺墓2基があり一方には鉇を副葬していた。東側からは、2軒の古墳時代住居跡が発掘区内に一部検出された。北側の3号住居跡のみ拡張して全掘した。3号住居跡は火災にあったらしく、炭化材が多く土器も残りが良かった。

南小路の調査面積は、昨年壁や鏡片などを発見した、453-2 番地と西側の453-3 番地の190mとなった。453-2 番地は南小路 I-6 に当り、発掘の主眼をここに置いたが、宅地であるため思うように発掘区が選定できず、空地を縫うようにして調査した。

南小路の調査は、昭和50年11月4日から昭和51年1月14日まで実施した。調査は第1目標に、昨年もう少しのところがつかめなかった、文政5年発見甕棺の原位置確認にあったため、地権者に無理を言って物置小屋の移転をした。推定どおり、小屋の直下に盗掘穴を発見し、それより大きな甕棺墓壙を検出した。昨年一部確認した墓壙はこれで、その上にのっている朱や鏡片その他の遺物を含んだ攪乱層は、盗掘穴に続いていた。この甕棺墓壙は、甕棺を掘り出した盗掘穴の外に、西側に多くの攪乱穴があり、その一部を破壊しているが、同じ攪乱穴がもう1基の甕棺墓を破壊していた。文政5年発見の甕棺墓を1号甕棺墓とすると、新発見の甕棺墓を2号とする。

11月16日,2号甕棺墓も盗掘されており,攪乱された棺内上層で連弧文日光鏡片3面分を発見する。棺内の攪乱土中には多くの朱が含まれており,日を追うごとに鏡片は多くなり,面数も増加した。17日にはガラス製勾玉,19日にはガラス容器細片を利用したと思われるペンダント,26日に完形の鏡を発見し、28日に硬玉製勾玉を発見するころには、鏡は10面分,ガラス製勾玉は12個となっていた。棺外でも,墓壙の攪乱されていない床面に鏡片を発見し、5面分の鏡片棺外副葬を確認した。

この間, 1号甕棺墓盗掘穴の中か



第9図南小路I-6の銅鏡調査

らも,鏡・璧・管玉・四葉蒂形飾金具の破片が多く出土したが甕棺本体は発見されず,完全に掘上げられたらしく,小破片のみであった。

I-6の西側から I-7 にかけては、浅い溝状の凹みが確認され、その上層から弥生中期から後期の土器片が多量に発見された。この中には、丹塗土器もあり、筒形土器片も含まれる。

2号甕棺が発見されたのが、発掘区の拡張した北端であったが、北側は家屋や花壇があり発掘できないため、I-6内では墓域の確認ができなかった。したがって、 $1 \cdot 2$ 号甕棺から少し離れるが、東側の溝と道路を隔てたヤリミゾII-6の畑地に幅2mのトレンチ2本を設定したが、墓域に関係ある遺構は検出されなかった。

井原鑓溝の甕棺墓確認の調査は,昨年井原鑓溝 I-1 にトレンチを設定したが,整地したと思われる層が深く,包含層さえ確認できなかった。したがって,今回は水路を隔てた II-1 にトレンチを設定した。やはり水路の近くを掘ることを嫌われ,水路から 5 m 以上の間隔をもたせることになったが,ここでも地表下1.15 m m で砂利層となり遺物の包含層もなかった。

上覚 $I-9 \cdot 12$ の調査は,昨年 I-6 で確認された墓地群の広がりを見ると同時に,井原鑓溝との関連を確認するにあった。しかし,墓地群は発見されず,弥生後期から古墳時代の住居跡が検出された。

12月19日,井原・三雲遺跡発掘調査指導小委員会を開催。原田大六・永井昌文・藤田等・西谷正の各委員と文化課・前原町教育委員会・同和対策室・土地改良区・地元役員代表が出席した。今年度の調査結果を報告し、現場を視察した。その後土地改良区から今後の計画が報告され、来年度の調査方針を検討した。

4 第3次(昭和51年度)の調査

昭和51年度は発掘調査に先だち、昭和52年度からの圃場整備事業が瑞梅寺川以東に及ぶために、圃場整備計画と遺跡の保護を前原町土地改良区と協議を重ねてきたが、この計画案がまとまったので、発掘調査指導小委員会に計るため、福岡在住の委員を10月12日前原町役場会議室に招集した。出席者は、永井昌文・西谷正両委員、福岡県教育委員会の藤井課長・柳田主任技師、前原町教育委員会の清水利美教育長・浜地哲輔課長・山崎信行主査、町土地改良区中村信理事長・井上克己局長・吉住誠主査であった。提示された圃場整備計画案は、土地改良区と地元の協力で埋蔵文化財の破壊は道路や水路の最小限度にとどめ、他の大部分は客土する設計となっていたため、指導委員からはやむなく破壊される部分の発掘調査に万全を期するよう指導があって終わった。なお、原田大六氏は途中で顔を出されたが、協議には参加されなかった。

第3次調査は、昭和51年10月22日から昭和52年3月15日まで実施した。

- 10月22日 現地に発掘用具の運搬をし、発掘事務所の整備を行った。
- 10月23日 本年度発掘調査を行なう個所の試掘を行い、遺構面あるいは包含層面までの深さを 確める。ユンボによる表土剝ぎの参考にするためである。
- 10月25日 堺 I-3地区の住宅新築予定地の調査を始める。昨年度住宅建築のために調査した 東側に接する。 $9~m \times 10 m$ の発掘区を設定した。表土と整地層は深さ60 cmほどであったが・ ユンボで簡単に終わり、ユンボは仲田に移動し、仲田 I-16 cm $8~m \times 43.8 m$ の発掘区の表土 剝ぎを始める。
- 10月26日 表土と整地層の下から中世の遺物が発見されたが遺構は伴わず、その下に古墳期の 方形住居跡1軒を検出したので、北東側を7㎡ほど拡張する。仲田 I —16は表土・床土の下 は遺構面で非常に浅く、遺物も多量に出始める。
- 10月29日 住居跡の写真撮影。遺物の撮影後、遺物を取り上げて柱穴の確認を行なう。仲田 I —16のグリット設定を行なう。
- 11月4日 堺I-3の調査を完了 し、仲田I-16地区に完全に移動 する。午後3時頃から雨。仲田I -16は東側から遺構検出を行った が、全体に遺構検出面は浅いが、 重複が多い。
- 11月6日 発掘区の東端で4軒の住居跡が重複している中で,最も輪郭のはっきりしていた1号住居跡床面中央部で,表面緑色ガラス質の丸玉を発見する。後にこれがファイアンスの丸玉であることがわかった記念すべき日であった。
- 11月11日 鬼木Ⅱ-13の坪掘りを行ったところ,北側で30cm,南側で 16cm掘りさげると包含層となり, 遺物が大量に発見される。
- 11月15日 仲田 I —16の17号住居跡 は以外と小さく、床面には配置さ れたままの土器がつぶれ、砥石・ ガラス管玉も発見されたので、北



第10図 仲田 I 一16の発掘調査風景



第11図 仲田 I 一16の発掘調査風景

側を拡張して全輪郭を出すことになった。

- 11月18日 18号住居床面には、多量の一括土器がつぶれており、碧玉管玉やガラス小玉多数も 出土し始める。17号住居より新しい弥生終末から古墳初頭の時期である。
- 11月19日 加賀石 I -22・23の表土剝ぎを始める。床土直下で須恵器片や石庖丁が出る。
- 11月20日 鬼木Ⅱ-13をユンボにより表土剝ぎを始める。耕作土直下から多量に発見される土 器は摩滅したものが多く、石庖丁の完形品なども発見されるが、2次堆積の可能性が強いの で、全面表土剝ぎを見合せることにした。
- 11月30日 仲田 I −16の18号住居跡から南側の方形透窓器台出土付近の拡張区でガラス小玉の出土が多い。鬼木 II −13は溝状遺構内から流木が出土し、他のくぼみも遺構にならない。
- 12月2日 加賀石 I 23に規準杭を移動し、2 m方眼のグリットを組む。
- 12月3日 加賀石 I 23の発掘開始。鬼木Ⅱ-13の実測を始める。西谷委員の指導を受ける。
- 12月9日 加賀石 I 22の包含層で方格規矩鏡の細片が出土する。 I 21にトレンチ設定。
- 12月14日 仲田 I-16の全体と個別の写真撮影を始める。雲がなく、影が強いまま撮影。
- 12月17日 加賀石 I -22・23の第3層の古墳時代と弥生後期の遺構面の写真撮影を行う。
- 12月19日 仲田 I -16の実測開始。加賀石 I -23の住居跡の写真撮影続行。
- 12月23日 仲田 I 16の実測続行。加賀石 I 23の1号住居跡貯蔵穴完形土器群の実測。弥生中期の住居跡のプラン検出。白木原和美委員を招聘し、指導を受ける。
- 1月6日 新年の作業開始。仲田 I 16の実測を続行。
- 1月7日 柳田忌引休暇のため16日まで作業員を休ませ、補助員で実測のみを行う。
- 1月17日 発掘作業再開。仲田 I —16は上層遺構の実測が終了したので、下層遺構の検出を始める。邪馬台国シンポジュウムの唐津・呼子コースの一行が立寄る。
- 1月25日 仲田 I-16の下層遺構の実測を始める。27日までかかり、エレベーションも終了。
- 1月31日 仲田 I -16は、17~21号住居跡の写真撮影と石棺墓の実測を行い終了する。
- 2月3日 藤田等委員と森貞次郎氏 を招聘し,指導を受ける。
- 2月20日 三雲公民館に於て,昭和 51年度の現地説明会を行う。参加 者110名以上。
- 2月25日 加賀石I-23の2回目の 全景写真撮影の後,さらに下層遺 構検出にかかる。
- 2月28日 加賀石 I 23の再割付を 行い,実測を始める。



第12図 加賀石 I - 23の8号住居跡発掘風景

- 3月5日 4号住居より古い、6・7号住居跡のプラン確認を急ぐ。実測は続行。
- 3月10日 加賀石Ⅰ-23の3回目の全景写真撮影を行う。
- 3月14日 加賀石 I −23の掘る作業を終了し、実測にかかる。
- 3月15日 本年度の発掘作業を完全に終了する。

本年度の発掘調査は,来年度圃場整備で地下げされる部分を前年度に調査終了する方針で実施した。結果として,仲田 I-16では耕作土直下の浅い所で大量の遺物が伴なって遺構が密集し,多くのガラス玉類や,1号住居跡で発見された表面ガラス質の丸玉は半年後にファイアンスであることに判明するなど,重要遺跡であった。加賀石 $I-22 \cdot 23$ も,弥生前期から古墳期の住居跡が密集し,さらに深くなると弥生前期の貯蔵穴などの遺構が存在したが,これ以上削平されないこともあって,完掘せずに終わることになった。

前原町土地改良区は、遺跡の重要性を考慮し仲田地区の削平計画を改め客土設計とし、遺跡保存に協力していただいた。 (柳田)

- 註1 八木奘三郎「九州地方遺跡調査報告」(『東京人類学会雑誌』175,1900) に引用。
 - 2 註1に同じ。
 - 3 高橋健自「銅鉾銅剣考(→)」(『考古学雑誌』6 −11, 1916)
 - 4 富岡謙蔵「九州北部に於ける銅剣銅鉾及び弥生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて」(『考古学 雑誌』 8-9, 1918)
 - 5 浜田耕作編「筑前須玖史前遺跡の研究」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』11, 1930) 森本六爾「筑前三雲・鑓溝・二日市三遺跡の考古学的研究」(『柳園古器略考』1930)
 - 6 中山平次郎「三雲字南小路に於ける特殊埋蔵物発掘地点」(『考古学雑誌』13-9,1923)
 - 7 註6を参考にした。

第2章 地理的環境

第1節 地 形

三雲遺跡は,福岡県糸島郡前原町大字三雲に所在し,福岡県の西端部, 北緯 33°20′15″・東経 130°14′40″ を中心として位置する。

糸島郡は、1896年に合併によって「糸島郡」という名称が付されるまで、律令時代以来の記録にみられる「怡土郡」と「志摩郡」に分れており、いま郡の南部と北部に相当するが地形的にみても性格が異なる。すなわち、前者は背振山地とそれから派生する台地を中心とした地形で、後者は糸島半島と低湿な沖積地を中心とした地形となる。

南部では、佐賀県と境界をなす十防山(534.5m)・浮嶽(805.2m)・獅子舞岳(900.3m)・ 雷山(955.4m)・井原山(983.0m)等の山塊、福岡市と界する飯場山(732.6m)・王丸山 (453m)・高祖山(416.1m)等の山塊が並び、更に平野部に向って前原に延びる台地がある。またこれらの山地から長野川・雷山川・瑞梅寺川等の北流する河川が流下する。雷山川・瑞梅寺川は風化した花崗岩(マサ)等を浸蝕し下流に扇状地を形成させ、更に古糸島水道を挟んで対峙していた糸島半島との間を埋めて陸繋化させた中通り低地を形成させている。三雲遺跡はこの瑞梅寺川水系に沿った扇状地に立地する。

北部の糸島半島は、玄海灘に直接面して突き出た形に位置し、可也山(365.1m)・火山(244.1m)・柑子岳(254.5m)等のやや標高の低い山塊が群がるが、山地が海岸線まで拡がり外海に面する側に幾つもの崖面・隠顕岩を伴う。またわずかな平野部の海岸線には砂丘を形成する処が多い。この糸島半島は三雲遺跡の占地する扇状地を外海から遮蔽する恰好にならしめている。

瑞梅寺川は、鳥帽子山の山麓に発して北北西に流れて、中通り低地で流路を北東に曲げて今 津湾に注ぐが、水系に支流の川原川が東側に枝分れしており、川原川には更に支流高祖川と赤 崎川とが合流する。三雲遺跡は瑞梅寺水系の中流域にあって川原川が支流と合流する地点と瑞 梅寺川に挟まれた形に占地する。

いま更に狭い視野で見れば、三雲遺跡は南方の井原山から拡がる扇状地上に立地し、遺跡の南部で標高44m・北部で標高28m位である。第3図に遺跡内の地形図を示すが、標高30m前後の地点では地下湧水の顕著な部分があることから扇状端に近い部分と言えよう。三雲に北接する区域を「井田」と称することからも理解できる。なお河川に近い部分では低地となり氾濫原

の様相を呈する。

現在三雲の位置は、北の今津海岸まで約8km, 唐津街道(一般国道202号)・国鉄筑肥線波多江駅まで約3km・西の深江海岸まで県道大野二丈線を経て約12kmの距離を有し、東は日向峠を越えて早良平野・福岡平野へと通じ、南は三瀬峠越えで佐賀県神埼郡・佐賀郡へ通ずる、交通の便が良好な場所である。

第2節 地 質

三雲遺跡を囲む山地のうち,洪積台地を派生させる背振山地では,浮嶽・女岳・雷山・井原山に結晶片岩類がみられ,この結晶片岩類中に蛇紋岩・石灰石等が貫入する部分がある。また鳥帽子山に嘉穂花崗岩・飯盛山・高祖山・叶岳一帯は早良花崗岩,飯場峠付近に角閃石斑糲岩が分布する。その他の地域では糸島花崗閃緑岩が優勢である。

一方糸島半島では、彦山・大葉山から柑子岳・今津・毘沙門山につながる一帯と灘山北麓の一部に結晶片岩が分布し、浜崎山に蛇紋岩もみられる。また角閃石斑糲岩類が野辺崎付近にあり、柑子岳以北の半島北東部では北崎花崗閃緑岩・火山以南の南西部では糸島花崗閃緑岩が広く分布している。なお局地的であるが今山・毘沙門山・可也山・芥屋大門等に玄武岩がみられる。

糸島平野のうち、曽根原等の丘陵部は洪積世の砂礫及び黄色土がみられる。三雲遺跡の範囲内では、南部の比較的標高の高い部分に黄色粘性のマサが多めで、縁辺部に礫が多くみられるものの、処々で南北方向に帯状の礫層が観察できる。おそらく扇状地形成時の流路変更に関わるものとみられる。なお遺跡の東部で標高34~36m位が内湾した形状になるイフ地区では、礫層がみられずグライ土壌系の青灰色粘性土がみられ、扇状地形成とは異なる過程を経た可能性を考えなければならないであろう。

福岡市の近郊にあり徐々に宅地化の波が押しよせようとしている三雲遺跡周辺は,水稲・蔬菜・果樹等が栽培されており,扇状地上とはいえ,降雨量の多い背振山地からの豊富な水量を活用しうることにも起因すると共に,気候面での好条件も相侯っていると考えられる。

しかし、冬期に背振山系の高山は降雪量も多く、雷山では九州唯一のスキー場が開設されており、この雷山から吹きおろす「雷山おろし」と、糸島半島で遮られるとはいえ玄海灘から吹きつける季節風は、冬期に調査を実施する場所として、決して快適とは言い難い気象条件であった。 (小池)

註 地質の項では、以下の文献を参考にした。

経済企画庁総合開発局「土地分類図(福岡県)」1970 大蔵省印刷局 松本達郎・野田光雄・宮久三千年「日本地方地質誌九州地方」1962 朝倉書店

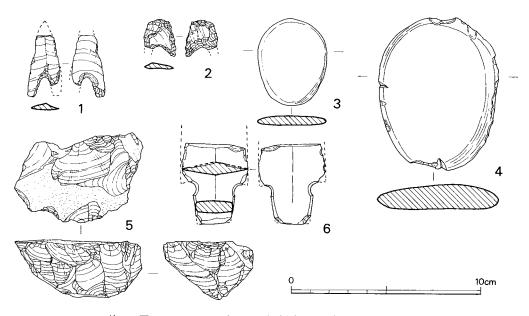
第3章 遺構と遺物

第1節 三雲遺跡の立地

――第1次予備調査の結果について――

三雲南小路,端山・築山古墳等の著名な遺跡が知られるこの地に,昭和50年度起工の三雲地区圃場整備事業が計画された。圃場整備事業計画予定面積は百余町歩という広大な面積であるため,福岡県教育委員会は遺跡の規模と性格を確認し,埋蔵文化財の保護と圃場整備事業の調整をはかるに資するため,昭和49年度には三雲南小路,端山・築山古墳,緊急を要した番上II 一6地区の調査と併行して,三雲地区全域にわたる予備調査を行った。予備調査は圃場整備予定地内全域のやや微高地をなす,遺構の存在が予測される部分を重点として110余個所のトレンチを設定し、発掘した。

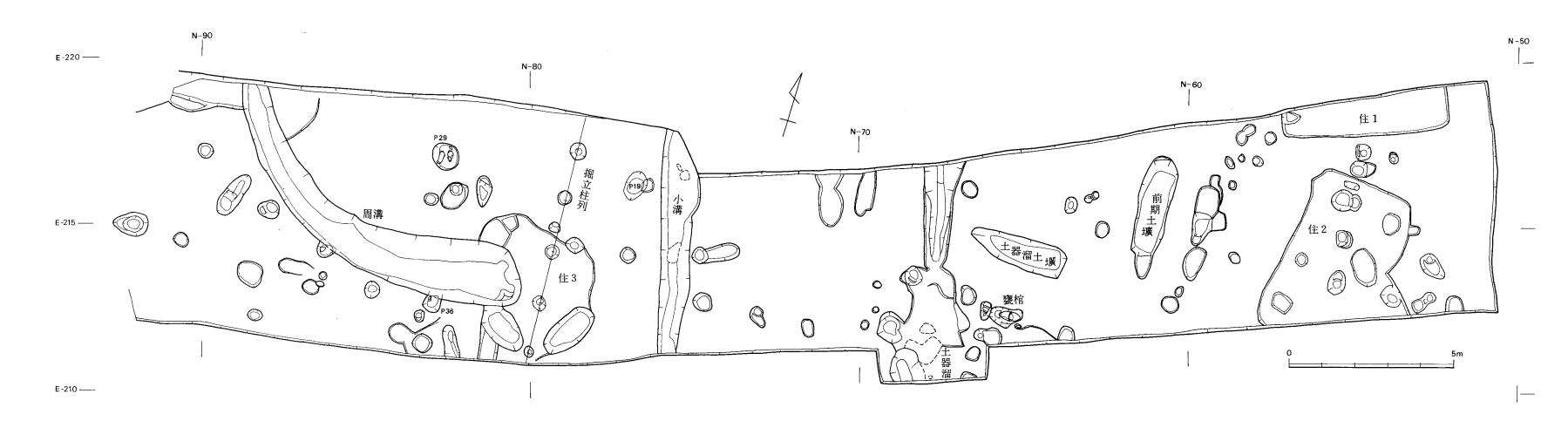
瑞梅寺川以西においては、まず石ケ崎遺跡周辺の水田を発掘したが、何らの遺構も検出されなかった。他の部分に関していうと、瑞梅寺川以東の遺構の集中する部分と同様、地形的には



第13図 瑞梅寺川以西出土の遺物実測図 (1/2)



第 14 図 第 1 次予備調査と遺跡の範囲 (1/8000)



第 15 図 郡 の後 Ⅳ 一 1~4 地 区 遺 構 配 置 図 (1/100)

遺構が存在するような観を与えたが、実際にはミソノ18、ノマI-16で溝を検出したのみであった。ノマI-16の溝(図版7-1)は条里の溝の可能性も考えられるが、ミソノ18の溝(図版 $7\cdot 8$)は弥生式土器の小片、剝片鏃等の遺物が若干出土しており(第14図)条里の溝の可能性はうすい。このように地形的には遺構が存在するような景観を呈しながらも殆んど遺構が存在しないことの最大の要因は水の便が悪かったことがあげられよう。

条里は水田耕作との関連で畦畔・水路を切る調査を行えなかったが、畦畔ぎりぎりに設定したトレンチでも何らの遺構もなく、どの区割もほぼ1町を測ることからしても、残存する部分はほぼ原状に近い状態であるといえよう。条里の方向はほば N 20°W で、北に位置する井田・波多江等で測った数値ともほぼ合致している。

三雲地区の遺構の集中する部分は第14図に示すごとく,瑞梅寺川と川原川に挟まれた,やや微高地をなす部分である。この地域では弥生時代には上覚・南小路・堺・八龍・石橋・加賀石それと第14図の北端に位置する井田に属するところに甕棺墓,石棺墓等が発掘され,ないしは知られており、墳墓群は集落の東辺、南辺に集中し、住居跡は中央部から西辺にかけて存在するととが確認された。古墳時代にも古墳の造営をのぞけば、ほぼこれと変らない状態といえようが14歴史時代になり条里制が施行された後、ほぼ現在の状況に近くなったものと考えられる。

(橋口)

第2節 郡の後地区の調査

1 はじめに

この「郡の後」地区は、現在の集落を含めた約方2町の範囲で、東側には「郡の前」の字名があるが、「郡の前」地区は川原川の氾濫原となっている。「郡」の名から「郡衙」や「大郡」・「小郡」の推定地である。

今回報告する分は、昭和49年度に予備調査した $I-2\cdot 6$ 、 $II-1のトレンチと昭和52年度 に調査した <math>IV-1\sim 5$ に新設する道路と水路部分である。

昭和52年度の調査は,大字井田との境界に幅 6 mの道路と幅 3 mの水路を東西に新設するもので,幅 5 \sim 8 m,長さ約80mのトレンチとなった。郡の後 I-1 • 2,IV-1の西端と 5 地区には遺構が発見されず,表土剝ぎのみとなった。IV-5 地区には若干のピットが検出されたが、今回の調査は断念せざるをえなかった。

郡の後IV地区は昭和52年度に調査を行ったので、地区割は圃場整備の地区割をそのまま利用 した。当方の地区割と大差なく、数センチメートルの差で影響を受ける他地区との関連遺構も

ないので、YはNにXはWに読み変えればよいであろう。

 $IV-2\sim4$ 地区の調査は、柳田康雄が担当し、実測図作成には、児玉真一・小池史哲・池辺元明・高田一弘・日高正幸・小林義彦が加わった。また、昭和49年の予備調査は森田勉が担当した。

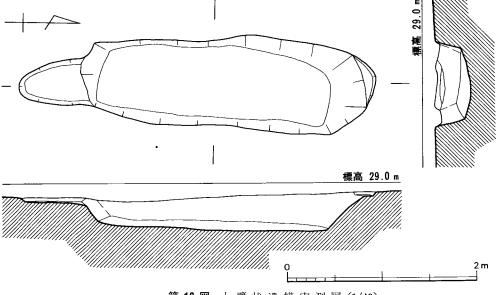
2 弥生時代の遺構と遺物

郡の後 $W-1\sim4$ 地区では、弥生時代の遺構として前期の土壙状遺構、中期の小児甕棺墓とその北側に土器溜土壙、住居跡 2 軒、後期の小溝・土壙・土器溜がある。発掘調査がまさにトレンチであるため、各遺構の関係は不明なところが多い。

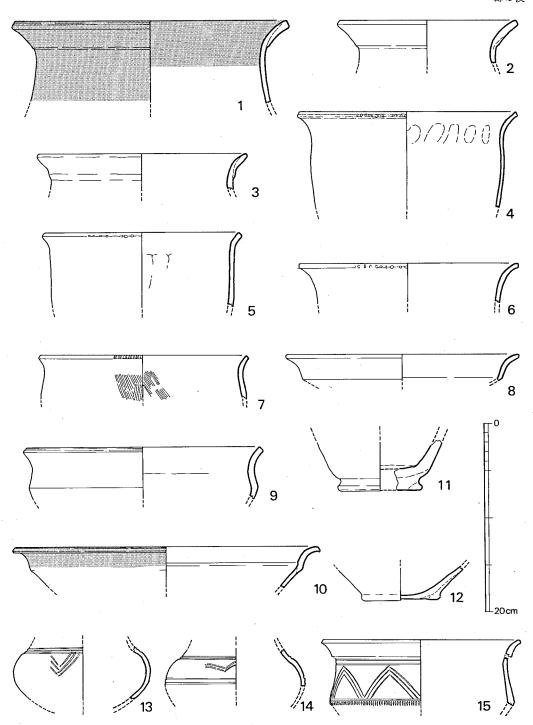
(1) 土壙状遺構(図版11-1,第16図)

IV-4のY-60・X+216で発見された弥生前期初頭の遺構である。長さ3.75m,最大幅0.98m,深さ 0.4m の大きさで,舟形をしている。付近に関連遺構はなく,土壙には床面近くに土器片が散乱していた。

土 器(図版16,第17図) 壷は $1 \sim 3 \cdot 12 \sim 14$ である。 1 は口径28.3cmの大型壷で,横方向のへラ磨研の上から丹塗りを行っている。 $2 \cdot 3$ は中型の壷で,表面が荒れて調整方法は不明なところがあるが, 2 は 1 と同様にはっきりした段を有している。 12は中型壷の底部で,円



第 16 図 土 壙 状 遺 構 実 測 図 (1/40)



第 17 図 土壙状遺構出土土器実測図 (1/4)

盤貼付ではない。13・14は小型壷でヘラ描き沈線の複線山形文と複線弧文がある。13は砂粒を含まないが、14は石英や雲母を多く含んでいる。

4~7は甕で、ゆるく外反した口縁が共通している。口縁先端の刻目も割合浅く、大きいともいえない。4~6は石英粒と雲母を割合多く含んでいるが、7は少ない。

8~10は深鉢であろう。8・10は口縁が強く外反して、口縁下の屈曲が浅鉢に近いものである。9は口縁の外反と屈曲もゆるやかであるが口縁先端に沈線の凹みを有する。9・10は磨研土器で、10はその上に丹塗りを施す。3点共に細かい石英粒を多く含んでいる。

11は,底部が楕円形を呈する可能性があるので,深目の楕円形の椀になるであろう。底面長径約9 cm,短径約8 cm。胎土に細かい石英・雲母を含み,白味の強い灰褐色焼成。

15は、南北小溝の北西側 $(X+216 \cdot Y-60)$ にあるP19から出土したもので、破片の図上復原である。深鉢と思われるが、口縁部は壷と同様にはっきりした段を有するが、このような形で胴部に続くものであるかは不明。口縁の細片は、胴部の破片と調整・胎土・色・焼成とも同一である。胴部の文様は、胴部へラ横磨研の後に施されたへラ描沈線の横線と山形文で構成され、凸帯状をなす屈曲部には丁寧な刻目を施す。胎土に細砂粒・雲母を若干含み、灰褐色・灰黒色の良好な焼成である。

これらの土器は細片のものが多く、若干新しい要素を持つものが含まれているが、表面調整の明らかな壷・鉢は研磨されており、鉢はとくに夜臼系のもので、古い要素が強い一括土器といってもよいであろう。総合して前期初頭(板付 I 式)として認識したい。

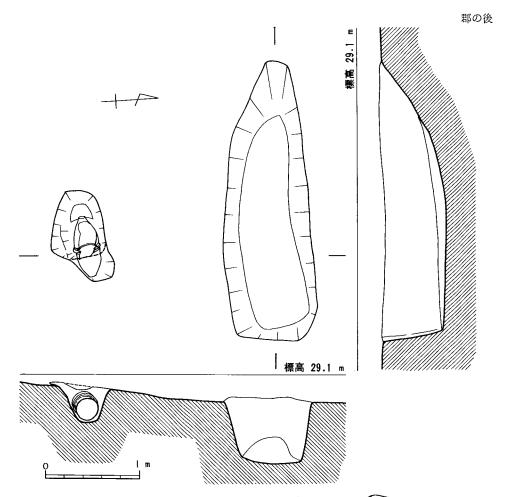
(2) 甕棺墓と土器溜土壙

発掘区内で1基の小児甕棺墓が発見された。位置は $X+212 \cdot Y-65$ にあるが、平行した北側 1.25m のところに同時期の関連遺構と思われる土器溜土壙がある。

甕棺墓(図版11-2・12, 第18・19図)

同形同大の甕を接口式に合わせた小児用甕棺墓で、主軸を S84°W にとり、上甕は西側にある。墓壙は、長さ72cm、最大幅58cmの大きさの東側が広い角張った卵形をしている。墓壙の東側に横穴を掘って2段掘りとし、下甕を約22cm挿入している。甕棺の傾斜角は17°30′で、多少上甕がずれているが合口甕の全長66cmとなる。下甕に穿孔はされていない。

甕 棺(図版17-1,第20図) 上は口径27.3cm,高さ33cm,胴最大径26cm,底径7.9cmの大きさである。口縁は逆L字形であるが、多少内側に突出する。口縁下の三角凸帯は、下辺が広く不明瞭である。底部は、わずかに上げ底であるから外面貼付で補強されている。器壁は、口縁から凸帯までヨコナデ、外面はタテにハケ目、内面の底部付近がタケにナデ、他は斜めにナデ調整している。

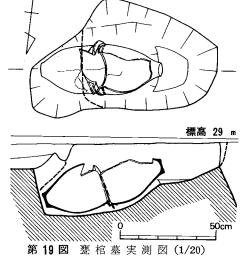


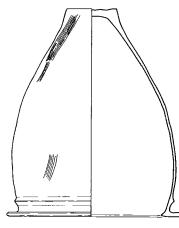
第 18 図 甕棺墓と土器溜土壙実測図 (1/40)

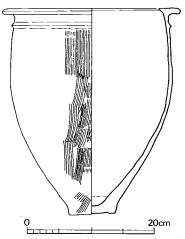
下甕は口径27.9cm,高さ32.5cm,胴最大径25.4cm,底径7.3cmの大きさである。口縁は逆L字形であるが、上甕より厚味があり内側にも突出する。口縁下の三角凸帯も上甕より顕著である。底部付近は上甕より厚味があり、屈曲する。その他の調整は同様で、両方共胎土に細砂を含み、淡赤褐色の良好な焼成となっている。

土器溜土壙(図版11-2,12-2,第18図)

この土壙は甕棺墓から1.25m北側にあり、主軸を N86°W に向けた舟形土壙で、甕棺墓にほぼ平行する。土壙は、長さ2.95m、最大幅0.93m、







第 20 図 甕 棺 実 測 図 (1/6)

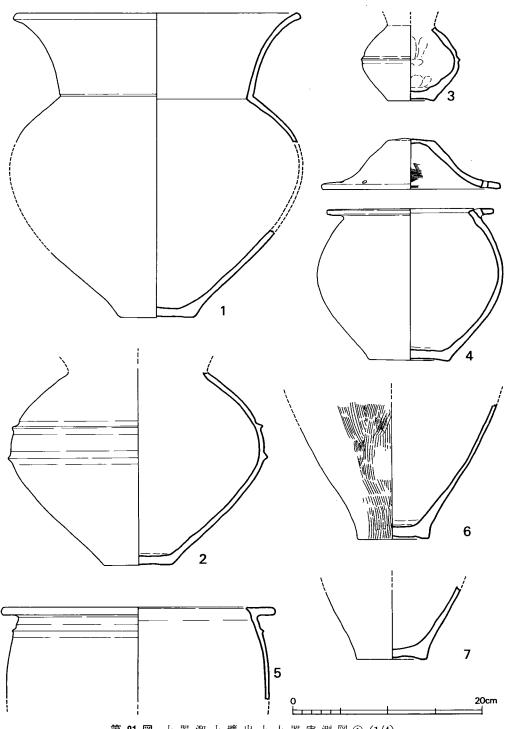
深さ0.65mの大きさである。西側が細くて傾斜して浅くなり、まさに舟形を呈する点は甕棺墓壙と同様である。

土壙内には,遺構検出面から土器が散乱していたが, 埋土を排除すると完形や1個にまとまる土器があった。 とくに蓋付無頸壷は蓋付のまま倒置されていた。土壙底 面から土器群の間には挙大の磔が散乱しており,土器は 磔群より下では発見されなかった。土壙の埋没は,深い 方に多少土砂が流入した後,石のみが南の甕棺側から埋 没し,最後に土器が人為的一括状態で土砂と共に投入さ れたと思われる。

土壙は,土器や礫群の埋没状態が人為的であると同時 に,時期的に見ても甕棺墓と関連づけて,祭祀的遺構と 考える。

土 器 (図版17・18,第21・22図) 1~4 は壷形土器である。1 は広口壷で、器高約32cm、口径30cm、頸部径20cm、胴部最大径約30.5cm、底部径8 cmの大きさである。器外面は摩滅しているため調整法は不明であるが、胴部内面はナデが見られる。胎土には細砂を多く含む。2 も広口壷であるが、胴部に2条の三角凸帯をめぐらすところから、口縁は鋤先口縁となろう。現器高20cm、頸部径14.5cm、胴最大径27cm、底径7.2cmの大きさである。胎土には細砂を含むが、器面は丁寧に外面ヨコナデ、内面ナデで仕上げられている。3 は小形壷で、胴部に1条の未発達の三角凸帯1条をめぐらす。口縁は初期的鋤先

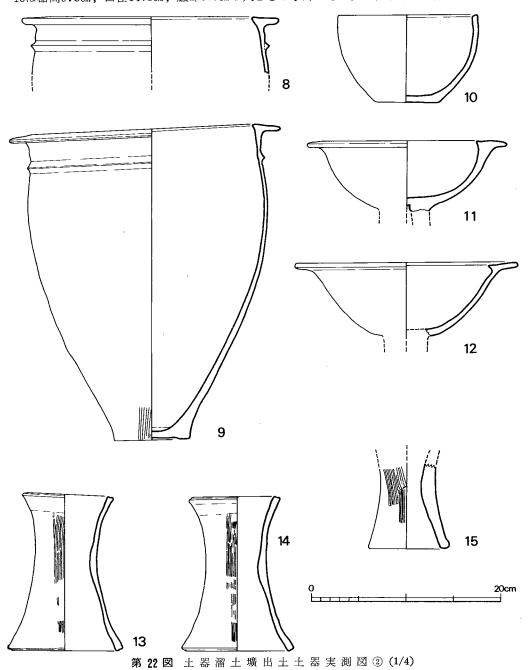
口縁を示すものであろう。現器高,7.8cm,頸部径5cm,胴最大径10.2cm,底径4.8cmの大きさである。4 は蓋付無頸壷で,出土状態(図版12-2)から見てもセットである。壷は器高16cm,口径17.4cm,胴最大径19.3cm,底径8.3cmの大きさで,逆L字形口縁に対になる各2個の孔が貫通している。孔は径3~4 mmの大きさで,3.3~3.5cm間隔で上から穿孔している。中期後半の無頸壷との違いは,逆L字形口縁の内側に丸味がなく突出するところにある。蓋は,高さ5.4cm,口径18.7cm,天井径5cmの大きさで,壷の口縁の孔と対応する位置に穿孔されている。器形の特徴は,天井部が平坦な裾広がりの截頭円錐形をしているところにある。蓋・壷両方共に器面が荒れて,調整具合が不明であるが蓋内面には横方向に走る細かいハケ目が残っている。胎土は両方共に細かい石英粒を含む。



第21図 土器溜土壙出土土器実測図① (1/4)

 $5 \sim 9$ は小型甕で、全体の器形・口縁・凸帯・底部・大きさ・調整具合の全てが甕棺と同一である。

10は器高9.3cm, 口径14.8cm, 底部6.7cmの大きさの小鉢である。口縁端部には丸味がある。



— 30 **—**

外面は摩滅が著しいが、内面は指痕の残るようなヨコナデをしている。

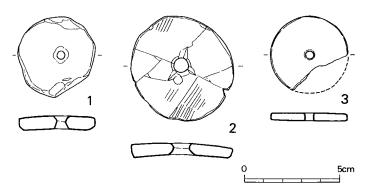
11・12は高杯の深みのある杯部である。11は現高 7.3cm, 口径21cm, 口内径14.6cm, 杯深さ 6 cmで, 口縁は鋤先になりかけている。全体に厚みのある器壁で, 脚部径も約 5.3cm となり, 杯部に対して太い。胎土に細かい石英粒を含む。12は現高 7.7cm, 口径 23.4cm, 口内径17cm, 杯深さ 6.9cm の大きさである。口縁部は内傾して内側に三角凸帯を貼付けた形となっている。胎土に石英粒を含んでいる。

13~15は器台で,13・14は同形同大で,15は多少小さく厚みがある。13は器高16.5cm,口径6.5cm,胴最小径6.4cm,裾径12cmの大きさである。13.14共に上下両端部に沈線状に凹みを有する。15は,底径8.5cm,胴最小径5.8cmである。

土器は、甕棺墓と同時期であることを述べたが、土器のセットとしてはほとんどの器形をそろえているといってよい。土器個別の特徴としても、高杯の鋤先口縁・蓋付無頸壷・器台など初現的要素を持っており、中期前半から脱した中期中頃の一括土器といえるだろう。

紡錘車(図版19-2,第23 図1) 土器群の中に混入し ていた土器片利用のものであ る。径4.2cm,厚さ0.7cm,孔 径 0.4cm の大きさである。胎 土に砂粒・雲母を多く含んで いる。

石 鏃(図版22-3,第37 図3)黒曜石製で長さ2.1cm,



第23 図 紡錘車実測図(1/2)

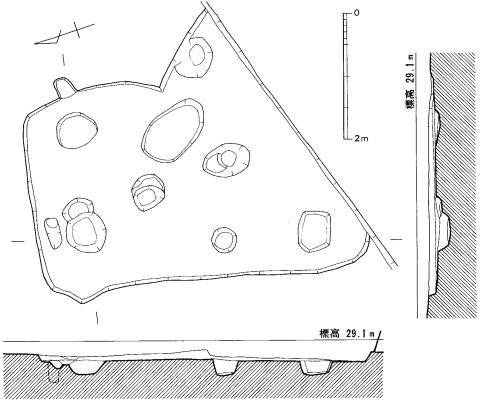
幅1.3cm, 厚さ 0.32cm の大きさである。紡錘車と共に前期のものの混入であろう。

(3) 住 居 跡

郡の後 $W-2\sim4$ では,住居跡として確実にプランを検出できたものはないが,弥生期の不整形であるが平坦床面をもつもの 2 軒を住居跡として報告する。 1 号は古墳時代の確実な住居跡で, 2 号はその南側のトレンチ東端にあるものとした。 3 号は,さらに不整形であり住居跡とするより,出土土器から不整形の祭祀遺構とした方がよいものである。 $2\cdot3$ 号共に丹塗土器をもった中期後半のものである。

2 号住居跡(図版13-1,第24図)

重複した遺構であるが、プランと新旧関係はつかめなかった。南北長5.3m、東西長3.2mの

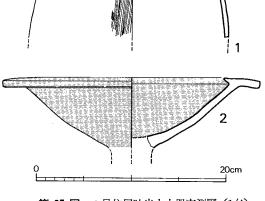


第24図 2 号 住 居 跡 実 測 図(1/60)

大きさの長方形住居跡であろう。住居内の主柱がどれになるかも不明である。床面に接して, 甕と高杯片が出土した。

土 器 (図版19-1,第25図) 1は口径21.9cm,口内径16cmの小型甕の破片である。口縁は逆L字形で内側にかなり突出する。胎土に石英粒・雲母を含む。2は口径27cm,口内径19.2cm,現杯深さ6.2cmの高杯の杯部片である。器面は著しく荒れているが、丹塗磨研であったらしい。胎土にやや大きい石英粒を多く含む。

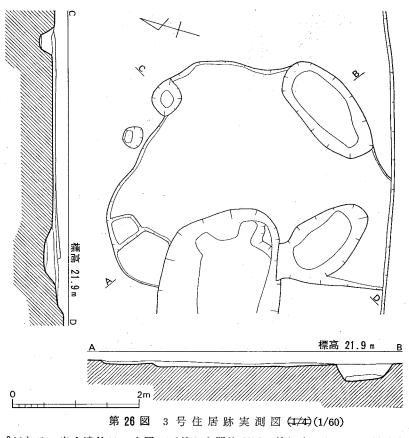
土器の時期は,甕に古い要素があるよう だが,高杯から中期後半としてよいであろう。



第 25 図 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)

3号住居跡(図版 13-2,第26図)

古墳期の半月形 溝に一部破壊さ れ,後世にかなり 削平されているた めに,遺構は浅く なって壁面がほと んど残っていな い。プランは,不 整形で東西4.6 m, 南北約 4.5 m の大 きさで,東側と南 側に浅い楕円形の 土壙がある。この 土壙内から土器が 出土しないので、 確実に伴うもので あるか不明。西側



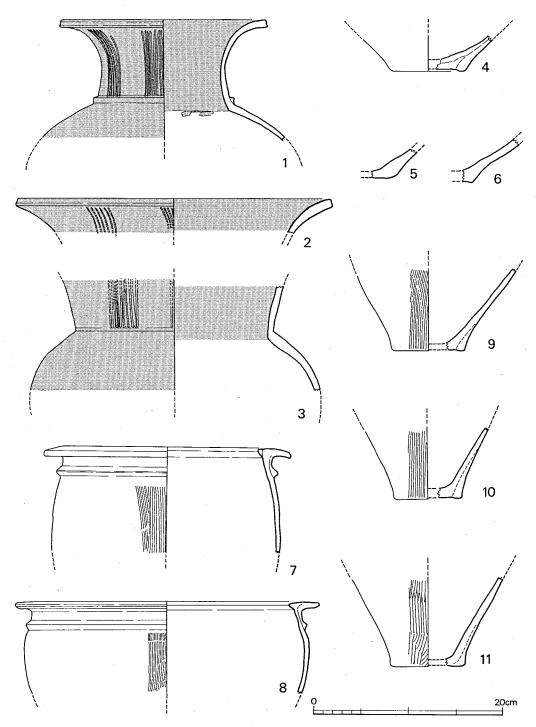
に1段高いステップがある。出土遺物は、土器・石斧と土器片利用の紡錘車があるが、丹塗土 器片が多く祭祀遺構の可能性もある。

土 器(図版19-2,第27・28図) 1~6は壷で,1と2・3のタイプがある。1は口径22cm,頸部径13.8cmの一般的壷で,肩部と頸部の接点に三角凸帯をめぐらす。外面と頸部内面は丹塗りで,頸部から口唇部にかけて約3cmの間隔で縦に暗文を施す。2・3は広口壷で,2個体以上はあるが,鋤先口縁は含まれていない。外面と頸部内面は丹塗りで,横方向にヘラ磨研している。頸部外面には,間隔を置いて縦に暗文を施す。

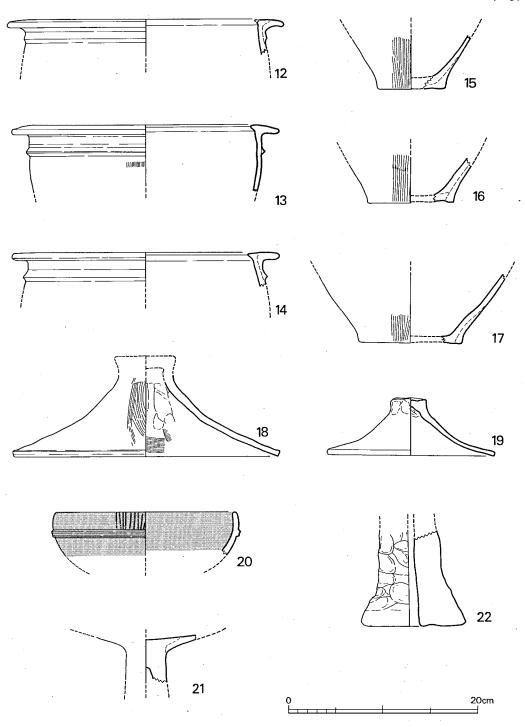
7~17は小形壷である。口径は7が小さく26.3cm, 8が大きく32.4cmで, 8と17は深鉢形といえるものであろう。口縁は内側に三角帯を貼付けて突出させたもので,口縁下にも三角凸帯をめぐらす。底部は全て外面を補強するため,わずかに上げ底ぎみとなっている。

18・19は蓋である。18はは現高8.5cm, 口径 28cm で大きく,19は器高6cm,口径17.9cmと小さく,甕用と壷用の違いであろう。19の天井部は指でつまんで整形した指痕が著しい。

20・21は高杯であるが、20が椀高杯で別個体となろう。20は口唇状凸帯を有し、丹塗磨研の上に縦の暗文を施す。20は口径19.2cmで、胎土に細砂粒を若干含む。



第27図 3号住居跡出土土器実測図① (1/4)



第28図 3号住居跡出土土器実測図②(1/4)

22は粗製の支脚である。全体に指痕が著しい。裾径11cmで, 1.6~2 cmの孔が貫通する。

紡錘車(図版19-3,第23図2) 3号住居跡の床面から出土した**甕片**利用品でハケ目が著しい。径5.2~5.7cm,厚さ0.7cm,孔径0.8cmの大きさである。

石 斧 (図版22-3, 第37図4) 玄武岩製太型蛤刃の基部の破片である。 最大幅 7.4cm, 厚さ5.4cmで、長さ8.4cm残っている。

(4) 土器溜•溝

その他の弥生時代遺構として、南北の小溝や浅い土壙状遺構・ピット・土器溜がある。ピットには前期のものも含まれるが、他の遺構は後期のものである。

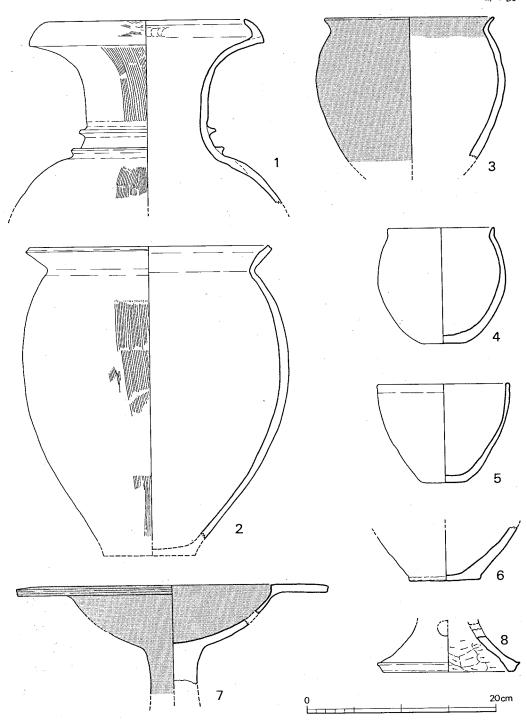
土器溜 (図版14-1,第15図)

IV-3($X+210\cdot Y-67$)で検出されたもので、土器群は下の不整形遺構から浮いている。 土器群は、ほぼ同一時期のものが北側の溝状遺構に続いていた。性格の不明な遺構と土器群である。

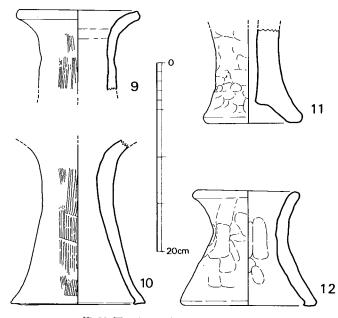
土 器(図版20・21-1,第29~31図) 1は袋状口縁の壷で、口径25cm、口内径20.6cm、頸部径12.7cmの大きさである。頸部は垂直で下端に台形凸帯2本をめぐらす。口縁と凸帯付近はヨコナデで、他はハケ目が著しい。2は、くの字口縁の甕で、口径25.8cm、胴最大径27.9cm、現在高31cmの大きさである。口縁先端は跳上げ口縁で、内側に指先ツマミ上げによるくぼみが見られる。胴は中位よりやや上に最大部がある。胎土には石英粒・雲母を多く含み、褐色の焼成となっている。3・4は壷と甕のどちらか決めがたいが、3は丹塗磨研の甕としてよいであろう。3は口径18cm、4は器高12.2cm、口径11.3cmで、3は石英粒を若干含むが、きめ細かい胎土である。5は器高10.4cm、口径14cmの小鉢である。胎土に細砂粒を多く含む。6は甕か鉢形の底部である。7は鋤先口縁が退化して平坦口縁となった丹塗磨研高杯である。口径33.2cm、口内径20.6cm、杯深さ約6cm、脚部最小径5cmの大きさ。8は裾径15cmの高杯の脚部片である。内面はヘラ削りされ径2cmの円孔を有する。裾部の特徴から瀬戸内系のものであろう。9~11は器台で、12は支脚である。9・10は胴部上半に最小部があり、ハケ目が著しい。9は指痕が著しい粗製品である。9は口径12.5cm、10は裾径14cm、11は器高12cm、口径11.4cm、裾径14.4cmの大きさである。

第31図は,器高62cm,口径29.7cm,胴最大径42.5cm,底径11.5cmの中型甕である。口縁は直立に近くゆるやかに外反し,高い凸帯をめぐらす。長胴の外面には粗いハケ目が著しい。底部は多少丸みが出ている。

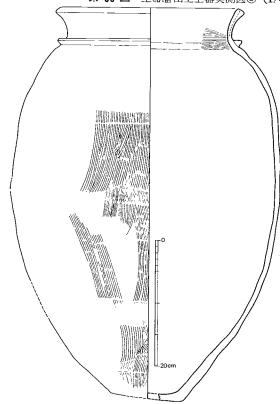
土器は、1の壷・2の甕・7の高杯の特徴から後期前半といえるが、第31図の長胴の甕は多少下がる特徴といえる。



第29図 土器溜出土土器実測図① (1/4)



第 30 図 土器溜出土土器実測図② (1/4)



第 31 図 土器溜出土土器実測図③ (1/6)

小 溝(図版14-2,第15 図)

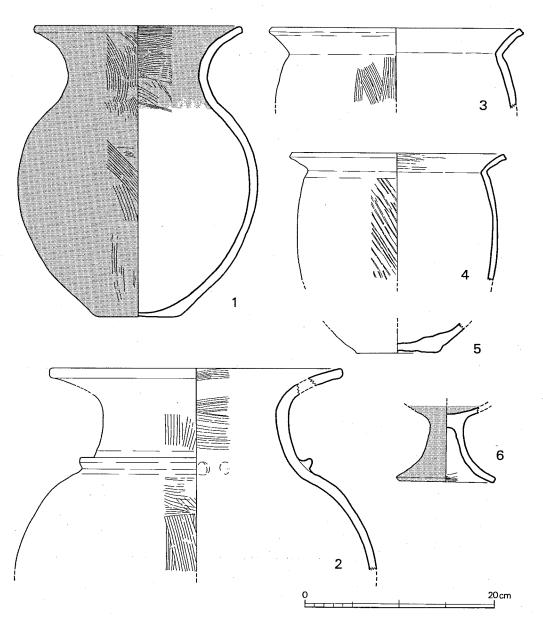
郡の後IV-2(Y-75) 地区に南北方向で検出された小溝である。溝の長さはトレンチ幅の 6.8 m を調査したが,溝幅は北側で 1.2 m,南側で 0.6 m となり南側が細くなっている。溝の深さも,北側で26.5 cm,南側で14 cm となり,南側が接くなる断面逆台形を呈する。この傾向はIV-3で土器の北側に続く溝も同様である。この 2 つの小溝は

平行し,方向を N 8 $^\circ$ 30 $^\prime$ W に向けている。

遺物は、図版14-2のように溝底からかなり浮いて発見され、第32図1の完形 壷は表土直下の溝が検出される前から発 見されていた。弥生前期の石鏃も発見された(第37図2)。

土 器(図版21-2,第32図) 1の 丹塗壷は、大きさが器高30.6cm,口径 22cm,頸径14.8cm,胴径25.3cm,底径9 cmあり,口縁部・頸部・胴部の区別がつ きにくいS字状曲線を描く。器壁は全体 に厚手で,胎土に細砂粒を含み,外面と 頸部内面に粗いハケ目調整と丹塗りを施 している。胴部内面はヘラ状具の痕跡も あるがナデ仕上げされている。底部は角 の取れた平底である。外面胴部中程以上 に煤が付着している。2も1と同様な曲 線を描く器形であるが、肩部に発達した凸帯をめぐらす大型の壷である。口径約30.9cm、頸径19.6cm、現胴部最大径38.3cmの大きさ。やはり外面と頸部内面に粗いハケ目を施すが、丹塗はない。5は壷の底部であるが、多少上げ底となっている。

3 · 4 は甕で, 3 の口径27cm, 4 の口径23cmの大きさである。胴部から口縁の屈曲は強く,



第32図 小 溝 出 土 土 器 実 測 図 (1/4)

内側の稜も顕著である。口縁部はゆるく外反し,先端の両角は著しい。胴部外面の粗いハケ目は4が特に著しい。

6は丹塗磨研の脚部・脚高6.6cm,最小径3.6cm,裾径10.5cmの大きさの小型品で,脚付椀になると思われる。胎土は細かい石英・雲母を含む黄褐色で,外面に丹塗磨研,脚内面はナデや細いハケ目の上に部分的に丹塗りが見られる。

土器は、甕と壷の底部の特徴から土器溜と同時期の後期前半に比定されよう。

郡の後IV-1~4地区の弥生時代遺構は,時期順に前期初頭の土壙とピット,中期中頃の甕棺とその北側の土器溜土壙,中期中頃から後半の住居跡2軒,後期前半の土器溜と平行する小溝2本であった。郡の後地区は,地形的に見ても水源に恵まれた地域で,前期遺構が多いのは当然といえる。

甕棺墓は、小児用が1基のみであったが、住居跡にしたもののうち、3号などは祭祀的色彩が強く、祭祀は墓地の周辺に所在する場合が多い点、墓地群の存在も考えられる。小児用甕棺墓は、住居近くに単独で発見されることもある。

後期の遺構は、南北の小溝2本と土器溜と若干のピットがあるが性格は不明。

3 古墳時代の遺構と遺物

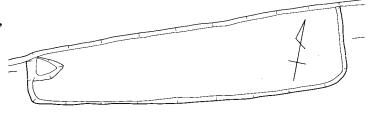
 $IV-1\sim4$ 地区で確実に古墳時代の遺構といえるのは、住居跡 1 軒と半月形の周溝のみである。表土下に若干の古式須恵器片を発見したが、これは遺構から遊離したものであった。

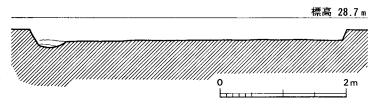
(1) 住居跡

1号住居跡(図版15—1, 第33図)

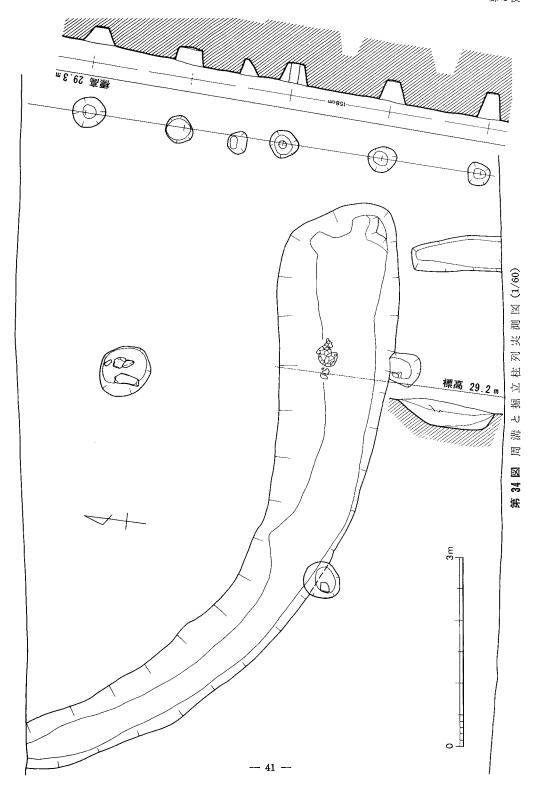
IV-4地区北側で一部を検出した。一辺5.06mの方形堅穴住居跡である。住居内には,柱穴も不明であるが,南西隅近くに1つの凹みがある。壁面も高さ約20cmしか残っておらず,土器も1個

体分が床面の東西に分散



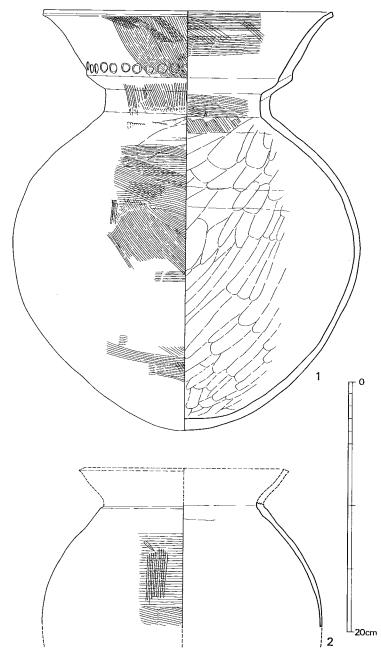


第33 図 1 号住居跡実測図(1/60)



して発見された。

土 器 (図版22-1, 第36図1) 住居跡から発見されたのは、この1個の土師器の盌だけである。器高8.7cm, 口径11.2cm, 胴部径12.5cmの大きさ。口縁部先端は、わずかに外反して



第35 図 周 溝 出 土 土 器 実 測 図 (1/3)

尖がる。器壁は,胴き によれい 東部 中程 して 丸 は 田 大 の を 増 して 丸 は 田 方 ら み で は 田 か で が な か と い れ で しんど な な も も で 頭 も の で あ ろ う 。

(2) 周 溝

 東端が 40cmで、西側が次第に浅くなって17cmとなる。 溝の壁面は、 南側の弧の外側が急傾斜で、内側がゆるやかとなり、古墳や周溝墓の溝と同様である。周溝内からは、幅の広い部分で2個体分の土器が発見された。土器は完形になる二重口縁壷と口縁や胴下半を欠く甕であり、溝底から20cm浮いていた。土器は、溝の大半が埋没した後に転入したものと思われる。しかし、溝と無関係のものではなく、墳墓の供献品であり、溝も古墳の周溝と見てよいであろう。周溝が円形にめぐっていたものとすると、内側裾で直径約12.6mに復原できる。

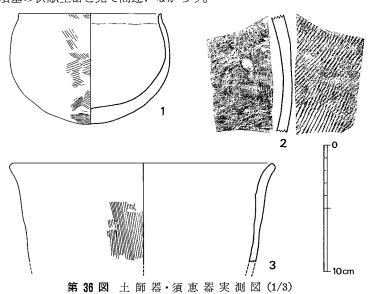
土 器(図版22-2,第35図1) 1は二重口縁の完形壷である。器高33cm,口径22.8cm, 頸部径13cm, 胴最大径27.3cmの大きさ。器形の全体のバランスとしては、口頸部が大きな比重 を占めている。短かい頸部は、わずかに上が細く、口縁部の1段目に続き、2段目もかなり傾 斜させている。2段目の口縁は、長くて広く外反して口縁部を特徴づけている。二重口縁の屈 曲部に施された陰刻竹管文は、さらに口縁部を強調するのに役立っているといえる。器外面は 丁寧なハケ目とナデ仕上げがなされ、胴部内面は丁重なケズリで器面を薄く仕上げている。胎 土はほとんど砂粒を含まない精良なもので白っぽい褐色の焼成となっている。焼成後の底部穿 孔はない。

2は口縁部を失った甕である。頸部径12.6cm, 現胴部最大径22cmの大きさで, 胴外面の上半には真横方向の丁重なハケ目に部分的に縦のハケ目・ヘラ刺突文がある。内面は頸部下約1cmのところから下を斜上方向にヘラケズリして薄い器壁としている。

土器は、二重口縁壷が特殊なもので、比較資料に乏しいが、甕は畿内地方の典型的な布留式 土器であり、4世紀後半の時期が与えられよう。壷に底部穿孔はないが、口縁部を強調した二 重口縁であるところから、墳墓の供献土器と見て間違いなかろう。

須恵器片(第36図2)

表土下で発見され,関連遺構の不明な大甕片の 1つである。外面の平行 タタキと内面の同心円タ タキを消しているところ は,古式の特徴であろう。



-- 43 **--**

4 その他の遺構と遺物

(1) 掘立柱列(図版15-2,第34図)

周溝の東側で、N2°E 方向に並ぶ 5 本の掘立柱穴を検出した。弥生や古墳時代遺構などの埋土より明確な黒褐色土が詰まっており、検出は容易であった。柱穴は、径35cmから52cmまであり、深さは28cmから43cmとなっているが、地山の北側が低くなっているので、柱穴底のレベルに大差はない。柱の大きさは35cmで、柱心間は35cm間隔となっている。

伴出する遺物はなかったが、柱穴間が均一な点と埋土の状況から歴史時代のものであることに間違いなかろう。同様な埋土のものは、周溝北側の篠混入ピットのP29と周溝南側にかかる2つのピットがある。周溝より新しい東側のP36から第36図3の土器片が出土しており、歴史時代であることを物語っている。

土器は、口縁がゆるく外反する甕か甑で、外面に細いハケ目、内面は口縁下3 cmのところから大きくヘラケズリをしている。

(2) その他の遺物

石器(図版22-3,第37図) 直接遺構に関連ない遺物のうちで最も興味あるのは,1の石器である。トレンチの南西端の地山直上で発見された長さ11cm,最大幅5.9cm,最大厚さ2.1cmのもので、堅牢な砂岩製である。石器の厚さは、直線的に減少してするどい刃部を作り、他方は掌に当るに都合よいように丸味を持つ・大きさ・形態・石材から考えて、擦切用の石器といえるだろう。縄文期に東北地方などで擦切石斧があるように、弥生前期の扁平片刃石斧製作に使用することも可能であろう。

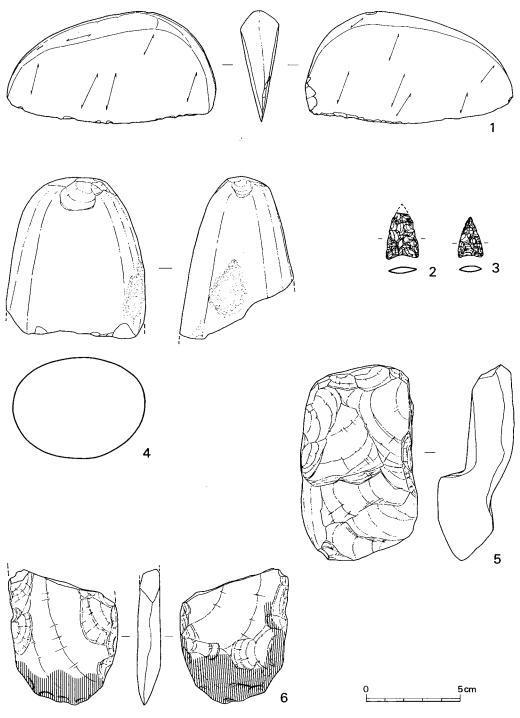
5 は新しいピット29から出土した、玄武岩製太型蛤刃石斧片である。破損による表面剝離が著しく、かろうじて石斧であったことがわかる。

6 は玄武岩製の打製石斧の刃部である。甕棺北西側の小溝から出土したが,縄文期のものであろう。現長 7 cm,幅5.7cm,厚さ1.2cmの大きさで,刃部に使用痕が著しい。

ガラス小玉 トレンチの南西隅の地山直上で出土したもので、径 3.25㎜, 厚さ 2.9㎜, 孔径 0.8㎜の紺色ガラス製である。

紡錘車(図版19-3,第23図3) 古墳の周溝から出土した白雲母片岩製である。径4.1cm, 孔径0.43cmのもので、弥生後期のものであろう。

(柳田)



第37図 石器実測図(1/2)

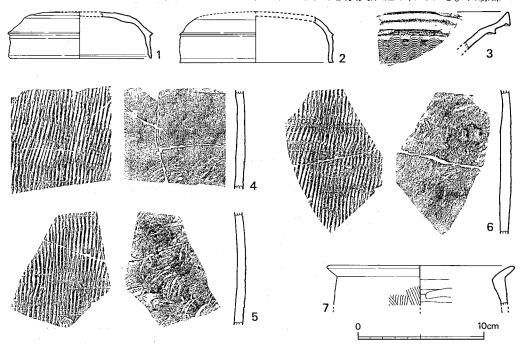
5 I-2・6, II-1トレンチの調査

 $I-2\cdot 6$,II-1に各々 1本づつ計 3本の東西トレンチを設定し調査を実施した。その結果,目的とした郡衙関係の遺構はもとより,顕著な遺構は何等検出できなかった。発見した遺物もわずかで,弥生土器がそのほとんどを占め,次いで古墳時代の須恵器・土師器が少量,奈良時代の甕が 1点出土したのみで,しかも全てが細片化していた。そこで,ここでは I-6出土の土師 甕と II-1 篠層上面からまとまって出土した古式須恵器を報告することにした。

須恵器 (図版22-4, 第38図1~6)

杯 蓋(1・2) 両者ともに肩部に鋭い稜を持ち、また、丸味を有する天井部は ½ 前後まで回転へ う削り調整を行っている。焼成は堅緻で暗青灰色を呈する。胎土はよく精選され、ほとんど砂粒を含まない。1の口縁端部は内傾し、凹線が巡る。また、内底部に同心円状の叩目がわずかであるが残っている。2は、若干内湾する口縁部を有し、端部は略水平であるが、わずかに凹線を成す。

甕(3~6) 口縁部の形状が知れるのはわずかに 1 点のみである。 3 は断面三角形を呈する口縁端部と三角凸帯を有し、この凸帯間に11本を単位とする波状文が施されている。口縁部



第38図 Ⅰ-2・6, Ⅱ-1出土土器実測図 (1/3)

外端面は強いヨコナデにより凹面を成している。 $4 \sim 6$ は外面に平行叩目と浅い沈 線 を 巡らし、内面は同心円状の叩目を半ばスリ消している。 $3 \sim 6$ はいずれも焼成は堅緻であり、胎土中の砂粒は少い。

以上,報告した須恵器はいずれも古式のもので, I型式3ないし4段階 (註1) に相当する ものと考えられる。

土師器 (第38図7)

甕 図示した甕は小片のため口径は正確さを欠いている。胴部外面は刷毛目調整,内面は ヨコ方向のヘラ削り調整を行っている。8世紀代のものであろう。 (森田)

6 小 結

郡の後地区の調査は、予備調査の時から掘立柱建物を期待したが、今回までには遺物さえつかめなかった。郡の後地区の特徴は、遺構はまばらであるが、弥生前期の遺構・遺物の発見率が高いことで、この傾向は加賀石地区にも及ぶ。井田用会支石墓付近を北端とした遺跡群は、東西幅約 200m ほどで細々と郡の後地区まで続くが、郡の後地区で急激に広がって三雲遺跡群となる。遺跡の両岸は洪水に脅かされるかわりに水利はよく、初期水稲栽培には適していたといえよう。遺跡の周辺は砂利層が多く、水田跡の発見は困難であるが、郡の後Ⅲ地区東半と仲田 I 地区北端は、現在でも湿田であるところから、当時も水源や水田として使用された可能性がある。

第3節 加賀石地区の調査

1 はじめに

加賀石地区は、東西に2町、南北に1町の広さで、北は郡の前と郡の後、西を仲田、南を石橋と平小路、東を川原川に囲まれている。加賀石のI地区とII地区では1m以上の高低差があり、II区は坪掘りの結果から遺構も確認できなかったので調査対象から除外した。しかし、地山が深い点など、今後水田跡の可能性として調査の必要性も生じるかもしれない。

「加賀石」の名の由来は、郡の後と加賀石の境界の道路を拡張するまで、道路の南側に露出していた「大石」によるようだ。その後「大石」は昭和25年頃道路拡張に伴ってその下に埋込まれ、昭和52年度の調査までその姿を見ることができなかった。その「大石」は、調査の結果

支石墓であることが判明した。

ここに報告するものは、昭和49年度に予備調査した $I-7\sim10$ のトレンチと昭和51年度に調査した $I-21\sim23$ 、昭和52年度に調査した道路拡張の I-1 • 5 地区である。

調査は、柳田康雄・橋口達也・馬田弘稔・丸山康晴・小田雅文・川村博・平島勇夫・小林義 彦が担当した。

2 弥生時代の遺構と遺物

加賀石地区の調査は、「大石」の存在と加賀石南側道路新設に際し「大甕」の発見を聞いていたため、調査前から墓地群の存在が予想されていた。予備調査でI-9に前期初頭の甕棺墓 9 基を確認したものの、「大石」の隣接地であるI-1は温室栽培のビニールハウスが設置されているため、工事施工の昭和52年度まで待たなければならなかった。

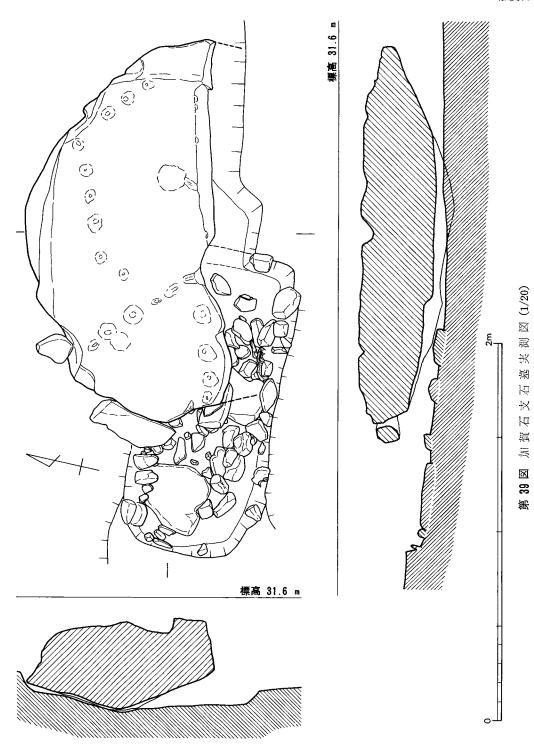
弥生時代の遺構としては、前期の甕棺墓9基と支石墓1基、貯蔵穴と思われる竪穴群、竪穴住居跡、中期の住居跡と祭祀用と思われる土器群、後期の竪穴住居跡、終末から古墳初頭の箱式石棺墓1基がある。 I —22・23地区で、前期初頭の遺物が発見されていながら、都合でその層まで調査できなかったが、発見された支石墓・甕棺墓・貯蔵穴などから見ても、この地域は前期の遺構が最も密集しているところといえるようだ。

(1) 支石墓(図版23・24、第39~41図)

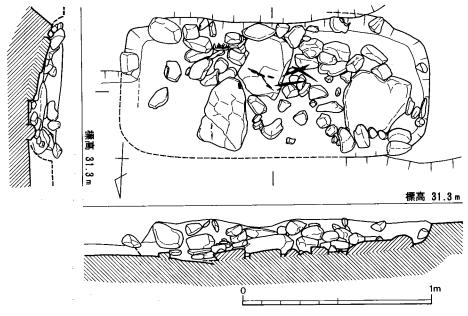
支石墓は,加賀石 I-1 の北側道路敷(E 46-S 2)で発見された。道路拡張の際に,穴を掘って埋込んだということであったから,著しく原状を損しているものと思われたが,予想に反して残りがよかった。

撑石は、現状で東西幅2.04m、南北幅1.0mの大きさの花崗岩であるが、石の南側には楔痕が残っていることから、後世に割取ったことが明らかで、幅1.5m以上はあったものと思われる。撑石の最も厚い部分は45cmである。支石墓は碁盤形(南方式)と思われ、撑石の西側に支石らしきものがあるが、主体部との関係から見ても、地元民がいうように移動していることが明らかであるから、確実な支石は失われたと見るべきであろう。「大石」を埋込む際に北東側に穴を掘り、ずり落したと思われ、この時に下部の主体部の半分近くが破壊されたようだ。

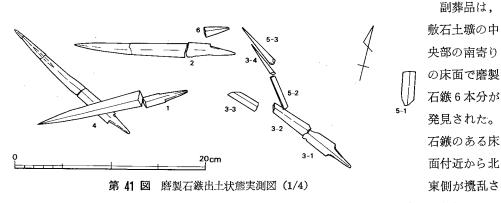
撑石の下には、半分程ずれていたが敷石の土壙が $S87^{\circ}W$ の方向で検出された。土壙の大きさは、長さ1.64m、幅約0.75m、現状深さ20cmの長方形で、成人埋葬の可能な規模となっている。土壙内には、径5cmから径35cmの塊石や平石が粗雑に敷かれているが、床面は舟底状を呈する。敷石には手近にある石ころを使用したというべきものである。



— 49 **—**

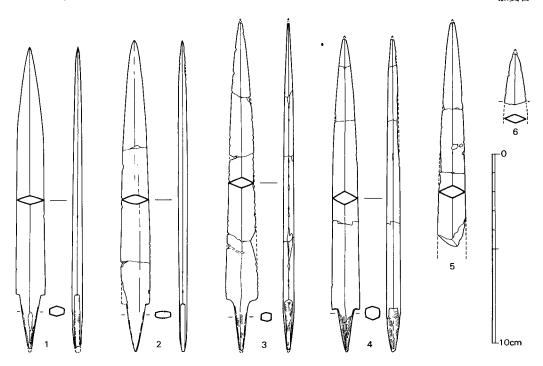


第40図 支石墓下部土壙実測図(1/20)



れているために、原位置にある石鏃は3本のみで、4本目は移動し、5・6本目は欠損していた。副葬状態は、原位置にある3本からすると土壙と平行に切先を西側に向けてまとめてある。人体の埋葬方向は、副葬品から決定できるであろうか。昭和37年発掘の須玖・岡本15号甕棺の中期前半では、銅剣の切先が足の方向にあるように、刀剣の場合に切先を足方向に向けて副葬することが多いが、石鏃の場合もあてはまるのであろうか。長大な磨製石鏃であり、刀剣と同様に腰部付近に副葬していることから、茎方向の東側が頭部となる可能性が強いといえるだろう。

磨製石鏃(図版25,第42図,表1) 磨製石鏃は,支石墓下部敷石土壙から副葬品として6本発見された。石鏃の計測表は表1のとおりであるが,材質は未鑑定であるので特徴を述べ



第 42 図 磨 製 石 鏃 実 測 図 (1/2)

る。 1 は灰黒色頁岩質で鉛質の光沢があり, 2 は内部が黒色頁岩質であるが表面は灰褐色で脆い。 $3\sim5$ は灰黒色粘板岩質で, 1 と比較して柔らかみがある。 6 は灰白色の粘板岩である。 石鏃は,身の中央に明瞭な鎬を通して断面菱形を呈し,身と茎の境に段を有して関を持つ長大な有茎式である。茎は全て断面六角形を呈するが, 4 のみ茎の大半を研直しているので不整形のところが多い。これらの形態から $a \cdot b$ の 2 種に分類することができる。この $a \cdot b$ の分類は,石鏃の身幅の変化によるもので, 1 のように先端から急激に幅を増して刃部に稜を持ち,稜から関まで身幅の差が少ないものを a 類, $2\sim4$ のように先端から次第に幅を増し,刃部に

表1 加賀石支石墓磨製石鏃計測表

(単位 mm, g)

<i>N</i> 6.	全 長	刃 長	関幅	茎幅	身 厚	重	備考
1	158+	129	15.5	11.5	5.3	14.4+	茎一部欠損
2	163.5	138	15	9.8	4.6	13.3+	関一部欠損
3	172+	145+	17	10	5.8	12.9+	先·茎一部欠損
4	154+	141+	14.5	9	7.3	14.8+	先一部欠損
5	117+	117+	15+	_	6.5	_	関・茎欠損
6	27+	27+	11+	_	4.5+		先端のみ

明確な稜を持たないものをり類とした。この分類でいくと5はb,6はaになる。さらにb類は、a類に比較して厚みがあり、文字どおり断面菱形を呈する。また、b類は関部の形態に差があり、刃部と直角をなすもの(2)、鈍角をなすもの(3)、鋭角をなすもの(4)の3者がある。4は茎の研直しを行なっているが、関部までは達しておらず本来の姿である。

本石鏃は、舶載されたものと思われるが、日本では春日市伯玄社24号土壙墓で副葬品として6本発見されている(註2)。伯玄社例は全てb類に属し、関部は茎の研直しのある1本以外は刃部と鋭角をなした逆刺がある。伯玄社例にはa類のような薄手のものもある。

朝鮮では、慶尚南道昌原郡熊南面外洞里の石積石室から有柄式石剣(BII)・丹塗壷・石斧に伴って長さ10㎝から19㎝の同類の石鏃が7本、同地支石墓(?)から有柄式石剣(BII)に伴って10.7㎝から17㎝以上の石鏃3本(註3)、金海郡茂溪里から管玉3個・有柄式石剣(BII)に伴って同類4本を含む10本(註4)、忠清南道扶餘郡松菊里から遼寧式銅剣・銅鑿・勾玉2・管玉17・有柄石剣(BII)に伴って11本(註5)などが発見されている。

日本出土品で,加賀石や伯玄社例のように長大なものでなく,長さ10cm前後の舶載品と思われるものは,前原町志登支石墓8号に4本(註6),同町用会箱式石棺墓(註7),同町高野箱式石棺墓(破損後研直し)(註8),福岡市浦田2号土 壙墓に2本(註9),板付竪穴・包含層(註10),粕屋町江辻採集(註11),長崎県下県郡豊玉町加志々箱式石棺墓に石剣と3本(註12)などの遺跡に出土例がある。ここで,福岡市有田(註13)や中間市垣生の有柄式石剣(BIb)と共伴した4本(註14)のように,関部に明瞭な段を有さず,鏃身の途中にふくらみをもつものは含めない。

これらの磨製石鏃の時期は、加賀石・伯玄社の2遺跡について時期の判明する伴出物がないが、実用品といえる長さ10cm前後の志登例などは、板付例が板付I式であるから参考になる。加賀石・伯玄社例は、志登・板付例と比較すると長大化し、実用品とは考えられないところから「副葬用の儀器」として、時期も多少新しくなるだろう。

支石墓は、糸島半島の確実な例として、志登(10基)・志登岩神・井田用会・井田御子守・石ケ崎・福岡市東小田(2基)・同小田森などが知られている。このうちで、下部構造や副葬品が判明しているものは少く、時期を決定する資料に乏しい。福岡市東小田の2基は、糸島半島で唯一の土器が伴出した遺跡(註15)であるが、報告によると1号に合口甕棺、2号に7個の支石の間に仰臥伸展葬人骨があり、屍体の左肩部に丸底の小形壷が副えられていたという。この小形壷を実見された松岡史氏は、これは赤色磨研の丸底小壷で、韓半島の無文土器文化に属する土器と同一で、夜臼式並行期のものであるという(註16)。

管玉では,石ケ崎支石墓から太形碧玉管玉 11 個(註17),井田用会支石墓から小形碧玉管玉 22個(註18)が発見されている。石ケ崎の太形管玉は,前記した松菊里の遼寧式銅剣と共伴する管玉と同一で,細形銅剣以前の時期が考えられる。また,松菊里では10.3cm~19.9cmの加賀

石 a 類の磨製石鏃も伴出しているので、糸島の支石墓の時期が推定できる。志登 8 号発見の磨製石鏃が、板付例から板付 I 式であり、志登支石墓群中にも夜臼式甕棺があることから、糸島の支石墓の大半が弥生初期のものであり、旧糸島郡にあたる東小田 1 号支石墓の甕棺などは稀であろう。 (柳田)

(2) **I** — 5 石棺墓 (図版26, 第43·44図)

墓壙のプランは、北壁を排水溝で切られているが、長さ3.07m×幅約1.75m(同床面1.89m×約1.60m)の隅丸長方形をなし、ほぼその中心に石棺を設ける。深さは、現在20cmを測る。石棺は、既に盗掘を受けており、蓋石は存在しなかった。南側壁に4枚・北側壁に3枚を使用し、東側小口部の北側壁は大きく外に出る。同様に南側壁もなされていたと考えられるが、原位置を保っていない。床面はほぼ水平であるが、深さは西側小口部で29cm、東側小口部で20cmを測り、側壁の上面レベルも順次低くなる。また、西側小口部幅46cm・東側小口部幅約30cmを測るので、頭位は西側と考えられる。長さは1.72mを測る。石材は墓壙底からは15cm~20cm程度掘り込み、花崗岩を使用する。石棺内面に朱は認められず、また粘土による目張りも検出されなかった。主軸は S68°W を測る。

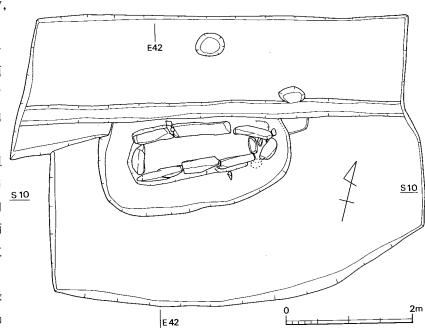
この石棺は、調査後に埋めもどして保存したので、石棺の掘方の断面図を完成していない。

土 器(図版27,

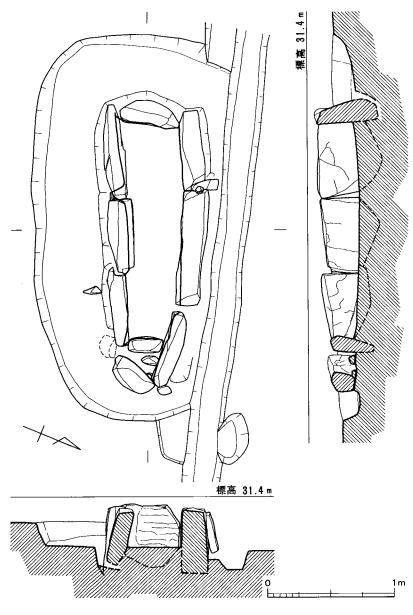
第45 • 46図)

壷10は鋤先状を 呈し、口縁平坦面 から外面にかけて 丹塗りを施す。内 外面共に丁寧なョコナデを明察・平坦 面には研察を、中 の刻み目を、外面 には縦方向の暗文 を施す。

1は同様の口縁 部を欠失する。凸 帯はいずれもシャ



第 43 図 加賀石 [- 5 石棺墓位置図 (1/60)



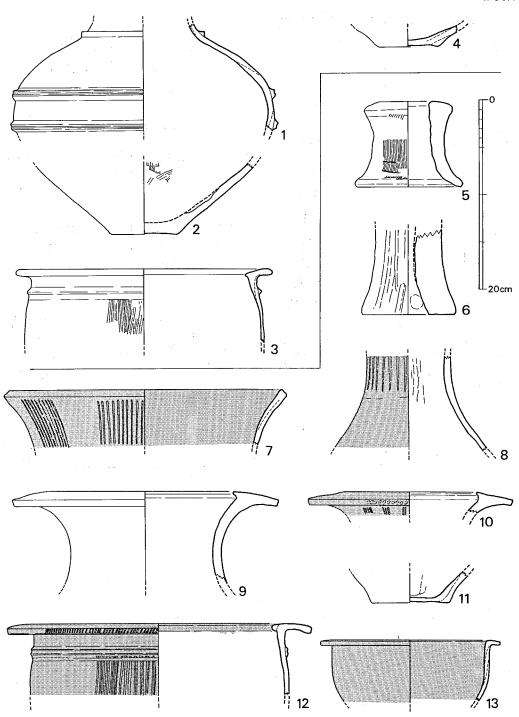
第 44 図 加賀石 [- 5 石棺墓実測図 (1/30)

良く,褐色を呈す。

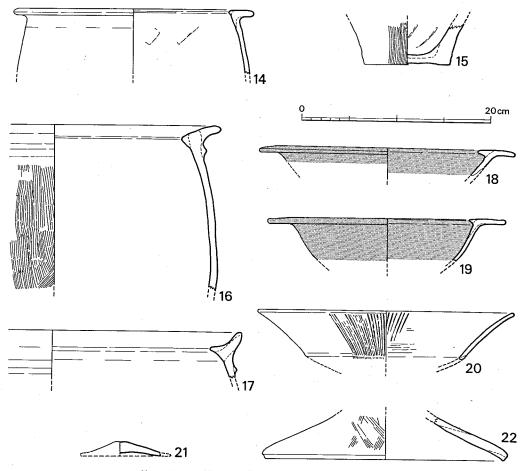
8は袋状の口縁部を欠失する。内面の頸部にはシボリ目痕を明瞭に残し、外面は丹塗り後、 頸部には下方で収束する縦方向の暗文を、胴部には研磨を施す。精製胎土に小さい研粒を若干 含み、焼成は良く、褐色を呈す。

器台5は器高9cmを測る小形ではあるが、外面のハケ目状整形及びその後の横方向のナデは

ープに仕上げ,内外 面共に丁寧なナデを 施す。2の外面は丁 寧な縦方向の研磨を 施し,10の胴部には 研磨が認められない ので同一個体とは断 定できない。以上 は,大きめ砂粒を若 干含むが胎土は精製 され, 焼成は普通で 褐色を呈す。9も内 外面共に丁寧なヨコ ナデを施し,やや小 さめの砂粒を含み, 焼成・色調は同様で ある。



第 45 図 石棺墓周辺出土土器実測図① (1/4)



第 46 図 石棺墓周辺出土土器実測図② (1/4)

丁寧に施す。6は下半部片で、外面に指押え痕を残し、底部は平坦に仕上げている。外面は縦 方向のナデが強く、その指腹幅が残り多面形状を呈す。共に大きめの砂粒を多く含み、焼成は 良く、茶褐色を呈す。

甕 12は内面のナデは丁寧であるが、口縁内面との接合痕を明瞭に残す。口縁平坦面から外面にかけて丹塗りを施す。平坦面は研磨し、端部に斜方向の刻み目を、凸帯下方に縦方向暗文を施す。暗文はシャープにヨコナデで仕上げた凸帯下半方にまで及ぶが、その後強くヘラで沈線状に研磨する。精製胎土に小さい砂粒を少し含み、焼成は良く、褐色を呈す。

14は器内のナデは丁寧であるが、ハケ目状整形痕を一部に残す。胴部には縦方向のハケ目状整形痕のままであるが、口縁下のヨコナデが強く若干凹んでいる。3は口縁内端部及び凸帯部のヨコナデが丁寧でシャープに仕上げている。17は口縁内端部が大きく突出し、胴部との屈折も明瞭である。なお、上面は大きく内湾し、胴外面との屈折は少なくその部位に凸帯を付す。

以上はいずれも小さめの砂粒を含み、焼成は良く、13・14は暗褐色、他は茶褐色を呈する。 高杯 19は18に比較して、杯部上半部がやや内湾し、口縁部上面は平坦である。共に精製胎土 を使用し、内外面共に丹塗磨研するが、18はやや砂粒を多く含み、焼成も悪く、明褐色を呈す。 20は杯部から大きく外湾する口縁部片で、内面は横方向にハケ目整形後に最上部のみョコナデ をし、斜方向の暗文を施す。外面は斜方向のハケ目整形痕を一部残し、方射状の暗文を施す。 口縁端部のョコナデによる整形は丁寧であるが、外面の杯部との屈折部はハケ目整形のみで、 稜は認められるが、所謂明瞭な段は認められない。精製された胎土を使用し、焼成は良く、暗 褐色を呈す。

鉢 13は内面から口縁部上面にかけて丹塗りを施し、研磨している。下半部で内湾する胴部は 上半部で若干内湾気味に直口する。胴部内面も口縁部近くで直立するが、その屈折は緩やかで ある。精製胎土を使用し、焼成は良く、褐色を呈する。

蓋 21は口縁部を欠失するが、径は10cm前後の小形品で無頸壷用と思われる。内面は丁寧なナデを施し、天井部は傘形をなさず低平である。外面は放射状の磨研痕を残し、頂部は凹んでいる。精製胎土を使用し、焼成は良く、褐色を呈す。22は甕と思われ、内面は丁寧なナデを施すが、外面は斜方向のハケ目状痕を残す。砂粒を若干含み、焼成は良く、茶褐色を呈す。

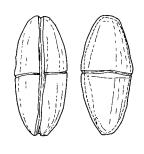
以上の土器は後述のように、明確な遺構での共伴遺物ではないが、次の特徴から大きく中期 後半・後期初頭前後・後期終末前後の3時期に大別できる。

中期後半 壷では1に代表され、大きく外反する口縁部に比較して、頸部の径は小さく、胴部には3条の口唇状凸帯を付す。なお10の口縁上面はやや下向きの鋤先状を呈し、後出の土器で類例が多くなる口縁端部の刻み目を施す。7は中葉に類をみる口縁部が大きく外湾する開口壷に対して、既に下半部での立ち上り気味で、頸肩部からの高さも若干低い器形である。口唇端部が若干つまみ上げ状を呈していることも同様である。甕では12と16に代表される。12の胴上半にも縦方向の暗文を施したものは、口縁下に波状の暗文を施す丹塗磨研より後出で、地域的には佐賀・筑後以東で認められることが多い。16は内傾する口縁直

下に凸帯を付し、14よりも後出である。高杯では19が18よりも後出する。

後期初頭 壷では8に代表されるが、頸肩部に凸帯が付されていない。甕では17の口縁部はくの字状を呈し、口縁内面は内湾しつつ大きく突出して稜をなしている。

後期終末前後 高杯の20に代表され、終末期に多い杯部と口縁部の接合部は内外共に明瞭な段は認められず、屈折した稜を残すのみで、むしろ土師器の範疇に入る可能性があろう。器台の5・6は後半に類例をみる。



9 3cm 第 47 図 石錘実測図 (1/2)

なお、これらの土器は、加賀石 I — 5 地区で発掘された石棺墓の上面で9・20が、墓壙内で1・2・3・4が、他はその周辺で出土したもので、図示しなかった土器片も多い。石器では、周辺から滑石製土錘が出土している。小形で弥生後期のものであろう。石棺墓は既に盗掘を受けており、共伴した土器はないが、後期後半以降の可能性を考えてよいであろう。

(馬田)

(3) I — 9 甕棺墓 (図版28~33, 第49~52図)

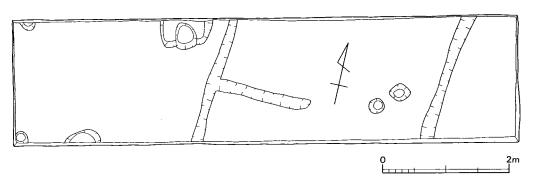
第1次の予備調査においては加賀石地区では I-7, I-8, I-9, I-10にトレンチを設定した。 I-7ではこれという遺構はトレンチ内では見られなかった(第48図)。 I-8においては住居跡 3 棟分を確認した(第102図)。 I-9では前期の甕棺墓 9 基分と古墳時代住居跡 1 棟分を検出した(第49図)。 I-10では遺構とおばしきものはトレンチ内では見られなかったが,弥生中期後葉~後期初頭の土器が多く散布し,これは墳墓群に伴なう可能性が強いと思われた。したがってこの項では I-9の甕棺墓と I-10出土の土器について述べる。

I-9 では 2×8 mのトレンチ内に 9 基分の弥生前期の甕棺墓が確認されたが,後世の削平によって上半をかなり欠失するものが多い。特に古墳時代住居跡によって削平を受けた 7 号~ 9 号の 3 基は小片を残すのみである。では個別に列記しよう。

1号甕棺墓(図版30-1·32-1,第50·51図1)

下甕の口縁部を打欠いた覆口式の甕棺で、S60°Wに主軸をとり、上甕は東南側に向く。傾斜角は30°30′で上甕が高い。下甕には水ぬき孔を穿っている。

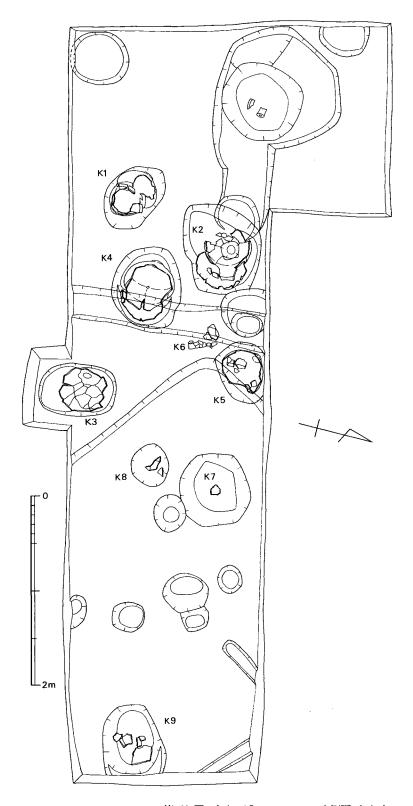
上甕には深鉢ともいうべき丹塗磨研の甕を使用している。器高25.4cm, 口径35.4cmを測る。 如意形口縁で,口縁下に1条の三角凸帯をつくり出すが,凸帯部の接合法には古い要素を残し ている。胎土には細粒の砂を含む精製粘土を用い,焼成は良い。器表全面と内面上半は丁寧に



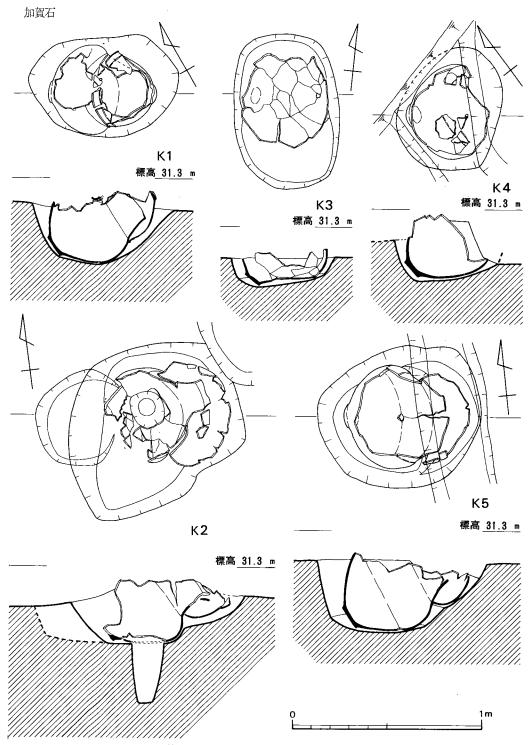
第 48 図 加賀石 [- 7 トレンチ実測図 (1/60)

へラ研磨し,ほぼそれと重複して丹塗りを施している。地色は明褐色を呈する。

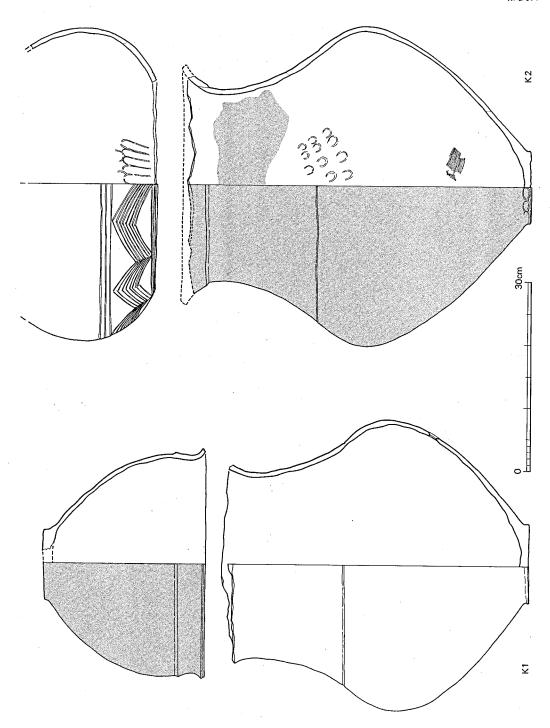
下甕は大形の壷で 口縁は打欠いてあ る。残存高は48.5 cm, 頸部最小内径は 27.5cm, 肩部には1 条の沈線を施すが, その部分の径は38.1 cm, 胴部はやや扁球 状を呈し, 胴部最大 径はやや上半にあり 45.5cmを測る。底径 は12.6㎝。胴部の中 央付近に内部から穿 孔した径 1.2cm 程の 水ぬき孔が認められ る。器表から内面口 縁下まではヘラ研磨 を施す。底部近くで は縦方向, 胴部最大 径のところまでは斜 方向, それより上位 はすべて横方向の研 磨である。内面の底 部は指で押え胴部は ハケ目調整の後ナ デ,頸部内面はナデ 調整である。胎土に は細粒の砂を含み, 焼成は良く, 暗褐色



第 49 図 加賀石 [一9 トレンチ実測図 (1/40)



第50 図 加賀石 I − 9 甕棺墓実測図 (1/20)



第51図 1・2号甕棺実測図(1/6)

を呈する。頸部から胴下半にかけて, 両側に黒斑が認められる。

2号甕棺墓(図版30-2·32-2, 第50·51図2)

主軸は S81°W で、上甕は東側に向く。傾斜角は 35°前後になるものであろう。上甕の口頸部、下甕の口縁を若干打欠いた覆口式の甕棺であるが、削平及び後世の柱穴等によりかなりの破壊を受けている。

上甕は大形壷であるが口頸部を打欠き,胴下半を欠失して全容はわからないが,復原した胴部最大径は49.4cmを測る。胴上半には上下各3条の沈線をめぐらし,その間には単位8条の端整なヘラ描山形文を施文している。文様帯は横方向のヘラ研磨,下半は斜め方向のヘラ研磨を加えている。胴上半内面には指頭圧痕が明瞭に認められるが,他の部分はナデ調整のようである。胎土には砂粒を多く含み,焼成は良好。茶褐色を呈する。文様帯の部分に大小の黒斑が数個認められる。

下甕は大形壷を使用し、口縁部の若干を打欠いている。復原高は 55.3cm 程、残存高は 54.5cm。残存する口縁内径は約32cm、頸部最小内径は28.3cm。肩部径は42.7cm,胴部はやや扁球形をなし胴部最大径は上半にあり50.2cmを測る。底径は11.3cm。口縁は外方に開き、口縁下と肩部は段をつくり、きわめて整った形をしている。器表及び内面頸部上半まではヘラ 研磨 を施す。研磨の方向は胴下半及び頸部が斜め方向,胴上半及び口縁~内面頸部上半は横方向である。肩部内面付近には指頭痕を残すが、最終的にはナデ調整を行っている。胴上半は横ナデ、下半はハケ目の後ナデ調整を施している。器表から頸部内面は丹塗を施すが、特に頸部内面は残りが良い。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。

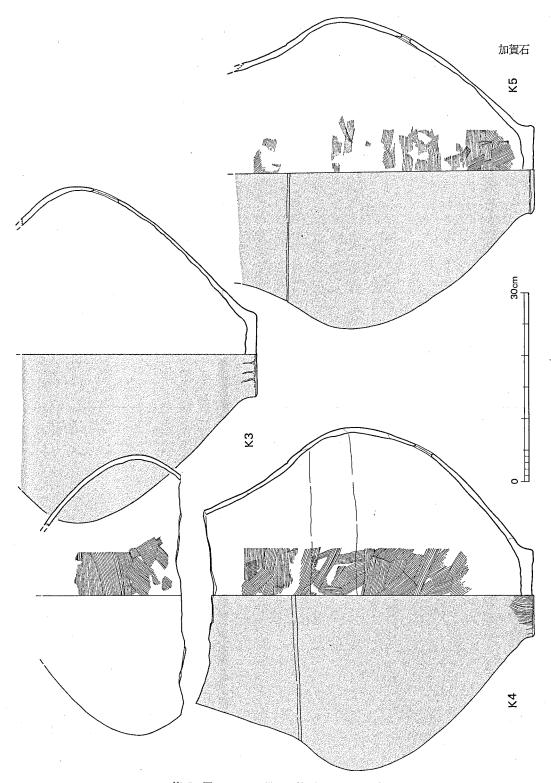
3号甕棺墓(図版31-1·32-3,第50·52図3)

主軸を N84°W にとるが、かなりの削平を受けており上甕があったか否かも不明である。傾斜角はかなり急で 50° をこえるものとみられる。又水ぬき孔を穿っている。

大形壷を使用しているが、肩部より上は欠失している。現存高37cm、胴部最大径はやや上位にあり推定53cm程、底径は13.1cmを測る。器表の胴下半は縦ないし斜め方向、胴上半は横方向のヘラ研磨をし、全面に丹塗りを施している。内面はナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。底部付近には煤の付着が認められ、又胴中央部には二次的黒変が認められる。

4号甕棺墓(図版31-2·33-1,第50·52図4)

上甕は口頸部を,下甕は口縁部を打欠いた大形の壷を使用した覆口式の甕棺で,主軸をN83°Wにとり、上甕は東側に向く。傾斜角は約45°である。下甕には水ぬき孔が穿れている。



第52図 3~5号 甕 棺 実 測 図 (1/6)

上甕は口頸部を打欠き,底部は欠失している。胴部最大径は44.3cmを測る。胴下半は斜め方向,上半は横方向のヘラ研磨,内面の下半はナデ,上半は指頭による押圧調整の後ハケ目を施している。胎土には細粒の砂を多く含み,焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。

下甕は口縁部を打欠いた丹塗磨研の大形壷である。復原高は55cmをややこえるものとみられる。現存高は52cm・頸部最小内径は約29cm, 肩部径43.9cm, 胴部最大径はやや上位にあり,53.7cm, 底径は13.6cmを測る。器表は底部付近にハケ目が残るが, 胴下半は斜め方向, 胴上半より上位は横方向のヘラ研磨を加えている。内面は指頭による調整の後ハケ目を施しているが,頸部上半ではさらにナデて仕上げている。胎土には砂粒を多く含み,焼成はやや軟質であるが良好。胴中央にやや大き目の黒斑とその反対側に縦長の小黒斑数個が認められる。

5号甕棺墓(図版31-3・33-1,第50・52図5)

古墳時代の住居跡によって上甕のすべてと、下甕の胴上半部より上位を切られている。主軸は S52°W にとり上甕の方向はほぼ東南方向に向いていたものと考えられる。下甕の胴下半部 にあたるところに外から 穿孔した1.4×2.1cmの水ぬき孔がある。

下甕は丹塗磨研の大形壷を使用している。先ほど述べたように胴上半部より上は住居跡によって切られているが、たまたま頸・肩部の一部が下甕内に落ち込んでいたので、それを復原すると現存高46.4cm、肩部径は40.8cm、胴部最大径は49.3cm、底径は14.1cmを測る。器表は底部近くを縦方向の、胴部の下位から上は横方向の丁寧なヘラ研磨を加えている。内面はハケ目の後ナデ調整を施しているが、特に底部にはハケ目がよく残っている。胎土は細粒の砂を多く含み、焼成は軟質である。胴部下半のかなり広範囲に二次的黒変が認められる。

6号甕棺墓(第49図)

上甕の方向はほぼ東南に向く甕棺であるが、上下共に小片で墓壙の確認すらできなかった。 7号~9号甕棺墓 古墳時代住居跡によって大部分削平を受け残るのは小破片のみであるがこれらはすべて1号~5号と同様の特徴を示す大形壷であることをつけ加えておく。

加賀石 I — 9トレンチで検出したこれらの甕棺は形態的には橋口の分類した K I a 式甕棺(註18) より明らかに古い。これらが後世にかなりの削平を受けていることによって、副葬小壷を有したか否かは不明で、副葬小壷での対比はできないが、ほぼ全容のわかる 2 号下甕に見られるような口縁部の外反、口縁下・肩部の段、2 号上甕の端整なへラ描の複線山形文等の大形壷自体の特徴から見ても板付 I 式に属することは明らかである。1 号上甕として使用された深鉢ともいうべき甕の口縁下凸帯部の接合法は、夜臼式甕の肩部凸帯部の接合法と同様で、古い要素を残しており、これも板付 I 式である根拠となろう。

又これらは器高50数cmのかなり大きな壷であるが、KIa式甕棺に比較すると未だやや小さ

いといえる。又3号,5号等にみられた煤の附着,二次的黒変からみても棺専用として作られたものではなく,日常容器の大形品を転用したものであると考えるのが妥当であろう。しかしながら甕棺の発生過程を考慮する上に好資料となることはまちがいない。

(4) I-10土器溜の土器 (図版33-2,第54~56図)

I-10トレンチ土器溜から出土した土器はかなりの量にのぼるが、すべて中期後葉**~**後期初頭の土器で占められている。

便宜的に中期と後期の土器とに分けて説明する。第54·56図は中期の土器,第55図は後期の 土器と底部を図示する。

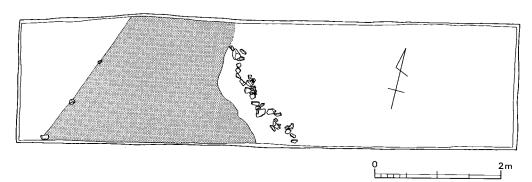
第54図1は丹塗磨研のおそらくは脚合付椀である。2・3は高杯で、3の内面には丹塗りが認められるが、2と3の器表は風化著しく観察不能である。甕は4・5のように口縁がほぼ平坦なもの、6・7のように口縁が外側に低く傾斜するもの、8・9のように口縁が内側に低く傾斜するものの三種が存在する。これらの中では8・9等が後出的であることは言うまでもない。図示したものでは7・8・9が丹塗磨研土器であるが、甕の中には丹塗磨研土器が多く、又内面のみを丹塗りしたものが若干例存在する。11は器形・口縁に特異な形態をもつ丹塗磨研土器である。12は中期に特有の器台である。第54図は中期後葉~末の甕棺片である。

これらは一括して出土して何らおかしくはない土器群であるが、強いて言えば、2・3の高杯、8・9の甕、10の壷等がやや後出的なものである。

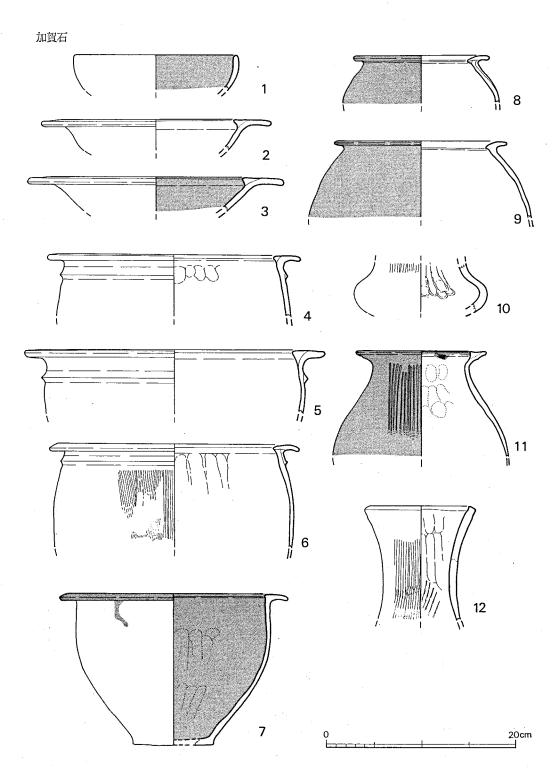
第55図 $1 \sim 4$ は後期の土器である。 $1 \sim 3$ の甕はそれぞれにく字口縁の諸特徴を示しているが、これらはいずれも丹塗りの土器ではない。 4 は後期前半代に特有な器台である。

底部は、この部分のみでは中期・後期に分ける根拠に乏しいので一括して図示した。8・9は丹塗磨研土器である。14は蓋形土器と考えられ、ほぼ以上の土器と同時期のものである。

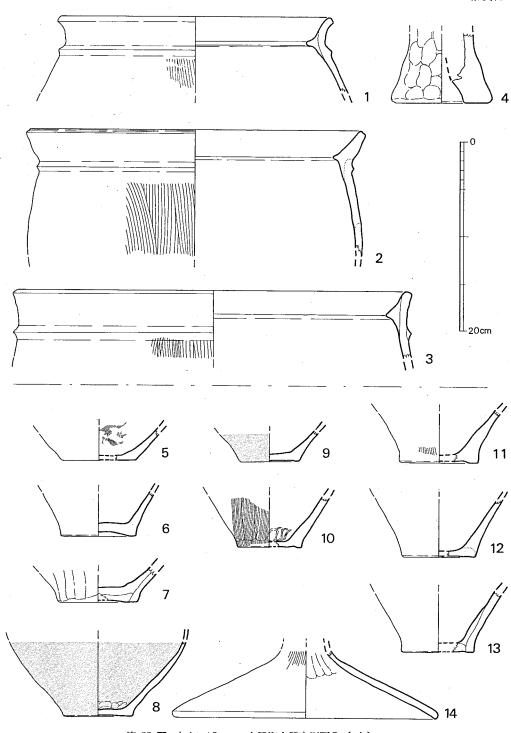
以上 I - 10トレンチの土器溜出土の土器を概述したが、丹塗磨研土器がかなりの量出土し、



第 53 図 加賀石 [一10トレンチ実測図 (1/60)



第 54 図 加賀石 I -10 土器溜土器実測図① (1/4)



第 55 図 加賀石 I —10 土器溜土器実測図② (1/4)

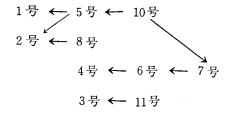
又同時期の甕棺片等も出土しており、甕棺葬に伴う祭祀 関係の土器であることは疑い得ない。トレンチ調査では 検出されていないが、付近にある甕棺墓群の縁辺部にあ たるところにトレンチが設定されていたものと考える。

(橋口)

(5) I-22・23 住居跡

加賀石 $I-22 \cdot 23$ 調査区には、11軒の住居跡が検出でき、弥生時代住居跡は $3 \sim 10$ 号住居跡であり、 $1 \cdot 2$ 号住居跡は古墳時代に属する。

各住居跡の切り合いは,次の通りである。



0 20cm

第 56 図 加賀石 I —10 土器溜土器 実測図③ (1/8)

(古→新の関係を表わす)

(柳田)

3号住居跡(図版36-1,第59図)

調査区の北西側(S110—E62)に位置する方形住居跡で、約 $4.65 \times 3.50 m$ を測り、両側に幅 $1.1 \sim 1.5 m$ のベット状遺構をもつ。柱穴は 7 個もち、主柱 4 本であると考えられるが、 1 本は検出できていない。ほぼ中央に、約 $0.5 \times 0.5 \infty$ 土 $\frac{1}{3}$ 生 $\frac{1}{3}$ は $\frac{1}{3}$ は $\frac{1}{3}$ を $\frac{1}{3}$ に $\frac{1}{3}$ を $\frac{1}{3}$ に $\frac{1}{3}$ を $\frac{1}{3}$ に $\frac{1}{3}$

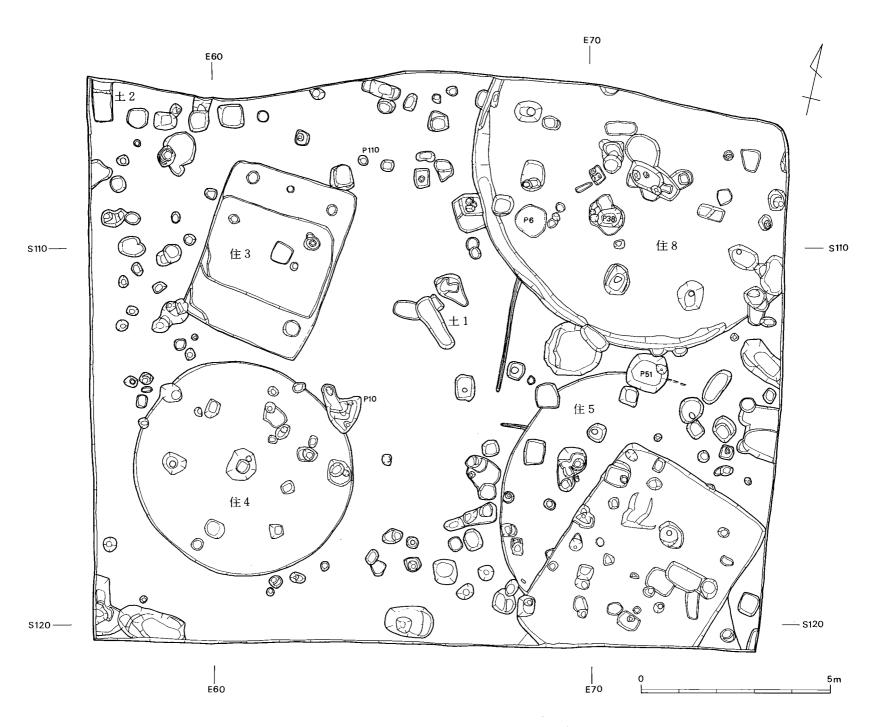
出土遺物は, 弥生土器・石器(石鏃2点・削器1点)・碧石製管玉・鉄器(石庖丁形)であり, 時期は後期後半であると考える。 (川村)

土 器 (第61図1・第81図5・6) 3号住居跡には時期の判明する土器はほとんど発見されなかった。1は後期中頃から後半の底部であろう。胎土に石英粒や雲母を多く含む。

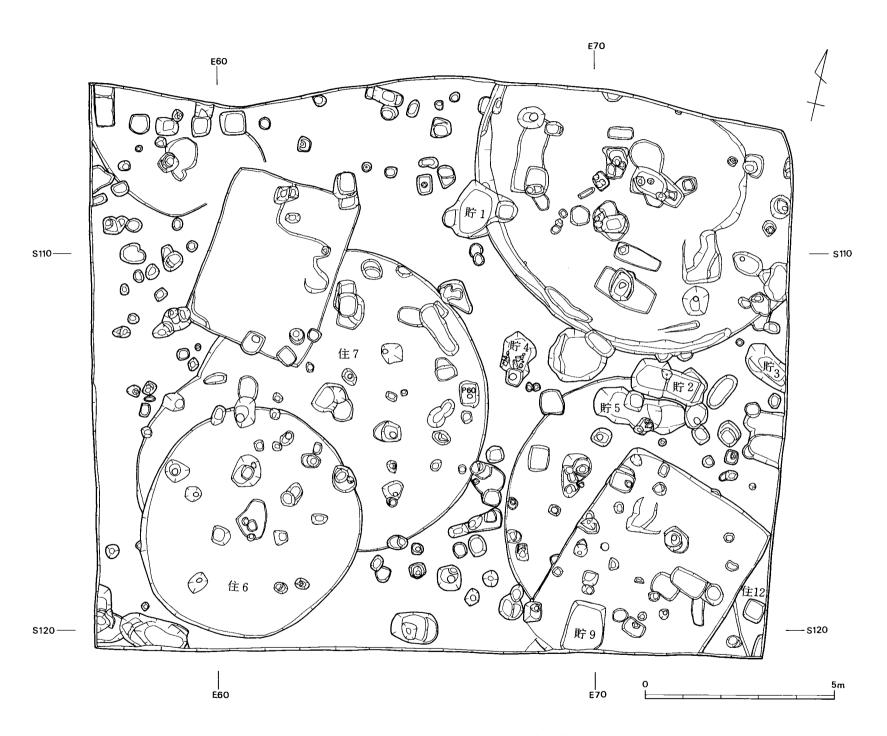
第81図5・6は、3号住居跡から発見されたものではあるが、時期が違いすぎるので、7号住居跡以前のものであろう。沈線山形文と重弧文であるが、6の方は肩部に明瞭な段を有する。 (柳田)

4号住居跡 (図版37-1, 第60図)

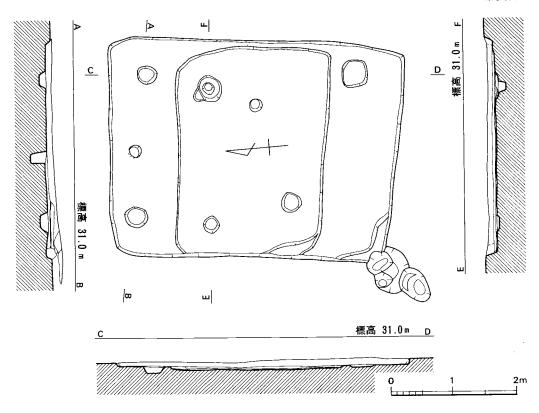
3号住居跡の南側(S110—E60)に位置する円形住居跡で、P10を切っている。東西径約 $5.85 \times 5.7m$ を測り、中央にほぼ円形の浅い土壙をもち、後 $3.20 \times 3.50m$ の円周上にまわる 8



第 57 図 加賀石 [-22・23 第 4 層遺構全体図 (1/100)



第 58 図 加賀石 I -22·23 第 5 層遺構全体図 (1/100)



第59 図 3 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

個の柱穴と2本の主柱穴をもつ。焼土等は検出しなかった。弥生土器(壷・甕)・石器(石鏃 2点・搔器1点・石斧1点)・紡錘車1点を出土し、中期初頭から前半と考える。 (川村)

土 器(図版49-7・8,第61図 $2\sim4$ ・第81図 7・8) 2 は中型の壷で,口径13cm,頸部径11.5cmの大きさである。肩部から頸部に移行する部分に作出しで未発達な三角凸帯をめぐらす。胴部は横に研磨されるが,頸部以上はヨコナデ調整されている。胎土に細かい石英粒や雲母を多く含む。

 $3\sim6$ は甕の破片で、3 は口径31cm、4 は口径24cmの大きさである。3 は口縁部の内側が厚く補強されたもので、先端下方にキザミ目を施す。4 は口縁端部外面に三角凸帯風に貼付けた口縁で、その下に未発達の三角凸帯をめぐらす。口縁にはキザミ目を施すが、三角凸帯には不明。

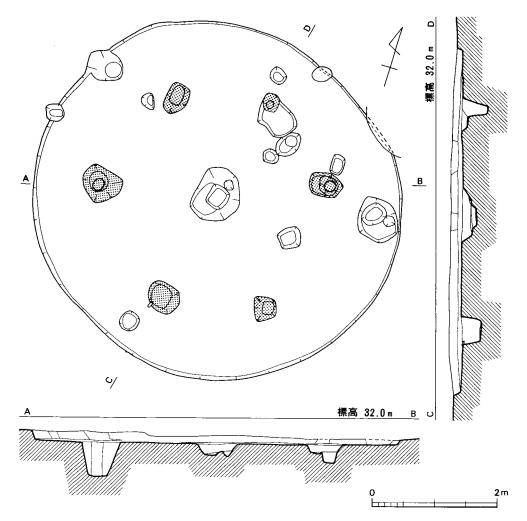
6の甕の底部は上げ底となり、外面補強の状態が明らかである。

土器は、2・4の特徴から中期初頭のものである。

第81図7・8は沈線と貝殻羽状文のある肩部の破片である

(柳田)

5号住居跡(図版38-1,第62図)

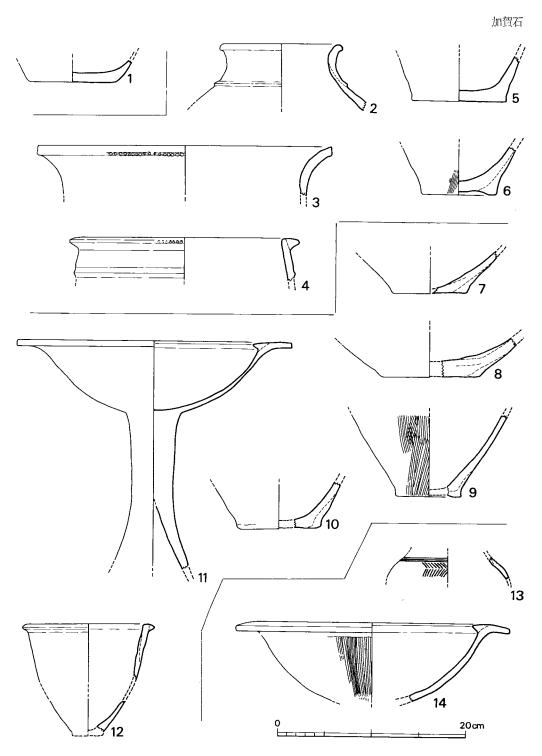


第60図 4号住居跡実測図(1/60)

1号住居跡に東側半分を,南側でP51に切られた円形住居跡であり,8号住居跡の南側(S117—E71)に位置する。両側の住居跡壁でみれば,径約7.0mを測ると考えられる。中央土壙は1号住居跡でほぼ削平されていて,径約4.7~5.0mの円周上に7個の柱穴をもつ。焼土等は検出しえず,住居跡西側の床面10cm上に高杯が,ほぼ床面上に石斧が出土し,他に削器・砥石が各1点出土した。時期は中期中葉と考える。 (川村)

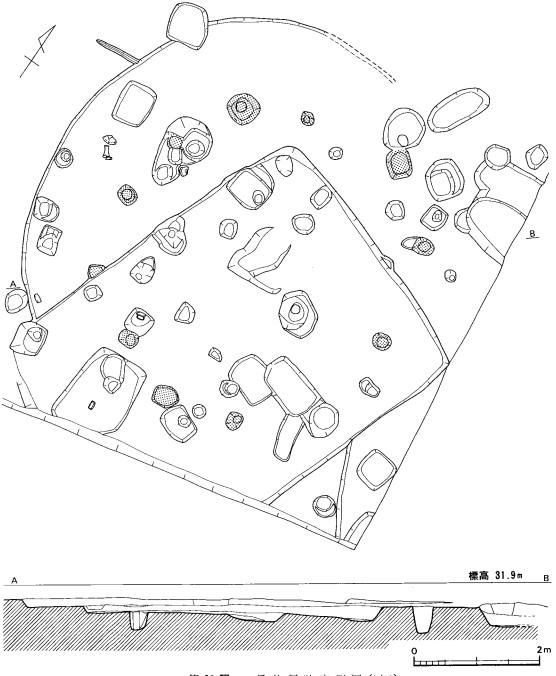
土 器 (図版47-1, 第61図 7~12) 7 · 8 は壷の底部で, 外面補強がよくわかる。 9 · 10は甕の底部で, 外面補強は壷と同様である。

11は高杯で、住居跡の床面で発見されたので住居跡の時期を決定するものである。鋤先口縁の高杯で、口径29cm、口内径20.6cm、杯深さ7.3cm、現在高24cmの大きさである。脚柱状部は



第61回 住居跡出土土器実測図① (1/4)

充塡され、下半のみ開き古い様相を残す。表面の摩滅が著しいので調整法は不明。 12は小型甕で、口径14cmある。口縁端に貼付三角凸帯をめぐらす。



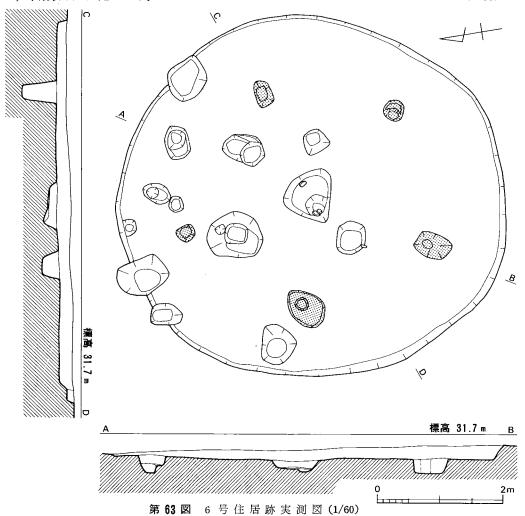
第62 図 5 号住居跡実測図(1/60)

土器は、11の高杯が中期中頃であるから、12の甕のように中期初頭のものは混入であろう。 第81図9・10は混入土器片であるが、沈線と貝殼羽状文の好資料といえる。9は表面横磨研 後施文し、10は肩部に貼付三角凸帯を1本めぐらす。 (柳田)

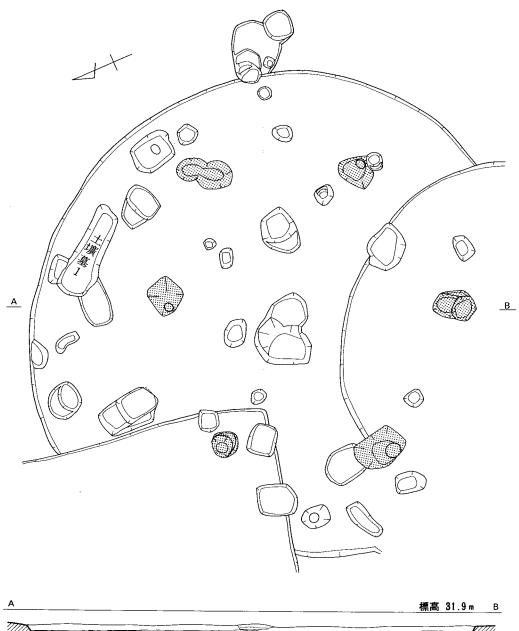
6号住居跡 (図版39-1,第63図)

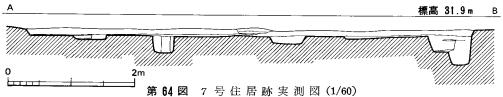
4号住居跡に切られて検出した円形住居跡でS116-E61に位置する。東西径約5.85m・南北径約6.15mを測り,不整形の浅い中央土壙をもつ。主柱穴2個と径約3.70~4.30mの円周上に6個の柱穴をもつ。焼土等は検出しえなかった。

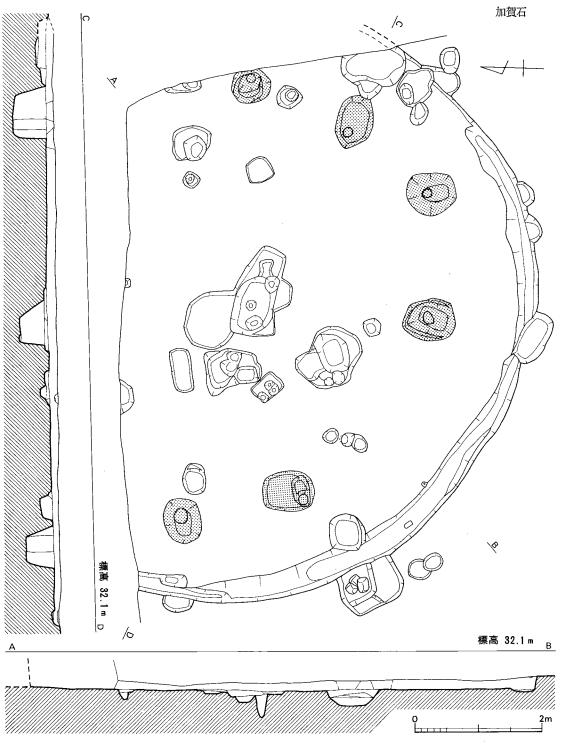
埋土上層に高杯を出土しているが、住居跡に共伴すると考えられず、他に砥石1点が出土 し、中期初頭と比定できる。 (川村)



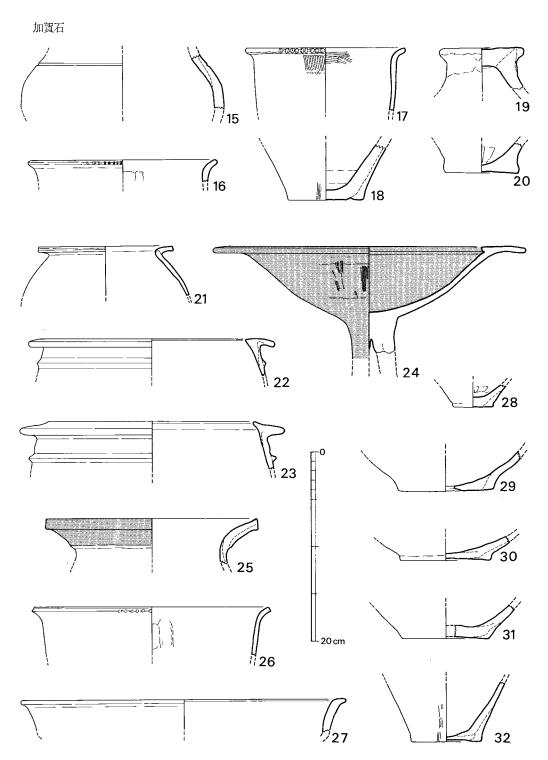
土 器 (図版47-13, 第61図13・14) 13は小壷の破片で,住居跡の中央東ピットから出土 した。肩部上端に沈線3条をめぐらし、その下に貝殻羽状文を施す。







第 65 図 8 号住居跡実測図(1/60)



第66図 住居跡出土土器実測図②(1/4)

14の高杯は6号住居跡検出前に上層で出土したもので、住居跡と直接関係ないものである。 鋤先口縁の口径29cm,口内径21cm,杯深さ7.5cm以上の大きさである。中期中頃のものである。 6号住居跡の土器は少ないので、時期は決定できないが、13の壷の前期中頃以後であろう。 第81図11は、混入土器細片であるが夜臼式甕の口縁部である。

7号住居跡 (図版39-2, 第64図)

3・4・6号住居跡に切られ、3号住居跡の南西側(S114—E64)に位置する円形住居跡であり、径約7.85~8.05mを測り、中央土壙をもち、2個の主柱穴と径約5.5~6.0mの円周上に6個の柱穴をもつ。焼土等は検出しなかった。

出土遺物は弥生土器(前期末)・石器(石斧2点・石庖丁1点)・紡錘車2点であり,時期は前期末と考える。 (川村)

土 器 (図版47-15・17, 第66図15~20) 15は壷の破片で, 肩部に沈線 1 条をめぐらす。 胴径21.4cmの大きさで, 器壁が厚い。胴部外面はヨコ磨研で, 内面には指痕が残る。

 $16\sim18\cdot20$ は甕で、16は口径20cm、17は17cmの大きさである。 $16\cdot17$ 共に口縁の屈曲は同様であるが、17の方が16より先端のキザミ目が大きく、古い様相を示している。

7は蓋形土器の天井部である。

第71図12・13は甕の口縁と壷の肩部沈線文である。

土器の時期は、17は古い様相を残すが、15の肉厚さや、16の口縁端部は前期末の特徴であるう。住居跡埋土の上層には、中期初頭の小破片も含まれることから、7号住居跡は前期末から中期初頭といえるだろう。 (柳田)

8号住居跡 (図版40-2, 第65図)

調査区の北東隅(S 108-E71)に位置する円形住居跡で,径約9.5mを測ると考えられ,30~40cmの周溝をもつ。中央土壙 1 個の主柱穴と径約6.5m の円周上に6 個の柱穴をもつ。焼土等は検出しえなかった。

床面を少し掘下げると周溝にそい、S111-E69・S112-E72付近に溝状遺構を検出し、8 号住居跡の円形住居跡周溝の可能性も考えられる。

出土遺物は,弥生土器(壷・甕)・石器(石斧1点・台形様石器1点)・紡錘車1点が出土 し,時期は中期中頃であると考える。 (川村)

土 器 (第66図21~32) 21は無頸壷で,口径14.2cmの大きさ。口縁は丸みのある逆L字口縁で、くの字に近くなっている。住居跡中央土壙出土。

22・23は口径26cmと28cmの大きさの甕。22は逆L字口縁の下に三角凸帯,23は内側に突出するT字口縁に近く,下に三角凸帯をめぐらす。それぞれに口縁部の貼付補強には特徴がある。

24は鋤先口縁の丹塗磨研高杯である。口径 33cm,口内径 11.8cm,杯深さ7cmの大きさ。口縁幅が広く薄手で,先端が下がりぎみである。

25・26は住居跡に直接関係ないが、住居跡の埋土から発見されたものである。25は口縁部外面に貼付補強された明瞭な段を有する前期初頭の壷で、外面はヨコ研磨された後に丹塗りを施す。26はゆるく屈曲した口縁先端下方にキザミ目を施す前期中頃の甕である。

27は、張床中から発見された小片で高杯と思われる。口径34cmの大型となるが、器面も荒れて不明な点が多い。

29~31は壷の底部であるが、29は焼成後の穿孔がある。30は前期のもので、円盤貼付に補強された状態が明瞭である。31は中期のものであろう。28・32は甕の底部で、32が中期のものである。

8号住居跡の土器は、25・30のような前期初頭のものから、21~24のように中期中頃までのものが含まれている。住居跡の時期は中期中頃といえるだろう。 (柳田)

9号住居跡 (第67図)

調査区西側(S115-E57)で、円形住居跡の壁のみを検出した。

出土遺物は、弥生土器(壷・甕)であり、時期は前期中頃~後半と考える。 (川村)

土 器(図版47-2,第70図33~37) 33~35は壷で,33は口径10cmの小壷,34・35は中型壷である。33は口縁外面に段を有し、内外面共に研磨されているが内面には赤色の彩文が残っている。外面にも彩文が施されていたのであろう。34は明瞭な段と角張った口縁に、立った頸部を持ち研磨されて優品である。頸部内面には指痕が残る。胎土に細かい石英粒や雲母を含み、良好な焼成。35は壷の胴部と底部で、肩部に沈線による横線と3条山形文を施す。胴部最大径は中位にあり径32.7cmの大きさである。底部径は8.5cmであるから全体に横広の壷である。

36は高杯の脚裾であろうか。端が尖がり脚裾としては軟弱な感がある。表面の摩滅がひどく 調整法は不明。

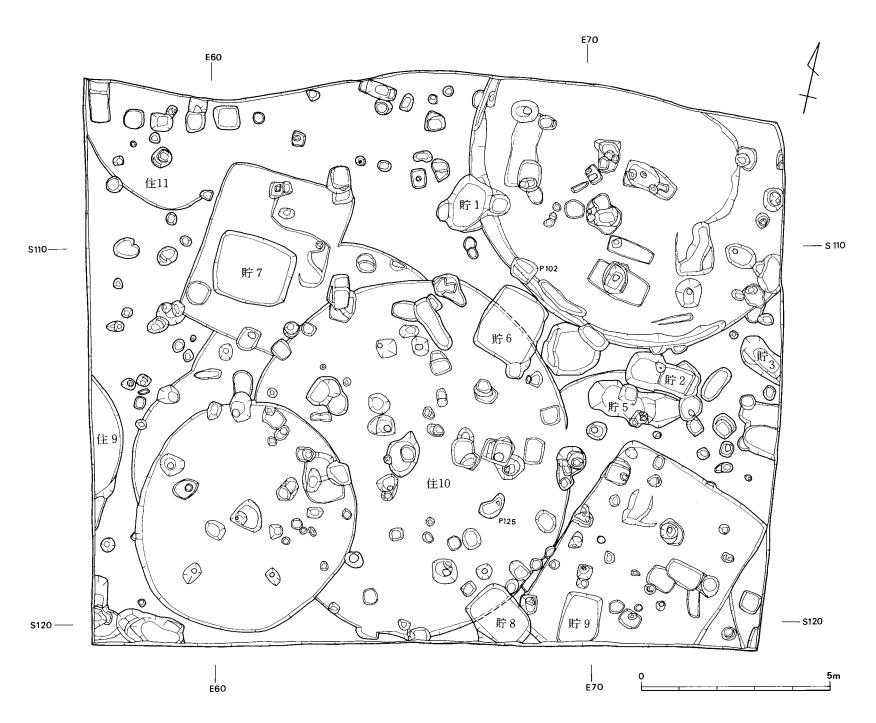
37は甕の底部であるが、これも摩滅して不明なところが多い。

第81図14~16は壷の口縁と肩部の破片である。15は沈線を軸にした貝殻羽状文である。14の口縁と16の肩部には明瞭な段を有する。

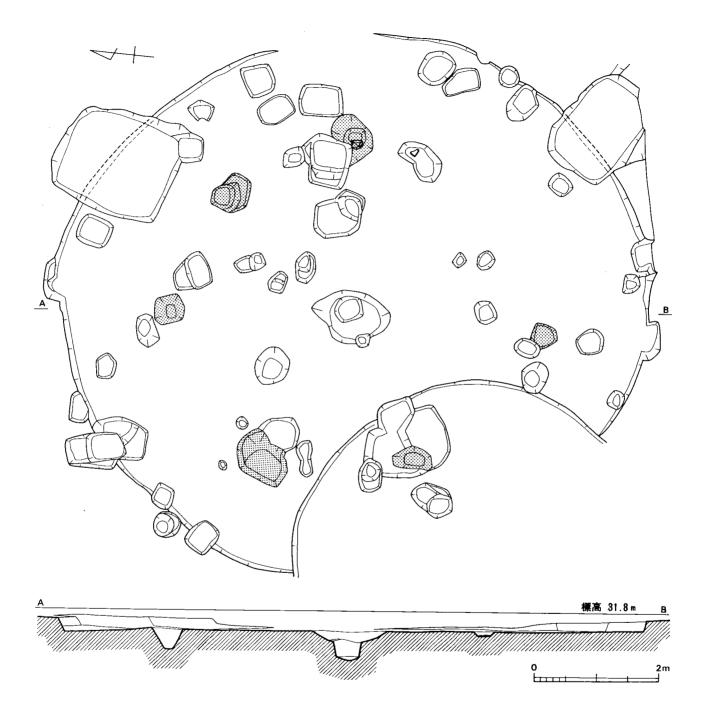
9号住居跡としたこの遺構は、ごく一部を調査しただけであるから、遺構としては不明といわざるを得ないが、遺物としては前期後半以前を含んだ好資料といえるだろう。 (柳田)

10号住居跡 (図版41-2,42-1,第68・69図)

調査区のほぼ中央(S115―E65)に位置する円形住居跡で、 3~7号住居跡に切られ、 住



第67図 加賀石 I -22・23 第6層遺構全体図 (1/100)

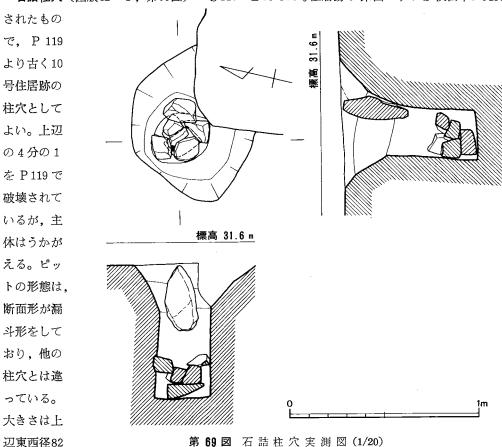


第68図 10号住居跡実測図(1/60)

居跡の中で最後に検出した。南北径約9.55m,東西径約8.40mを測り,6号住居跡に切られた 部分を除き、床面はほぼ検出できた。ほぼ円形の中央土壙、2個の主柱穴と径約5.5~5.8mの 円周上に7個の柱穴をもつ。焼土等は検出しえなかった。

出土遺物は, 弥生土器(壷・甕)・石器(未製品の石庖丁1点・石斧1点)・紡錘車3点が あり,前期後半と考える。 (川村)

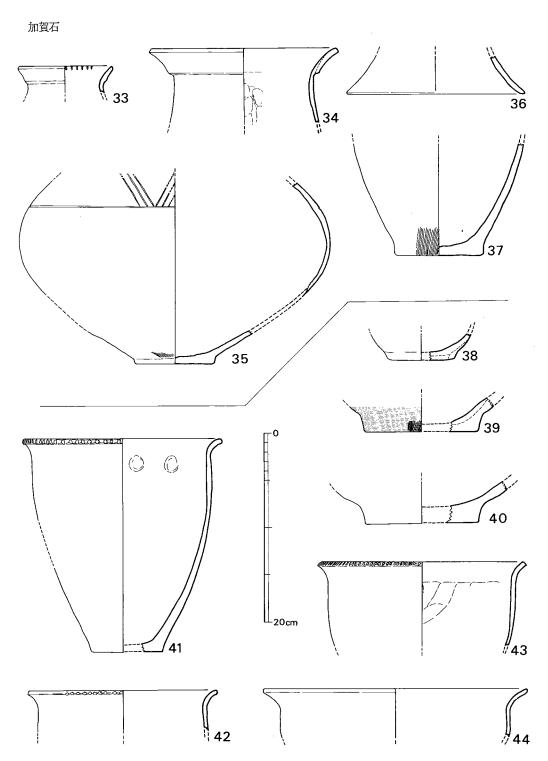
石詰柱穴(図版42-1,第69図) S116-E68で10号住居跡の 床面ピットを 検出中に発見



cm, 南北径65cm, 底辺東西径26cm, 南北径30cm, 深さ72cmある。ピット内は, 底面に 6 個の石

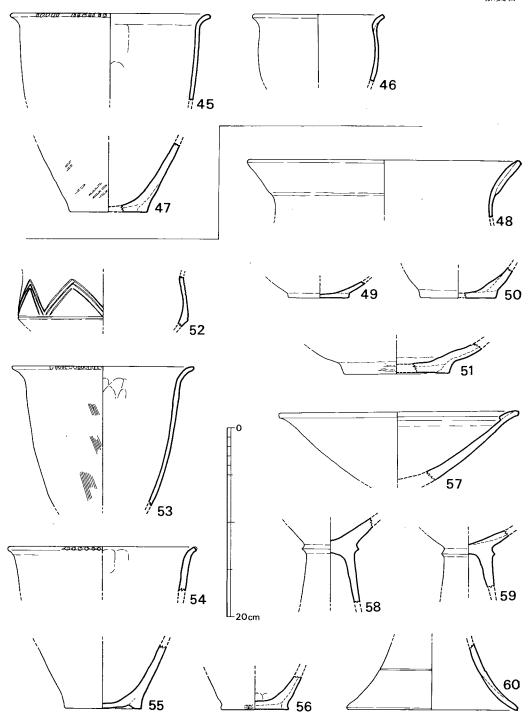
積,上方に立石1個がある。立石は長さ35cm,最大幅16cmの大きさで,西壁に接して尖がった 方を下にしている。立石が10号住居跡床面以下にあることから、住居跡の床面から掘り込まれ たことに間違いなく、柱穴と考えた場合には底面の石積を柱の根石とし、立石を詰石とするこ とができる。この場合、根石に6個もの石を使用するほどなぜ深くしなければならなかったの か疑問が残るし, 詰石も外の柱穴には見られない。

土 器 (図版47-1・49-17~25, 第70図38~47) 38~40は壷の底部である。総じて厚み



第70図 住居跡出土土器実測図③(1/4)





第71図住居跡出土土器実測図④(1/4)

のある底部で甕の可能性もあるが、39は丹塗りであるから壷である。

41~47は甕であるが、41・46は深鉢となるかもしれない。41・42・44・45・47は確実に床面で発見されたもので、時期的に見ても一括といえるだろう。41に代表されるように、口縁の屈曲はゆるやかで、先端に大きなキザミ目を施す。41は口径 20.9cm、器高 22.5cm の大きさである。44は口径28cmの薄手でナデ仕上げされている。46は口径14cmの小型品で、口縁端にキザミ目がなく、器壁の内外面は研磨されている。磨研は外面と口縁内面は横方向、胴内面に斜方向である。研磨されていることからも深鉢といえるだろう。胎土に細かい砂粒を含むが、淡褐色の良好な焼成で仕上っている。

47は床面で発見された甕の底部であるが、多少摩滅のある外面に明瞭な平行線タタキ目が凹線として残っている。10号住居跡の土器に41のように古い様相を残すものもあるが、42~46の甕のように前期後半の特徴を備えており、47も例外ではないことから、タタキ整形は前期後半から行なわれていたことになる。

第81図17~25は、口縁と肩部文様の破片。18の壷口縁は、横方向に研磨された後に丹塗細線 文を施したらしい痕跡がある。19~24は全て表面を研磨された後に施文され、22はその上に丹 塗りを行っている。23・24は鉢形で、23には鋭利な沈線を施し、明瞭な屈曲が見られる、夜日 系のものである。25は甕の口縁で表面が摩滅して調整は不明であるが、口縁端部を折り込んで 丸めている。キザミ目は施されていない。 (柳田)

11号住居跡 (第67図)

調査区北西隅(S107-E58)に位置する不整形な円形住居跡であろう。住居跡内の4個の 方形柱穴は新しい遺構であり、柱穴等は不明である。

出土遺物は, 弥生土器(壷・甕・高杯)・石器(石斧1点・石庖丁1点)・紡錘車1点であり, 時期は前期中頃~後半と考える。 (川村)

土 器 (図版47-52, 第71図48~60) 48~51は壷で, 48は口径29cmの中型, 49・50は小型の底部である。48の口縁は外面貼付の段や先端に丸みがあり,シャープさがない。49・50は底部の円盤貼付が明瞭なものであるが,51は外面に補強貼付が見られる。

52は郡の後IV-1~4のP19から出土したものと同様の胴径18cmの深鉢である。体部の屈曲部に一条の沈線をめぐらし、その上部に3条山形文を施す。胎土に細かい石英粒・雲母を含み黒褐色の良好な焼成となっている。

53~56は甕で,53の口径19cm,54の口径20cmの大きさ。54の口縁の屈曲は少ないが,53はかなり外反する。

 $57\sim60$ は高杯である。57の杯部は,口径25cmの大きさで直線的に開き,口縁内側に貼付を行って段をつけている。杯の深さは約7cmとなっている。 $58\cdot59$ は脚接合部で,他にも1個体あ

る。接合に三角凸帯をめぐらし、杯部・脚部共に直線的にのびる。60は高杯脚裾部で、9号住居跡の36と同様に先端が丸みを持って尖がる。下から4.2cmのところに一条の沈線をめぐらす。外面は研磨したらしいところもある。

第81図26は太い沈線によって横線と山形文を施す。胎土は精良なもので古式のものである。 11号住居跡は、プランが明確でなく、重複遺構も多いので一括資料とはいえないが、52の深 鉢と57~60の高杯は少ない資料といえるだろう。時期は、52の縄文晩期系統、49・54の前期前 半、その他の前期中頃という幅をもっている。 (柳田)

円形住居跡について(第72・73図)

円形住居跡は、弥生時代前期後半から中期中葉の時期のものが8棟検出され、これらは8号・9号を除いて重複している。これに方形住居3棟の検出を加えると、9号を除いた11棟が重複関係にある。その詳細は各遺構ごとの説明に譲り、ここでは時期的に連続し、遺構の全容がほば確認可能な4号~8号の6棟について、平面プランを中心に補足する。

現在までの北九州に於ける住居跡の調査資料では、前期は方形プランを呈すると言われるが、発掘された類例は少ない。これに対して、円形プランの住居跡は中期に類例が多く、特に中期初頭から中期中葉にかけての時期の発掘例が多く認められ、中期後葉には既に方形(長方形)プランの住居跡に変化する。そして、後期以降には方形(長方形)プランの住居にベット状遺構を伴う形態にその主流が移って行くと言われている。

4号~8号の6棟の住居跡は、いずれも円形から長円形プランを呈するが、その柱穴は円形に配され、主柱穴は5個~6個を有するが、5号・8号の例では主柱穴の中間にも柱穴が配されている。後者の柱穴を、ここでは補柱穴と仮称する。第72・73図は、各住居跡の掘方・主柱穴・補柱穴・中央ピットを1400に縮少し、これらの位置関係を模式化したものである。以下の説明では、掘方上の円を(外円)、柱穴上の円を(内円)とし、両者を(製円)として仮称する。また、外円と内円は同心円で、その中心を(住心)と仮称する。表2は、各住居跡の計測値を示す。以下、各時期ごとのプランの概略を説明する。

前期後半の10号住居跡(第72図)は、南北方向の径が大きく、6個の主柱穴を有すが、南側の $P1 \sim P6$ 間では柱穴が検出されていない。P1は、P1と住心とP2を結んだ角度が 45°を測り、 $P2 \sim P4$ のそれも同様である。P5は、P5と住心とP4を結んだ角度が 60°を測り、P6のそれも同様である。外円に対して、南北方向の径が大きく、内円の南側に柱穴が検出されなかったことから、入口部は $P1 \sim P6$ 間に考慮されよう。なお、外円に対して南北方向が長径を測ることは、前期の長方形住居跡から、中期の円形住居跡への過渡的様相を呈したものと考えられる。前期後葉の7号住居跡(第72図)は、10号住居跡同様に南北方向に長径を測るが、外円との差は縮少し、6本の主柱穴を有す。P1は、P1と住心とP2を結んだ角度

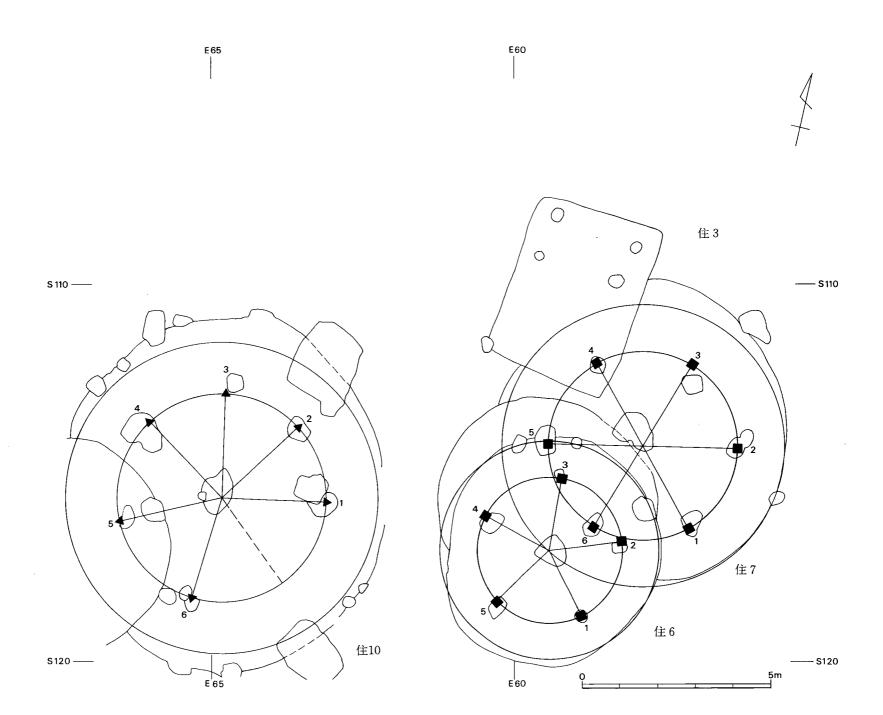
が 60° を測り, P 2~P 6 のそれも同様である。外円に対して,南北方向の径が大きく,入口部は P 1~P 6 間に考慮されよう。前期後葉~中期初頭の 6 号住居跡(第72図)は,ほぼ外円に一致し,5 本の主柱穴を有す。 P 1 は, P 1 と住心と P 2 を結んだ角度が 72° を測り, P 2~P 5 のそれも同様である。外円との差が若干南北方向に残り,入口部は P 1~P 5 間に考慮されよう。

中期初頭の 4 号住居跡(第73図)は,外円に一致し,6本の主柱穴を有す。P1と住心とP2を結んだ角度が 60°を測り, $P2\sim P6$ のそれも同様である。中期中葉の 5 号住居跡(第73図)は,11個の柱穴を有し,奇数番号の $P1\sim P11$ の 6 個が主柱穴で,偶数番号の $P2\sim P10$ の 5 個が補柱穴である。P1と住心とP3を結んだ角度が 60°を測り, $P3\sim P11$ の主柱穴のそれも同様である。P2と住心とP4を結んだ角度が 60°を測り, $P2\sim P10$ の補柱穴のそれも同様である。P2と住心とP4を結んだ角度は 30°を測り, $P2\sim P10$ の補柱穴のそれも同様である。なお,P1と住心とP2を結んだ角度は 30°を測り,補柱穴はいずれも主柱穴内円上の中間に配されている。しかし,P1とP11の主柱穴間に補柱穴が検出されないので,入口部は $P1\sim P11$ 間に考慮されよう。同様に $P1\sim P11$ 0 ませ穴で,偶数番号が補柱穴である。また同じく, $P1\sim P11$ 0 ませ穴間に補柱穴が検出されないので,入口部は $P1\sim P11$ 1間に考慮されよう。

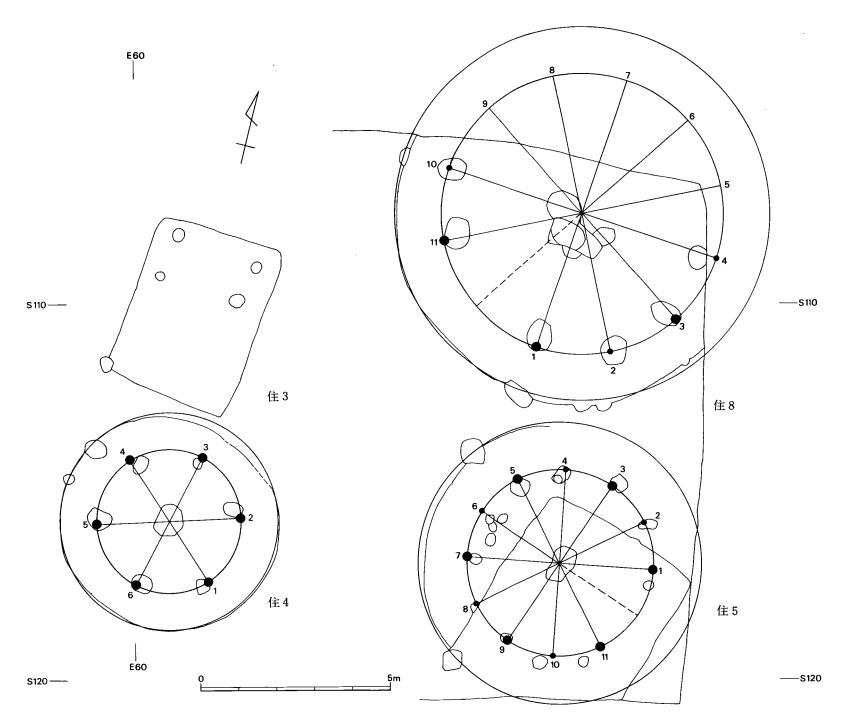
次に、時期的な流れを製円について説明する。外円に対する内円の割合は、前期後半の10号は1/3・前期末~中期中葉の7・6・4・5号 $^2/_3$ は、中葉の8号の割合は $^3/_4$ となる。 この変化は、居住空間の広がりを、単に外円を大きくするだけでなく、内円をも大きくすることでも解決したものと考えられる。また、外円と内円が一致するものに、7号と5号・6号と4号があり、外円あるいは内円が一致するものに、7号と5号と8号がある。なお、三雲遺跡の調査は冬期に集中した。時として南からの「雷山降し」も吹くが、海からの北風は終始止むことがなかったことからして、南側に入口部を設けたものであろう。

最後に、6棟の円形住居跡全体について触れる。前期後半の10号住居跡は、前期の長方形住居跡から中期の円形住居跡への過渡期の様相を強く残し、中期初頭の4号住居跡で円形住居跡と6個の主柱穴を配することが確立し、中期中葉で主柱穴と補柱穴による拡大が行われている。また、8号住居跡における製円の拡大(大形化)は、それを認容し得る家屋構造の確立・必要とする居住成員の構成の変化の二者によってなされたものと考えられ、この両者を許容し得るものは、生産構造の質的発展として把握できよう。なお、模式図に使用した製円は、次の結果得られたものである。

- ① ¹/₅₀に縮図された各住居跡上に多数の同心円を描き,円形の壁と柱穴の真心の位置に近似した外円・内円・住心を求めた。
 - ② 外円と内円との比を求め、これは $^2/_3 \cdot ^3/_4$ に近似した。
 - ③ 各住居の製円の比較を行ない、5号・6号・7号等に共通して外円・内円が近似した。



第72 図 円形住居跡模式図① (1/100)



第73 図 円形住居跡模式図② (1/100)

- ④ これらの製円の半径 r を 27.65cmで割ると 7 · 9 · 15 · 18 · ²¹/₂ などの数に近似した。
- ⑤ 最終的には、①~④について近似した製円を、共通して一致した製円として描き、内円をその主柱穴の数で分割した。

この27.65cmは,秦・前漢尺の一尺に等しい。このことから単絡的に,一尺=27.65cmの基準尺度を使用したとは帰結できない。27.65cm×2=55.30 cm は成人の片腕の長さに 近似したものでもあり,他の遺跡との比較類例の結果を待ちたい。なお,内径をその半径で6分割したことは少なくとも明らかであると考え,〔製円〕と仮称した。大陸と半島に近い遺跡の立地と,中期という時期からも,このことは充分に考えられる。(註20)

住居番号	10 号	7 号	6 号	4 号	5 号	8 号
時 期	前期後半	前期末葉	前期末~中期初	中期初頭	中期中葉	中期中葉
主柱穴数	6	6	5	6	6	6
補柱穴数	0	0	0	0	5	5
外円半径	15x = 414.75	$\frac{27}{2}x = 373.275$	$\frac{12}{2}x = 290.325$	290.325	373.275	18x = 497.7
小円半径	10x = 276.5	9x = 248.85	7x = 193.55	193.55	248.85	373.275
内円/外円	2/3	2/3	2/3	2/3	2/3	3/4

S3°E

S 16° E

S 68° E

S 12° E

表 2 加賀石 I -- 23 円形住居跡一覧表

(単位: cm, x=27.65cm)

(馬田)

S 36°W

(6) I-22·23 貯蔵穴

S 48° E

入口方向

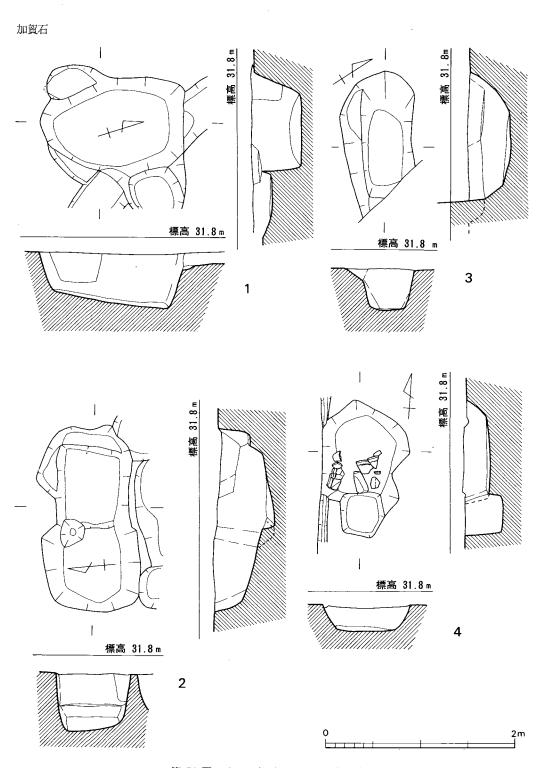
いわゆる袋状竪穴といわれる 貯蔵穴は、この地区に おいては 6 • 7 号とした ものだけであり、ここで貯蔵穴の番号を付したものには、土器溜となっている土壙状遺構も含まれている。

1号貯蔵穴(図版42-3,第74図1)

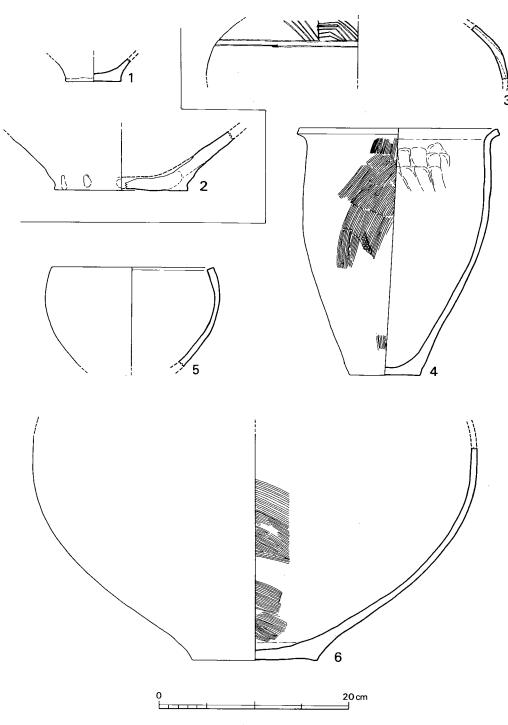
S68—E110で発見された楕円形プランの竪穴である。上辺で南北1.5m,東西約1.1m,深さ51cmの大きさで,北東側を中期中頃の8号住居跡に切られている。埋土上層で土器片が若干と石庖丁片が出土している。 (柳田)

土 器 (第75図1・2) 1は小形の壷底部片で、外面は中心部に向って1 m程上げ底状となる。また、底部端と胴部との屈折部に若干の稜を有す。2も同様の特徴を有す大型の壷底部片である。共に砂粒を多く含み、焼成は普通で、1 は茶褐色・2 は器内外面淡褐色で断面は淡灰褐色を呈し、摩滅が著しい。前期後半であるが、板付 I 式以来の特徴を残している。

(馬田)



第74図 貯蔵穴実測図① (1/40)



第75図 貯蔵穴出土土器実測図① (1/4)

2号貯蔵穴(図版43-1, 第74図2)

S114—E73 で発見された土壙である。掘上った土壙は2個の方形竪穴が重複した形となっているが、西側の上辺の輪郭線はP51のものであり、貯蔵穴の床面までは達していない。貯蔵穴の床面は西側が浅く東側に傾斜している。土器片が多く発見されたが、土器片も西側から流込んだ状態であった。土壙は、東西長1.9m、南北幅0.75~1.0m、東側深さ50cmの大きさとなっている。土器片利用紡錘車2個も出土している。

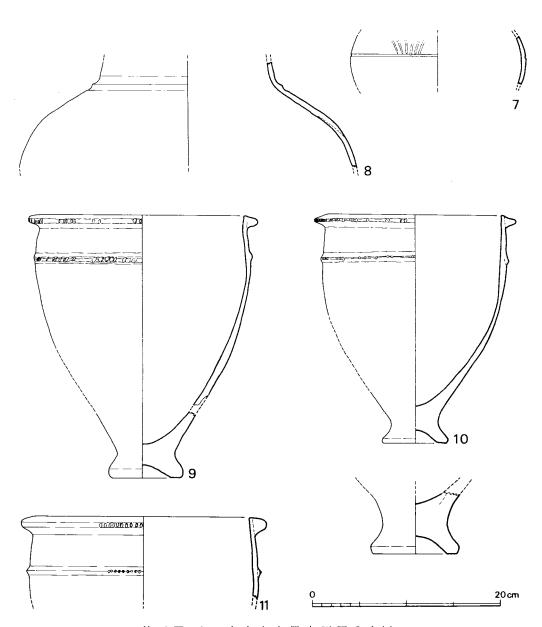
土 器(図版48-4・6, 第75図3~6) 3は壷の胴半部片で, 胴部最大径約32cmを測る。 内面は指押え後にナデ,外面は横方向に研磨するが,胴部のカーブの為に若干斜方向となって いる。肩部にはヘラ描き沈線を施すが、二条の横方向沈線の下位のものには段差が生じて一致 せず、また斜方向沈線には乱れが生じている。細かい砂粒を含み、焼成は良く、器内外面淡褐 色・断面黒灰色を呈す。 4 はその大型の下半部で,胴部最大径は約47cm前後を測る。内面は, 底部はナデのままであるが、胴部は非常に密なハケ目痕を整然と残し、むしろ削りに近い様相 を呈す。外面は、胴部を斜方向に研磨し、底部も粗く研磨する。砂粒は小さく、焼成は良く、 褐色を呈す。4は甕で略完形に復原でき,口径21.5cm・胴部最大径 19.7cm・底径 7.5cm・器高 25.9㎝を測る。器内は摩滅し、器外は一部に密なハケ目を残す。胴部の張りはほとんどなく、 屈折した口縁端部は、シャープに仕上げる。砂粒をあまり含まず、焼成はやや悪く、暗褐色を 呈す。5は鉢で水平なつくりと考えられる底部を欠失する。口径は,17cmを測る。内外面共に 摩滅が著しいが、肥厚して内傾する口縁部外面には研磨痕を認める。焼成は普通で、砂粒を多 く含み器内面淡褐色・器外面褐色を呈す。この鉢は,終末期のそれと器形が似るが,胎土や研 磨の技法などから、4と共伴する前期後半と考えてよいであろう。いずれも前期後半の様相を 残したものと言えよう。 (馬田)

3号貯蔵穴(図版43-3, 第74図3)

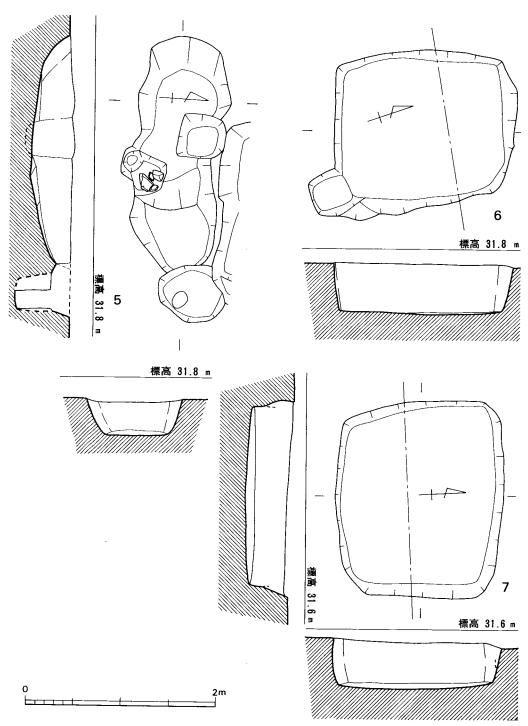
S114—E75の発掘区東端で発見された舟形の土壙である。大きさは、幅75cm,長さ1.5m以上、深さ45cmで、底面は舟底状を呈する。埋土上半と下半に分かれて土器が出土した。時期も下半が前期末、上半が中期初頭となるようだ。 (柳田)

土 器 (図版48-9~13, 第76図7~13) 7は小型の壷の破片で,胴部最大径18.5cmを測る。胴上半部にヘラ研磨後,3条一対の弧文を施す。砂粒を少し含む精製胎土で,焼成は良く,淡褐色を呈す。8は,胴部最大径約35cm前後を測る。内外面共に摩滅する。大きめの砂粒を多く含み,焼成は悪く,淡褐色を呈す。肩部の凸帯は,貼付けというよりむしろ指による強いヨコナデが認められる。9~12は甕で,胴上半部の凸帯や口縁部の仕上げに同様の特徴を有す。12は大きく上げ底となり,器壁は厚手である。7のみは前期の土器であるが,他はいずれも中期初頭の特徴を有している。

13は甕で、底部を欠失する。口径は21cmを測る。器内は、胴中部は指で押えたままで、口縁部近くはその後でナデるが、指押え痕を残す。口縁部は丁寧なョコナデを施し、胴部もハケ目を残さないまでに丁寧にナデる。砂粒を少し含み、焼成はやや悪く、淡褐色を呈す。胴部の張りはほとんどなく、前期以来の様相をとどめた後半の土器と考えられる。 (馬田)



第76回 貯蔵穴出土土器実測図②(1/4)



第77図 貯蔵穴実測図②(1/40)

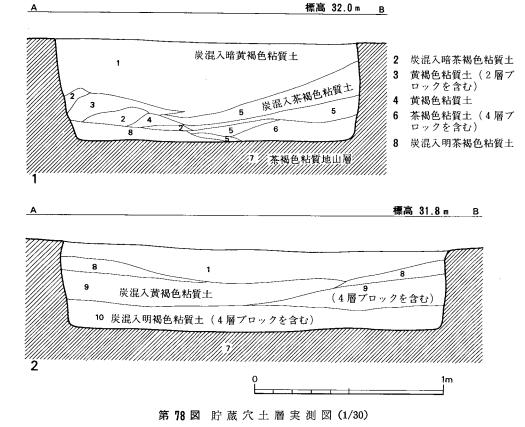
4号貯蔵穴(図版43-3, 第74図 4)

S114-E70で発見された不整形の竪穴。 6号貯蔵穴・10号住居跡より新しく, 南側を時期不明の方形掘立柱穴から破壊されている。竪穴は, 南北1.1m, 東西0.9m, 深さ0.25mの小型である。平坦な床面から多少浮いた状態で一括土器が出土している。土器片利用紡錘車1個も出土している。 (柳田)

土 器 (図版48-14, 第80図14・15) 14・15は甕で、胴下半を欠失する。14は口径26cm, 15は21cmを測るが、特徴は共に同じである。厚手に仕上げられた口縁は、内面の稜がシャープで、上面は若干下がり気味である。内外面共に摩滅が著しく、砂粒を多く含み、焼成は悪く、褐色を呈す。口縁部の未発達と凸帯の断面形状の特徴は、中期初頭の様相を示している。(馬田)

5号貯蔵穴(図版44-1,第77図5)

S116-E72 の 2 号貯蔵穴の南側に接して発見された舟形土壙であるが, 2 号とは重複していない。土壙は,東西長2.4m,南北幅0.8m,深さ0.45mの大きさで,底面は東西両方が傾斜



— 91 —

して浅くなっている。遺物は、東側の浅い部分の床面から多少浮いて一個体分の甕が出土した。 (柳田)

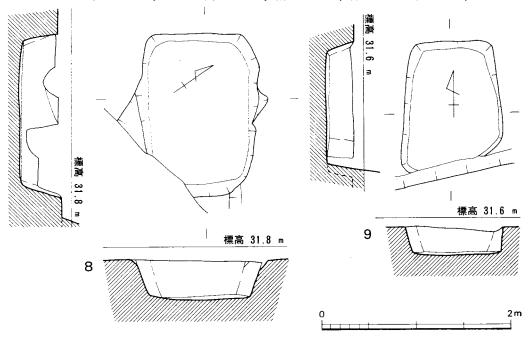
土 器 (図版48-16, 第80図16) 16は略完形の甕で,口径24cm,胴部最大径20.5cm,器高25cmを測る。細かい砂粒に雲母片を含む胎土で,焼成は良く,暗褐色を呈す。若干胴部に張りが認められ、外湾する口縁に胴部との段差を有す特徴から,前期後半の様相を呈していると考える。 (馬田)

6号貯蔵穴(図版44-2,第77図6)

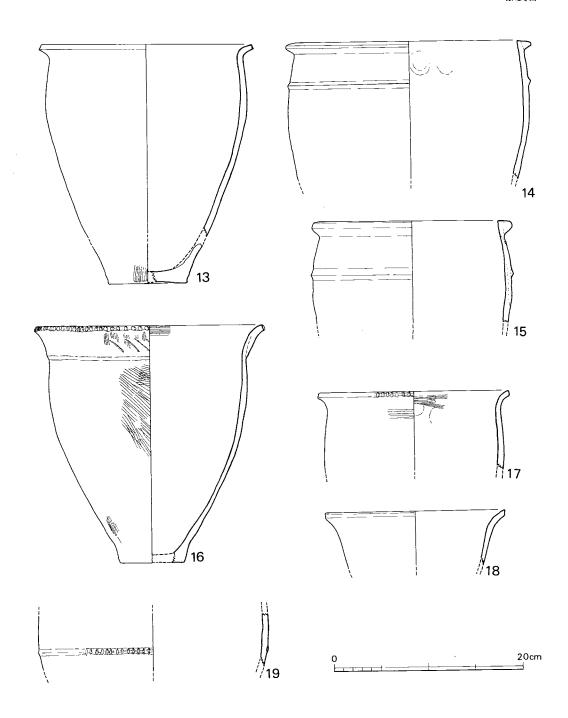
S114—E70で発見された長方形の竪穴。 中期初頭の4号貯蔵穴の下から検出されたので、これより古く、さらに前期後半の10号住居跡より古い。貯蔵穴の時期は、遺物が全く発見されなかったので、前期後半以前とすべきであろう。貯蔵穴の大きさは、上辺で南北長1.9m、東西1.65m、深さ0.5m あり、上部はかなり削平されて浅くなっているものの、一応しっかりした貯蔵穴といえるだろう。壁面も上部にいけば袋状をなすものと思われる。 (柳田)

7号貯蔵穴(図版44-3,第77図7)

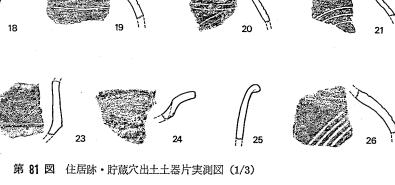
S112-E62で、3号・7号住居跡の下から発見された長方形袋状竪穴で、両住居跡より古いものである。貯蔵穴は、上辺で東西2.05m、南北1.75m、深さ0.5mの大きさで、壁面は内



第79 図 貯蔵穴実測図③(1/40)



第80 図 貯蔵穴出土土器実測図③(1/4)



湾して袋状を呈する。床面は平坦で,東西1.85m,南北1.62mの約3m弱ある。遺物はまったく発見されなかった。 (柳田)

土 器 (第80図17~19) 7号貯蔵穴出土の土器としてここに取り上げたが,実は3号住居跡床面として取り上げられていたもので,7号住居跡の遺物とすべきものである。17~19は共に甕で,17は口径20.5cm,18は同19cmを測る。17は若干張りの認められるが直立気味に内湾する。胴部から,また18はほぼ直線的に外反する胴部からそれぞれ屈折する口縁部との境に明瞭な稜を有さない。いづれも,古い様相を残した前期後半の特徴を呈している。 (馬田)

8号貯蔵穴(図版45-1, 第79図8)

前期後半の10号住居跡より新しく,古墳の1号住居跡より古い貯蔵穴であるが,出土遺物はなかった。 長径1.7m,短径

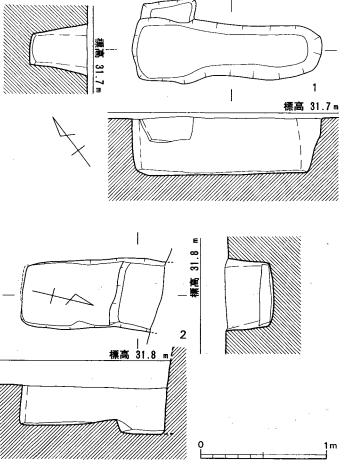
1.2m, 深さ 40cm の小型であるが, 6・7号のように床面が平坦で壁面に湾曲が見られる長方形の貯蔵穴らしいものである。

9号貯蔵穴(図版45-2,第 79図 9)

8号貯蔵穴の東側にあって、1号住居跡より古いものであるが、未製の石斧1個が出土しただけで時期不明。南北長1.4m、東西幅1m、現存深さ23cmの大きさで、8号と同様である。上部を1号住居跡で削平されているので、本来は深さ50cm以上あったであろう。 (柳田)

(7) 土壙とその他の 遺構

加賀石 I -22・23地区では,



第82 図 土 壙 墓 実 測 図 (1/30)

住居跡・貯蔵穴・掘立柱建物以外に、土壙墓らしきものや貯蔵穴とはできない不整形の土壙など性格不明なものが多い。これらのうち形態のはっきりしたものを取り上げる。

1号土壙墓(図版46-1,第82図)

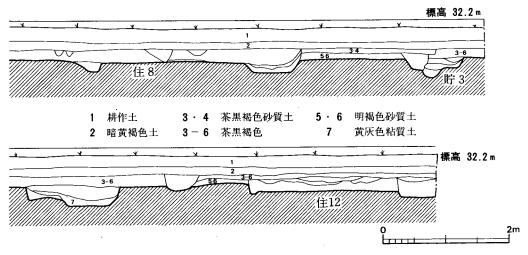
S112-E66 にあり,前期末の 7 号住居跡より新しい土壙墓。大きさは長さ 1.52m,北西側幅0.5m,南東側幅0.4m,深さ0.47mで,主軸を N53°W に向けている。土壙は北東側が広いので頭部と思われるが枕などはない。時期は 7 号住居跡より新しいといえるだけで,それ以後のどの時期に属するかは不明であるが,形態からは弥生後期から古墳初頭のもののようだ。

2号土壙墓 (図版46-2, 第82図)

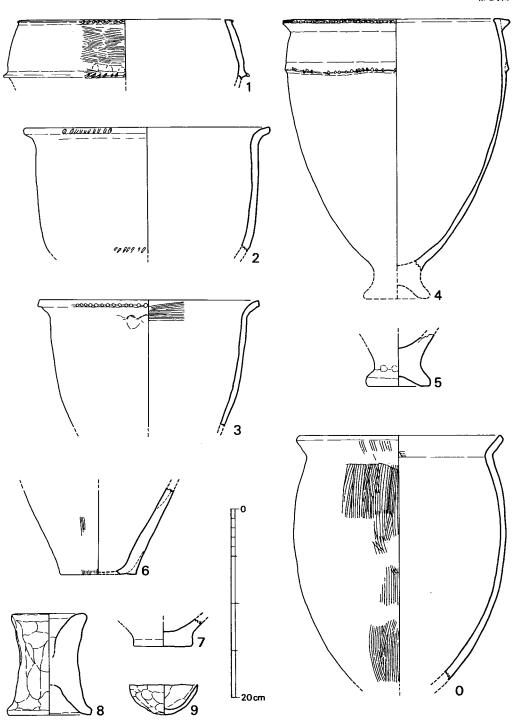
S108-E58 にあり,前期後半の11号住居跡より新しい土壙で未完掘。 確実に土壙墓といえるものではなく,未掘側が1段深くなるなど不明な点がある。第3層で明確なプランを検出できたので,弥生終末以後のものであろう。大きさは,現在長1.1m,幅0.53m,南北深さ0.31m,北側深さ0.36mで,主軸をN14°W に向けている。壁面は直立に近い。

(8) ピット・包含層出土土器

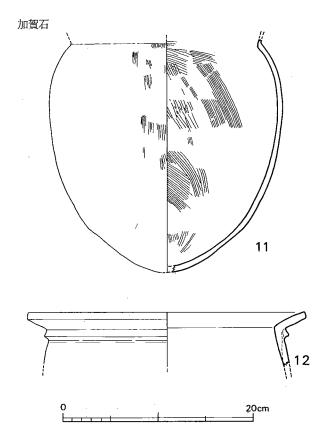
土 器 (第84・85図) 1 は S 108— E 64第 3 層で出土した破片。口縁と胴部にキザミ目凸帯を付ける夜臼式土器。 2 は S 112— E 68 第 3 層で出土した深鉢。口縁端と胴屈曲部に浅いキザミ目を施す。 3 は 8 号住居跡より古い P 102 から出土したもので、口唇下端にキザミ目を施す点



第83 図 加賀石 I -22·23土層図 (1/60)



第 84 図 ピット・包含層出土土器実測図① (1/4)



第85 図 ピット・包含層出土土器実測図② (1/4)

から前期後半のものである。

4は前期末の2号貯蔵穴より新し い P51から 蛤刃石斧(第91図3)と出 土した。口縁の三角貼付凸帯は口縁 として確立し、キザミ目も下部の三 角凸帯と同様になどりとして残って いる。底部は細くなっているところ から、5のような上げ底になるもの と思われる。5はS116-E68第3層 から出土した。6は前期末~中期初 頭の4・7号住居跡より新しいP10 から出土した甕の底部。中期中頃の もの。7は7号住居跡より新しい掘 立柱穴のP60から出土した前期壷底 部。8は前期後半の10号住居跡のP 125内から出土した支脚。器高10.7cm 上辺径8.1cm,底辺径9cmの大きさで 手捏的である。9はS108-E64の P110 から単独出土した手捏土器。

10は8号住居跡より新しいP38出土の甕。胴の張りがないところから後期中頃と思われる。 11はやはり8号住居跡より新しいP6から出土した弥生終末の甕。胴部外面下半にヘラケズリ が行われている。

12はS108E46第3層出土の甕口縁部片。後期前半と思われる。

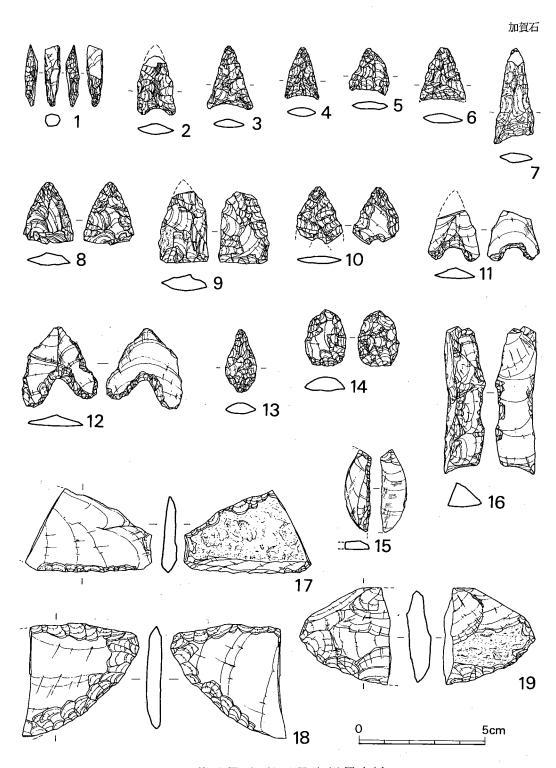
(柳田)

(9) I-22・23の石器・紡錘車・鉄器・玉類・鏡片

加賀石 $I-22 \cdot 23$ 地区の土器は、住居跡・貯蔵穴・ピットなどの各遺構毎に説明したが、各遺構から出土した石器・鉄器・玉類などは量が少ないので、ことにまとめて説明することにする。

石 器 (図版50~52, 第86~91図)

台形様石器(図版50-1,第86-1図) 1は8号住居跡より出土した資料で、黒曜石剝片の縁辺を刃部とし、他の部分を刃潰しで整形された梯形を呈す石器で、基部に研磨の顕著な痕

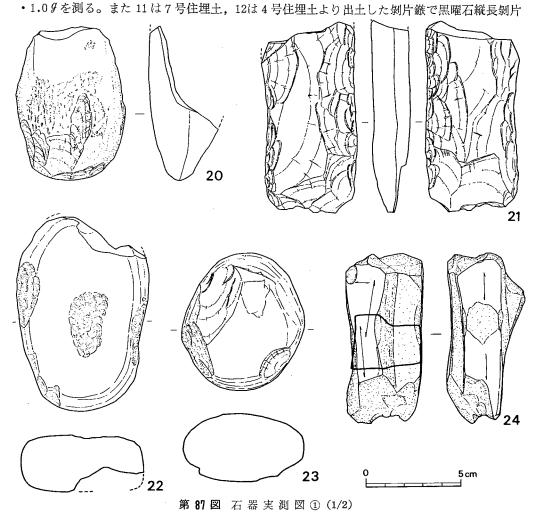


第86図 打製石器実測図 (1/2)(2/3)

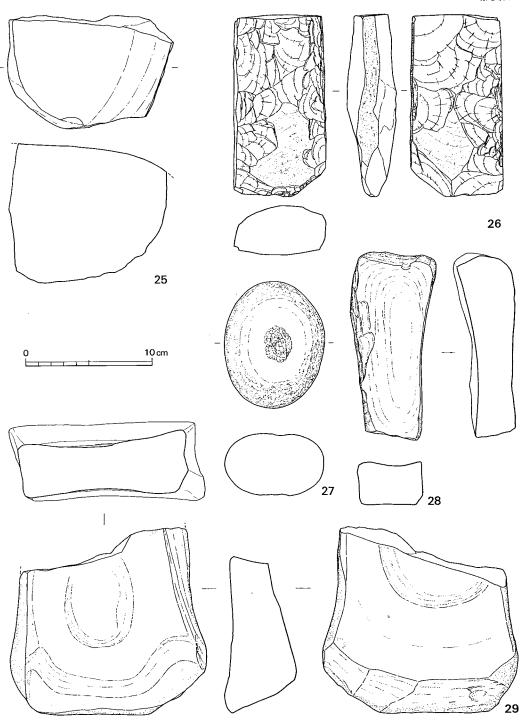
跡を認める。長さ24.2 m・最大幅6.5 m・厚さ5 m・重量0.7 gを測る。先土器時代後期に多くみられる石器であるが風化が進まないことから縄文時代後期頃の所産と考える方が妥当であろう。

打製石鏃($2\sim13$) 2 は S 122-E 70 区の第 3 層上部から出土し,3 は 3 号住居跡埋土,4 は 1 号住居跡埋土,5 は S 116-E 36 区第 4 層上部,6 は S 118-E 32 区第 3 層出土資料である。いずれも黒曜石不定形剝片を素材として全面に調整剝離が及ぶ。このうち $2\sim4$ の基部はやや内湾するが他は平基になる。重量はそれぞれ $1.49 \cdot 1.09 \cdot 0.69 \cdot 0.79 \cdot 1.29$ を測る。なお 2 の片面には研磨痕が認められる。

7 は 4 号住居跡床面出土の安山岩製石鏃で、全面に剝離が及び偏脚となる。 1.8 g を測る。 8 は S 108— E 62 区第 3 層、 9 は 1 号住、10は S 108— E 70 区第 2 層下部出土の資料で、黒曜石不定形剝片を素材とし主要剝離面を残す。前二者は平基で10は凹基となろう。 1.8 g ・3.0 g



— 100 —



第88 図 石器実測図② (1/2)(1/3)

の打面側を基部とするタイプである。重量は $1.29 \cdot 2.39$ を測る。

13は S 118—E 68 区小溝より出土した黒曜石製石器で、全体に丁寧な調整剝離が及ぶ。先端 部は細めに尖り、基部は丸くふくらむ形状をなすが、石鏃として類例をみかけない例である。 $1.05\,\mathrm{f}$ 。

削器・搔器(14~19) 14は4号住居跡埋土より出土した掻器で黒曜石剝片の主要剝離面の厚みを利用したいわゆるラウンドスクレイパーと称される類である。15は3号住居跡埋土より出土したサイドスクレイパーと称される種類の例であるが,黒曜石縦長剝片の打瘤部を取り除き厚みを減じている。長軸に直交する方向の擦痕が主要剝離面にみとめられる。16は2号住居跡出土の削器で,黒曜石のスポールを利用したものである。17は3号土壙から出土した安山岩製の削器で原面を残す。18は5号住居跡出土の削器で安山岩製。19は2号住居跡出土の削器で安山岩製。原面を残す側の一部に研磨痕がみられる。

石 斧(20・21・26)20は4号住居跡の柱穴内で出土した磨製石斧刃部破片で蛤刃になる。 刃部に打裂痕が生じている。玄武岩製。21はS114-E74区の南北小溝1号から出土した打製 石斧胴部破片で刃部に近い。やや扁平な玄武岩の横長剝片を素材としている。26は10号貯蔵穴 出土の石斧未製品で安山岩質。基部側を欠損するが630gを測る。

蔵石・すり石(22・23・27) 22は7号住居跡より出土した白雲母片岩製の敲石で円篠平坦面の中央が敲打によって凹む。また周縁部も敲打痕と磨耗痕があり敵く機能と磨る機能を兼ねていたとみられる。23は12号住居跡出土のすり石で玄武岩を素材とする。平坦面に磨耗痕が顕著にみられると共に周縁に敲打痕がみられる。27は S 108・E 36 区の第3層出土の敲石で、花崗岩円礫の平坦面が磨耗し、中央部は敲打痕によって凹む。577 9 を測る。

石 皿(25) 1号住居跡床面より出土したが破片で全体の形状は不明。花崗岩質アプライトを用い上面は顕著に磨耗する。

砥 石(24・28・29) 24は、2号住居跡より出土した粘板岩製の砥石で、図示した面の長軸方向に砥研の痕跡を顕著に有し、反対側の面にも若干砥研の痕跡を残す。28は6号住居跡床面より出土した細粒砂岩の砥石で上面は浅い船底状に凹む。29は5号住居跡の床面よりやや浮いた位置で出土した細粒砂岩の砥石で、両面共に中央部が円く凹んだ形状となる。また図の左側の面は端部が鞍状に隆起しており脚ともみられる形状になる。半欠資料であるが重量1620 9を測る。

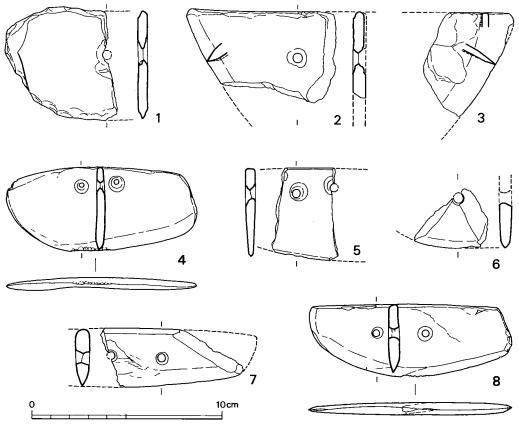
これらの石器類では、打製石鏃・削器・搔器・打製石斧・敲石・すり石・石皿等、縄文時代に属する可能性を有す。しかし縄文時代後期後半以降弥生時代前期では石器類自体の変化は跛行的であり、明確な時期区分は成し難い。但し打製石鏃中の基部の平坦化・剝片鏃の衰退は弥生時代において明瞭となり、敲石・すり石・石皿等もかかる主用途を考慮すれば稲作普及と共に衰退を余儀なくさせられる種類の石器と言えよう。 (小池)

石庖丁(図版51-2, 第89図) 1 は前期後半の10号住居跡中央土壙から出土した未製品。 砂質頁岩と思われる石材であるがもろい。研磨前に穿孔をしている。

2は前期後半の1号貯蔵穴から出土した破片。背は直線的であるが、端部近くでわずかに内 反りしている。刃部は逆にわずかに外反りしており、復原形は逆三角形の前期初頭の古いタイ プとなる。孔は両側穿孔で径5 mmの円孔1個が残っている。厚さは7 mmで、部分的に剝離し、 石材は砂質頁岩である。

3は前期末の7号住居跡埋土上層で発見された破片。背は直線となり、刃がわずかに外反りの逆三角形となるところは2と同様であるが、同じ両刃でも2より刃部が薄く鋭利である。石材は同じ砂質頁岩で、片面が剝離している。

4は前期後半の11号住居跡の上層で発見された完形品であるが、11号住居跡とは関係ないであろう。石庖丁は、玄武岩製で長さ10.1cm、最大幅4.3cm、厚さ5mm、重さ46.49の大きさで、2個の円孔を持つ。図面右端部は破損後再加工したもので、本来は左側と同様なものであろう。形態は、横剝ぎによって得られた剝片を素材にしているため、背に外反り、体部に湾曲があ



第89 図 石庖丁実測図(1/2)

る。刃部は、体部の反りを利用して左右対称的な片刃状態となっている。この左右対称の片刃は、8の石庖丁のように両面対称の片刃ともなり、どの面を掌に当てても片刃の状態で使用できるようになっている。4の場合は、刃こばれの具合から図面上面を掌に当てて使用している。時期は不明であるが、弥生後期のものであろう。2孔の中心距離は1.85cmあり、孔径は2mm強となっている。

5 は古墳期の 2 号住居跡埋土中から発見された,灰白色粘板岩製の破片。現存幅 4.9㎝, 背厚さ5.3㎜, 刃部厚さ2.7㎜, 孔径 4.3㎜ のもので, 背は直線,刃は湾曲する半月形に近いものであろう。裏面に穿孔位置がずれた浅い穴あり。 2 孔の中心間距離は2.1㎝, 孔径 4㎜。

6 は S 108—E 64 の第 4 層で発見された輝緑凝灰岩製の小破片。時期は関連遺構・遺物がないので不明であるが、層位から弥生中期のものであろう。

7 は,S112-E58の第3層で発見された輝緑凝灰岩製の破片。最大幅 3.1cm,厚さ 7.5mm,2 孔の中心間距離 2.7cm,孔径 4mmの大きさで,厚さから見て幅が狭いのは,かなりの使用に耐えて研減りしたものと考える。

8 は、9 号貯蔵穴の上部で発見された輝緑凝灰岩製の完形品であるが、遺構とは直接関係ないものと思われる。長さ10.7cm、幅3.8cm、厚さ0.6cm, 2 孔中心間距離2.6cm, 孔径0.4cm、重さ44.6gの大きさであるが、図右端は欠損後研磨している。背は直線で刃部は湾曲するが、4と同様に左右対称の片刃の形態をとる。中期後半のものであろう。

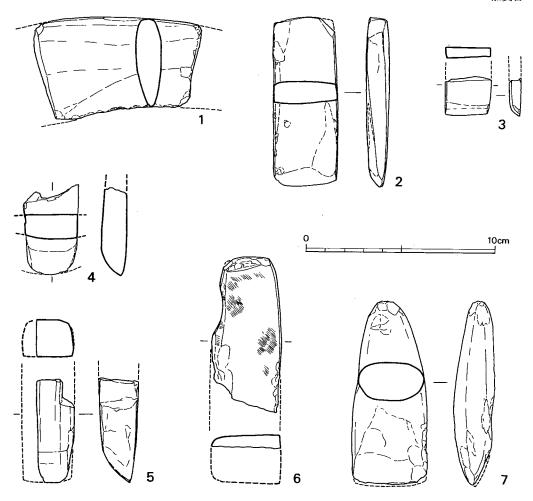
石 鎌(図52-1,第90図1) S120-E66の第3層で発見されたが、この下には前期後半の10号住居跡がある。第3層では、中期初頭(4号住居跡)以後の遺構が検出されるので、時期は確定できないが、出土地点は遺構の重複がないので、一応10号住居跡の埋土上層に含まれていたと見るべきであろう。現在長8.7cm、関部幅5.3cm、刃部幅4.6cm、厚さ1.3cmの大きさの玄武岩製。刃部は使用痕が著しく、刃とぼれした上に擦痕が残り、刃は丸くなっている。

3はS118—E76の古墳期以後の小溝で発見された小片。表面が淡褐色に風化した頁岩。

4は、前期末の7号住居跡 P124から出土した破片。表面灰色に風化した頁岩製で、長さ・幅は欠損し不明であるが、厚さは1.3cmで生きている。

抉入石斧(図版52-1,第90図5・6) 5はS116-E66の第3層から出土したが,下には前期末から中期初頭の7号住居跡がある。抉入石斧とするには抉入部を欠損し,長さ・幅も不明であるが,厚さが2cmと厚いことから,柱状片刃石斧であることに間違いない。石材は,表面が灰色に風化した灰黒色頁岩。

6は、前期後半の11号住居跡の埋土から発見された破片。これには抉入部が残っているが、



第90 図 磨製石器実測図(1/2)

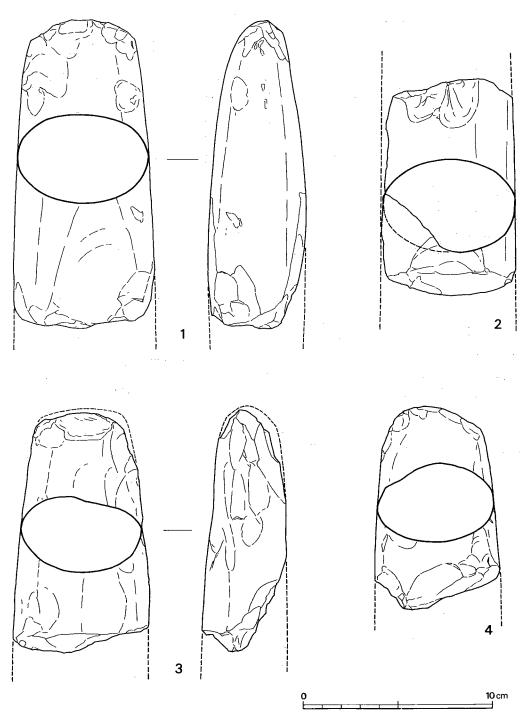
長さと幅は不明で、厚さは3.6cm。石材は灰色頁岩。

小形磨製石斧(図版52-1,第90図7) 前期後半の10号住居跡床面で発見した完形品。長さ9.6cm,刃部幅3.9cm,最大厚さ2.1cmの砂質頁岩製。小形で,いわゆる蛤刃石斧と違う。

蛤刃石斧(図版52-2, 第91図) 1は中期中頃の5号住居跡の床面で発見された。刃部を 欠損し、現存長16.2cm、最大幅7.4cm、厚さ5.1cm、現重量1.035 g の大きさの玄武岩製。

2 は,中期中頃の8号住居内周溝から出土した,刃部・頭部を欠く玄武岩製。現在長11.3 cm,復原幅7 cm,厚さ4.9cmの大きさ。

3 は,中期初頭のP51出土の刃部を欠損した玄武岩製。現在長12.5cm,最大幅7cm,厚さ4cmの大きさ。



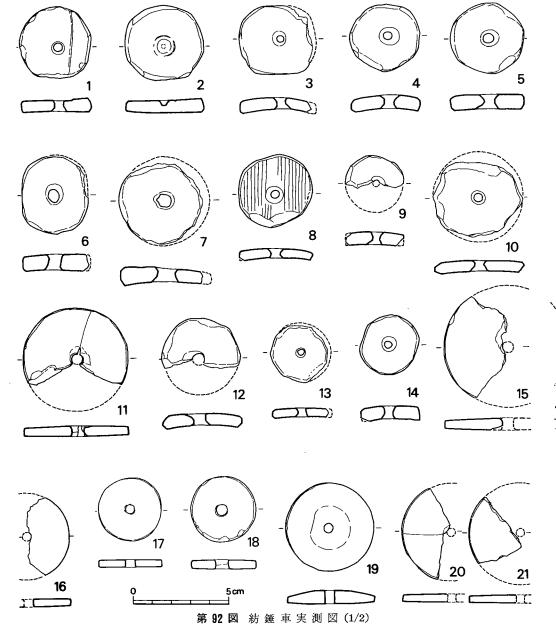
第91図 蛤刃石斧実測図(1/2)

4 は、S108-E64の第3層上部で発見された遺構から遊離したもの。玄武岩製で、現在長10.7cm、最大幅6.7cm、厚さ4.2cmの大きさ。

紡錘車(図版53, 第92図・表3)

 \mathbf{C}

加賀石 I - 21~23で発見された紡錘車は、土器片利用品と石製品に限られる。出土遺構・計



測値・時期は表のとおり。

土器片利用品で,前期末の2号貯蔵穴から出土した2の未製品は,穿孔途中のもので孔の外に径1.1cmの沈線の溝がある。穿孔具と穿孔法を考える資料となろう。

石製品では、11の粘板岩製品が10号住居跡床面出土であるから、前期後半という ことに なり、石製品としては前期のものは 1 例のみである。他の石製品は、白雲母片岩製であり、弥生後期に置かれるものであるから、石材において差を生じている。

表3 加賀石 [-21~23 紡錘車一覧表

(単位 mm,g)

								(単位	
No.	遺構	時 期	材 質	直 径	厚	孔 径	重	備考	
1	2 貯	前期末	土器片	40	7	4.5	12.1	完 形	
2 / "		"	" "		7.5	_	15.9	未製品	
3	4 貯	"	"	41	7	4	13+	一部欠損	
4	2 住	古墳前期	"	37	7.5	4.5	12.1	完 形	
5	4 住	中期初	"	39	8	5	12.9	"	
6	7 住	前期末	"	40	9	6	14.7 +	一部欠損	
7	"	"	"	42+	9	6.5	18+	周辺欠損	
8	8 住	中期中	"	39	5.5	4.5	10.2+	ほぼ完形	
9	10 住	前期後	"	31	7	3+	4+	半 分	
10	"	"	"	46	6.5	4.5	12.9+	周辺欠損	
11	"	"	粘 板 岩	55	$4.5 \sim 5.6$	5.5	19.1+	½ 欠損	
12	11 住	"	土器片	41	7	6	7.2+	半 分	
13	3 貯	中期初	"	30	5	4	4.8+	一部欠損	
14	P 51	"	"	32	7	4	8.8	完 形	
15	1 住	4 C以前	白雲母片岩	(66)	$4{\sim}6$	(5.5)	17.8+	% 欠損	
16	3 層	後期以前	"	(45)	4.5	(4.5)	7.3+	"	
17	"	_	角閃片岩	33	4	5	9	完 形	
18	"	後期以前	白雲母片岩	34	5	5.5	11.3	″ I —21	
19	"	"	"	46	3∼7	5	22.1	" "	
20	"	"	"	(52)	3.5∼4		9.3∔	% 欠損 "	
21	"	"	"	(54)	3.5~4.5	_	6.3+	¾ 欠損 ″	

()内は復原、+はそれ以上の大きさ・重さ。

鉄 器(図版54-1,第93図)

鉄 斧 1は S120—E68の第3層上部で発見されたので、弥生後期から古墳時代前半の時期のものであろう。長さ6.3cm、刃幅約3cm、袋部外幅2.4cm、同厚さ1.4cmの大きさ。

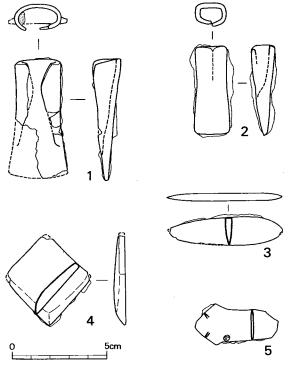
2は I-21の第3層で発見された弥生後期の小型品。長さ4.6cm, 刃幅1.9cm,袋部幅1.7cm,

同厚さ1.2cm, 袋内部 1.2cm, 同厚さ0.7 cmの大きさで, ミニチュア品のようであるが, 1より刃部が厚く 0.7cm あり, 袋部もしっかりしているところから, ノミ状の実用品である。

不明鉄器 3は S 108-E 62 の第 4 層から出土したもので、弥生後期以前のものである。形態は石庖丁形をした背と鋭利な刃部をもつ。大きさは長さ 6.1cm,最大幅1.5cm,背厚0.4cmである。

4 は弥生後期後半の 3 号住居跡の埋土 中から発見された菱形品。大きさは長径 約 4.8cm, 短径約4.4cm, 最大厚さ0.6cm で, 片面は平坦で一方が丸みを持って片 刃状になる。

5は4世紀末から5世紀初頭の1号住居跡の埋土から発見された鏃状品。全体に扁平で、周辺に刃部を持ち、一方が菱形に尘がるよとるから鉄鏃であるかもしま



第93 図 鉄 器 実 測 図(1/2)

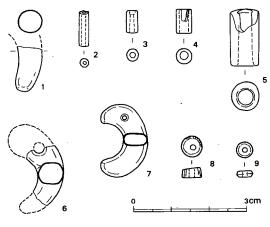
形に尖がるところから鉄鏃であるかもしれない。滑石の臼玉2個が付着している。

玉 類(巻頭図版2-3, 図版54-2, 第94図1~6, 表4)

加賀石 $I-21\sim23$ 地区出土の玉類は、埋葬遺構から出土していないため、各遺構・包含層から単独で出土したものである。古墳時代のものは後記する。

勾 玉(図版54-2,第94図1・6) 1は前期後半の10号住居跡床面から発見された硬玉 勾玉片である。頭部を欠損しているが、断面正円に近い優品である。現存長11.5㎜,最大幅6.6 ㎜、最大厚6.1㎜の大きさで、白色部分もあるが、淡緑色があざやかである。

6は後期後半の3号住居内の西北ピット内から発見された滑石製品。ピット内の発見であるから、時期が新しくなる可能性もある。両端を欠損した現存長15mm、中央幅6.5mm、厚さ6mmの大きさで、断面は楕円形であり、5世紀のもののように内湾部に稜線はもたない。



第94回 玉類実測図(実大)

管 玉(図版54-2,第94図2~5) 2はS106-E60の第3層で発見した黄色ガラス製管玉。出土層位は,弥生後期から古墳初頭の時代である。大きさは一方が欠損した現存長9.3mm,径2.45~2.55 mm,口径1.2 mmで,孔は同一大きさで貫通している。材質の分折を行っていないが,管玉表面に残る孔に平行な無数の細条線と気泡のふくらみは,ガラス製作の未熟さから生じるガラス特有の性質である。

3~5は淡緑色碧玉製管玉である。3は後期後半の3号住居跡床面で発見したもの。大きさは長さ5.9㎜,径3.2㎜,孔径1.5~1.6㎜の両側穿孔の小形品。4は1号住居跡南西隅の住居跡より古い方形掘立柱内出土。弥生後期以前のものであろう。大きさは長さ6.5㎜,径4.05㎜,孔径2.4~2.6㎜の片側穿孔。5は第4層排土中から発見されたもので,弥生中期以前のもの。

一方を欠損した後に再磨研したもので、現存長14.7mm, $&7.5\sim7.7mm$, 孔 $&8.15\sim3.95mm$ の両側穿孔された、端部に丸みがあるもの。

ガラス小玉(図版54-2,表4) ガラス小玉は,古墳時代の1号住居跡から出土したものを除外すると,紺色と空色のみで弥生後期のものである。大きさは紺色のものが最も大きく径6 mm,最も小さいものは径 2.9 mm である。形態も紺色のものが丸味があり丸玉と同様で,他は輪切に近いもの,長いもの,薄いものの各種がある。気泡は少ないが孔に平行に並ぶところから孔を平行方向に「のばし」て製作したものである。

表 4 三雲加賀石 I - 21~23 ガラス小玉計測表

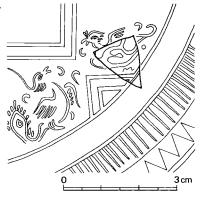
(単位 mm)

No.	出土遺構	径	厚	孔 径	分 類	色	
1	1 住	4.3	3.85	1.2	С	空色	不透明
2	"	2.6	2.5	0.9	В	"	
3	"	3.05	1.45	0.9	D	赤褐色	孔に平行に濃いすじ数条あり
4	S 108 E 60 2層	6.0	4.75	1.6	С	紺 色	
5	6 住 上層	3.6	2.5	1.3	E	空 色	
6	S 108 E 70 3層	2.9	3.5	1.15	В	"	

	S 110 E 33 3層						
8	S 113 E 33 3層	7.2	5.6	2.0	С	"	I —21

鏡 片(図版54-3, 第95図)

S108—E56の第3層で発見された方格規矩鏡の小片である。発見された層位は、出土する遺物は弥生後期にかぎられるが、3層上部に古式土師器や須恵器片を含んでいるところもあるので、古墳初頭までの幅をもたせた方がよいであろう。鏡片は、15.5×10.5mmの三角形の小破片であるが、V字形と銘帯内側凸線の一部があり、規矩鏡系のものであることがわかる。細線の文様はあまり鮮明ではないが、「鳥」らしき文様が見える。「鳥」であればV字形の位置から、「朱雀」本体ではなく、V字形を間に「朱雀」と向合う「鳥」であることになる。このように方格の辺に向って右側に「青龍」・「朱雀」・「白虎」・「玄武」を



第95図 鏡片実測図 (実大)

配し、左側に「鳥」などを対置するのは、日本では唐津市桜馬場出土のような大型の流雲文縁 方格規矩鏡に見られる。洛陽焼溝漢墓では、この形式の図文は第三期後期(玉莽及其稍後)に 出現する複線山形文縁方格規矩鏡に見られ、第四期(後漢早期)になってしか出現しない流雲 文縁式・複鋸歯文縁式に受継がれている(註21)。

3 古墳時代の遺構と遺物

加賀石地区の調査では、古墳時代の遺構・遺物は各調査地区で確認された。 I-1地区は、削平が著しく、時期決定できるのは西端の古墳期の住居跡状遺構のみであった。 I-8・9トレンチでは弥生前期の甕棺墓を破壊した住居跡 4 軒と土器・鉄器などの遺物。 I-22・23地区では、最上層である第 3 層で三雲では稀な須恵器片を発見すると 同時 に、須恵器を伴った 2 号、古式土師器を伴う 1 号の各住居跡を検出する。この第 3 層では、外に小溝があるが性格は不明。

I-5の石棺は、周辺の土器では弥生中期から終末~古墳初頭のものがあり、一応弥生時代に編入したが、構造から古墳時代のものである可能性もある。

(1) I-1トレンチ (図版55・56, 第96・57図)

加賀石 I-1 は昭和52年度の既設道路(昭和25年頃拡張)の再拡張のため,幅 3moトレンチを道路南側に沿って設定することになった。このトレンチは,支石基確認の意味でも昭和49年度の予備調査で設定したかったのであるが,ビニールハウス栽培のため果せなかった。結果的には後に道路敷で確認した支石基上面のレベルは,トレンチ地山面より20cm以上も上であった。したがって,I-1のトレンチでは,削平が著しくて遺構も時期が決定できるのは西端の住居跡状遺構のみであった。

住居跡 (図版56-1, 第96図)

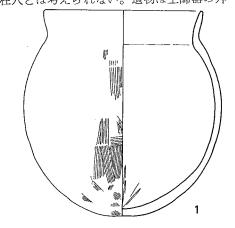
住居跡らしき遺構は,トレンチの西端のE35で検出されたが,確実に住居跡といえるものではない。西端の遺構は,昭和25年頃の道路整備まであった溝で西側を破壊され,さらに埋め戻されていた。遺構は東西幅6.3m,南北幅 24.5m を確認し,壁高は東側で20cmである。ピットが 3 個検出されたが,深さは $10cm\sim14cm$ であるから柱穴とは考えられない。遺物は土師器の外

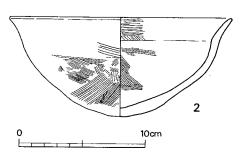
に鉄鏃と砥石が発見されている。

E33-E38グリットでは、北側に方形になると思われる深さ10cm程の浅い遺構を確認した。東西長4.2m、南北幅1.5mの大きさで、床面は平坦であるが、出土遺物はなかった。

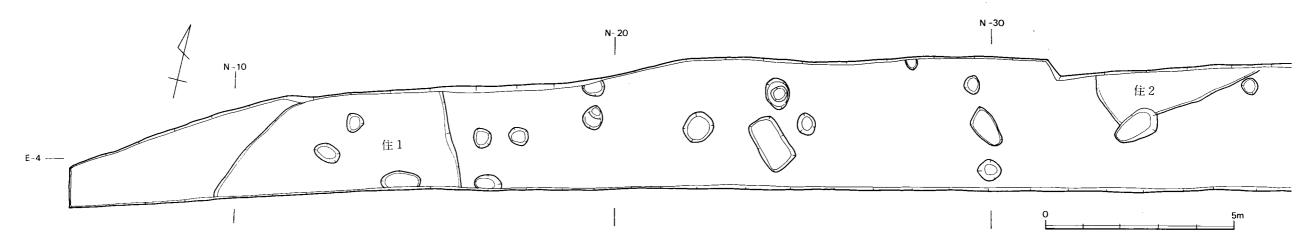
土 器(図版57,第98図) 1は小甕で,器高 16.2cm,口径12.6cm,胴径15.6cmの大きさ。器形は,わずかに外反する口縁の先が薄く,球形の胴に丸底である。口縁から肩部まではハケ調整の後にヨコナデするが,胴部には縦にハケ目が残る。内面調整は,口縁がヨコナデ,底部が板状痕が放射状に残り,他はナデ仕上げである。胎土には細かい石英粒・雲母を含み,外面淡赤褐色,内面黄褐色の良好な焼成。

2は鉢で、器高7.8cm,口径17.7cmの大きさである。摺鉢状の胴部から、口縁部はわずかに外反する。器内外面全体にハケ目調整が残るが口縁や底部外面はハケの後でナデ仕上げがされている。胎

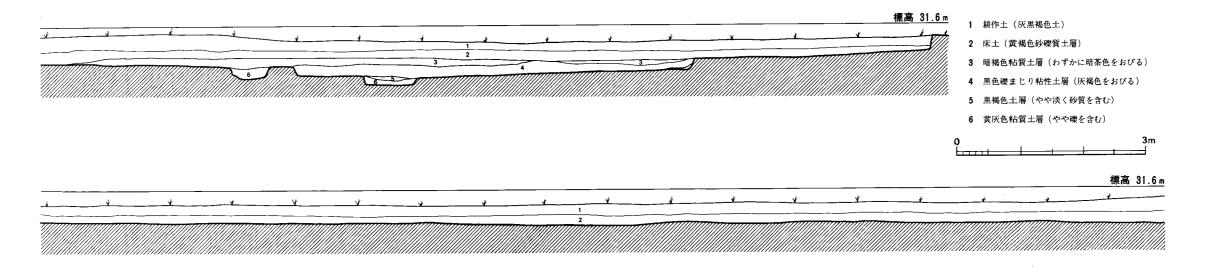




第 98 図 住居跡出土土器実測図 (1/3)



第96図 加賀石 [一1 トレンチ全体図(1/100)



第97図 加賀石 [-1 トレンチ土層図(1/60)

土に細かい砂粒・雲母を含む,暗褐色の良好な 焼成で仕上っている。

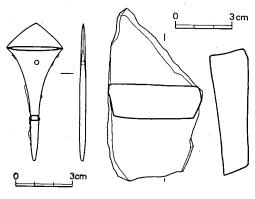
土器の時期は、決定しにくい器形であるが、 他の細片を見ても混入はなく、布留式の5世紀 前半頃に比定できよう。

鉄 鏃 (図版57, 第99図) トレンチ西端の遺構から土器に伴って発見された完形品。全長7.3 cm, 最大幅3 cmの大きさで, 茎と身の区別がはっきりしない。身の厚さは3 mmで, 茎よりわずかに薄くなっており, 中央付近に径2 mmの円孔を穿っている。

砥 石 (図版57,第100図) 鉄鏃と同様に西端の遺構から出土した小片。砥石は砂岩製の荒砥で、両面を使用している。重さ $120\,g$ 。

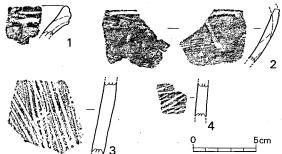
その他の遺構 (図版56-2, 第96図)

加賀石 I-1 では、前記したように削平



第99図 住居跡出土 鉄鏃実測図(1/2)

第 100 図 住居跡出土砥 石実測図(1/2)



第101図 I-1住居跡混入縄文土器 (1/3)

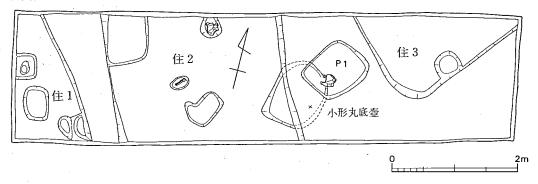
されているため,支石墓に伴う前期の墓地群は発見されず,若干のピットと土壙状遺構が検出されただけである。ピットや土壙も浅く,遺物もないので性格は不明である。 (柳田)

縄文土器 (図版57, 第101図)

4片出土しており、第101図に示す。1は口縁端部が肥厚した文様帯に沈線2条を施すもので波状口縁になると思われる。精製鉢形土器であろうが風化のために調整方法は明瞭でない。2は黒色系の色調を呈す精製磨研の鉢形土器胴部破片で、胴部界線接合面にて離脱した状況が窺える。界線外面に浅い沈線1条がめぐらされる。3・4は粗製深鉢形土器の胴部破片で、外面にアナダラ条痕を施文し内面はナデ調整される。胎土に1㎜前後の砂粒が含まれる。1は縄文時代後期西平式土器、2~4は後期末~晩期初頭頃の土器と考える。 (小池)

(2) I-8 • 9住居跡 (図版28 • 29 • 58 • 59, 第49 • 102図)

加賀石地区のトレンチにおいて、古墳時代住居跡は I-8 で 3 棟、 I-9 で 1 棟分検出された。いずれも方形住居跡であり、そのなかで遺物を出土したのは I-8-2 号住居跡、 I-9



第102図 加賀石 [-8トレンチ実測図 (1/60)

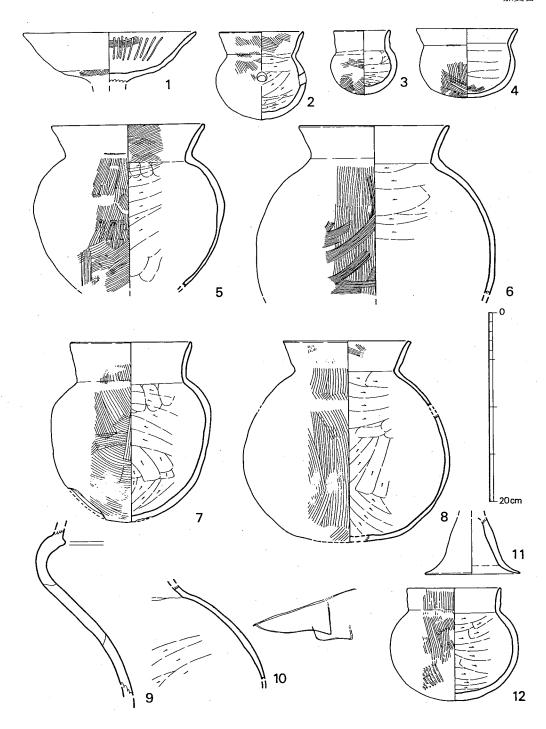
の住居跡である。

I-8-2号住居跡から出土した土器は第103図2・5・6である。2は有孔の小形丸底壺で器高9.4cm,口径8.7cm,胴部最大径9.5cmを測る。器表胴下半はヘラ研磨,上半と口縁内面はハケ目,胴部内面はヘラ削りを施す。胎土には精選された粘土を用い,焼成は硬く良好。茶褐色を呈する。孔はほぼ胴部最大径付近に位置し,孔径は10㎜を測る。5は甕で底部を欠失する。口径は16cm,胴部最大径は20.2cm,器表胴部はハケ目,口縁部は横ナデ,口縁内面はハケ目の後横ナデ,胴部内面はヘラ削りを施す。胎土には細粒の砂を含み,焼成はよく,褐色を呈する。6は2号住居跡内ピットより出土した甕で胴下半部を欠失する。口径は16cm,胴部最大径は25.4cm,器表胴部はハケ目,口縁は内外ともに横ナデ,胴部内面はヘラ削りを施す。胎土には砂粒を多く含み,焼成はよく,赤褐色を呈する。各所に煤の附着が認められる。第105図2・3は形代を思わす土製品で4.3cm,4.8cmと小形であるが,用途は不明。

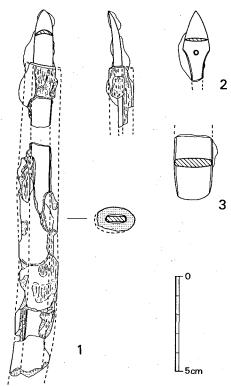
2号住居跡からはこれらの他に、鉄器3点が出土している(第104図)。1は鉇で一部を欠失するが、全長20cmをこすものと思われる。刃部は3cm程で、柄は鹿角を用いる。刃部の断面は三日月形で、柄部の断面は長方形を呈する。2は鏃で茎の一部を欠失する。中央部に径2~3mmの孔を有する。3は刀剣類の茎と思われる。

2号住居跡以外に I - 8トレンチでは P - 1 から甕が、×印の部分 (第102図) より小形丸底 壺 2 が出土している。 P - 1 出土の甕 (第 103 図 7) は完形品で、器高18cm、口径12.5cm、胴部 最大径は16.7cmを測る。口縁部は内外ともに横ナデ、胴部は器表をハケ目、内面をヘラ削りを 行っている。胎土には細粒の砂を多く含み、焼成は硬く、良好で、褐色を呈する。肩部以下には煤の附着が認められる。 3 は器高6.8cm、口径5.7cm、胴部最大径は 7 cmを測る。口縁内外は 横ナデ、胴部は器表をハケ目、内面は粗雑なヘラ削りである。胎土は微細な砂粒を含み、焼成は硬く良好。 黄褐色を呈する。 4 は器高 7.3cm、口径 10.6cm、胴部最大径10cmを測る。調整は 前者と同様である。胎土には精選された粘土を用い、焼成はよく、黄褐色を呈する。

8~12と陶質土器(第 105 図)は I - 9 トレンチの住居跡から出土した土器である。 8 は器高



第103図 加賀石I-7·9出土土器実測図 (1/4)



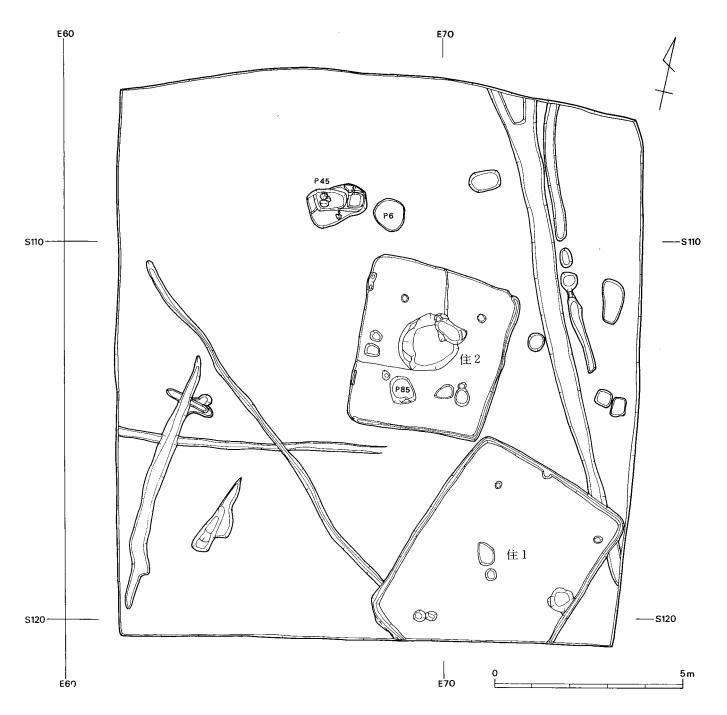
第104図 2号住居跡出土鉄器実測図(1/2)

をもつが, どのような絵か見当がつかない。器 表はハケ目,内面はヘラ削りを施す。11は高杯 脚部で底径10cmを測る。器表の風化がいちじる しく調整の観察は不能。胎土には砂粒を多く含 み, 焼成はよく, 赤褐色を呈する。12は完形 品で,器高 11.9cm,口径 9.6cm,胴部最大径は 13.5㎝を測る。口縁部はハケ目の後横ナデ,胴 部上半は粗いハケ目,下半はタタキの後ナデ, 内面はヘラ削りを施す。胎土には砂粒を含み, 焼成は良く,褐色を呈する。部分的に煤・炭化 物の附着が内外ともに認められる。第105図1は 陶質土器片である。 格子目タタキを残す ので胴下半部である と思われる。胎土に は砂粒を含まず、焼 成は硬緻で, 灰褐色 を呈している。この 他にI一9の住居跡 から不明鉄器片が出

21.4cm, 口径13cm, 胴部は下ぶくれで最大径はやや下位にあり21.7cmを測る。口縁内外はハケ目の後横ナデ, 器表はハケ目, 内面はヘラ削りである。胎土には砂粒を多く含み, 焼成は良く, 褐色を呈する。煮沸に使用されたものと思われ, たきこぼれの痕跡が認められる。9は二重口縁壷の破片である。器表はハケ目, 内面はヘラ削り。10は壷の破片で肩部にヘラ描の線刻

第 105 図 加賀石 [一 7 ~10出土遺物実測図 (1/2)

土している。
加賀石ではI-8 -1号住居跡から縄
文土器片(第105 図
4) が, I-9 の住



第106図 加賀石 I-23 第 3 層遺構全体図 (1/100)

居跡からは黒曜石製鏃(第 105 図 5)が出土しているが、これらは混入したものとみられる。 以上みてきた土器は第 103 図 7 のようにやや新しいと思われる要素の認められるものがあるが、同一型式内の変化とみてよい程の差である。類例をあげるとすれば、春日市上白水門田 6 号住居跡出土の土器群とほぼ同一時期のものと考えられる。陶質土器を伴出しているが、須恵器が出現しているか否かは微妙な段階であり、むしろ出現前夜の時期といってよかろう。

(橋口)

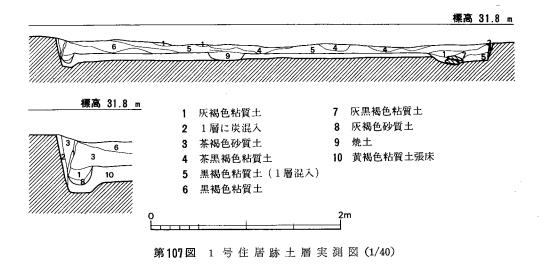
(3) I -23 住居跡

1号住居跡(図版34,第107・108図)

調査区東北隅 (S118—E71) に位置し、後世の溝に切られている方形住居跡である。約6.0 ×4.70mを測り、幅15~20cmの周溝を持つ。東側にほぼ円形の貯蔵穴・3個の柱穴を 検出した。貯蔵穴及び周囲に5個の小形丸底坩と盌を出土した。同溝には、住居跡土層図(第108図)でみれば、縦状の土層をみ、住居跡の側板と考えることができよう。床面は張り床であり、建材であろう炭化木材・工作台であろう石魄が床面にあり、ほぼ中央には焼土・スミの埋土とする炉を検出した。

出土遺物には,土師器(甑・甕・高杯・脚付盌・小形丸底坩・盌)・紡錘車1点であり,時期は古墳時代前期・布留期古式であると考える。 (川村)

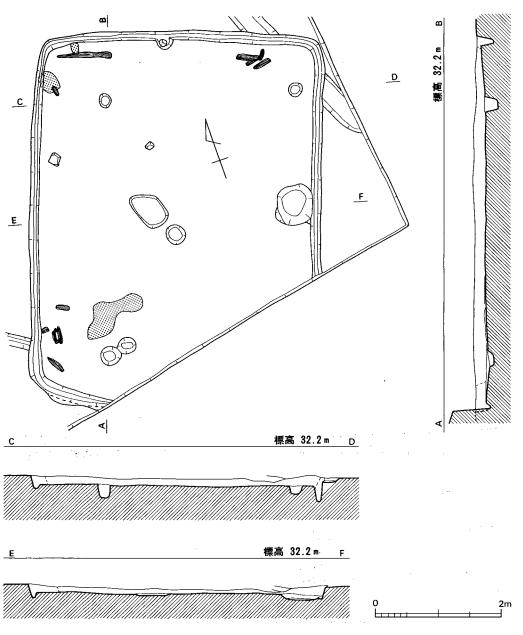
土師器(図版60,第109・110図1~17) 1~5は小形丸底坩で,6の盌と共に完形一括土器である。1は器高9.5cm,口径 8.2cm,2は器高9.5cm,口径 8.4cm,3は器高10.9cm,口径 9.1cm,4は器高11.2cm,口径9.1cm,10200分



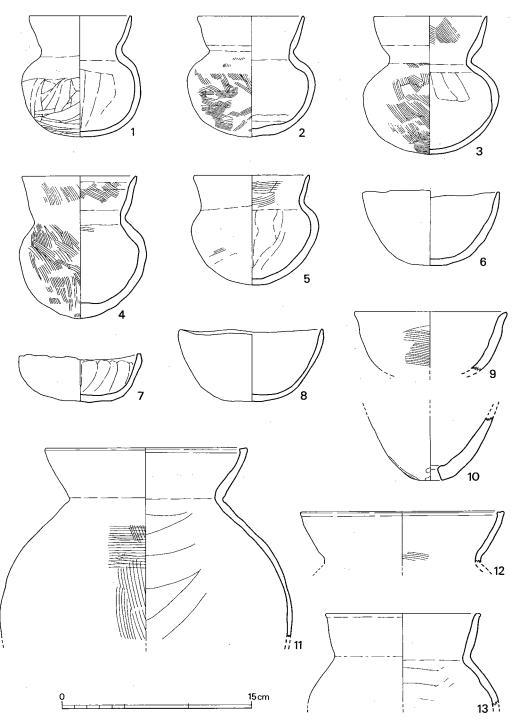
— 117 —

が厚さに変化なく直口的であるが、他の4個は口縁下半の外面に段ともいうべきふくらみを有する。1は胴部外面下半にケズリがあるが、他の4個はハケ目調整である。内面は5個共同様に指やヘラ状のものでナデている。

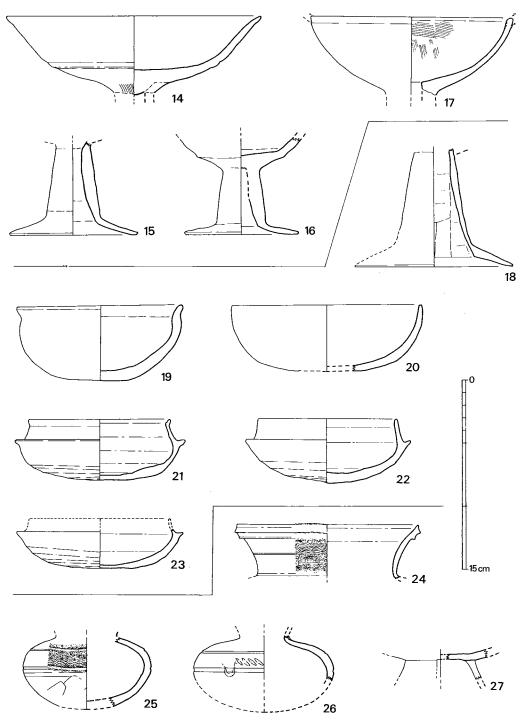
 $6\sim9$ は盌であるが、9 の外は手揑的で口縁が一定しない。9 は口径 12cm、現高 4.8cmの大



第108図 1 号住居跡実測図 (1/60)



第 109 図 1 号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第110図 土 師 器·須 恵 器 実 測 図 (1/3)

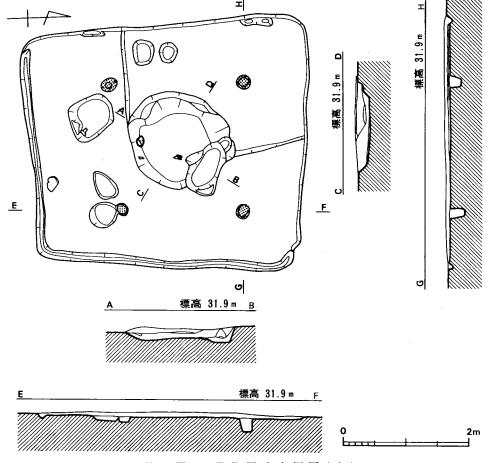
きさで、外面にハケ目、内面はハケ目後ナデ調整が行なわれている。

10は甑で底部に径1.8cmの円孔を穿っている。

11~13は甕であり、11の口径16cm、胴径23cmの大きさ。11・12は口縁端がわずかに内傾する 典型的な布留式で、肩部に真横のハケ目があり、下半は縦のハケ目となっている。胴内面は頸 部から約1cm下を下から斜上にヘラケズリを行っている。13は口径12.3cmで、口縁が11・12と 比較すると立ち、上端に平坦部がある。

 $14\sim16$ は高杯である。 4 個は別個体であるが,14と15のような組合せになるであろう。 14の杯部外面屈曲部には 2 本の沈線状段を有する。 15の柱状部内面はヨコケズリ,他はナデ仕上げである。 16は脚接合部から杯部屈曲部までが短かく, 14の杯部とは差がある。柱状部内面にはシボリ痕があるが他はナデ仕上げ。

17は脚付温かと思われたが、杯部上端に接合の痕跡があり、口縁部が存在したことが明らか



第111図 2号住居跡実測図(1/60)

であるが、どのような口縁となるかは不明。さらに杯部底から脚に貫通した焼成前の円孔があることから器台と考えなければならないだろう。現口径16cm、杯深15cm、脚上端径4cmの大きさ。1号住居跡の土器は、小形丸底坩と盌との外は破片資料であるが、出土状況から一括資料といえる。11・12の甕のみが古い傾向があり、13と多少時期差を感じるので、小形丸底坩と13の甕は確実に伴うとすれば、4世紀末から5世紀初頭の時期と考えられる。 (柳田)

2号住居跡 (図版35, 第111図)

調査区のほぼ中央(S113-E70)に位置する方形住居跡で、約 $4.35\times3.95m$ を測る。ほぼ中央に円形土壙・4 個の柱穴を、部分的に西側と東・南側に周溝をもつ。中央土壙は $1.5\times1.55m$ で、周溝幅は $10\sim15cm$ を測る。西北部床面は1 段低い。

出土遺物には、土師器(高杯1点・盌2点)・須恵器(杯身3点)・石器(石庖丁1点・削器2点・砥石1点)・紡錘車1点があり、時期は6世紀初頭~前半と考える。 (川村)

土師器(図版61-19・20, 第110図19・20) 18は高杯の脚部で、柱状部内面はヨコヘラケズリである。 P85から出土しているが、住居跡より古い。

19・20は盌で、中央土壙から出土。19はかすかに丹塗りの痕跡があり、その下はナデ仕上げとなっている。20は口縁部直行し、内外面を磨研している。19は器高 5.9cm、口径 13.2cm, 20は口径15.1cmの大きさ。

須恵器 (図版61, 第110図21~23) 3 個共に杯身である。21は器高 4.8cm, 口径 11.1cm, 22 は器高5.1cm, 口径10.9cm, 23は受部径 13cm の大きさである。21・22の立上りは高いが, 21は 先端が屈曲する。底部外面は 3 個共回転ヘラケズリ仕上げである。21・22は青灰色の良好な焼成であるが, 23はかなりあまい焼成である。

2号住居跡の時期は,須恵器の年代ということになるので,18の土師高杯は混入品であり,23の須恵杯は出土位置が住居プランの不確定なところであるから除外すると,21・22の時期として6世紀前半の時期になろう。

須恵器(第110図24~26) 24は S108—E70の3層で発見された口径14.3cmの小形甕の口縁部で,内面上半に自然釉がある堅牢な焼成である。口縁端は突がり,その外側に2段のシャープな凸帯をめぐらす。頸部中位に沈線1条をめぐらし,その上部に櫛描波状文を施す。胎土は砂粒を含まず,内部淡紫灰色,外面青灰色の上質焼成。

 $25 \cdot 26$ は 26 を 25 は 25 に 2

28

しその間に原体によるキザミを施すが,自 然釉等で不明瞭なものとなっている。

27はS 118-E72の3層上部(1号住居 跡上部)で発見された透台付壺と思われる もの。小破片であるから不明な点が多いが, 方形透窓を持つ台付きであることは明らか である。胎土に砂粒をあまり含まぬ,灰青 色の良好な焼成。

土師器 (第 112 図28・29) 28は, S 29 110-E68で 1号貯蔵穴に重複して発見さ 第 112 図 土 師 器 実 測 図 (1/3) れた土壌状遺構から出土した高杯。杯部の外面には丸みがあるが、内面には段がついている。胎土に細砂粒を含むが精良で、焼成良好。

29は、S112—E60の第3層で発見された高杯脚部。杯部を欠損しているが、脚の接合部にはキザミ目を入れて杯部と接合したらしい。脚には3個の円孔がある。器面は全体に摩滅がひどく、調整法が不明瞭であるが、外面にはハケ目が残っている。

28・29の2点は、1号住居跡と同時期の4世紀後半頃のものであろう。

玉 類(巻頭図版 2 - 3, 図版54-2, 第94図 7~9, 表 4)

7・8は6世紀前半の2号住居跡出土の滑石製勾玉と臼玉である。勾玉は長さ19.05元 中央幅6.35元 厚さ2.7~2.9元 局平なもので,重さ0.95gとなっている。孔径は1元 を整然とした両側穿孔である。臼玉は径5.25元 厚さ2.6元 孔径1.5元 大きさで,断面台形をしている。孔は片側穿孔で,玉の側面には粗い条線が残る。

9は4世紀末の1号住居跡から出土した滑石製臼玉で,外に2個が第90図5の鉄器に付着している。径4.15km,厚さ1.75km,孔径1.4kmの大きさで,側面にソロバン玉状の稜を持つ。

4 小 結

加賀石地区は,郡の後,西側の仲田,南側の石橋地区に分布する弥生前期遺構の中心地域ということができる。集落は $I-22 \cdot 23$ 地区に集中していたが,墓地は I-1 の支石墓, I-9 の前期初頭の甕棺群,仲田 I-14の前期中頃の甕棺群(昭和55年度報告),石橋 I-2 の前期後半の甕棺群(昭和55年度報告)があり, $I-22 \cdot 23$ の集落を囲むかっこうになっている。支

とI-9の前期前半の甕棺群の発見は、予想はしていたものの、好資料に恵まれたといえる。

 $I-22 \cdot 23$ の集落では、 $9 \cdot 10$ 号住居跡のように弥生前期後半にのぼるものがあり、前期末には 7 号住居跡、中期初頭には $4 \cdot 6$ 号住居跡、中期中頃には $5 \cdot 8$ 号住居跡、後期後半には 3 号住居跡が営まれている。また、住居跡に付随する貯蔵穴と思われる竪穴や土器溜土壙は、前期後半の $1 \cdot 5$ 号、前期末から中期初頭の $2 \cdot 4 \cdot 8$ 号がある。貯蔵穴で土器が発見されない $6 \cdot 7$ 号は、切合い関係から 6 号が 4 号の中期初頭より古く、さらに前期後半の 10 号住居跡 より古く、7 号が前期末の 7 号住居跡より古いことが明らかであり、長方形の袋状竪穴であることからも、最も古い貯蔵穴らしいタイプといえる。

住居跡と貯蔵穴の新旧関係を図式すると下記のようになる。

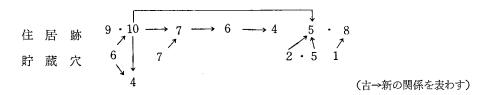


表5 加賀石 I -22 · 23 住居 · 貯蔵穴時期別一覧表

			前:	期	前 半	前	期	後	半	前	期	末	中	期	初	中	期	中	頃
住					9 • 10			7			4 • 6			5 • 8					
貯	蔵	穴		6 ·	7		1	• 5			2 • 3			4 • 8	3		•		

以上でわかるように,住居跡に混入して発見される前期前半の土器や石器は,長方形の袋状竪穴を主体とする集落の存在を証明し,I-9で発見された甕棺群との関係も明らかになった。また,前期後半の住居跡は,仲田 I-16・石橋 I-2 の甕棺群の同時期で,住居を中心とした墓地構成が明らかになってくる。

中期になれば、I-23の中頃の住居跡とI-5・I-10で発見されるような後半から後期初頭の祭祀を思わせるような土器群の存在も、住居と墓地の関連として浮上してくる。

加賀石地区では、弥生後期の遺構・遺物は少ないといえる。 I-23で住居跡 1 軒と後期らしい遺物の発見があったが、 I-5 の石棺が古墳時代に下る可能性があるため、住居と墓地を関連づけることができない。仲田 I-14の終末期の甕棺墓と石棺墓も、西側の仲田 I-16が後期後半から終末の大集落であるから、加賀石との関連は薄い。

加賀石地区の古墳時代遺構は, $I-1 \cdot 8 \cdot 9 \cdot 23$ で住居跡が合計 7 軒発見された。住居跡の時期は,大別して 4 世紀後半・5 世紀前半・6 世紀前半の時期に分けることができた。この地区の中心ともいえる $I-8 \cdot 9$ にトレンチながら 4 軒が検出できたことは,このあたりに 5 世紀前半の住居跡が集中すると見てよいであろう。5 世紀前半という時期は,伴出する陶質土

器が須恵器に交替していく前夜としてとらえられ、寺口・八龍・堺地区においても同様な状況である。これらの地区で陶質土器と伴出する大量の土師器は、朝鮮半島で時期幅のある陶質土器の年代を決定できるものであろう。 (柳田)

第4節 番上地区の調査

1 はじめに

番上地区の調査は、昭和49年度の三雲地区簡易水道施設工事に伴うⅡ-6地区と昭和52年度の圃場整備に伴う水路工事に伴うⅡ-2・3・5地区を実施してきた。「番上」は、前方後円墳である端山古墳の北あたり、東を仲田、北を深町、西を柿木、南を八反田・塚廻りに囲まれている。

今回報告する分は,昭和49年度調査のII-6と昭和52年度調査の $II-2 \cdot 3$ 地区であるが,II-6の簡易水道工事は計画がありながら,前原町水道課と教育委員会の合議がなされず,工事着工時になって初めて知らされるという行政のまずさがあった。当県教育委員会は,たまたま圃場整備のための予備調査の準備を行っていたので,これに対処すべく緊急に調査を実施することになった。

三雲地区簡易水道工事は,番上II-6を水源とし井戸とその施設を建設し,三雲全体に配管するというものであった。遺跡が破壊されるのは,井戸の周辺と建物の部分だけということであったが,結果的にはブルドーザーで井戸掘りをしたためにII-6地区全体が破壊されてしまった。配管工事は,一応道路敷であったために,工事に立合って出土した遺物を採集するだけにした。

番上II-6は、とくに緊急的な調査であったために、当方の準備が完全に調わずに応急的な調査となり地区割りと実測基準線は番上II-6のみの部分的なものとならざるを得なかった。

番上Ⅱ-6の調査は、小池史哲が主体となり柳田康雄・橋口達也・馬田弘稔・宮崎貴夫が担当し、桑田和義・川村博・堀田秀茂・小林美孝が参加した。 (柳田)

番上Ⅱ-6の区割りの設定(第113図)

この地区の調査では、当初遺構範囲確認のため幅2mの試掘溝による調査を実施し、遺構の存在が確認できたことから調査区を拡張することにし、4m方眼の区割りを設定した。

区割りは、試掘溝の方向に合せて、東から西へA~Hのアルファベット列・南から北へ1~ 8の数字列を用いて、これによる方眼をアルファベット→数字の順に呼称することにした。こ

番 上

の結果従来の試掘溝は1トレンチがA2~H2区の北半分, 2トレンチがD3~8区の東半分, 3トレンチがA4~C4区北半分, 4トレンチがD1~2区の東半分, 5トレンチがD4~H4区の北半分, 6トレンチがA7~H7区の南半分に相当する。

遺構の確認できた部分については全面発掘を行うものにしたものの、既に試掘溝による調査 段階の排土と、順次拡張した部分の排土が処理できず、 $D3\sim H3$ 区・ $D4\sim G4$ 区の南半分 ・ $D7\sim H7$ 区の北半分は設計で破壊されない範囲であったので調査を実施していない。

なおこの区割り設定の段階では、三雲遺跡全体に及ぶ区割り設定がなされていなかったので 当該地区単独の区割りである。三雲遺跡全体の区割りであるS255~290、W154~185の範囲に 相当し、アルファベット列はWラインに対して北側が2.5°東偏することになる。

層 序(第114図)

この地区の堆積土は大きく5つの層に区別している。

第1層は、水田耕作土で暗灰褐色ないしは黒色を呈す軟質の土壌、第2層は同じく水田耕作土であるが色調が淡灰褐色を呈し第1層に比して硬めである。

第3層は, 黄色粘質土で水田床土として整地された面である。薄く, 全体には及ばない。

第4層以下が遺物包含層で、第4層は暗黄褐色を呈す粘性で鉄分を含む部分が多い。またこの層には色調が黒っぽく軟質になる部分があり4⁴層として区分している。第4層・第4⁴層は主に古墳時代以降の遺物を含む。

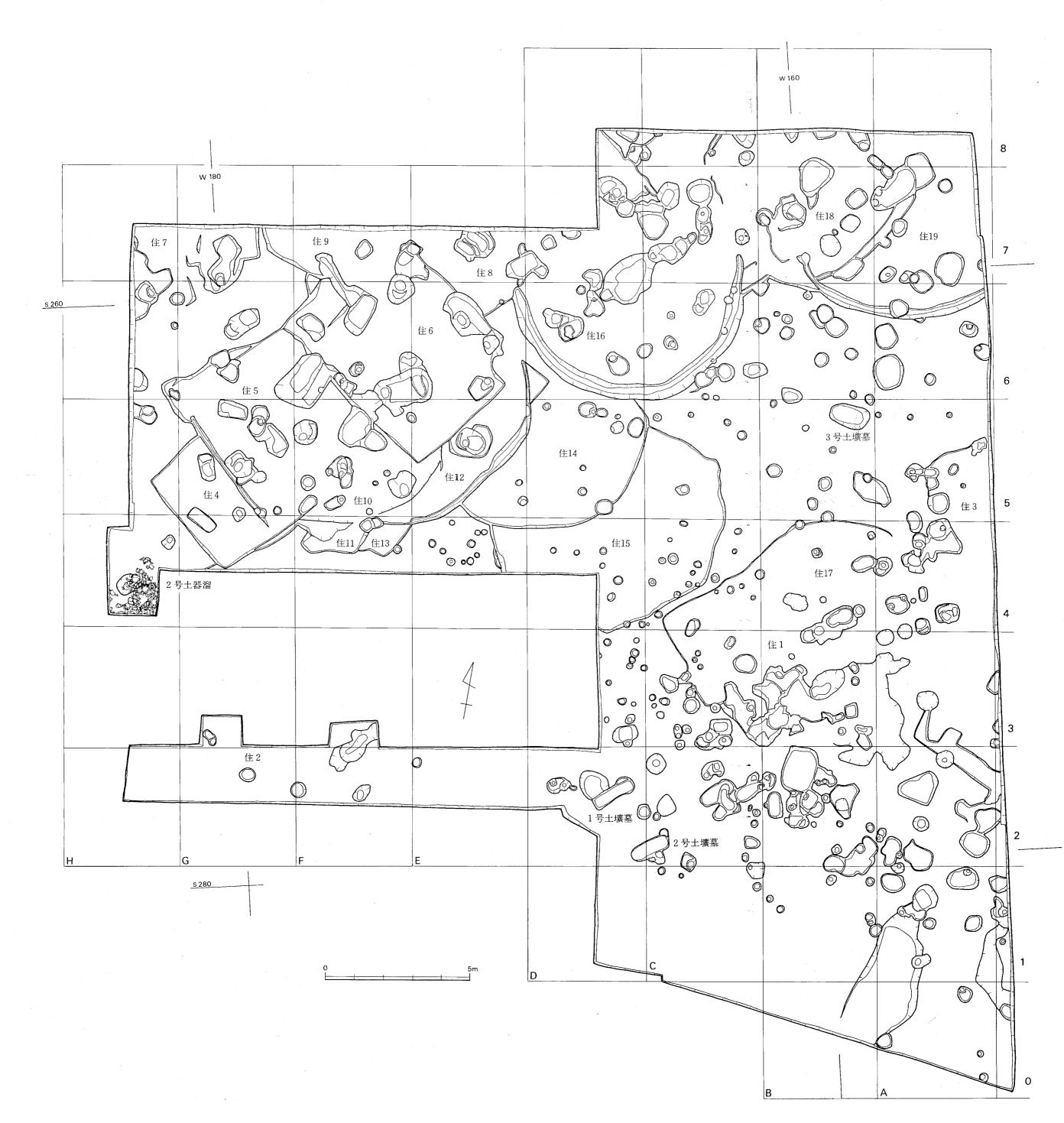
第5層は灰黄褐色粘性土で、上部では暗黄褐色粘性土となり第4層と明確に区別をし難い部分もある。またこの層にはやや暗い色調の黄褐色粘性土があり5a層としているが、主として住居跡埋土等が相当する。5b層とした褐色土は住居跡内床面に主としてみられる堆積土で、黄色粘土・焼土・灰等が混っている。これらの層は弥生時代に属する遺物を含む。

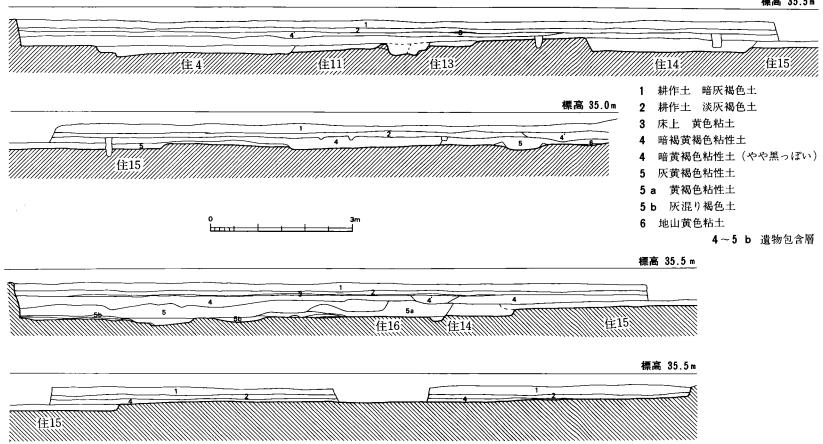
第6層は黄色粘土でやや砂質の地山になる。遺物は包含しない。

遺物包含層である第4層~第5 b層は色調の変化が漸次的で、明確な区別のし難い部分が多く、堆積状況観察用の壁面において幾分区別がし易いという状況であった。平面的に順次掘り下げている過程においてはほとんど識別し得なかった。

2 弥生時代の遺構と遺物

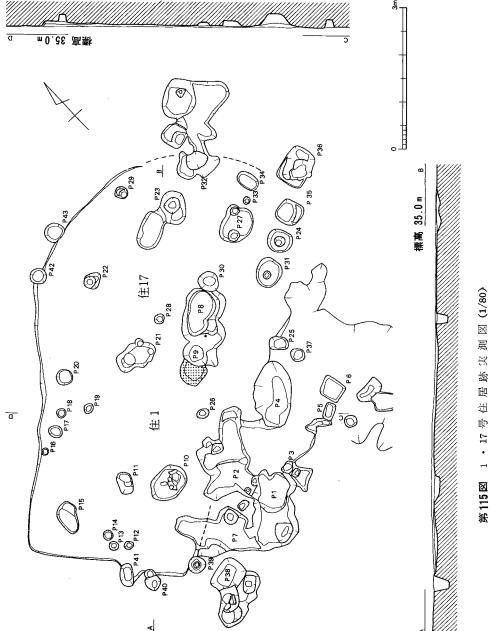
弥生時代に属する遺構として住居跡19・土器溜め1が確認できた。これらの遺構は調査区域 内の北西寄りにやや集中し、殊に住居跡相互の重複が顕著にみられる。

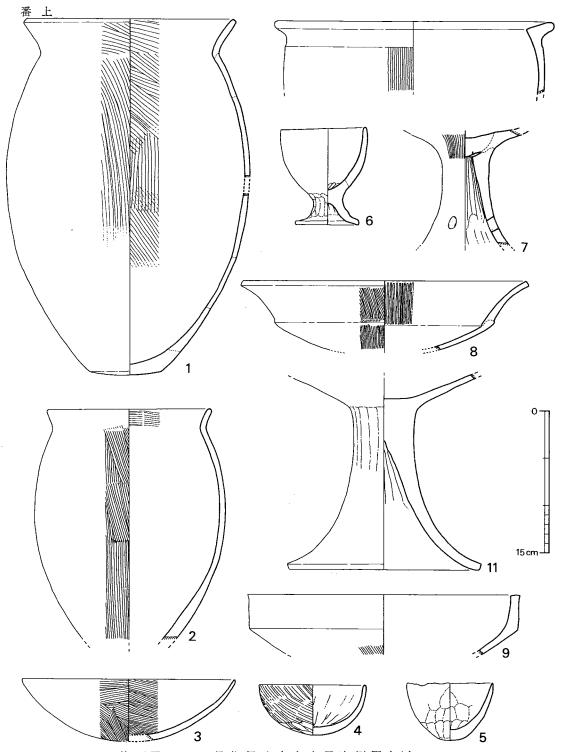




第114図 番上 I - 6 土層実測図 (1/60)







第116図 1 · 17号住居跡出土土器実測図(1/4)

(1) Ⅱ-6住居跡

19基の住居跡の内訳は以下の如くである。

前期不定形住居跡

15号

中期円形住居跡

2 · 3 · 10 · 12 · 14 · 16 · 17 · 19号

後期方形住居跡

1 • 4 • 5 • 6 • 7 • 8 • 9 • 11 • 13 • 15 • 18号

これらの住居跡の調査では、住居跡相互の重複が顕著なことと、調査担当者が堆積土の識別に不慣れであったことも相俟って、黄色粘性土の地山での識別以外は充分であったとは言い難い。黒色土中に掘り込まれた幾つかの住居跡において輪郭が不明のまま床面に至って逆に周壁を確認するという本末転倒な調査方法も用いて住居跡のプランを確認した例もある。

なお住居跡内出土遺物のうち石器・土製品等は最後にまとめて記述することにする。

1号住居跡 (図版65, 第115図)

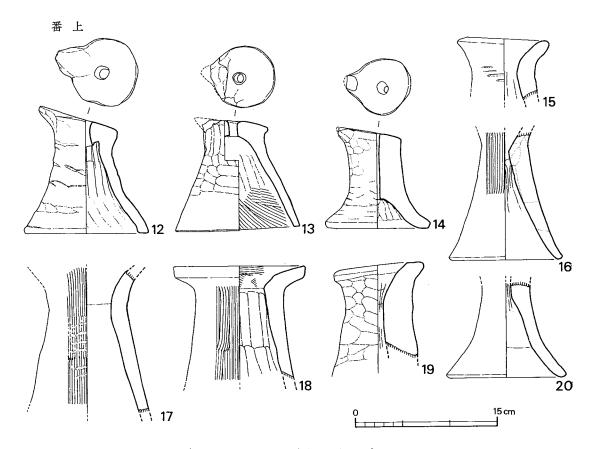
B・C-3・4区に位置する。平面形は方形プランを呈すが、17号住居跡と重複し、上部を削平されていることと相俟って東部での輪郭は明確でない。長軸7m程度・短軸5.7mで、周壁の残存状態良好な部位での壁高10cmを測る。西南部の周壁で内側に入り込む部分のあること周壁外柱穴に後期の遺物が出土することから、ベット状遺構の存在も想定し得る。

床面はやや堅緻であるが、南部では下層を形成する円礫面が露呈する。柱穴様ピットのうち $P16 \cdot 17 \cdot 20 \cdot 42 \cdot 43$ では中世の遺物が含まれるものの残るピットのいずれが当該住居跡の柱 穴として伴うのかの判定はし難く、比較的深さを有する $P5 \cdot 11 \cdot 18 \cdot 28 \cdot 30 \cdot 37 \sim 40$ が可能 性を残す。なお P9 の西側に焼土が検出されたが前述の理由で 1 号住に確実に伴うとは断定できない。

土 器(図版73・74,第116・117図) 1・2は長胴の甕である。1は内外面共に粗めのハケ目がみられ、外面の胴下半はヘラナデによって消される。底面は丸味を有す平底でナデ調整される。外反する口縁をもち口唇端部は平坦になる。2は胴下半にもハケ目が残り、内面はナデられる。また1に比してやや短く立つ口縁部の外面もヨコナデされ口唇端部は丸味をもつ。

3は器高に比して広い口径を有す椀で内外面共にハケ調整される。4は器高と口径の比が 1:2程度になる椀で、外面に叩き痕が残り下部はヘラ削りされる。5は手捏に近い形状をな す椀で指圧痕が残る。6は口径よりも深みのある体部を有す台付椀形土器で内外面共にナデ調 整されるもののくびれ部に指圧痕が明瞭に残る。

7~9は高杯の破片で、7は長い柱状部と杯部がソケット状に接合される。杯内面はヘラ磨きされ外面にはハケ目がみられる。柱状部の外面ヘラ磨き、内面はヘラ押え痕が残り3孔が穿



第117図 1号住居跡出土土器実測図② (1/4)

たれる。8はくの字形に稜を有し屈折して外反する,杯部破片で外面をハケ目調整し,内面に暗文を施している。口唇部まで厚みを保ち端部は平坦になる。9は,直立する口縁を有す杯部破片で口唇端部は平坦面となり,わずかにはみ出す。

10・11は、中期に属す資料で17号住居跡に伴う資料であろう。

12~14は,支脚形土器で沓形状を呈し上面中央に1孔が穿たれるが,12・13の体部が中空になるのに比し,14は大半が充塡されやや形状が異なる。12・14の外面には叩きの痕跡が残る。15~20は器台で,上面を丁寧に調整する18と,叩き痕の残る15・17,指圧痕が残る19等がある。これらの土器は,9にやや時期の溯る可能性を残すものの,概ね後期後半頃に属す。(小池)

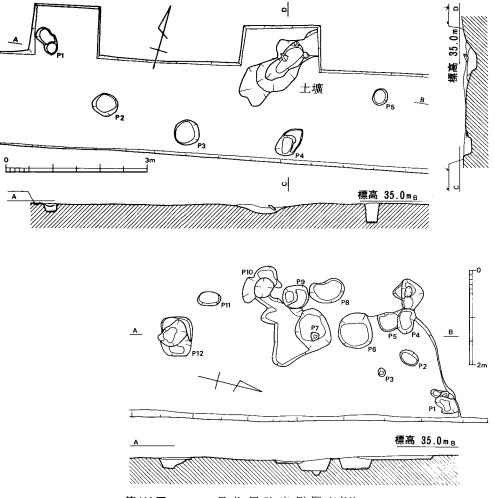
鉄 器(図版88, 第148 図1・2) 1・2 共に用途不明の小鉄片である。1はP8から出土した長さ2.6cm,幅0.9cm,厚さ0.2cm弱の大きさで,刀子の破片とも考えられるが,刃が鈍い。2は現存長2.2cm,幅0.8cm,厚さ0.4cmの断面台形状のものである。 (柳田)

2号住居跡 (図版66, 第118 図)

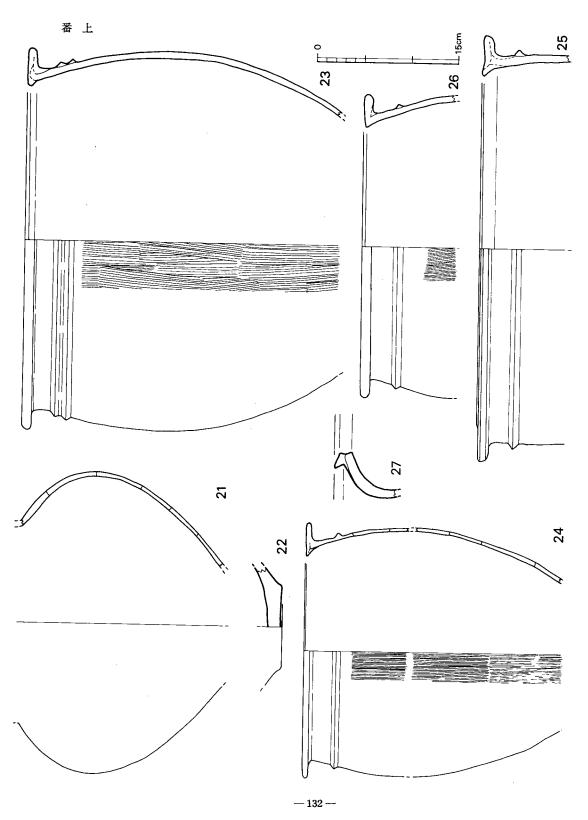
調査区南西部のトレンチで柱穴が弧状に並ぶことと土壙を有すことから円形住居跡と確認で

きたが、削平が激しく、かつ北半部を未掘のために全体の形状は不明である。周壁は FG-4 区においても検出されなかったことから右 8 m程度の円形ないしは長円形プランの住居跡であろう。柱穴を結んだ中央東寄りに長軸 2 m, 短軸 0.7m 程度、深さ25cmの土壙があり、土器片の集積がみられた。

土 器 (図版74,第119図) 21・22は壷形土器の破片であるが,口縁部は残存せず,底面はやや上げ底になる。23は口縁下に2条の凸帯を有す甕,24~26は口縁下に1条の凸帯を有す甕で,26の口縁はL字に近い。胴部外面にハケを施す以外はヨコナデ調整され,外面に煤の付着がみられる。27は胎土に砂粒を多く含み,外反する口縁部上に折り返す口唇部が付される前期の壷形土器破片であるが,小破片であり混入した資料であろう。27を除いた土器の形状からは



第118図 2 · 3 号住居跡実測図(1/80)



第118四 2号住居跡出土土器実測図(1/4)

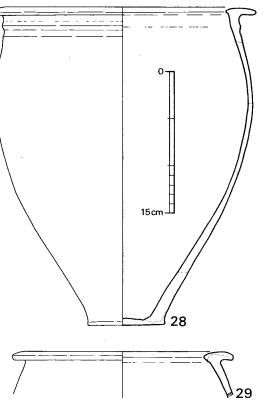
中期後半の時期が考えられる。

3号住居跡 (第118図)

A-4・5区に検出され、東部が調査区域外に及ぶ不整円形プランの住居跡で、南部は削平のため全体の形状、規模は不明。北部での周壁は7cmを測る。床面はやや堅緻であるが主柱穴及び炉跡等の施設は不明。

土 器(図版74,第120図) 28・29は口唇上面がふくれるT字形口縁を有す甕で,28の口縁下には1条の低い突帯がめぐり,底部は平底。両者共に外面はヘラによる研磨に近いナデ,内面ヨコナデ調整され丹塗りの痕跡を留める。時期は中期中葉であろう。

石 器 磨石1点が出土している。



第120図 3号住居跡出土土器実測図(1/4)

4号住居跡 (図版67, 第121図)

調査区の西部 $G-4 \cdot 5$,H-5 区に位置し, $5 \cdot 10$ 号住居跡と重複する。北東側は重複のため輪郭を明確にし得なかったが,残された南西側は, $4.2m \times 4m + \alpha$ の規模の方形プランを呈し,壁高27cmを測る。周溝を有さず堅緻な床面を切り込んだ 2 つの柱穴と浅い土壙を有している。中間に焼土のみられる柱穴間の距離は 2.3m で,対応する柱穴を想定すればそれぞれ 2.6m の距離を有す P $5 \cdot 10$ が考えられるものの P $23 \cdot 24$ 間よりも広がる。この想定では長辺が 6 m 前後となる。

土 器 (図版74, 第122図30・31) 30は胴上位が球形にふくらみ, 頸部に三角凸帯を貼りつけた甕形土器で底部は平底に近い丸底を呈す。31は, 外面上半に叩き痕を残し, 下半を磨きに近いへう削り調整する鉢で直立する口縁端部が平坦に脹らむ。両者の土器は口唇部にやや時期の溯る要素を有すが, 後期後半頃とみるのが妥当であろう。 (小池)

鉄器(図版88,第148図3・4) 3 は長さ3.2cm,幅1.6cm,厚さ0.1cmの扁平な鏃状鉄器。 鉄鏃とするには,先端が鈍く,両側に刃がない。4 は現存長4.8cm,最大幅4.4cm,刃部幅4 cm,最大厚さ1.1cmの大きさの鉄斧。横断面形は梯形をし、袋部の一部が残っている。残っている袋部、形態、錆と亀列の具合から見て鋳造品と考えられる。4 号住居跡は後期後半である が、鉄斧の出土位置は後期前半の5号住居跡の可能性もある。

(柳田)

5号住居跡 (図版67, 第121図)

住居跡相互の重複が顕著な部分に位置し、北部の輪郭が明瞭であるものの、その他の部分では、4・6・10~13号住居跡と重複するため輪郭の不明瞭な住居跡である。重複する住居跡のうち殊に11・13号住居跡は残存部分が少なく、また下位に10・12号の中期住居跡があるために切り込み面の確認を充分に検討できたとは言い難いし、また10・12号より掘り下げ作業を先行させたため混乱を迎く結果となったが後期住居跡の全てから切られた状況が窺われる。この住居跡の規模はおおむね長軸6.2m・短軸4.8m以上であろう。壁高は10cm程度を残し、4号住居跡と接する部分では周溝が検出されたが、全周しない。主柱穴としてP6とP20あるいはP21が考え易いが確証はない。中央部・中央部南寄り・北壁付近に焼土がみられるが中央部の焼土をこの住居跡の炉跡と考えたい。

この住居跡では時期の重複する土器片が混雑しており、あるいは 4 ・11・13号住居跡の時期 の資料とすることも可能であるが一括して図示した。また、石鏃・石斧等の石器が出土してい る。

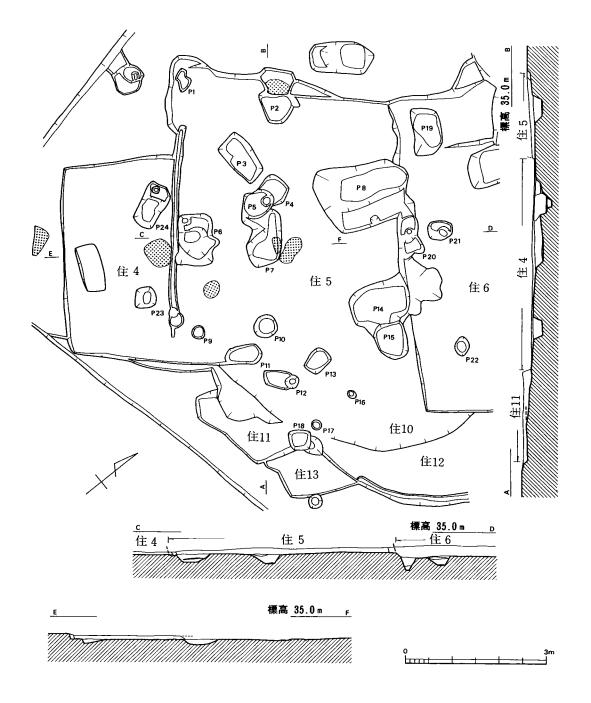
土 器(図版76,第122・123図) 32は床面直上で検出された小破片であるが、くの字状に外方へ屈曲する甕形土器の口縁部破片で口唇端部は肥厚しわずかに上方に延び、外面にはヘラ先による2条の浅い沈線を有す。器面はヨコナデ調整されるが、頸部以下をヘラ削りし明瞭な稜をなす。また胎土は他の土器と異なり砂粒を多く含み、膚色っぽい淡褐色の色調を呈す。この土器にみられる特徴は瀬戸内地方の上東式にみられる。

33は、住居跡内P7より出土した甕形土器口縁部破片で、くの字形に外反するものの端部に向ってゆるやかに内湾し、頸部内面は突出する。34はP2出土の甕形土器口縁部破片で外反する口縁端部が丸く肥厚し、頸部外面はヘラ先による押えがめぐる。35は床面に接して出土した甕形土器口縁部破片で34に似るが肩は張らない。36は端部がほとんど肥厚せず平坦面となる。

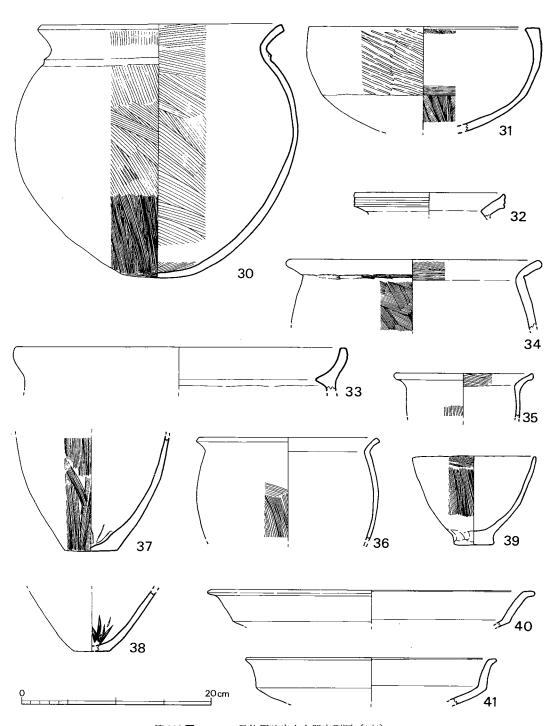
37は、P6出土の甕底部破片である。外面に細密なハケ目がみられ、わずかに丸味を帯びる 底面にもハケ目が及ぶ。38も甕底部破片で外面は丁寧なナデ調整が施される。39は厚い底面を 有す鉢形土器で外面をハケ調整される。40・41は高杯杯部破片で、口縁は短く立ち上り端部で 外方に折れまがる。40が床面直上・41がやや上位で出土した。5号住居跡出土土器の中でもこ れらの土器は古い様相を呈すグループで33~35は後期初頭頃・36~41を後期中葉頃であろう。

一方やや新しい様相を呈す土器では42の直口口縁を有す壷形土器があり、肩部に叩き痕が明瞭である。43~45は直口口縁の小形帯。

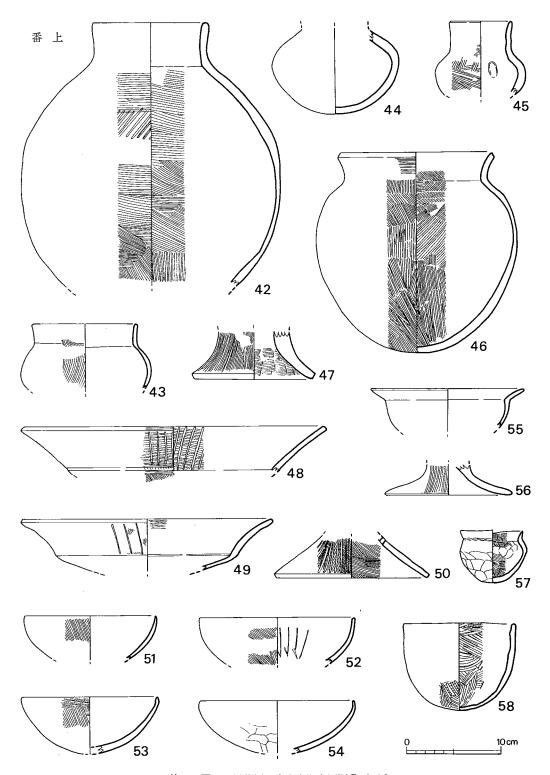
46はP8に含まれていた土器で肩の張る甕形土器。口唇端部は外方に平坦面を向け、底部はやや平坦な丸底となる。47は台付甕形土器の脚部であろう。48の高杯は上層で出土したが口縁



第121図 4・5・11・13号住居跡実測図(1/80)



第122 図 4 · 5 号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第123 図 5号住居跡出土土器実測図② (1/4)

部が大きく直線的に広がる器形で内面共にハケ調整のあとへう先による研磨を加えている。49 は床面よりやや上位に出土した高杯で口縁部は外湾する。杯部内外面共にへう磨き が 施 さ れ る。50は上層出土の高杯脚部破片で外面にハケ調整後のへう磨きがみられる。51~54は器高に 比して口径の広い椀形土器でいずれも上層出土。口唇端部の形状として平坦面をなす例と別に 丸味をもってやや内湾する例があり,54では下半をへう削りする。55は P 15出土の台付鉢形土器の口縁部破片で外面の調整は不明だが内面はへう磨きされる。56は台付鉢形土器の脚部破片であるが外面をハケ調整内面ナデで仕上げており上層出土。57・58は床面のやや上位で出土した手捏ね風の土器で,58の椀形土器に叩き痕が明瞭に残る。これらの土器はおおむね後期末葉に属するとみられるが,46甕の口縁部の形状,49の杯部の形状,55の体部内面の形状は後期後半頃に含まれる要素を有している。

6号住居跡 (図版68, 第124図)

E・F-5~7区にわたって検出できた比較的残存状態の良好な住居跡で重複する住居跡の中でも、やや時期に問題のある8号住居跡を別にして、最も新しいと考えられる住居跡である。長辺8.0m・短辺5.2mを測る。長軸方向の両側に床面より約10cm高く幅約1mを測るベット状遺構を伴う。周壁とベット状遺構床面との比高は約10cmを有し、周溝は存在しない。床面は堅緻で、北端隅と中央部に焼土がみられるが中央部の側では12号住居跡に伴う可能性もある。柱穴はP1・3・6・7が考え易いがP6は内に入る。また北西側のベット状遺構に接して長方形プランの土壙がある。なお北側隅の焼土塊を除去すると下に柱穴が検出できていることからこの柱穴が6号住居跡に伴うものかも知れない。但しこの場合、焼土は6号住居跡に後出する遺構に伴うことになるが該当する遺構は検出しえなかった。

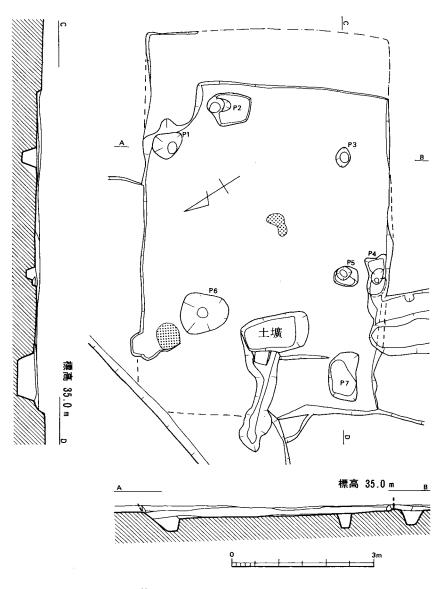
6号住居跡からは弥生後期土器と石器類・鉄器類・玉類等が出土しており、住居跡内に赤色 顔料の点在がみられた。

土 器(図版76~79,第125~129図) 59~60は直口口縁になる壷形土器で,59の外面胴下半はハケ調整のあと磨きに近いへう削りでハケを消しており内面胴上部はナデ調整。また口唇端部は平坦に仕上げられる。61・62・64は球形の胴部を有し、内外面共にハケ調整されるが外面胴下半はへうによってナデ消される。63は口縁部が外反し胴部最大径を上まわる。底部の形状としては62・65にみられるようにやや平坦な丸底で底面はナデ調整される。61~65は壺形土器と同様な胴部を有すものの口縁部の形状から甕形土器の類に含められる。体部外面に煤の付着するものが多い。

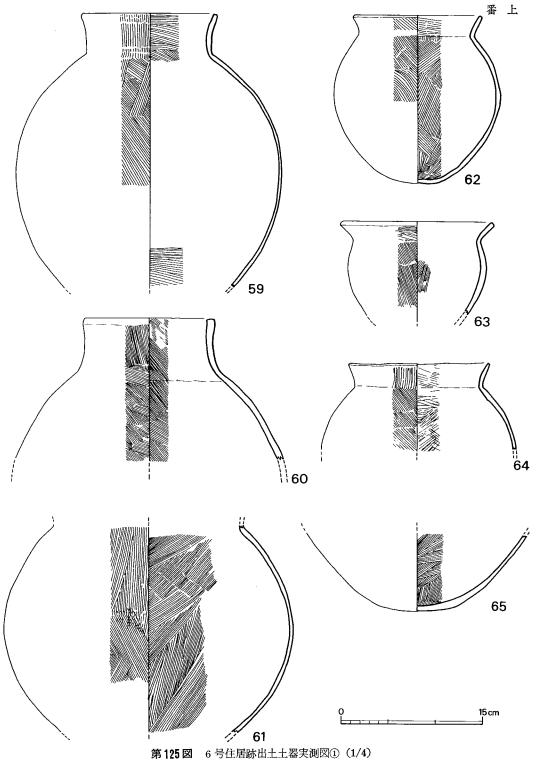
66~69は長胴の甕形土器で、66・69の外面は叩きのあとハケ調整した状況が観察され、また 胴下部を更にヘラ削り及びナデで消した状況もみられる。なお内面はいずれもハケ調整である。 70・72・73は大形の甕形土器で、70の口唇端部は下にやや張り出して平坦となり粗い間隔の

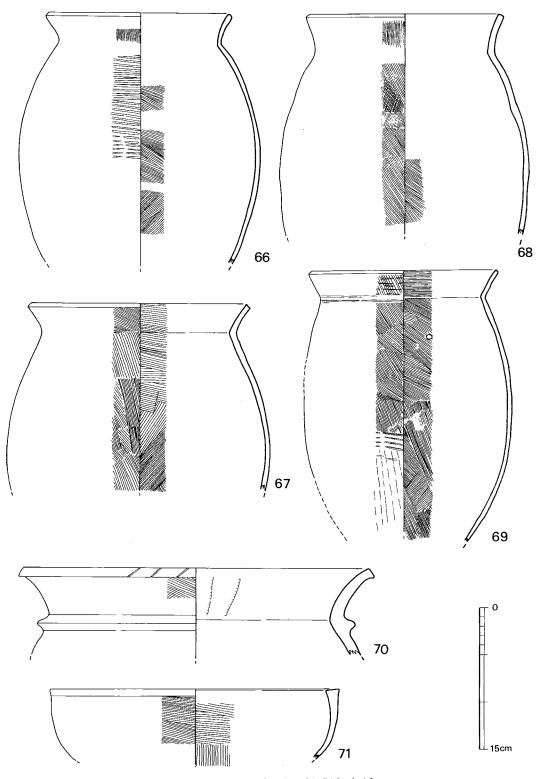
番 上

斜線を刻む。頸部に三角突帯を貼り付けている。72の口唇端部は上方につまみ出したように広がり、平坦面に斜行する刻み目を施している。また頸部と胴下部にコの字形突帯を貼りめぐらせ刻み目を施す。底部は平底に近い丸底をなす。外面は叩きのあとハケ調整,更に胴下半をナデ消すが、口唇から頸部にかけてナデ調整がみられる。内面はハケ調整で頸部以上は粗いハケ

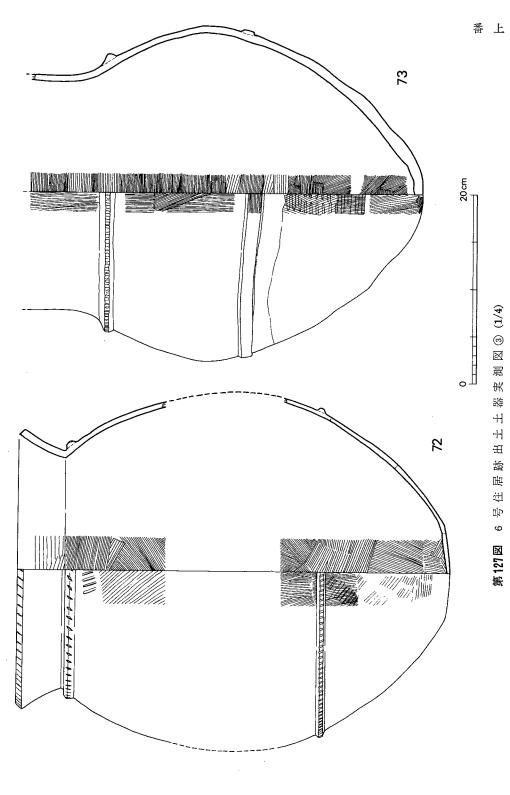


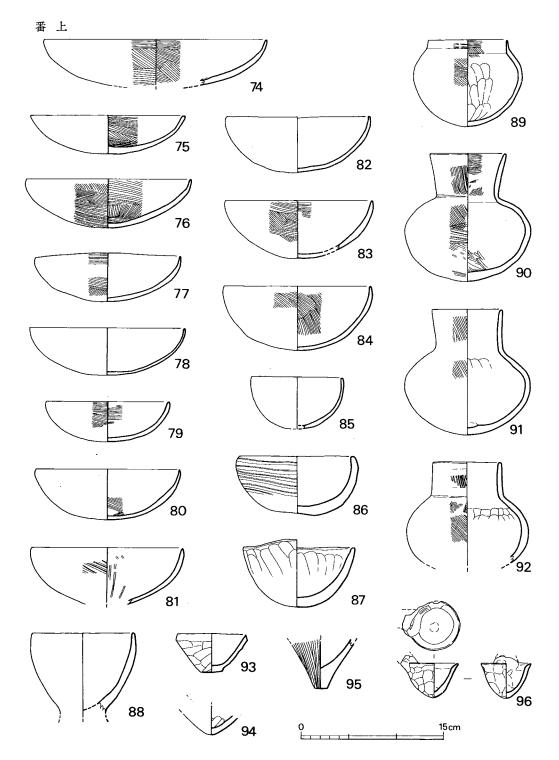
第124図 6号住居跡実測図(1/80)



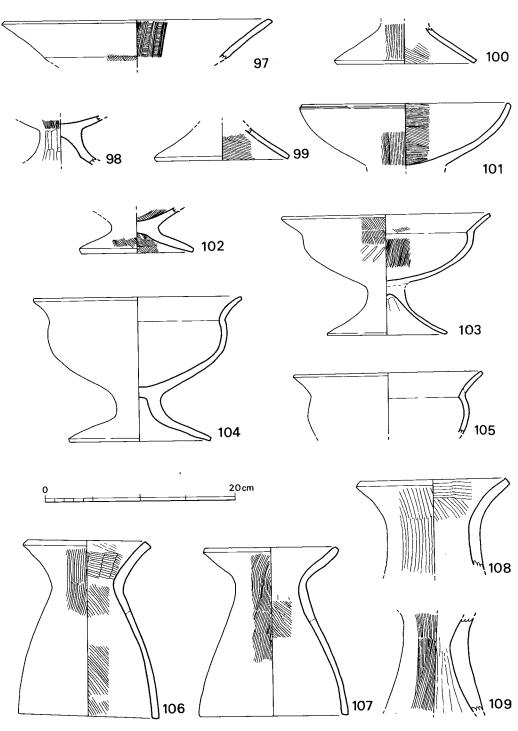


第126図 6号住居跡出土土器実測図②(1/4)





第128 図 6 号住居跡出土土器実測図④ (1/4)



第129図 6号住居跡出土土器実測図⑤ (1/4)

番 上

目がみられる。73は直口する口縁を有し、頸部に三角突帯・胴下半に幅広なコ字形突帯を貼り めぐらせるが外面をハケ調整したあとに貼りつけ突帯上にそれぞれ刻み目・横位のハケを施 す。底部は丸底となり胴下半のナデ消し手法は認められない。

71は口縁部が直に立ち上り端部を平坦に肥厚させた鉢形土器でハケ目が施されるが外面の体部下半はナデられる。

74~84は器高に比して口径の広い椀形土器で殊に 74~79 は比が 1:3 以上となる。ハケ目調整を施す例が多いものの80・84の体部下半にはヘラ削りがみられ,82の外面はヘラ削りのあとナデられる。また81の外面には叩きのあとナデられた状態となっている。口唇端部はやや内湾気味に立ち上り、端部が平坦になる例より丸味をもつ例が多い。

85~87は器高の約2倍の口径を有す椀形土器で,86・87は手捏の厚い器壁を有す。86の外面は叩きのあとナデ調整される。88は体部に深みを有す台付椀形土器の破片である。

89~92は小形壷で、いずれも底部は丸味をもつ。89は短頸直口口縁になり内面に指ナデ痕が残る。90はやや外反する長めの直口口縁、91・92は長めの直口口縁を有し外面に叩きのあとハケ調整を施す。

93は手捏の小形鉢。96は手捏の杓子状土製品で把手部を欠失する。内面はヨコナデで調整される。

97~100 は高杯の破片資料で,97 は口縁部がゆるやかに広がり体部との境に明瞭な段を有さない杯部破片でハケ調整される。98では短い柱状部の外面にヘラ削りがみられる。99・100 は脚部破片でいずれも小破片のため穿孔は不明。

101 は脚台部を欠失する台付椀形土器で口唇端部に浅い凹線をつくる。

102~105は台付鉢形土器で、脚部の高い例と低い例がある。外面 103 では外面に叩きの痕跡が残るものの胴部以下ではナデ消し、内面はハケ調整される。

106~109は器台で、外面はハケ調整され、内面にもハケを施すが、内径の小さくなる 109 では絞り痕とナデ調整痕を認めるのみである。

これらの土器は、弥生時代後期末に甕・椀等の外面下部にヘラ削りのみられる例 が 多 い こと、高杯の形状等からみて弥生時代でも終末期的な土器といえよう。 (小池)

鉄 器 (図版88, 第148図 $5 \sim 9$) 5 は有茎式鉄鏃で、茎の一部を欠損している。現存全長 4.6cm,身幅1.5cm,身厚2.5mm,茎幅3.5mmの大きさで、先端付近のみ刃をつけている。身と箆 代の区別がつきにくく,関といえるものがない。6 は長さ3.4cm,幅0.5cm,厚さ0.3cmの大きさの用途不明鉄器。両端は丸みがある。

7 は素環頭刀子で、刀身を欠損している。現存全長 5.6cm、柄幅 1.1cm、柄厚さ0.2cm、環外径 $3cm \times 2.2cm$ 、環身径 $0.4cm \sim 0.5cm$ の大きさ。環は柄の上端から延ばし、下端に密着させるが、その接着部は環端が細くなり柄に接するだけである。

8は鉄鉇の小破片。 現存長1.9cm,幅1.2 cmの大きさで,錆の ため細部は不明。

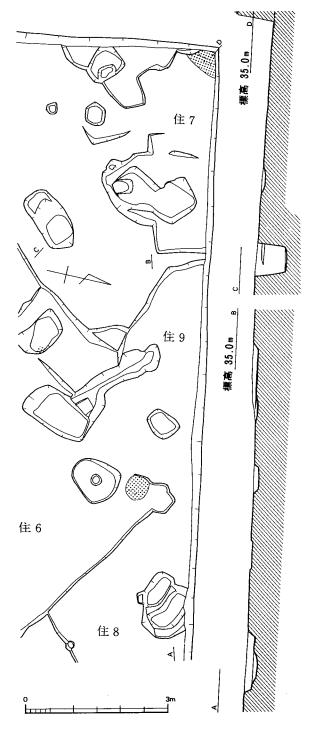
9 は長さ3 cm,幅 1.9cm,厚さ0.5cmの 鉄片で,用途不明。 4 辺の端部には丸み がある。

以上,有茎鏃・素 環頭刀子はその特徴 から,弥生終末から 古墳初頭のものであ る。 (柳田)

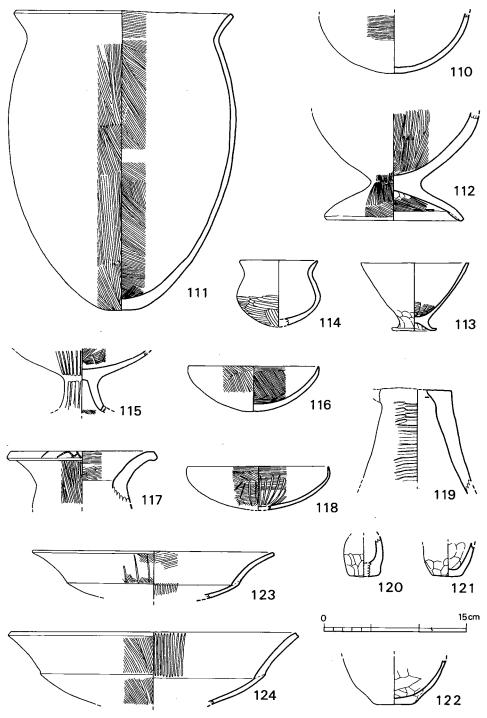
7号住居跡(第130図)

この範囲からは弥 生時代後期の土器・ 石器・鉄器等が出土 している。

土 器(図版79,



第130図 7·9号住居跡実測図 (1/80)



第131図 7・8・9号住居跡出土土器実測図 (1/4)

第131図) 110は壷形土器と思われる底部破片で球形になる。下半部はナデ調整される。111は 完形になる長胴の甕形土器で、底部はやや平らな丸底。口縁部外面がヨコナデ調整される他は ハケ調整で仕上げられている。 112 は台付になる脚台部破片であるが、脚部内面にはハケ調整 後の貼り付けで肥厚させており、踏ん張る形状となる。体部の大きさに耐える為の補強ともみえる。体部下半の外面はハケ調整のあとナデ消される。 113 は低い脚台を有す鉢形土器で底部 から口縁にほぼ直線的に広がり端部を平坦にさせている。

114は小形壺で胴下半部をヘラ削りするが、最大径を測る部分ではヘラ磨きに近い。115は高杯柱状部の破片で外面に縦位のヘラ削りを施して暗文の効果をあげ、内面にはハケ目を入れる。116は器高に比して口径の広い椀形土器で下半部はナデ調整される。117は口唇端部を下方に拡張させ、板の木口を押圧させた刻み目が施される器台である。

これらの土器はおおむね弥生時代終末期に属す資料であろう。

(小池)

鉄 器 (図版88,第148図10~14) $10 \cdot 12$ は鉄鏃で、10には箆代があるが、12は鏃であるということぐらいである。10は現存長7.3cm、身最大幅2cm、厚さ0.6cm、箆代幅 $4 \sim 6$ mmの大きさで、その形態から銅鏃を思わせ、鋳造の可能性がある。身には両面とも2本の稜らしきものがあり厚みがあるのが特徴である。12も身にわずかに鎬があるところから有茎式であろう。幅1.65cm、厚さ3mmである。

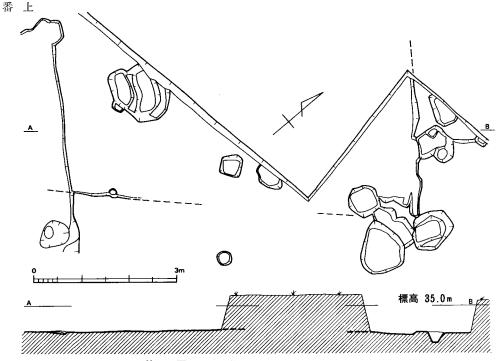
11は鈍で、現存長5.3cm、身幅1.2cmで、刃先端と身の半分程を欠損する。著しく錆が全面を 覆っていたが、うまく錆落しに成功し刃部と身の両側細部が観察できる。刃部はV字形の端部 が両方にわたって水平に研がれ、鋭利な刃を残しており、身の両端も丸みがなく両角がシャー プである。

 $13 \cdot 14$ は刀子片である。 $12 \sim 14$ は同一地点で出土したので,同一個体の剣かと思われたが,12は剣の切先にしては小さすぎ,13が片刃の身と茎で,14は13の茎と幅が違うことで 3 点は別個体とした。13は身幅1.15cm,身厚 0.25cm,茎幅 0.9cmで,刀子であることに間違いない。14は現存長6.8cm,幅 1.1cm,厚さ 0.2cmの茎と思われるが,刀子の茎にしては均一幅で長すぎる感があり,剣の茎の可能性もある。

10の鉄鏃の形態としては、住居跡が弥生終末期である点において問題になるが、土器にも新しいものが混入していないところから、このあたりに位置づけられるものである。 (柳田)

8号住居跡 (第132図)

調査区北部で6・9・16号住居跡と重複する住居跡で,9号住居跡との前後関係は把握し得ず,6号住居跡との関係はE6区東寄りの地山の残存する部分で6号住居跡より先行すると判断したが,6号住居跡北隅の焼土下の柱穴の存在からあるいは後出する可能性をも否定し難い。また東隅部のやや上位に古式土師器片が1点みられたことも時期を下げられる要素といえ



第132図 8 号住居跡実測図(1/80)

よう。いずれにしても東北部の周壁から6号住居跡周壁まで7m以上を有しており、規模としては大きな住居跡である。床面に土器片少量と石器数点が発見された。

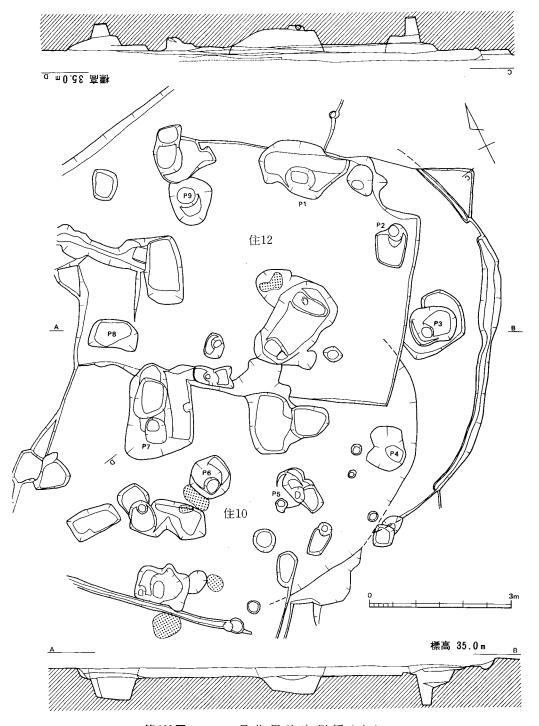
土 器 (第131図) 118は器高の約3倍の口径を有す椀で外面を叩き,ハケ調整とヘラ先による無秩序な条痕を施す。内面はハケのあと暗文を入れる。119は支脚破片で外面には叩き整形の痕跡が明瞭に残る。120・121は手捏の小容器であろう。これらの土器では時期を決し難く後期後葉~古墳時代前期の幅を考えざるを得ない。 (小池)

鉄器(図版88,第148図15) 15は形態的に石庖丁形をした鉄器である。現存長6.1cm,最大幅4cm,背厚さ0.25cmの大きさの扁平な半月形をしている。背は一部屈曲するが外は直線的で、刃部は湾曲する文字どおり石庖丁形である。石庖丁と同じ用途ではないにしろ、庖丁的刃物であることに間違いなかろう。弥生終末期の土器が伴出している。 (柳田)

9号住居跡 (第130図)

F~G7区に周壁が検出され、6号住居跡に切られる住居跡で7号住居跡の東に接す。壁高は約10cmを残し、床面は堅緻。柱穴及び炉跡については明確ではない。住居跡内の浅いピットから土器底部破片と鉄鏃が出土し、床面に接して高杯破片が出土している。

土 器(第131図122~124) 122は手捏に近い整形の鉢形土器底部破片で、内面の下部はへ ラ削りされる。底面は一部ヘラ削りされるが、丸味をもった平底となる。



第133図 10·12号住居跡実測図(1/80)

123 は高杯杯部破片で、口縁部は杯体部からわずかに折れて緩やかに外反する。外面にハケ調整後のナデがみられ更に暗文が施される。内面はハケ調整。124は123と同様な器形であるが口縁部は肥厚気味で口唇端部は平坦面をなす。外面はハケ調整、内面はヘラ先による暗文が施される。

これらの土器では122に疑問を残すものの,他は後期後半頃の高杯であろう。 (小池) 鉄 器(図版89,第148図16~19) 16・17は鉄鏃で,16は身に丸みがあり有茎式であろう。 16は現存長4cm,最大幅2.3cm,厚さ0.3cmの大きさで,周辺に刃をもつが鎬はない。

17は,浅いピットで第131図122の底部と共伴した無茎の有孔鉄鏃で,うまく錆落しに成功し,孔と刃の細部が観察できる。鏃の形態は,時期は別にして扁平磨製石鏃形といえるもので,古墳時代の石製鏃はこの形態をモデルにしたものであろう。身の中央にある円孔は,石器であれば両側穿孔といえるもので,鉄鏃においても同一穿孔法であろうか。大きさは全長2㎜である。

19は鈍で、現存長 4.8cm、最大幅 1cm の大きさ。刃部は錆のため V字形になっているのがわかるだけ。

18は刀子の身部破片で,現存長5.7cm,幅1.45cm,厚さ0.4cmの大きさ。茎部は不明。

16の扁平で大きな鏃は、出土位置が終末期の8号住居跡の可能性があるが、他は確実に9号住居跡のもので、6号や8号の終末の時期より少し古い時期のものである。 (柳田)

10号住居跡 (図版67-1, 第133図)

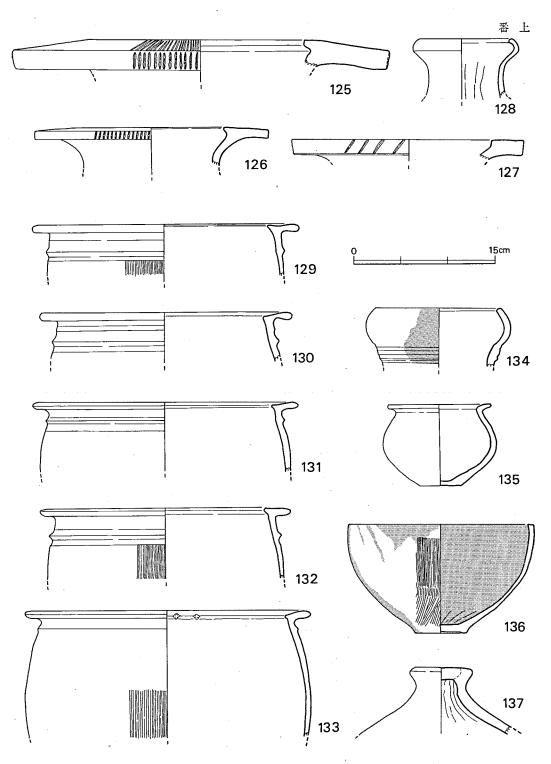
 $4 \sim 7 \cdot 11 \sim 13$ 号住居跡と重複し、12号住居跡より後出するが他の全ての住居跡から切られる住居跡で、南端部周壁と柱穴及び土壙を残すのみである。ほとんど高低差のない周壁から円形プランを想定できるが、柱穴として中期の遺物を含む $P10 \sim 16$ が考えられ、六角形 7 本柱になる可能性を有す。また土壙が中央部東寄りにある。

これらの柱穴内等から少量ではあるが土器片・石器類が出土した。

土 器(第134図) 125・126はいわゆる鋤先状口縁と称される壷形土器口縁部破片で、外面には刻み目が施される。また125の上面には暗文も施される。127は鋤先に類する口縁ではあるが、張り出しが少なく幅も狭い。外面に斜行する刻み目が粗めに入れられる。 128 は袋状口縁の壷形土器口縁部破片であるが、ヨコナデ調整が施されるのみである。これらの土器は 127 に若干の疑問を残すものの中期後半頃と考えたい。

11号住居跡 (第121図)

4 • 5 • 13号住居跡より後出する住居跡であるが輪郭を確認できず,わずかに南隅の一部が 地山に切り込まれていたことから住居跡とした。遺物は後期に属すとみられる小破片がみられ たのみで図示しうる資料はない。



第 134 図 10·12号住居跡出土土器実測図 (1/4)

12号住居跡 (図版70-1第133図)

 $5 \cdot 6$ 号住居跡及び $10 \cdot 13$ 号住居跡等から切られ,14 号住居跡を切って南東部のみ残存した住居跡で周溝がめぐる。周溝は約5 cmの深さを有し,周壁の高さは約20 cmを測る。床面は堅緻でこれを掘り込んだP3 がある。また6 号住居跡床面下に $P1 \cdot 1$ 生壙1 が確認でき,これらの配置と中期の土器片を含む柱穴を求めると $P1 \sim 9$ が主柱穴と想定できる。但しこの円のP5 が伴わなくても想定が可能である。柱穴と土壙の配置からみて直径約10 9 mの円形住居跡と考えられる。

この住居跡床面・周溝内及び柱穴・土壙内から土器・石器が出土した。

土 器 (第134図) 129~133は甕形土器口縁部破片で逆L字形状口縁となるが,口縁下につまみ出した低平な笑帯がめぐる。 134 は外面に丹塗り研磨のみられる袋状口縁の壷で頸部に低い 2 条の笑帯がめぐる。内面はヨコナデで調整のままである。 135 は口縁部が短く外反する短頸壷で風化のため調整方法は不明。 136 は内面に丹が付着する鉢形土器で外面にも伝った状況がみられる。内面ナデ調整外面ハケ調整され底部はやや凹み気味の平底となる。顔料を入れた容器で外面にこばれた状況を示す資料であろう。 137 は甕に使用される傘形の蓋で,上端部はつまみ状に肥厚し,外面はナデ調整される。これらの土器は中期中葉頃に属す資料であろう。

(小池)

鉄 器 (図版89,第149図20・21) 20・21は用途不明鉄片である。20は現存長3.6cm,幅1.9 cm,厚さ0.2cmの大きさで,両側に丸みのある扁平なものであるが,破損している一方は破損時のものが曲っている。21は扁平な鏃のようであるが,両側に角があり厚みもある。鏃にたとえれば一方の逆刺は欠損している。現存全長3.3cm,幅1.9cm,厚さ0.3cmの大きさ。出土した12号住居跡は中期後半であるが,鉄器の出土した位置は6号・13号住居跡の可能性もある。

(柳田)

13号住居跡 (第121図)

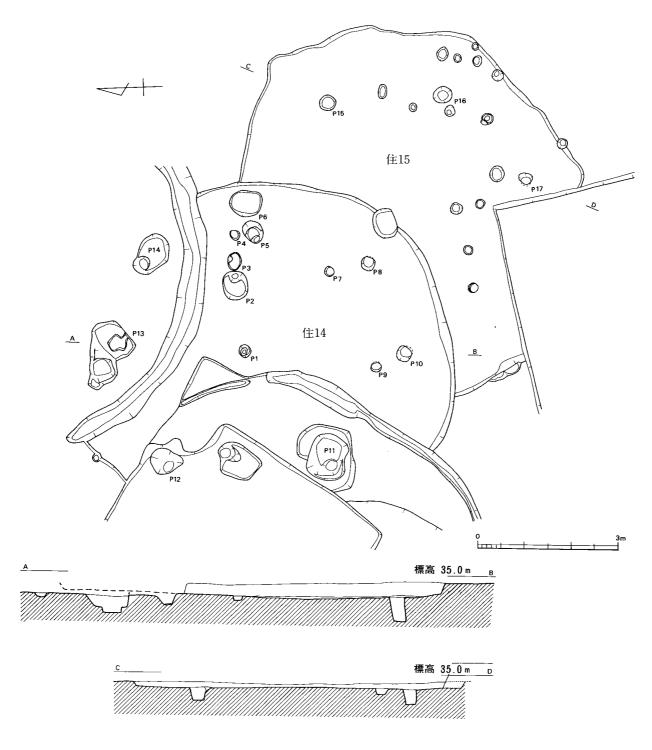
11号住居跡と重複するが、南端部のみ地山を切り込んでおり、若干の後期土器片が出土したが図示しうる資料はない。住居跡の規模等は重複が激しいために確認しえなかった。(小池)

鉄 器(図版89,第149図22・23) 22は鉄斧で,長さ6.5cm, 刃幅約3.5cm, 袋幅3.3cm,袋厚さ約1.8cmの大きさある。袋部は欠損しているところがあるが,簡単な折り曲げである。

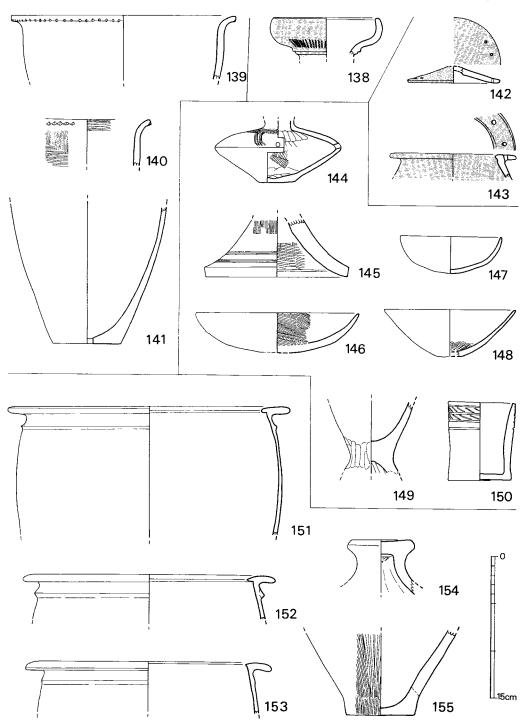
23は鉇で、両端を欠損して長さ4.3cm、幅1.1cmになっている。刃部を失っているが、両側の 角はシャープである。

13号住居跡は、時期が確定できないが、終末期のものであろう。 (柳田)

14号住居跡 (図版70-2, 第135図)



第135図 14・15号住居跡実測図(1/80)



第136図 14・15・16・18・19号住居跡出土土器実測図 (1/4)

番上

土 器 (第136図) 138は,袋状口縁の細頸壷口縁部破片で,外面のみ丹塗り研磨される。 口縁部はかなり開いた形状となり,頸部にかけて 2 条の段状凸帯がめぐらされ,へう先による 暗文が配される。内面はヨコナデのまま放置され丹が若干こぼれた状況を呈す。時期は中期後 半頃であろう。

15号住居跡 (図版71-1, 第135図)

14号住居跡に切り込まれ、1号住居跡との間に検出されたが、南西部を未掘。検出しえた部分の形状から、東西8m、南北7.2mを測る不整円形プランの住居跡で、周壁は約15cmを残す。 床面は砂っぱい土質でやや堅緻。柱穴様ピットが17穴あるが、中世の遺物を含む例及びこれに類する埋土のみられる例が多く、前期の土器が含まれていたP17とP15・16がこの住居跡に伴う柱穴と考える。14号住居跡内のP9をも含めて $6\sim7$ 本柱となるものと想定しうる。炉跡等の施設はみられない。

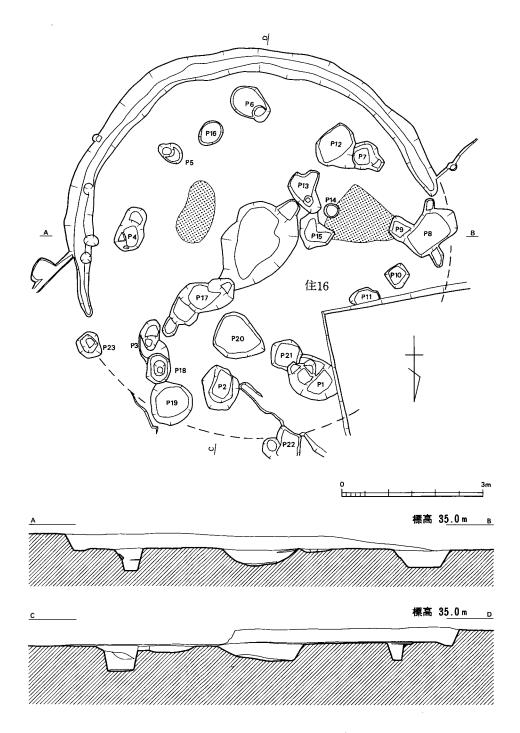
住居跡内から遺物をほとんど検出しなかったが、P15とP4等に出土した前期の土器片が図示しうる資料であり、上層から土製紡錘車が出土している。

土 器 (第136図) 139・140は、如意状口縁を有す甕形土器の口縁部破片で、139はナデ調整で仕上げられ口唇部下端に小さな刻み目が入る。140は外面及び口縁部内面にハケ調整が及び口唇部下端に大きめの刻み目が入る。141は甑の底部破片で、径1.2cmを測る焼成前の穿孔がある。体部内外面共にナデ仕上げされる。これらの土器は前期後半頃の特徴を有している。

16号住居跡(図版71-2,第137図)

C・D-6・7区に位置し、14号住居跡を切り、8号住居跡に切られる住居跡で、南側では 残存状況が良好で周壁及び周溝が残存する。周壁高43cm・溝の深さ10cmを測り、平面形は直径 約8mの円形プランとなる。床面は極めて堅緻で、中央部に土壙が施設され、土壌の東西両側 に焼土がみられる。主柱穴はP1~7で未掘部に1穴を仮定して8本柱が考えられる。住居跡 内から出土した遺物は少ないが、中期の土器片と石鏃・投弾等が出土してある。

土 器(第136図) 142は壷に使用される蓋形土器で、外面を丹塗り研磨され、2 穴単位の



第137図 16号住居跡実測図(1/80)

紐穴が穿たれる。 143 は平坦な逆L字状口縁を有す短頸壷で,外面を丹塗り研磨され2穴単位の紐穴を有すが、142の径より広い口径を有す。中期中葉頃の土器であろう。

17号住居跡 (図版72-1, 第115図)

1号住居跡の東部に重複し、北側周壁の一部が円弧を描いて残存する。主柱穴としてP21~26があり6本柱が推定でき、直径6.2m程度の円形プランとなる。P8とした土壙が中央部に位置する。P9の西側に焼土がみられるが、1号住居跡に伴う可能性も否定できない。中期土器片と石器が出土している。

土 器(第116図10・11) 10は,逆L字状口縁を有す甕形土器で頸部を強くナデて極めて低平な突帯が生じている。11は長い脚を有す高杯で外面はヘラ磨きされる。中期前半に属す。

18号住居跡(図版72-2,第138図)

調査区の北端部で検出できた住居跡で、19号住居跡を切り込んだ周溝から隅丸に近い方形住居跡とみられ、南西側の周壁を検出し得なかったが、長辺約6.5m、短辺約5mの規模を有しP5~8が主柱穴になる可能性がある。床面は堅緻であるが焼土等はみられない。後期土器と石器・鉄器類が出土した。

土 器 (図版81,第136図) 144は算盤玉形の胴部を有し、頸部以上を欠失するが細頸となる壷形土器で、底部はやや丸味をもつが平底。肩部には4本単位の重弧文が描かれ、小さな孔が穿たれる。内面胴下半には押し引きのハケ目が入る。145 は脚台の破片で裾部外面に浅い平行凹線・内面に1条の浅い凹線がみられる。146 は器高に比して口径の大きな椀形土器で外面を叩き整形のあとへラ削りしている。147・148は器高に比して口径が約2倍になる椀形土器でナデ調整されるが、148の内面はハケ調整される。149 は台付椀でやや深い体部となろう。150はコップ形の土器でヘラ磨きされる外面の上部に4条の平行沈線をめぐらせ、沈線間のうち上の2列を連続するヘラ描き沈線斜行文で充塡している。これらの土器の時期は後期後半頃であるう。

鉄 器 (図版89,第149図24・25) 24 は身と柄を残す刀子片である。現存長 5.4cm, 身幅 1cm, 身厚0.25cm, 柄幅0.95cm, 柄厚0.25cmの大きさで、身幅と柄幅はほとんど違わないが、関部分は身幅を狭めることによって段をつけている。背に湾曲があり、内反りであることから素環頭刀子であったろう。25は用途不明鉄器で、現存長5.5cm,最大幅1.35cm,厚さ0.45cmの大きさ。片面は平坦で他方は丸みがある。側面は片方に面があるが他方は刃をなすところがある。

(柳田)

19号住居跡 (図版72-3, 第138図)



第138図 18·19号住居跡実測図 (1/80)

調査区の北東部で18号住居跡に切られて検出された住居跡で、南側に残る周壁から直径9m程度の円形プランになるとみられる。最高30cmを測る周壁下には最深部で7cmを測る周溝が施設される。床面は堅緻で床面に掘り込まれた柱穴様ピットの内、P1~4が主柱穴と考えられ、中央部に土壙がある。土壙の東側に焼土が点在する。調査区北東隅には古墳時代前期の土器溜めが位置し、土器溜めをとり囲む遺構が存在した可能性もあるが、検出し得なかった。この住居跡からは中期土器片・石器・土製品等も出土している。

土 器 (第136図) 151~153 は逆L字状・T字状口縁を有す甕形土器で,153 は低平な突帯,他 2 点は三角突帯が口縁体に1条めぐる。154 は甕に使用される傘状の蓋形土器で,上端部はつまみ状に肥厚する。155 は甕形土器の底部破片で平底。これらの土器は中期後半頃に属す。

(2) Ⅱ-6土器溜

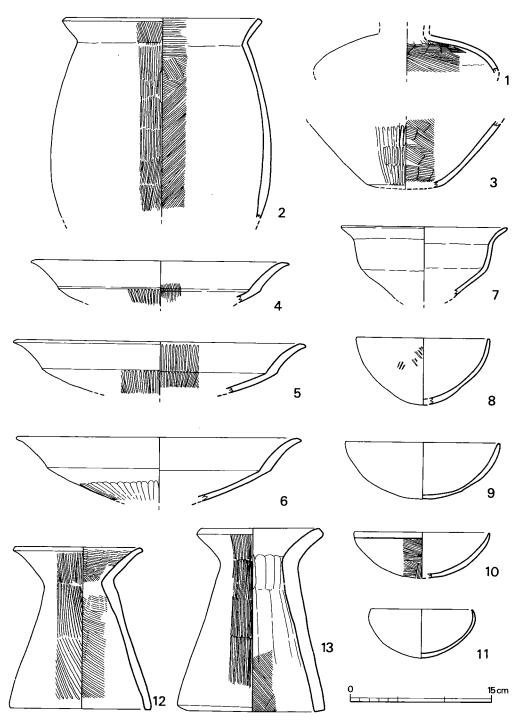
1号土器溜め (図版82)

D6区東寄りに弥生時代後期の土器がまとまって検出され、周辺を精査しても遺構範囲が確認できないことから、土器溜め状遺構としている。

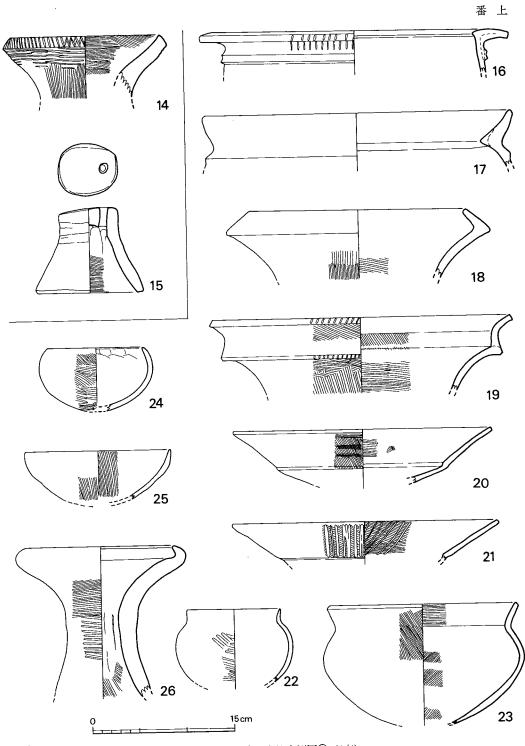
土器(図版82・83第139・140図) 図示しうる資料が15点ある。1は,算盤玉状の胴部を有し細頸になる壷形土器で,肩部のみ残存するが,外面をへう磨き,内面をハケ調整で仕上げている。2は長胴の甕形土器で胴下半を欠失するが,内外面共にハケ調整される。3は甕形土器あるいは壷形土器の区別はし難いが底部破片で,胴部を叩き整形したあとナデ調整し内面はハケ調整,底面もナデられ丸味をもった平底となる。4~6は高杯の杯部破片で,体部外面はへラ削りで暗文としている。また内面は,5に暗文がみられるが,他は調整方法不明で4の内面には体部から「く」字状に屈折して外反するが短めである。なお6の口唇部上面には部分的に赤色顔料が付着する。7は胴部と頸部が屈折する鉢形土器で口縁部は外反して開くが調整手法は不明。9・10は器高に比して広い口径を有す椀形土器で,10の口唇部やや下に細い沈線がめぐる。外面はハケ調整され内面はヨコナデ調整。8・11は器高と口径の比が1:2程度の椀形土器で8の外面には叩きの痕跡が残り内面はヘラによるナデ調整。11は外面にハケ調整がみられる。12~14は器台でいずれも外面は叩き整形とハケ目調整を施し,14では口唇部にヘラ状の原体で刻み込んだ斜線文がめぐらされる。内面はハケ調整される。

15は支脚で上面は隅丸梯形の平坦面をなし、一方に偏って小さな円孔が1孔穿たれる。外面はナデ調整で、中空になる内面はナデとハケ調整される。

これらの土器は中部九州にみられる後期免田式に似た器形(1)を伴うが、高杯の形状から後期 後半期に属すと考えられる。なお2の甕と7の鉢は土器の集中する部分からやや離れて出土し



第139図 1号土器溜出土土器実測図 (1/4)



第 140 図 包含層出土土器実測図① (1/4)

たことを付記しておきたい。

(3) Ⅱ 一 6 包含層

包含層の4層及び5層の一部から遺構に直接伴わない弥生土器・石器・石製品・土製品等が出土している。土器は主な例のみを示すが、石器等は住居跡内出土の遺物と共にまとめて記述する。

土 器 (第140図) 16はB 2 区第 4 層出土の逆L字状口縁を有す甕形土器で口縁部下にM字形突帯を 1 条貼りめぐらしている。外面と内面の上部は丹塗り研磨され,口唇部に刻目・頸部に暗文を施している。弥生時代中期後半。17はG 6 区第 4 層出土の口縁が内湾気味に上方に延びる甕形土器口縁部破片で頸部下に三角突帯を形成する。頸部内面は張り出して稜をなす。中期末~後期初頭頃。18はB 6 区第 4 層から出土したく字状にふくらむいわゆる複合口縁の壷形土器口縁部破片で,袋状口縁が退化して外面に稜を有す形状である。後期前半。19はA 7 区第 4 層から出土した複合口縁の壷形土器口縁部破片で,口縁部は大きく屈折して外方に広がる。口縁部上下端を平坦にして刻み目が施されている。内外面共にハケ目がみられる。後期終末頃の資料であろう。20・21は高杯の杯部破片で口縁部と体部の界はやや明瞭であり後期後半ないしは終末期の高杯であろう。前者はF 7 区第 4 層出土で体部の上方に口縁部が接し,外面はハケ調整のあとヨコナデしている。後者はG 5 区第 5 層上面出土の資料で,体部の外方に接す口縁部はハケ調整のあと暗文を施し,体部はヘラ磨きされる。

22は出土地点不詳の資料であるが、外面を叩き整形したあとヨコナデ調整する小形の直口気味な口縁を有す壷形土器。23はE・F-4区から出土した鉢形土器で外反する口縁を有し内外面共にナデ調整されるが胴下半は調整方法不明。13号住居跡に伴う可能性もある。24は出土地点不詳・25はC7区第4層出土の椀形土器で、前者は口縁部が大きく内湾して内面に指圧痕が残る。外面は叩き整形のあと上部をハケ調整・下部をナデ仕上げする。後者は器高の2倍以上になる口径になり、ハケ目がみられるものの外面下半部は削りに近い形状となっている。26はA3区第4層出土の器台で口縁端部は内湾する。胴部に叩き整形痕とハケ目を残し他の部分はナデ調整される。22~26の資料は、おおむね終末期に属すとみられるが古墳時代初頭との明確な区別はなし難い。

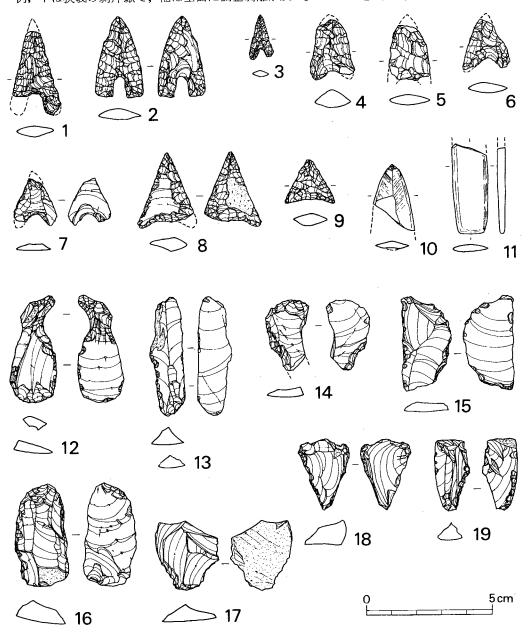
(4) **Ⅱ** - 6 石器・鉄器・玉類

石 器(図版84~87, 第141~147図)

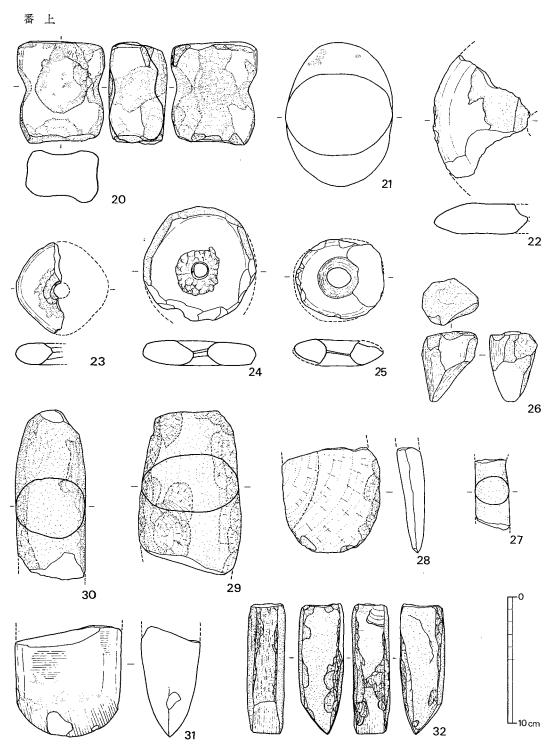
打製石鏃・磨製石鏃・削器・敲石・すり石・環状石斧・打製石斧・磨製石斧・石庖丁・石鎌・

砥石・石製紡錘車等の器種があり、68点を図示し、計測値を表にまとめた。との他図示しえない破片資料が58点ある。縄文時代に属すとみられる例もあるが区別し難く一括している。

打製石鏃($1\sim9$) $1\sim7$ は基部の逆刺が深いタイプで、このうち 2 は主要剝離面を残す例、7 は狭義の剝片鏃で、他は全面に調整剝離が及ぶ。 $8\cdot9$ は基部が平坦に近いタイプで、



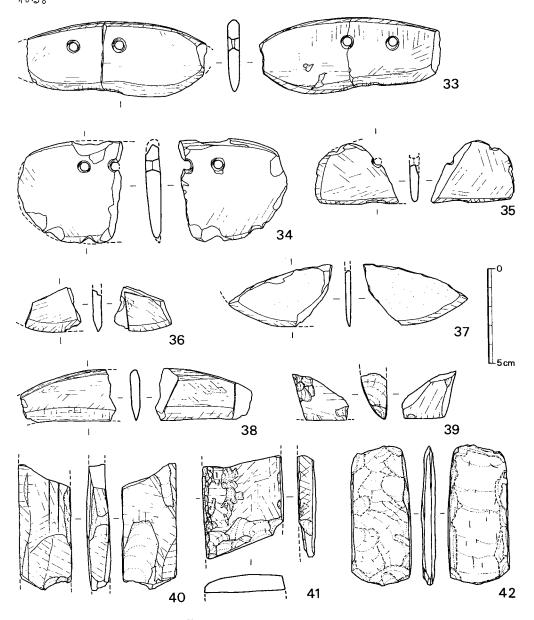
第141図 石器実測図① (2/3)



第142図 石器実測図② (1/3)

8は原面と主要剝離面を残す。1・2の如く長い二等辺三角形を呈す例と8・9の如く三角形状の例とは時期的に異なるものと考えうる。

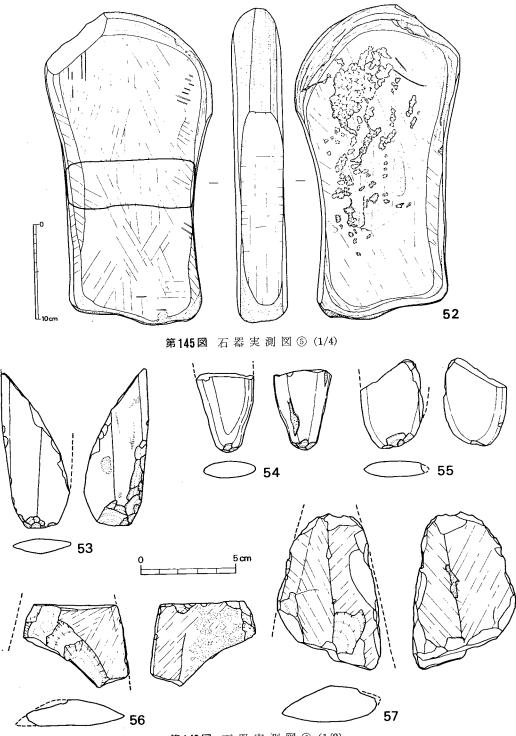
磨製石鏃(10・11) 10は両側縁がやや幅広に広がり、研磨によって明瞭な鎬が形成される 先端部破片で先端部のみ残存するため全体の形状は不明。11は研磨によって扁平に仕上げられる。



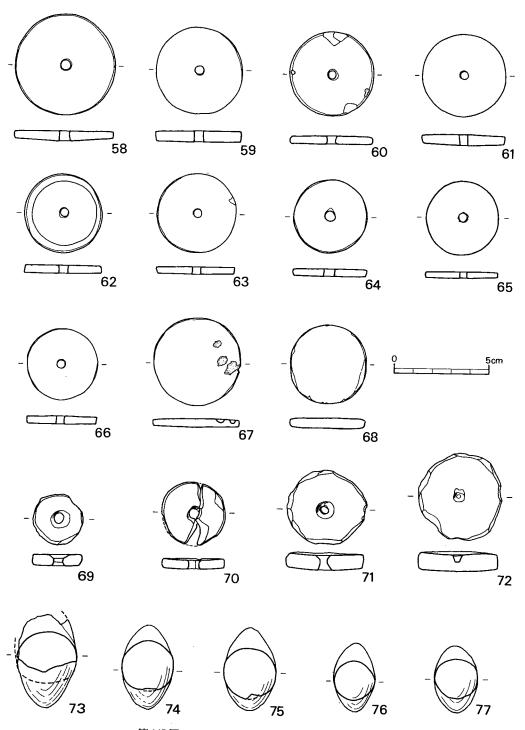
第143図 石器実測図③ (1/2)

— 164 —

第144図 石器実測図④ (1/3)



第146図 石器実測図⑥ (1/2)



第147図 石器·土製品実測図⑦ (1/2)

削器・搔器(12~19) 12はいわゆる石匙に似るが、縦長剝片の先端と側縁を刃部とし、基部が叉状となる。13~17はいずれも剝片の側縁部を刃部としているが先端あるいは打面部も刃部にしている例がある。削る機能と引っ掻く機能を兼ね備えているといえよう。

敲石・すり石(20・21) 20は掌の中に納まる形状をなし、平坦になる面の中央が敲打によって凹む。また敲打面以外は磨耗が顕著でする機能を兼ねているとみられる。このことは21のすり石に敲打痕が伴うことから、敲いてすりつぶす一連の作業に用いられた石器と言えよう。

環状石斧(22~25) いずれも角閃片岩・白雲母片岩の軟質な石材を利用し、打欠き及び研磨によって円盤形をなし、中央に敲打による貫通孔が施される。孔径は1~2 cmを有し、周縁は刃部を形成する例と鈍い例がある。23は円形というより隅丸方形に近い。

用途不明の石器(26・27) 26は一端が研磨によって尖り,一端は研磨で凹む面と研磨の及ばない面を共有する。砥石の一種あるいは他の器種の一部をなす破片の可能性もある。27は円柱状の外面が研磨され一端でやや凹み気味となる。

打製石斧(28・29・42) 28は横長剝片を素材とする扁平打製石斧で刃部には長軸方向の磨 耗痕がみられる。29は太形の石斧で胴下半部が磨耗する。前者は縄文時代後晩期に盛行する石 斧に似ており、後者は太形蛤刃石斧に近い。また42は小形の扁平打製石斧である。

磨製石斧(30~32・39~41) 30は敲打によって整形され円柱状の胴部を形成する。31は太 形蛤刃石斧・32は柱状片刃石斧。39・40は扁平片刃石斧。41は胴部破片で節理による剝落のた め柱状か扁平かの区別はし難いが敲打によって整形される点が32と共通する。

石庖丁(33~37) 33はかなり使い込まれて刃部が内湾気味となる例で,34の如く刃部が外湾して紐孔が高い位置にある例とは対象的である。

砥 石(43~52) 43は粗粒の凝灰岩質砂岩を素材とし掌中に納まり易い形状をなす。砥面は多面にわたってみられ稜をなす。45は湾曲する体部の内側面が砥面として使用され、両側面より内湾する面がよく使用される。46は平坦面の中央に敲打痕が顕著にみられ肉厚な端部に擦り切り状の痕が残る。6号住居跡内でも10号住居跡に伴う土壙部分から出土しており10号住居跡の時期の可能性がある。47は下端部が握り易い形状に肥厚する。52は一方の平坦面に敲打痕が残り、砥研の機能と共に作業台的な機能を兼ねて使用されたとみられる。その他の砥石は破片資料であるが粘板岩を素材とし、素材の性質上欠損し易いものの欠損後も更に掌に握って使用される例が多い。

石 剣(53~55) いずれも基部破片であるが,53は鎬がみられる。他は稜を有さない。磨製。 **石 戈**(56・57) 胴部破片のため全体の形状は不明。両者共に研磨によって鎬が形成される。

石製紡錘車(58~68) いずれも加工し易い石材を使用しており、扁平な円盤形となる。67 \cdot 68は未製品で穿孔されていないが、他は中央に $4\sim5.5$ m の小円孔が穿たれる。このうち58

表6 番上Ⅱ-6 石器・土製品類計測表

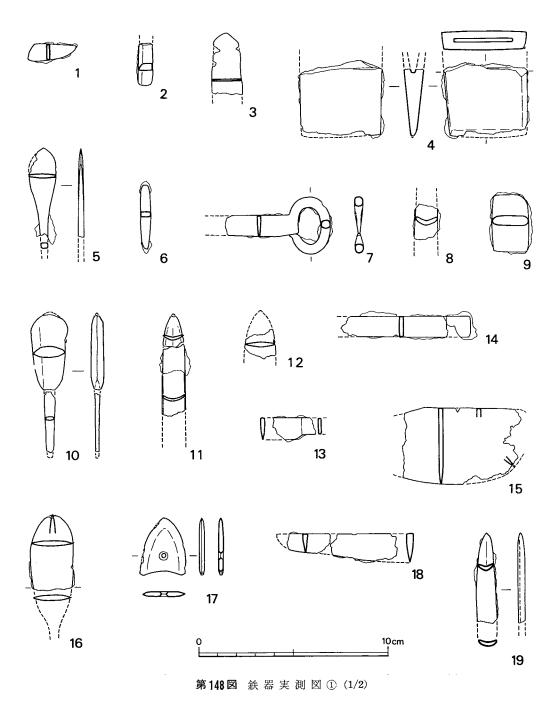
(単位はcm及び 9 ()を付したものは現存値を示す)

	1									(単位はcm及びg())を付したものは現存値を示す)				
Лб.	器		種	出	土地	点	石		質	最大長	最大幅	厚さ	重 量	残存状態
1	打 製	石	鏃	A	2 🗵	1 層	黒	曜	石	(3.4)	(1.9)	0.4	(1.8)	端部欠失
2		"		18	물	住		"		3.2	1.9	0.4	2.1	完
3		"		D	7 区 4	1層		"		1.8	0.9	2.3	0.2	"
4	"			12	号	住		"		(2.4)	1.8	0.7	(2.5)	端部欠失
5	"			С	1区2	2 層		"		(2.2)	(1.2)	0.4	(1.8)	"
6	"			5	号	住		"		(1.9)	(1.8)	0.4	(1.1)	"
7	″			表		採		"		(2.0)	(1.7)	0.3	(0.7)	"
8		"		Α	1 区 2	2 層		″		3.0	(2.2)	0.5	(1.7)	"
9	"		16	무	住		"		1.7	2.0	0.5	1.1	完	
10	磨製	石	鏃	5	号	住	粘	板	岩	(2.6)	(1.6)	0.3	1.1	端部破片
11		"		9	물	住	砂	岩	質	(3.6)	(1.4)	0.3	2.3	"
12	削		器	Е	6 🗵	4 層	黒	曜	石	4.2	1.8	0.6	(3.4)	一部欠失
13	″			4	号	住		"		4.7	1.3	0.7	(3.8)	一部欠失
14	"			12	무	住		"		(2.8)	(1.7)	0.4	(2.3)	端部破片
15	"			В	2 区 4	4 層		″		3.7	2.0	0.4	3.4	完
16		"		6	号	住		″		4.1	2.1	0.8	7.0	"
17	"			D	5 区 4	1 層		"		2.8	2.4	0.7	4.6	"
18	"			D	2 区 2	2 層		″		2.8	2.0	1.0	4.6	"
19		"		5	号	住		"		2.9	1.4	0.6	3.2	"
20	敲		石	18	号	住	玄	武	岩	8.2	6.9	4.6	460	"
21	す	り	石	3	号	住	多孔	質粗面	玄武岩	11.4	8.5	6.4	875	"
22	環状	石	斧	Ε	5 区 4	1層	角	閃片	- 岩	(7.8)	(7.8)	2.5	(192.4)	1/4
23		"		8	号	住	白:	雲母)	七岩	(7.2)	(3.6)	1.7	(59.3)	1/2
24	"			18	号	住	角	閃片	岩	(9.1)	9.0	2.1	(249.8)	一部欠失
25		"		Α	1区	1 層	白:	雲母.	片岩	(7.0)	(6.2)	2.2	(111.8)	"
26	不		明	6	号	住	砂		岩	5.6	4.5	3.8	(81.4)	ほぼ完
27		″		E	6 区	4 層		"		(5.6)	2.7	2.2	(55.5)	両端欠失
28	打 製	石	斧	10	号	住	玄	武	岩	(8.3)	7.8	1.9	(200)	刃部破片
29		″		Α	4 🗵 :			"		(13.0)	8.1	4.7	(840)	刃部欠失
30	磨製	石	斧	18	号	住		"		(13.5)	5.6	4.4	(615)	"
31	"			D	6 🗵 4	1 層		"		(8.8)	(8.4)	(4.7)	(468)	刃部破片
32	″			D	6 Z	1 層	安	山岩	質	10.3	2.9	3.6	196.9	完
33	石	庖	丁	7	号	住	輝	緑凝	灭岩	(9.6)	4.0	0.6	(39.4)	両端欠失
34	"				5 区:			" "		(5.7)	5.4	0.8	(36.7)	1/2
35	"			Η	5 区:	2 層		"		(4.4)	(3.3)	(0.4)	(9.3)	刃部破片
36	"			18	号	住	緑	簾丿	岩岩	(3.0)	(2.4)	(0.5)	(4.6)	"
37		"		6	号	住		"		(5.6)	(3.2)	(0.3)	(7.2)	"
38	石		鎌	4	号	住	粘	板	岩	(5.2)	(2.7)	0.5	(12.0)	両端欠失

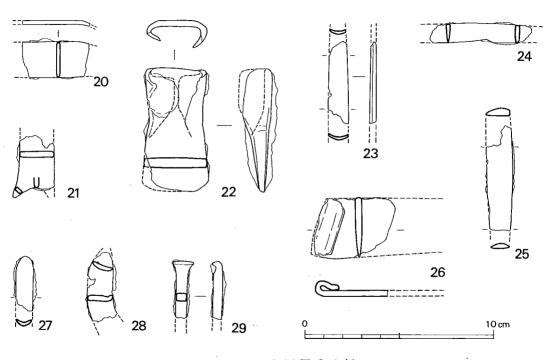
No.	器種	出土地点	石 質	最大長	最大幅	厚さ	重 量	残存状態
39	磨製石斧	4 号 住	頁 岩	(2.5)	(2.9)	(0.9)	(9.7)	刃部破片
40	"	C2区ピット	"	(6.7)	(2.9)	(1.2)	(49)	胴部破片
41	"	B7区4層	"	(5.4)	4.3	(0.9)	(32.3)	"
42	打製石斧	D 5 区 4 層	緑泥片岩	7.4	3.2	0.8	31.2	完?
43	砥 石	B 2区ピット	砂岩	9.3	6.8	3.8	268	完
44	"	18 号 住	粘 板 岩	10.3	6.1	2.3	232	完?
45	"	A 7 区 4 層	玄 武 岩	17.2	4.2	3.9	522	完
46	"	6 号 住	砂岩	18.3	10.5	7.5	2,210	完?
47	"	18 号 住	粘 板 岩	18.5	4.7	3.1	280	完
48	"	B 2 区 4 層	″	(10.7)	(2.1)	1.0	(26.9)	端部破片
49	"	1 号 住	″	(7.8)	1.4	1.3	(21.3)	端部欠失
50	"	7 号 住	"	(6.8)	5.6	2.0	(85.4)	1/2?
51	"	E 6 区 4 層	"	(9.5)	(3.2)	2.8	(83.5)	端部破片
52	"	17 号 住	砂岩	33.3	17.5	5.4	4,705	完
53	石 剣	1 号 住	"	(8.2)	(3.5)	(8.0)	(27.8)	基部破片
54	"	9 号 住	硬質砂岩	(4.2)	(3.1)	(0.9)	(15.3)	<i>"</i>
55	"	19 号 住	砂岩	(4.6)	(3.4)	(8.0)	(17.5)	"
56	石 戈	6 号 住	玄 武 岩	(4.4)	(5.6)	(1.4)	(37.1)	胴部破片
57	"	G 6 区 2 層	硬質砂岩	(8.3)	(5.5)	(1.9)	(105.7)	"
58	石製紡錘車	A 8 区 4 層	斜方角閃片岩	5.3	5.3	0.6	26.5	完
59	"	4 号 住	白雲母片岩	4.5	4.5	0.6	25.9	"
60	u u	16 号 住	角閃片岩	4.4	4.4	0.4	(18.0)	ほぼ完
61	"	表採	極細粒砂岩	4.4	4.4	0.6	21.4	完
62	"	8 号 住	角閃片岩	4.2	4.1	0.5	14.75	"
63	"	5 号 住	白雲母片岩	4.2	4.2	0.4	14.9	"
64	"	12 号 住	"	3.9	3.9	0.4	11.5	"
65	" .	7 号 住	"	3.9	3.8	0.4	10.37	"
66	"	B 5 区 4 層	"	3.7	3.7	0.5	12.2	"
67	"(未製品)	表 採	"	4.6	4.6	0.5	17.9	"
68	" (")	1 号 住	"	4.1	4.0	0.5	17.6	"
69	土製紡錘車	15 号 住	(土器片打欠)	2.7	2.6	0.6	3.5	"
70	"	A 1 区 4 層	(")	3.4	3.3	0.5	(6.7)	一部欠失
71	"	15 号 住	(")	4.2	4.0	0.8	16.7	完
72	〃(未製品)	15 号 住	(")	4.6	4.4	0.9	20.9	"
73	土製投弾	19 号 住		(5.0)	(3.1)	(2.2)	(25.1)	1/2
74	″	16 号 住		4.4	2.7	2.6	(28.1)	ほぼ完
75	"	19 号 住		4.4	2.8	2.7	(25.7)	"
76	<i>"</i>	12 号 住		3.6	2.1	2.1	13.4	完
77	"	19 号 住		3.6	2.2	2.1	14.9	"

番上

・61は片面が円錐形にやや肥厚する。また62では周縁に沿って1条の細い刻線が円を描いており、整形の目安を兼ねていたと考えうる。円は正円でコンパスの使用を窺わせる。



— 170 —



第149図 鉄器実測図②(1/2)

土製品 (図版87, 第147図)

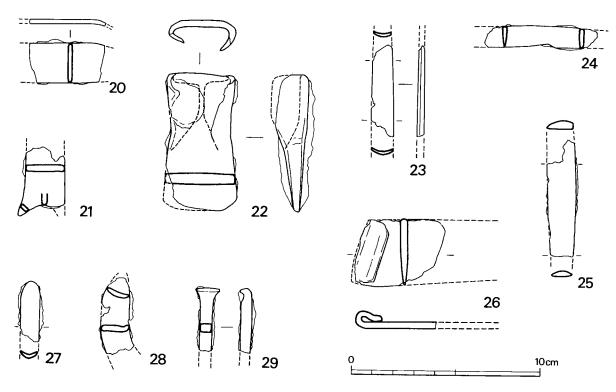
土製紡錘車($69\sim72$) いずれも弥生前期の土器片を打ち欠いて円盤状になし中央に $3\sim5$ 째 の小円孔が穿たれる。72は穿孔が中途迄で止り未製品とみられる。 $69\cdot70$ は周縁が研磨される。

土製投弾(73~77) いずれもラグビーボールを小さくした形状に粘土を固め胎土・焼成共に良好。

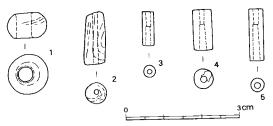
紡錘車は前期,投弾は中期の住居跡を中心として出土しており,この時期に伴うと考えられる。 (小池)

鉄 器(図版88~89,第149図26~28) 26は鉄鎌片でA1地区の東側溝内から出土しているが,時期不明。現存長4.3cm,幅3.1cm,背厚0.35cmの大きさで,折返しは完全に身に密着しているが,当初のままであるかどうか不明。

 $27 \cdot 28$ の鉇と用途不明鉄器は,H4の古墳期の2号土器溜の下層で発見された弥生後期のものである。27の鉇は刃部であるか尻部であるか錆のため不明。現存長2.9cm,幅0.9cm の大きさ。28は扁平で湾曲した鉄器。現存長3.5cm,幅1.4cm,厚0.3cmの大きさで,両側の形状は一定せず,曲ったり,丸みを持ったりしている。



第149図 鉄器実測図② (1/2)



第150図 玉類実測図(実大)

1 は中期中頃の12号住居跡のピットから出土したガラス製丸玉で, 径 10.15~10.5㎜, 厚さ6.45㎜, 孔径4.25㎜, 重さ1.49 強ある。 表面は白色であるが艶があり, 孔と直行する方向と多少斜行して

シマ状の線が走る。これは分析によると鉛ガラスで、孔に直行する方向にシマがあるところと 孔径が同一であることから巻つけ手法により製作したものであろう。白色に風化していながら 艶があるのは南小路 1 号甕棺墓出土のガラス壁や勾玉に通じるところがあるが、本例はこれよ り古い可能性がある。

2は弥生終末の6号住居跡床面で出土したガラス管玉。一方が欠損して現存長13.65㎜,径4.85~5.7㎜,孔径1.6㎜の大きさで、中ぶくらみのあるエンタシス状を呈する。管玉は青緑色の鉛ガラスで、シマ文様状に縦に並ぶ気泡が多く、一部ラセン状に巻いたところ、側面から見ると不規則なところなどがあり、鋳型状のものを使用した可能性が強い。

 $3\sim5$ は濃緑色碧玉製管玉で,中期後半の16号住居跡から出土している。 3 は長さ 9 700 , 径 3.25 700 , 孔径 1.55 700 , 4 は長さ 10.75 700 , 孔径 1.25 ~1.9 700 , 5 は長さ 13.8 700 , 700 700 , 700 700 , 700 7

水銀滓(巻頭図版2-2,図版89)

B4の第4層で出土したもので、1号と17号のどちらの住居跡に伴うものか不明であるが、第4層であるから後期後半の1号の可能性が強い。大きさは径 $10\sim11$ mm、厚さ $2\sim4$ mm、重さ 1.49 の水銀滓の小粒といえるもので、全体として赤褐色をしているが、部分的に水銀の光沢がある。

玉類や金属類の分析結果は、まとまり次第一括して報告する予定である。 柳田)

3 古墳時代の遺構と遺物

番上地区では、どの土器型式をもって弥生終末にするのか問題となるが、一応 6 号住居跡の時期をこれにあてた。これらの弥生終末期の土器を観察すると大甕には後期後半の伝統を残すが、高杯の杯部の大きな反りや、甕・壺に直立口縁が出現している。ここでは、いわゆる土師器製作手法である内面へラ削りや土師器質胎土のものが含まれないところから、弥生終末期として扱ってきたが、サキゾノI-1の祭祀住居跡のように弥生終末といわれていた多量の土器と

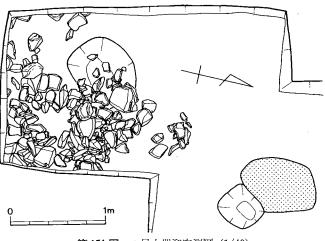
共に庄内系の土器の一群が含まれているので、今後古墳出現と も合わせて検討していきたい。

(1) Ⅱ-6土器溜

2号土器溜(図版90,

第151図)

発掘区の西端にあたるH4地区で,土師器の土器群が発見された。土器の上面は第2層の水田床土の直下からあり,立って



第151 図 2号土器溜実測図 (1/40)

いる甕の口縁部などは耕作などのために削り取られていた。土器は、東西1.8m, 南北2.4mの範囲にのみ集中し、それ以上に広がらない。土器群は竪穴などの遺構に廃棄されたものと思われたが、遺構はなく積上げられたもののようである。土器を取り上げると、その下は直接石積となり、土器と同様に積上げられていた。石積は人為的石積で、最も盛上った中央には石積がない。石積は、東西1.2m、南北1.6mの楕円形プランをし、高さ31cmとなっている。石積中央の石のない部分は東西径25cm、南北30cmの穴となっている。

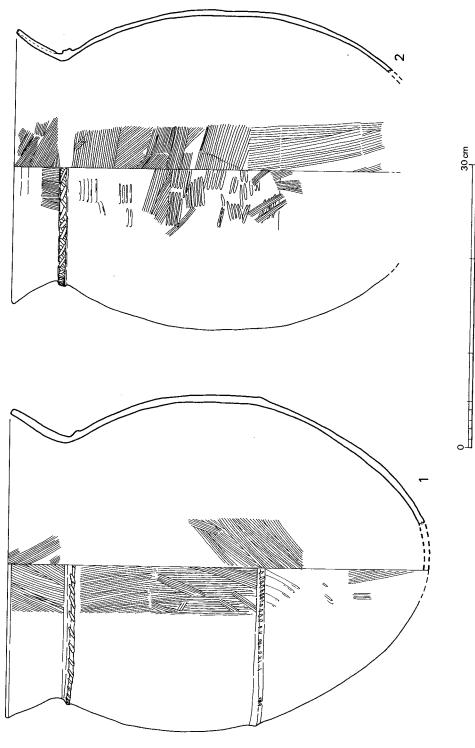
石積を除去すると、下には北西側にずれて径 62cm×75cm、深さ27cmのピットが発見されたが、このピットは下層の弥生後期の遺構と思われ、この層では鉄錐なども発見された。

この石積と土器群の性格は、周囲を完掘していないので不明な点が多いが、祭祀的色彩が強いといえる。

土 器(図版91~96,第152~165図)

甕A($1\sim3$) 1は器高44.5cm,口径32.4cmの大きさで,外反する口縁下と胴部に不明瞭な凸帯をめぐらす。凸帯にはハケ原体によるキザミ目を施す。口縁部は先端近くでわずかに内湾するのが特徴となっている。 2 は口径29cmの大きさで,口縁下のみ×印キザミ目凸帯をめぐらす。口縁は外反するが,先端は口唇状に凹みがある。胴部外面平行線文タタキの後,部分的にハケ目で消しているが,下半3分の1は下から上にヘラケズリを行っている。 3 は肩部以上を欠損しているが,胴部に凸帯がないところから2 と同様なものであるが,下半のヘラケズリがない。底部は丸底。

甕B $(4 \cdot 5)$ 4 は器高35.2cm,口径22cmの大きさで,5 もほとんど同一である。 $4 \cdot 5$ 共に,外反する口縁部と長胴,外面タタキの後にハケ目調整,3 分の1下半をケズリ状のヘラナデと丸底など弥生終末のものと同様である。

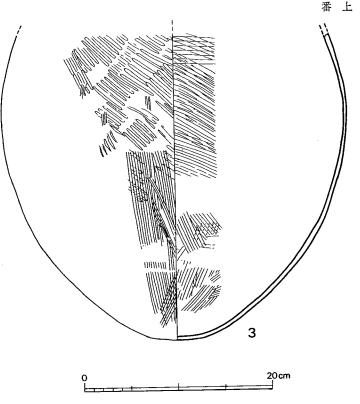


第152図 2号土器溜出土

実 阅 図 ① (1/4)

土器

甕C (7·13·16~24) 甕Cとしたものは, 口径 14.4cm~22cmのもので、 器高は約27cm~35cmの大 きさあり,長目の胴に内 面ヘラケズリを行う。口 縁部は内湾し, 先端の内 側が突出するか上端が水 平に近くなり, 布留式の 特徴を備えている。胴部 外面の特徴として, 肩部 のみ水平に整然とハケ目 を施し,部分的に縦のハ ケ目を加えている。さら に, その上からヘラ先刺 突文を等間隔に施すもの (19・20) や半截竹管文 (21)、 櫛描横線文 (22・



第153図 2号土器溜出土土器実測図②(1/4)

23), ヘラ描波状文(24)を施すものがある。

甕D (10~12) 甕Cの特徴を全て備えたものであるが、口径が12で14.4cm, 器高18.8cmと小さくなり、特に高さが低くなっているために胴に丸みがある。肩部にヘラによる刺突文と波状文がある。

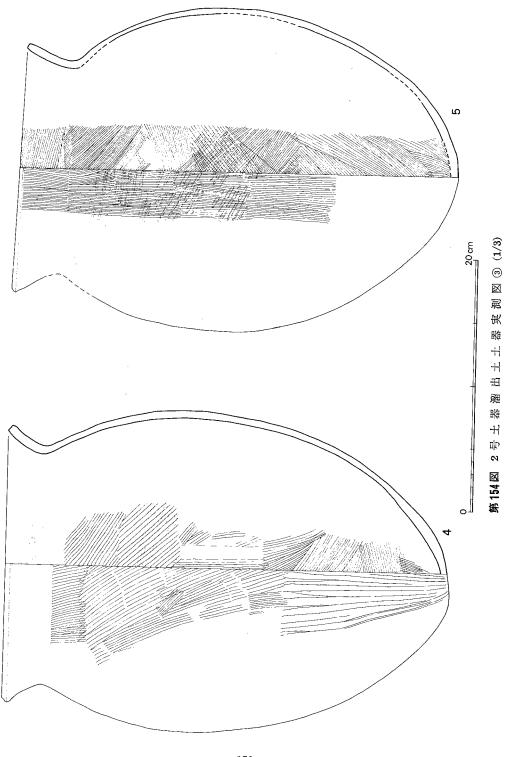
直口壷(8)8は器高16.5cm,口径15.2cmの壷で,直立する口縁端は丸みのある角をもつ。 胴内面はナデ仕上げであるが,外面は横方向にヘラケズリが残っている。

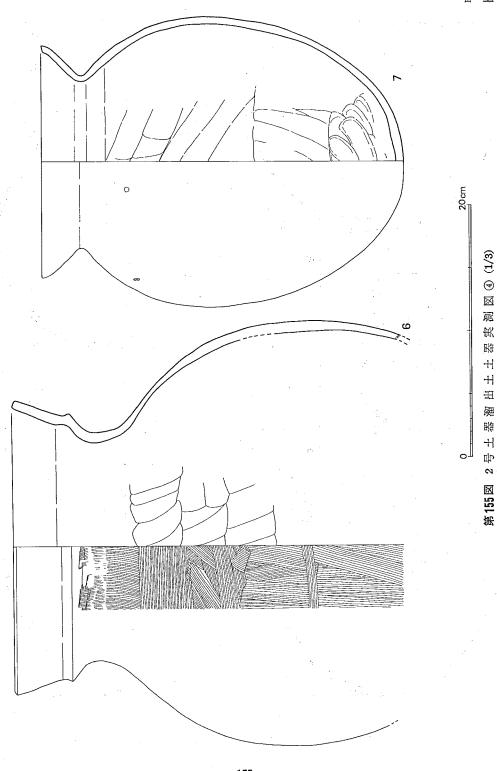
坩(9) 器高約12.7cm, 口径 7.8cm の大きさで小形丸底坩といえるものであろう。口縁は 直立に近く, 外面に段をつけて頸部を形成している。

広口壷 (14・15) 14は口径19cm, 胴径29.7cmの大きさで,口縁部は長くて頸部といえるが, 甕Cの口縁に似たところがある。器面調整も甕Cと同様である。

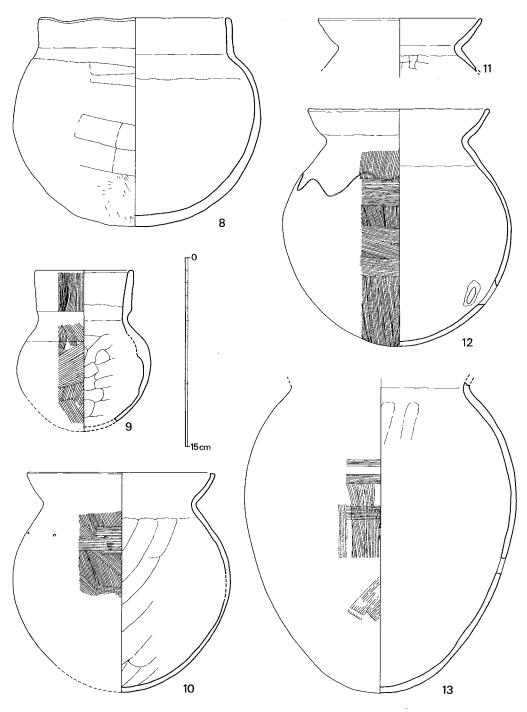
二重口縁壺(6) 口径23.4cm, 胴径33.7cmの大きさで,口縁はあまり外反せず,頸部も太い。胴部内外面の調整は甕Cと同様であるが,頸部のハケ目を下から上に引いた勢いで口縁部一段目に放射状の文様のように板目痕が残っている。また,外面の肩部から口縁部に丹塗りの痕跡がある。

鉢 (25・26) 25は器高14.7cm, 口径28.9cm, 底径8.8cm, 26は器高10cm, 口径21.2cmの大き

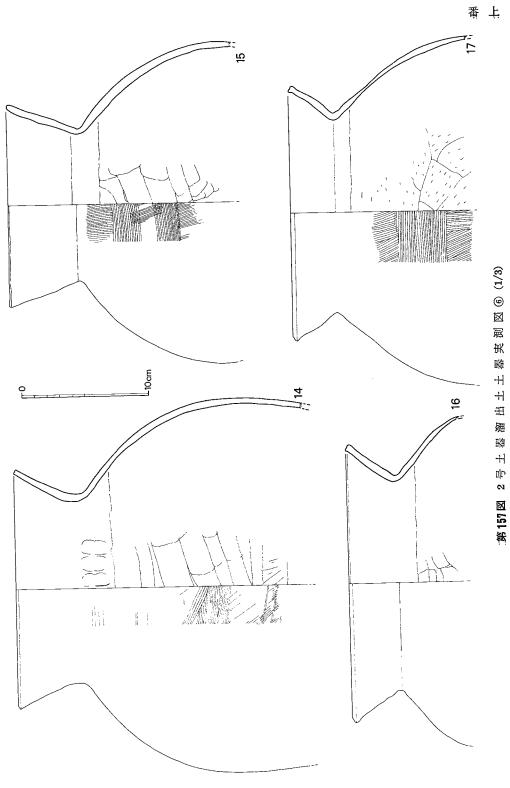




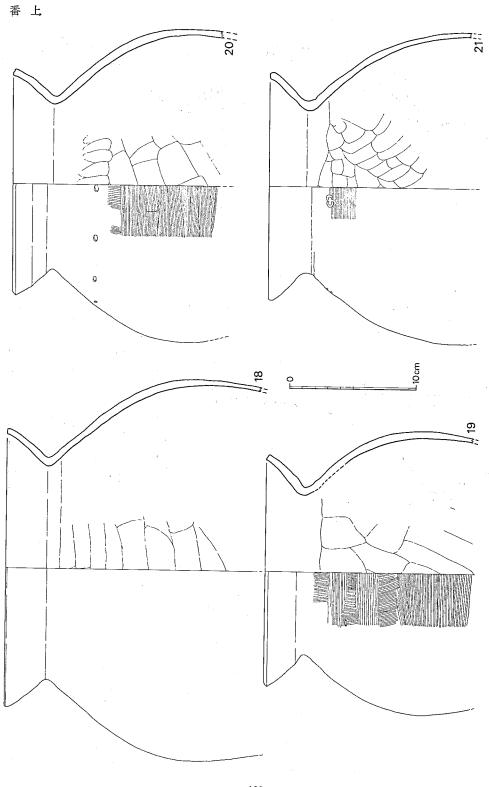
--- 177 ---



第 156 図 2 号土器溜出土土器実測図⑤ (1/3)



- 179 -

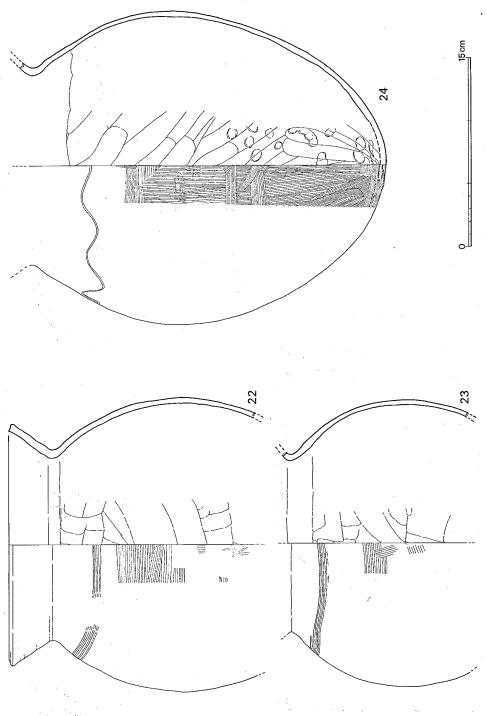


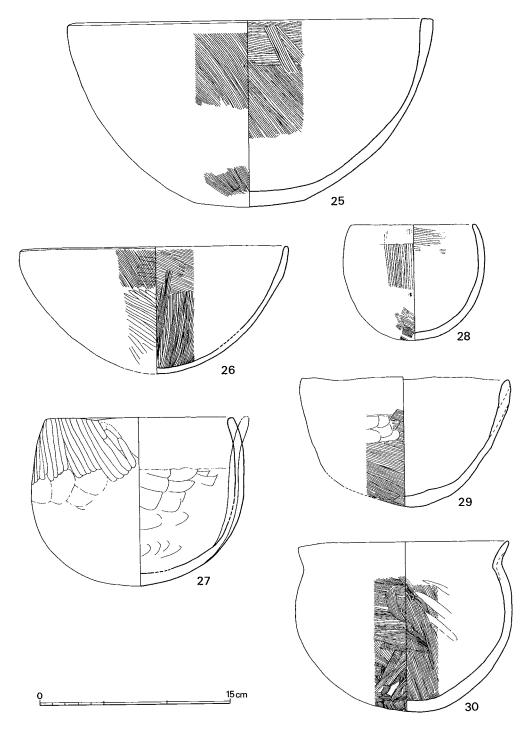
器溜出土土器実測図①(1/3)

2号士

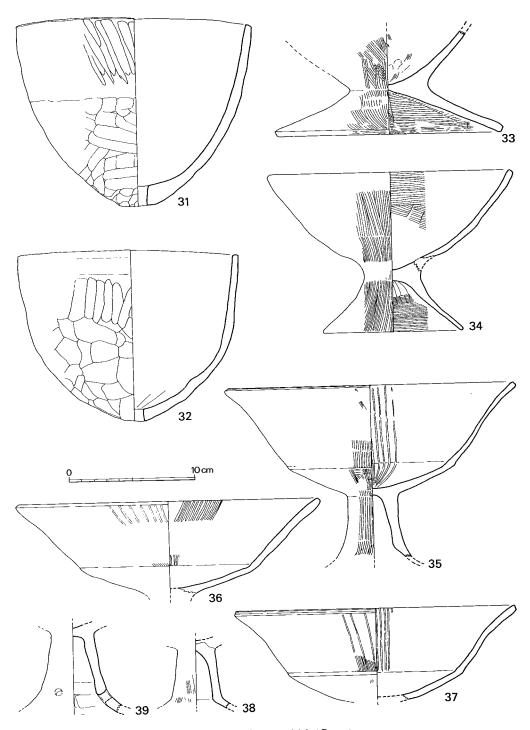
第158図

- 180 -





第 160 図 2 号土器溜出土土器実測図⑨ (1/3)



第 161 図 2 号土器溜出土土器実測図⑩ (1/3)

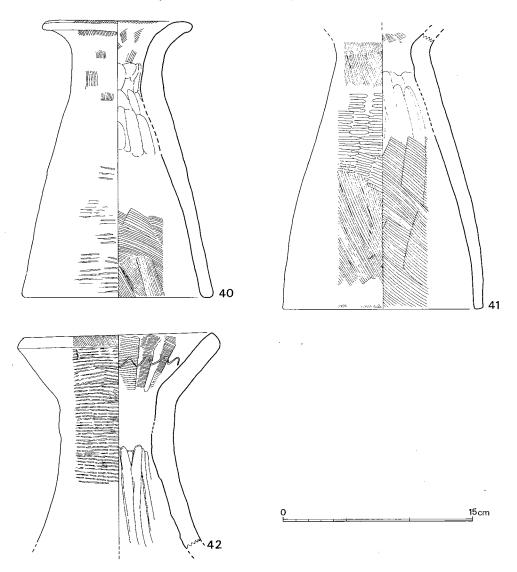
番上

さ。両方共に内外面ハケ目調整であるが、26は外面にタタキ目が残り、25はレンズ状の平底である。

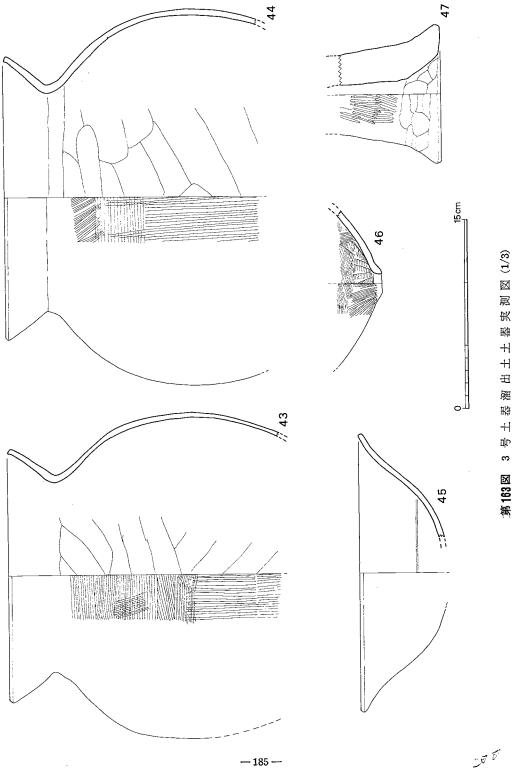
片口椀(27) 器高13.5cm,口径14.8cmの大きさで一方に片口が付く。外面上部に幅広の板目と思われるタタキと下半は粗い手揑状成形の後でナデている。内面下半は粗いヘラケズリ。

椀(28・29) 28は器高9.1cm, 口径9.8cmの大きさで, 口縁は内湾する。29は手揑状の粗い成形で, 粗タタキのあと粗いヨコヘラケズリ, 粗いハケ目調整を行っている。

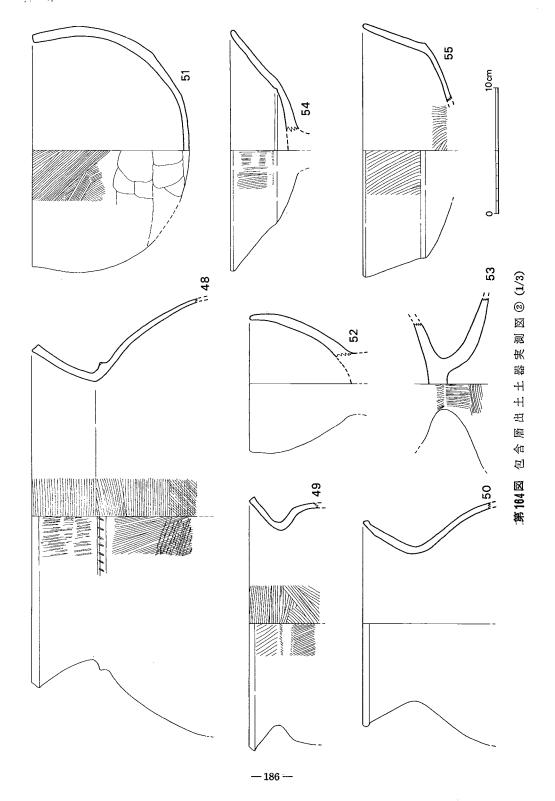
小甕 (30) 器高13.5cm, 口径16.7cmの大きさで, 壷・甕の区別のつきにくいもの。外面は



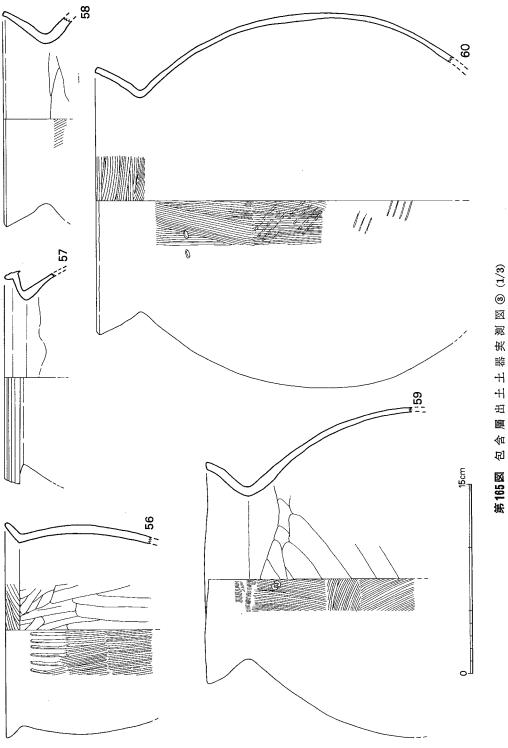
第 162 図 2 号土器溜出土土器実測図⑪ (1/3)



J# 8







— 187 **—**

番上

ヘラケズリ状のハケ目、内面はヘラケズリの後に細かいハケ目調整仕上げ。

甑 $(31 \cdot 32)$ 31は器高 14.9cm,口径 18.6cm,孔径1.1cmの大きさ。外面は棒状用具によるナデあるいは,タタキの後,下半を横にヘラケズリをして尖がり底としている。32も同様。

台付鉢 (33・34) 33は台付甕になる可能性がある。34は器高12.5cm, 口径19.5cm, 台裾径 11.1cmの大きさで, 鉢部外面はヘラケズリの後に粗いハケ目調整が見られる。

高杯(35~39) 35は現存器高13.6cm, 口径23cm, 杯深さ8.1cmの大きさで, 杯部が大きくて深く, 脚部が低いのが特徴で, 36・37も同様である。杯部にはハケ目も残るが, 内外面に暗文があり丁重な仕上げとなっている。脚部内面は, ヨコヘラケズリである。

器台(40~42) 40は器高21.9cm, 口径11.8cm, 裾径15cmの大きさで, 上部4分の1ほどのところで外反して受部を形成するのが特徴。3点共に外面に粗いタタキ目が残っている。42は受部内面に部分的にヘラ描波状文がある。

2号土器溜の土器群は,同一時期の一括土器といえるものであるが,甕形土器において在地土器と伝来土器との融合過程が伺える。甕のA~Dはこの項のみの便宜的分類であるが,A・Bは単独に取り上げれば弥生終末ともいってよい在地土器であるが,甕C・Dは畿内からの伝来土器といってよい。2号土器溜においては在地土器と伝来土器が混在する一方では,甕Cの中に13・24のように在地土器との融合がなされたと思われる長胴の甕がある。C・Dのその他の土器も長胴とならないでも,畿内の布留式のような丸胴でなく「なで肩」の胴部となっているのが特徴といえる。肩部の刺突文や波状文も伝来の過程で付加された要素であろう。

高杯は、弥生終末近くになると杯部の反りが長く大きくなっていたが、ここで始めて短脚となり伝来土器に統一されている。

3号土器溜(図版91-1)

3号土器溜めは、A8の発掘区北東隅の第4層下部に包含層一括土器として取上げたものである。発掘区の隅であったためにどの程度の規模であるかも不明。

土 器 (図版96, 第163図) 43・44は甕で、口縁の内湾とその先端、肩部の横ハケ目は2号 土器溜の甕Cと同一である。

45の高杯は,杯部中段の屈曲がなく丸みがある。46は甑で,底部のみであるが,孔付近は乳頭状に突出している。47は支脚で,叩きと粗に表面仕上げとなっている。弥生時代の混入品である。

包含層出土の土器 (図版96, 第164・165図)

48は口縁下の三角凸帯に刻みを施す。A3 ・ 4 で出土したもので、弥生終末のもの。

49~53は同様に弥生終末のもので、49はG6第4層、50はB4第4層、51はF6第4層、52

はE6第5層、53はA3のピット内出土である。

54はA3第4層で発見されたもので、近くで発見されたものに60の布留期の甕がある。2号 土器溜の甕Cと高杯のセットと比較すると53の高杯は杯部小さく厚みがある。

55の高杯はG6第4層出土で、杯部の反りがなく深く、古式土師器であろう。

57はB5のP10から出土した瀬戸内系の甕。口径16cmの口縁部に凹線2本をめぐらし,胴内面は頸部の1cm下から斜上にヘラ削りを行っている。岡山地方の最古式土師器に含まれるものであろう。

 $58\sim60$ は口縁が内湾し、その先端が内側に突出するか平坦になるところは、2号土器溜の甕 Cに共通するが、一層ナデ肩となり肩部の真横のハケ目が見られない。60には刺突文があるが、54の高杯と共伴する可能性があり、甕Cより新しい傾向が見られる。58はB7第4層、59は 2トレ5第4層、60はA3第4層出土である。

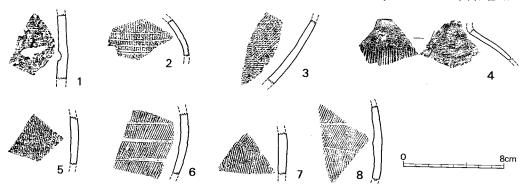
陶質土器 (図版97, 第166図)

番上Ⅱ-6で出土した陶質土器は、全て細片であるために出土遺構に心ずしも伴うものとは限らない。出土した8片の土器は外面調整によって3型に分類できる。

I型(1) 外面ナデ調整のため無文で、内面に布痕らしきものが残る。軟質で外面灰黒色、内面灰色。6号住居跡出土。

II型($2\sim5$) 軟質で外面に縄席文があるの が 共 通 し, 2 は肩部に間隔の狭い沈線を施 し, $2\cdot3\cdot5$ は内面ヨコナデ, 4 は同心円状叩きが残る。 $2\cdot3\cdot5$ は同一形態のいわゆるタマネギ形をした肩部(2)・胴部下半(5)・底 部 付 近(3) である。 2 は 4 号, 3 は 6 号, 4 は 8 号住居跡, 5 は 6 この第 4 層出土である。

Ⅲ型(6~8) 硬質で外面に細平行線叩き目が共通し、7には沈線がなく、叩きの方向が 交互に違っている。内面はヨコナデ(7)とナデ仕上げであるが、凹凸が激しい。6はG・H 5第4層、7はD8第3層、8は布留式の2号土器溜で出土しており、7の近くで布留式土器



第166図 陶質土器断面実測図(1/3)

番上

も出土している。

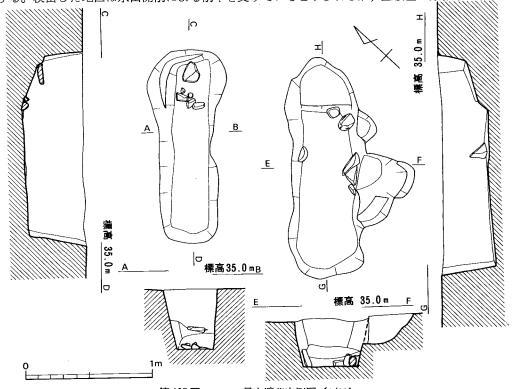
I型は楽浪系の無文の鉢などであり、弥生後期、Ⅱ型の2・3・5は沈線間が狭いなど古い 点があるが、後期後半の時期。Ⅱ型の4は頸部近くに縄席文がない点新しい要素があり、伴出 土器も弥生終末である。

Ⅲ型は布留式土器に伴っている点と硬質である点においても古墳時代のもので、布留式土器の年代である4世紀後半のものとしてよいであろう。ここで、I~Ⅲ型式に分類したのは、本項のみで便宜上行なったもので、他地区の陶質土器を合せて再分類したい。 (柳田)

4 歴史時代の遺構と遺物

(1) 土壙墓

 $C\sim D\ 2$ 区に 2 基(1 ・ 2 号土壙墓) と $B\ 5$ 区東北隅に 1 基(3 号土壙墓)の計 3 基を検出した。1 ・ 2 号土壙墓は、いずれも N 46° E に主軸方向をとり、約 2 m の間隔をおいて平行に位置する。検出した地区は水田開削による削平を受けているとみられるが、土壙墓は素掘りの状態

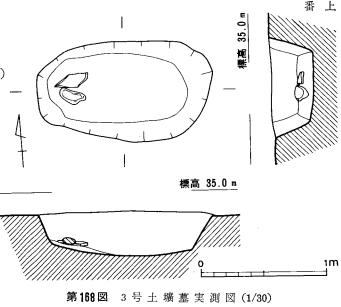


第 167 図 1 · 2 号土壙墓実測図 (1/30)

で,上部の構造は不明である。

1号土壙墓(図版89-2,第167図)

上面形は長辺155 cm,短辺45cmを測る隅丸長方形プランを呈し頭部の深さ35cm,足部の深さ45cmを有す。床面は長辺135cm,短辺25~30cmを測る隅丸長方形プランで,頭部端から40cmの間は斜面となる。更に頭部は扁平な磔を置き枕石としており,上面での床面との比高約10cmを有す。



土壙内堆積土には土器片以下の遺物を検出できなかった。

2号土壙墓 (図版98-3, 第167図)

上面形は長径 175cm, 短径60cmを測る不整形な長楕円形プランを呈し, 頭部の深さ20cm, 足部の深さ40cmを有し頭部は段状に高くなる。床面は長さ160cm, 幅 40~45cm の不整長楕円形プランで, 頭部40cmが10~20cm高い緩斜面の枕となる。1号土壙墓同様に礫層に掘り込まれているために床面は礫床の如き状況になる。また土壙内の堆積土には礫が含まれるが, 土器片以外の遺物は出土しなかった。

なお,1号土壙墓出土土器と当該土壙墓出土土器は同一個体であることから同時埋葬が想定できる。

土 器(第165図56) 1・2号土壙墓出土土器片が接合した甕形土器である。外面にハケ目を施し、口縁部外面はナデられる。内面は頸部までヘラ削りが及び、口縁部内面はハケ目の原体でナデられ、頸部内面は明瞭な稜となる。焼成良好な土器で暗褐色を呈すが、外面には煤が付着する。奈良時代後半頃の土器とみられる。

3 号土壙墓 (図版99-1,第168図)

頭位を西に向けており、主軸方位 N88°W を測る。上面形は長径 140cm, 短径80cmの不整楕円形を呈し、上部を削平されているものの、頭位24cm・足位30cmの深さを有す素掘りの土壙となる。

床面は,長径110cm・短径55cmの不整楕円形プランを呈し,頭部50cmの範囲は中央部から緩

番 上

傾斜に浅くなり比高は最高10cmを測る。頭部は更に 5 ~ 7 cm厚さの扁平な石を 2 個並べて枕石 としている。土壙内からは土師器小皿片,青磁椀片,滑石製石鍋片が出土した。 (小池) **土師器**(第169・170図)

小皿 (1・2) 口径9.0・9.2 cm, 器高 1.0・1.5 cm, 底径 7.8・6.5 cmを測り, 糸切りである。

磁器

青磁(1) 龍泉窯系で、口径13.2cm・器高6.2cm・底径5.15cmを測り、内外面に貫入をみ、 内面は草花文の変形と考えられ、外底部には焼台の使用のために焼成差がみられる。(川村)

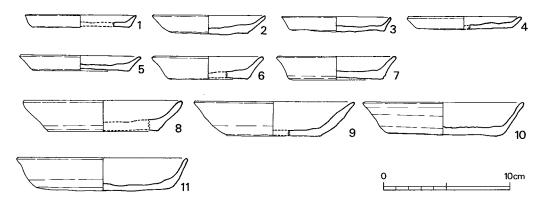
(2) 柱穴様ピット

主に調査区の東半部で無数の柱穴様ピットが検出できたが、建物の柱穴としてまとまるものはみあたらない。これらのピットには弥生土器を含むものも多くあるが、土師器・小皿類・硯片等が出土していることから歴史時代の遺構とすることができよう。 (小池)

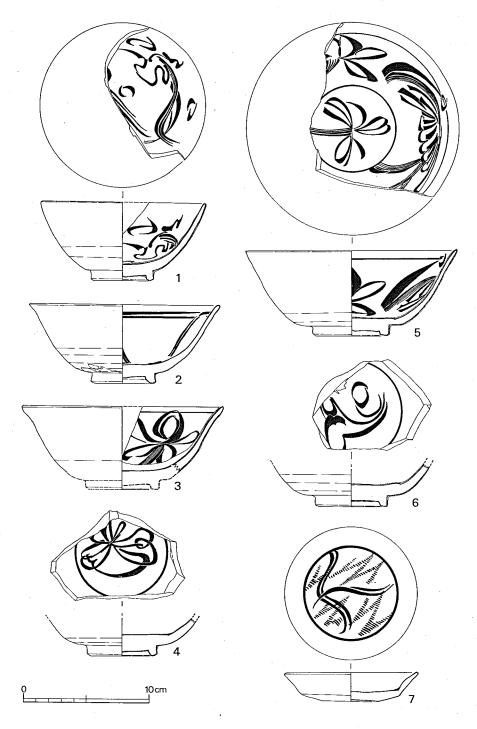
(3) その他の遺構出土の遺物 (第169・170図)

土師器

小皿 (3~5) 口径8.8~9.3cm・器高1.1~1.2cm,底径7.6~8.1cmで,糸切りである。中皿 (6・7) 口径9.1・9.7cm,器高1.85・1.7cm,底径6.4・7.7cmで,糸切りである。 杯 (8~11) 口径12.8~13.8cm,器高2.45~2.7cm,底径7.6~10.8cmで,糸切りである。10は内底部に刻み目をみる。



第169図 歴史時代の土器実測図① (1/3)



第170図 歴史時代の土器実測図② (1/3)

番 上

磁器

青磁 $(2\sim7)$ 2~6 は龍泉窯系の椀であり、2 は区画文をみ、内外面に4ケ所の目跡をみる。3~6 は体部内面・見込みに草花文をみ、4~6 には外底部に焼台痕をみる。7 は同安窯系の皿であり、内底に櫛描き・ヘラ描きをみ、外底部は施釉後かき取っている。

3号土壙墓出土の土師器は、五条(御笠川南条坊遺跡)の分類でⅡ-3類を示すが、同土壙墓出土の磁器は草花文の変形であり、全体的に時期が下がるであろう。

他の遺構出土の土師器も同分類でⅡ一3類前後に対応できる。

よって,番上II-6に出土する歴史時代の土師器・磁器は13世紀前半に比定でき,その後に3号土壙墓をおくことができる。 (川村)

Лб.	挿図番号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	切り へ ラ	離 し 糸	内底部の ナデ有無	板状圧底 の 有 無
B5区3号土壙墓								
小皿	L .							
1	1	(9.0)	1.0	(7.8)		0	0	?
2	2	9.2	1.5	6.5		0_	0	0
他の遺	他の遺構							
小 皿								
1	3	8.8	1.2	7.6		0	0	0
2	4	9.3	1.1	8.1		0	0	0
3	5	(9.8)	1.2	(7.7)		0	0	0
中皿								
1	6	(9.1)	1.85	(6.4)		0	0	
2	7	9.7	1.7	7.7		0	0	
杯								
1	8	(12.8)	2.45	(8.8)		-0	0	
2	9	(12.8)	2.7	(7.6)		0	0	
3	10	13.1	2.6	8.7		0	0	
4	11	13.8	2.6	10.8		0	0	

表7番上Ⅱ-6土師器計測表

(cm)

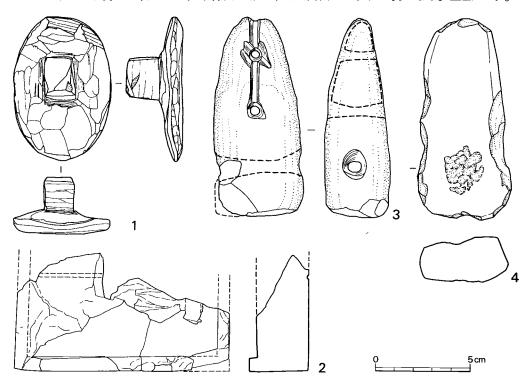
石製品(図版100,第171·172図)

滑石製摘付円盤(1) 滑石製石鍋を転用して製作されたもので、端部に石鍋器面の一部が残る。全体の形状はスタンプに似た形状となり、体部と摘部からなる。体部は長径 7.6 cm・短径5.2 cm の楕円形を呈し、約1 cmの厚みを有すが、摘の付く面を背とすれば腹になる面の周

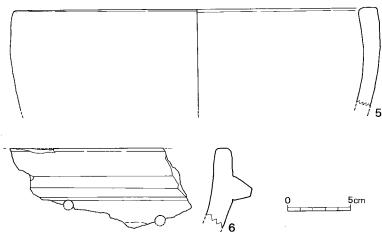
縁は丸味をもって収まる。摘部は長辺2.3cm・短辺1.6cmの不整方形の柱状となり体部につながる。器高3.0cmを測る。器面は整形時の削り痕を明瞭に残し、体部腹面は使用による磨耗の為かやや平滑である。G7区第4層上面出土。

硯(2) 破片資料のため全体の形状は不明であるが、不整方形の平面形になるものと思われる。いま 11.3cmの 1 辺とほぼ直角に接する 2 辺の一部が残存し、3.2cm の器高を有す。表面は幅 $7 \sim 8$ mm の縁部と陸部からなり、縁部立ち上りは 4.5mm を測る。陸部は中央に向ってやや盛り上った形状となる。側面・裏面共に平坦に仕上げられ、裏面に横行する幅 2 mm の浅い溝が刻まれる。粘板岩製。 C 4 区柱穴様ピットとD 4 区柱穴様ピット出土資料で接合した。

蔵 石(4) D5区第4層出土。扁平な斜方角閃片岩礫を素材とし、周縁は打欠き整形によって掌中に握り易い形状となす。敲打面は礫の平坦な両面にみられ凹状になる。重量199 €。



第171図 歴史時代の石製品類実測図① (1/2)



第172図 歴史時代の石製品類実測図② (1/3)

滑石製石鍋(5・

6) 5は3号土壙 内から出土した復原口 口縁部破片で復原口 径29㎝を測る。や部 は肥厚し上面で整地と なる。外面に整形は が残り,内面は磨耗 している。6は敷 地区南側の道路敷の

水道工事に発見された資料である。口縁部下に鍔が造り出されており、鍔の下に鍋を垂下させる為の施設とみられる2孔がみられる。 (小池)

鉄 器

鉄 釘(図版89,第149図29) 29はB-3地区の1号住居跡に重複したP4から出土した鉄 釘片。土器は弥生中・後期のものが伴出しただけで時期不明。 (柳田)

5 小 結

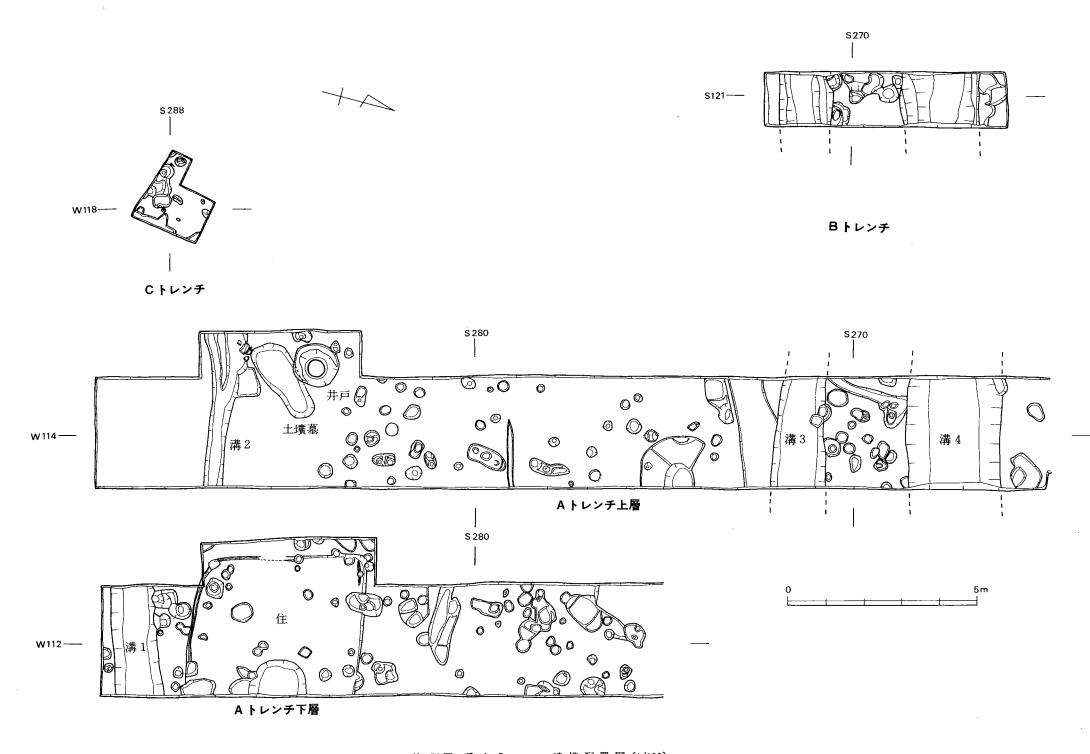
番上II-6の調査では、弥生時代前期~終末の住居19・土器溜め1、古墳時代初頭の土器溜2、歴史時代の土壙墓3等の遺構と、これらの遺構に伴う遺物を検出することができた。

住居跡群は、相互の切合い関係と出土土器によって整理すると以下のようになる。

15号住居が最も古い住居跡で弥生前期後半頃にあてることができる。

中期の住居跡では、住居跡の切合い関係によって14号住居跡が12号・16号住居跡より先行する。14号住居跡ではまとまった遺物の出土がないものの12号住居跡に中期中葉の土器がみられることから14号は15号住居跡の時期より下り12号住居跡より朔る中葉前半頃にあてれば15→14→12号の関係にできる。また一方中期中葉の住居跡として3号住居跡がやや距離をおいて存在する。中期後半には南西部に2号、北西部に10号、北部に16号、北東部に19号、東部に17号住居跡が存在する。

一方弥生時代後期前半から中葉頃の資料は少なく10号住居跡内と5号住居跡にみられること,更に切合い関係で10号→5号→4号住居跡となり4号住居跡は後期後半に相当することか



第173図 番上 1-2・3 遺構配置図(1/100)

ら 5 号住居跡のみの存在となる。また後期後半頃には 4 号住居跡以外に 9 号・18号・1 号住居 跡が存在する。

弥生時代終末期の住居跡としては6号・7号住居跡がある。

住居跡以外の遺構では、弥生時代後期後半~終末期の1号土器溜があり、古墳時代初頭期の2号・3号土器溜につながる。土器溜の出現期は当該地区住居跡群の消滅期にも相当することも考えうるが、弥生時代後期後半期以降古墳時代初頭期の土器群についてその編年作業が各地で問題にされている現状に新たな視点を与える遺構・遺物といえよう。いずれにしても6・7号住居跡、1号土器溜、2・3号土器溜の時期は跛行的とみる要素もあり、期間的にも短い間での変遷であろう。

この段階以降の遺構・遺物は歴史時代まで空白をもち、1・2号土壙墓の出現まで跡絶える。1・2号土壙墓は同時埋葬の様相を呈し奈良時代後半期頃の所産と考えうる。また3号土壙墓は調査区域東半部に点在する柱穴様ピット等と共に13世紀前半期頃を前後する時期に構築される。

一方,土製品・石器類・鉄器類・玉類等があり,時期の限定できる資料もある。土製品では,土製紡錘車が15号住居跡の時期,投弾が16・19号住居跡の時期に伴うことが考えられる。石製紡錘車は弥生時代後期以降に集中するがコンパスの使用を窺わせる資料のある点も注目できる。また粘板岩製の砥石も後期以降に集中し鉄器類の盛行と相似することからみて両者は密接な関係にあったことが推測される。ガラス玉の出現も注目すべき事象であろう。

土器類のなかには注目すべき将来された土器が含まれている。5号住居跡に出土したいわゆる上東式土器あるいはB5区ピット内出土の酒津系の土器は岡山県を中心とした地域の土器(註21)であり、18号住居跡出土の免田式系の土器と共に当時の交流関係を窺わせる資料といえよう。 (小池)

6 Ⅱ-2・3の調査(図版101~109,第173図)

南北方向の水路にかかる部分に東西幅 3 mのトレンチを南北に設定し、遺構の遺存する部分について調査を実施した(第173図 Aトレンチ)。 また、土器片が多く散乱するW118、S288を中心に幅 1 m、長さ 2 mのトレンチ(Cトレンチ)を設定し、Aトレンチの調査の過程で検出した溝 2 • 3 の続き具合を確認する目的でAトレンチ西側に幅 1.5 m のトレンチ(Bトレンチ)を設定し、調査を行った。

調査の結果,表土下20cm~30cmで歴史時代の遺構面に達し,溝3条,井戸1基,土壙1基, 性格不明のピット多数を検出した。Aトレンチ南半部では,歴史時代の遺構面から15cm~20cm 下層に弥生時代の遺構面があり,住居跡1軒,溝1条,性格不明のピット多数を検出した。

番 上

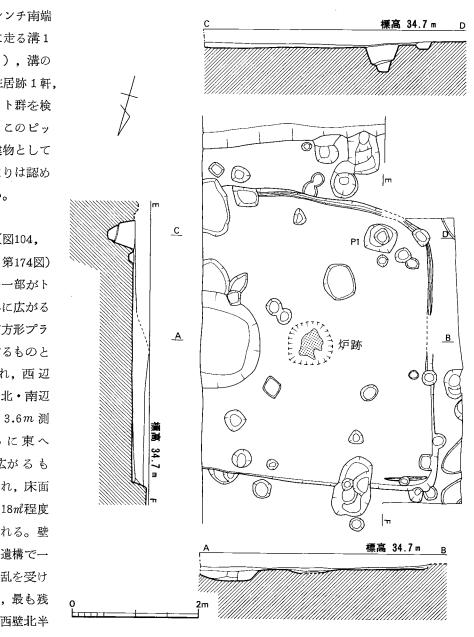
調査は柳田康雄,児玉真一があたり,高田一弘,内田恵三の助力を得た。

(1) 弥生時代の遺構と遺物

Aトレンチ南端 に東西に走る溝1 条(溝1),溝の 北測に住居跡1軒, 他にピット群を検 出した。このピッ ト群は建物として のまとまりは認め られない。

住居跡 (図104,

東側の一部がト レンチ外に広がる が、ほぼ方形プラ ンを呈するものと 推測され, 西辺 4.2 m, 北·南辺 は現状で3.6m 測 り, さらに東へ 0.5 m は広がるも のと思われ,床面 積は17~18㎡程度 と推定される。壁 は中世の遺構で一 部にかく乱を受け ているが, 最も残 りの良い西壁北半 部で壁高30㎝を測



第174図 住居跡実測図 (1/60)

る。壁に沿って幅10cm,深さ $4\sim5cm$ の浅い溝が掘られているが住居内を一巡しない。中央部に炉跡が,東側に土壙が掘られている。炉は1辺70cm前後の不整形を呈し,深さ10cm程で床面は焼土が残り,その上に厚さ $5\sim7cm$ の炭がのっている。土壙は南北径1.5mを測り,東西径は現状で1mを測るが,径1.5m程度の円形に近いプランを呈すると推測される。深さは15cmで浅く,出土遺物はなく,性格については不明である。主柱は4本柱と推定され,壁際に検出した1つの主柱穴(P1)は深さ40cmを測る。

床面で石斧,玉類を検出したが、この住居跡の時期を示す土器が乏しく、明確な時期を知り 得ないが、弥生時代後期のものと推定する。

溝(図版101,第173図)

住居跡の南側に検出した東西に走る幅1.2mの溝で、深さは25cm 前後である。床面は西から東に向かって傾斜し、その比高差は6cmである。溝は一挙に埋まったものではなく、埋土は6層に分層でき、下から3層目の黒褐色土中から土器片1点が出土した。

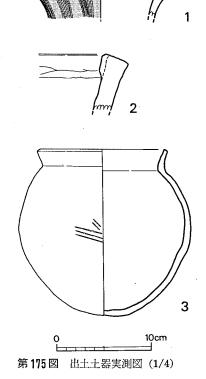
土 器 (図版107-3,第175図)

一応、各トレンチで少量ながら出土しているが、Cトレンチ、溝3・4の埋土中から比較的

多く出土している。器種は甕・壷・器台があり、甕・壷 が量的に多い。そのほとんどが小破片で、図示できるの は3点にすぎない。

壺(1) Cトレンチで出土した口縁部から頸部にかけての小片で、復元口径は内径で12.8cm、外径で18cmを測る。口縁の形態は鋤先状を呈し、口縁部から胴部にかけての形態はゆるやかなS字状を呈するものと思われる。頸部外面は暗文がみられ、1単位8本の縦方向のもので、1単位の幅は2cm前後である。口縁部及び外面は丹塗りを行っている。胎土は精選され、焼成良好であり口縁部内外面、割れ口の一部に煤が付着している。

甕(2・3) 2は溝1埋土から出土した大甕口縁部の小片である。口縁部内面に粘土を貼り付け、口縁端部は4個1組の長三角形の刻み目をつける。内面及び外面の口縁端部直下はヨコナデ、以下は縦方向のハケ目調整を行っている。胎土に多量の白色砂粒を含み、焼成はあまりよくなく淡茶灰色を呈する。ただ口縁内部の粘土を貼りつけた部分は茶色を呈する。



--- 199 ---

番 上

3 は溝 4 埋土下層から出土し、完形に復原される。口縁部径13.2cm、器高17.6cmを測り、胴部はほぼ球形を呈し、その最大径は18.2cmを測る。底部は丸底で、器面が剝落しているが胴部中心に部分的にタタキ目が残る。胴部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデを行っている。胎土は多量の砂粒を含み、焼成は良好で淡茶灰色~明橙色を呈し、肩の部分に黒班が一つある。

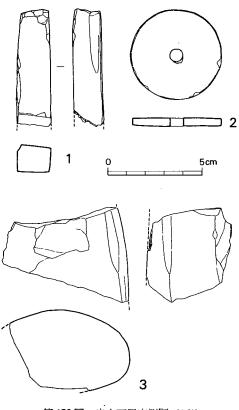
石 器 (図版107-1,第176図)

表採品を含めて三点出土した。

石 斧 (1・3) 1はAトレンチ南端の歴 史時代の遺構面を地下げ中に出土したもので, 下半を欠失するが,柱状片刃石斧だと思われ る。現存長 6.2cm,幅 1.8cm,厚さ1.5cm前後を 測る。二次的に砥石に使用された可能性 があ る。石材は頁岩である。

3 は住居跡埋土中で検出した太形蛤刃石斧の 小片で、断面は長円形を呈する。石材は玄武岩 である。

紡錘車(2) 表採品である。径 4.6cm,厚さは周縁部で0.4cm,穿孔部で0.45cm を測る。中央に径 7mmの孔をあけ,全面をきれいに研磨している。石材は白雲母片岩で重さは22g である。



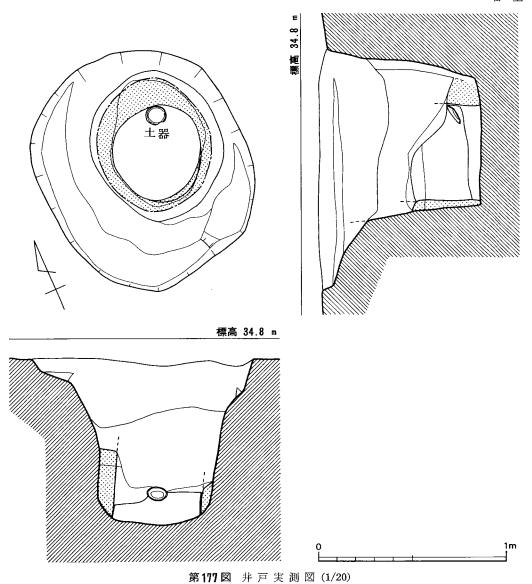
第176図 出土石器実測図 (1/2)

(2) 歴史時代の遺構と遺物

Aトレンチ南側に井戸1基、土壙1基、溝1条(溝2)を、北側で溝2条(溝3・4)を検出し、溝3・4はBトレンチにおいても検出され、西にのびることが確認された。

井 戸(図版106,第177図)

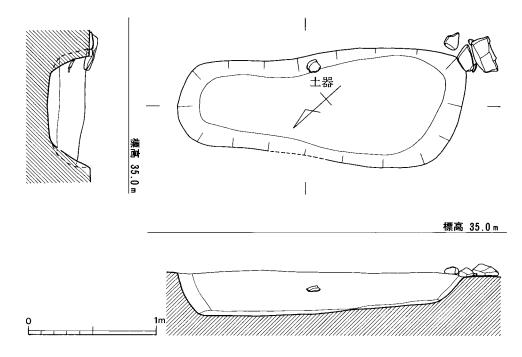
方掘のプランは径1mの円形で、南側の壁上半は剝落している。深さは0.9mで小さな井戸である。井戸枠は検出されておらず底に径50mの曲物が据えられ、高さは20m程残っている。曲物は掘方床面の中心から南にずれて据えられ、砂質土で裏込めされている。床面から10m浮いて曲物に接して土師器杯1点が出土している。埋土中に床面から40m~60cmの範囲に大小の



石が20個ほど検出され、井戸を意識的に埋めたものと思われる。鎌倉時代前後の井戸だと推定される。

土壙墓 (図版105, 第178図)

井戸に南接し、西側の長壁を井戸に切られた状態で検出した。主軸を $S42^{\circ}W$ におき、上端で主軸長2.27m、幅は南側で0.85m、北側で0.65m、を測り、深さは南側で15.8cm、北側で32.9cmを測り、床面は北に向かって低くなる。頭位は南側で、南側短壁で歯を検出している。



第178図 土壙墓実測図(1/30)

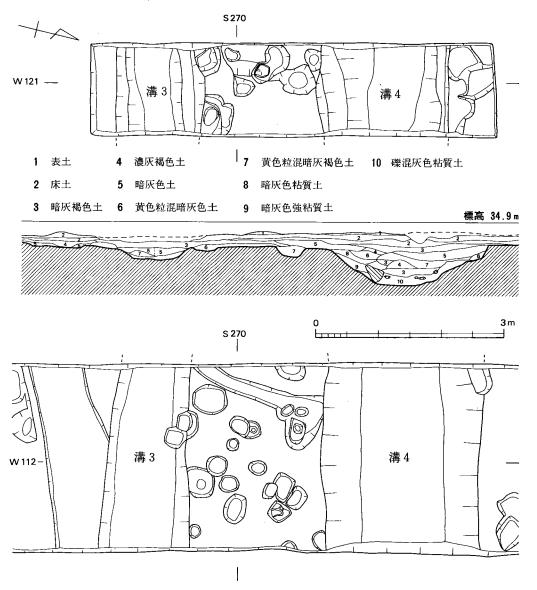
墓壙の壁は傾斜がゆるく、また釘等を検出しておらず、木棺を納めた痕跡はなかった。なお、被葬者からみて右壁に土師器の小皿を検出した。完形品ではなく、出土状況からして副葬品とする可能性は低いと思われ埋めもどす際の混入品だと推定される。この土器から判断して、鎌倉時代までは降らず平安時代後期だと思われる。

溝(図版101, 第179図)

Aトレンチの北に2条,南に1条,計3条の溝を検出した。

- **溝2** トレンチの南側で検出した東西に走る溝で西側で分岐して2本に分かれる。幅50cm, 深さは西側で8.7cm, 東側で16.3cmを測り, 溝底は東に向かって低くなる。すぐ西側のCトレンチまでこの溝はのびておらず,途中で消えるか流路を変えているものと推定される。鏡片が出土しているが溝の時期を判断できる土器は出土していない。
- 溝3 トレンチの北側で検出した東西に走る溝で、幅 $1.4\sim1.1m$,溝底の標高は西側で34.31m, 東側で34.29mを測り、溝底は東に向かって低くなる。この溝は7m西側のBトレンチにも検出し、幅1.6mで溝底の標高は西側で34.305m, 東側で34.284mを測り、やはり東へ向かってわずかながら低くなっており、この溝の流れの方向は西から東へ向かっていたと思われる。この溝は両トレンチの西及び東へさらに続くものと解される。

溝4 溝3の2.2m北で検出した東西に走る溝で、幅2.5mを測る大溝である。西側のBトレンチでもこの溝の続きを検出し、幅2mを測り、西側では幅が0.5m程狭くなっている。Aトレンチでの溝底の標高は東側で33.95m、西側で33.92mを示し、Bトレンチでは33.96mで高低差はほとんどない。溝のわずかな部分の高低差で流れの方向を決めるのは危険を伴うが、この溝は溝3とは逆に東から西へ向かって流れていた可能性がある。溝からの出土遺物は、埋土下層から弥生式土器片が、中層から歴史時代のものと推定される支脚が出土している。



第179図 溝 3 · 4 実 測 図 (1/60)

番上

上記の3条の溝はその使用時期を推定し得る遺物に乏しいが、同一の面で検出したピット埋土中や、井戸などから糸切り底の土師器や小皿片が出土しており、おそらく鎌倉時代に使われた溝であろうと推定される。

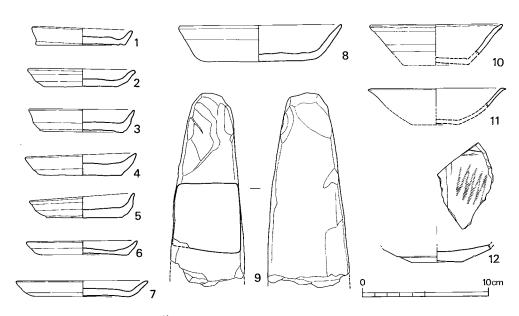
ピット群

建物としてまとまるものはないが、各トレンチで多数検出した。特にCトレンチでは、ピットを検出した面よりやや浮いた状態で完形品かそれに近い状態で多量の土師器の小皿・杯を検出し、他に破片であるが摺鉢、石鍋、中国からの輸入陶磁器が出土している。これらは、遺構に伴うものではなく、その性格については不明な部分が多いが、あるいは廃棄されたものかもしれない。

出土遺物 (図版108~109, 第180図)

小 皿 $(1\sim7)$ $1\sim5$ は口径 8 $cm\sim8.5$ cm, 6 は口径 9 cm を測り,器高は 6 が1 cm で浅く, $1\sim5$ は 1 $cm\sim1.8$ cm を測る。器高の差は土器の深さに対応するものではなく,深さは総じて 1 cm 前後で,底部の厚いもの程,器高は高くなる。 6 個体とも C トレンチ出土で底部は糸切り底で,内底面はナデ,他はヨコナデによる調整を行っている。焼成は良好で,淡茶色~淡茶褐色を呈する。

7 は土壙墓で検出した小皿で、復元口径10.5cm、器高 1.3cm を測る。底部はヘラ切りで簾状



第180図 出土土器実測図 (1/3)

圧痕が残る。調整は内底面はナデ,他はヨコナデである。淡茶色を呈し,焼成は良好である。 太宰府出土の小皿と対比すれば, $1 \sim 6$ は鎌倉時代前期,7 は平安時代に溯ると思われる。

杯(8) 井戸の底から10cm程浮いて出土した。ほぼ完形で、口径13cm,器高3cmを測る。 底部は糸切り底で、内底面はナデ、他はヨコナデによる調整を行っている。焼成は良好で淡茶 色を呈する。鎌倉時代前期のものと考えられる。

支 脚 (9) 溝 4 埋土中層から出土した。 断面は $1 \ 20.5 \ cm \sim 5.5 \ cm$ を測る方形で,大部分を欠失するが,現存高 $15.5 \ cm$ を測る。 胎土に多量の砂粒を含み,淡茶色を基調とするが,部分的に煤が付着し,二次的な火をうけて汚れた赤白色を呈する部分がある。

陶磁器 (10~12) Cトレンチから青磁7片(同安窯系青磁4片, 龍泉窯系青磁3片), 白磁2片, 青白磁1片が先述の土師器類と共に出土した。

10は皿の小破片で復原口径 10.2cm, 推定器高8.2cmを測る白磁である。口唇部内外は露胎で 釉はやや灰色を帯びた白色に発色している。体部外面下半はヘラ削りを行っている。

11は皿の小片で復原口径11cm,推定器高 2.9cm を測る青白磁の皿である。口縁部端は外側に折り曲げられ、上に面を持つ。釉は淡い青白色に発色している。

12は同安窯系青磁皿の底部片で、内底面に櫛によるジグザグ文とへラによる片彫りの文様が施されている。体部外面下半に一条の沈線が巡る。現存する体部外面はヘラ削りを 行っている。胎土は灰白色の粗いもので、全面施釉後、底部外面の釉をカキ取っている。釉は同安窯系青磁特有の黄色味の強い飴色ガラス質のものである。 (児玉)

鏡 片(図版107-2,第181図1)

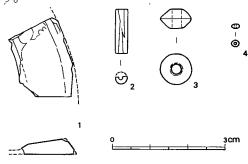
銅鏡片がS288-W110の溝2から出土した。溝2は平安末から鎌倉時代の小溝であるから混入品である。鏡は縁の細片であり,鏡縁端も欠損しているので確実ではないが,直径12cm前後に復原できる。鏡縁は素文で斜縁をなす,斜縁幅9.8 mm,厚さ2.8~4.2 mmに計測できる。表面が剝離しているところが多いが,漆黑色の部分もあり舶載鏡である。鏡の年代は,素文で斜縁をなすことから後漢末から三国初期のものであろう。

玉 類(図版107-2,第181図2~4)

番上II-3出土の玉類は,3個共弥生後期の 1号住居跡床面で発見された。

2 は淡緑碧玉製管玉である。縦に割れた長さ 11.95㎜,径 3.5㎜,孔径 1.3~1.5㎜の大きさ で,両側穿孔の様子が明瞭である。

3は白色に風化した鉛ガラス製算盤玉であ



第181図 鏡片・玉類実測図(実大)

仲 田

る。風化して表面が剝離しているため正確な計測値は出せないが,径8.3 m,厚さ5.1 m,孔径3.4 mの大きさ。

4 は青色ガラス小玉である。径1.85~2.0mm, 厚さ1.2mm, 孔径0.65mmの微小小玉で, 半透明の優品。少し大きければ、紺色となるものであろう。

1号住居跡は、時期を確定できる土器が発見されていないので、白色に風化する鉛ガラスが 弥生後期まで使用されたとすべきである。 (柳田)

第5節 仲田・柿木地区の予備調査

1 はじめに

仲田・柿木地区は、昭和49年の予備調査から昭和52年度までに、仲田 I-6のトレンチ、I-14の甕棺墓・石棺墓群,I-16の住居群,II-4の予備調査、柿木-3の予備調査、11の甕棺墓・土壙墓群の調査を実施してきた。今回は、昭和49年度の予備調査である仲田II-4と柿木-3のトレンチを報告する。

両地区の予備調査は,橋口達也が担当し,平島勇夫が補助した。

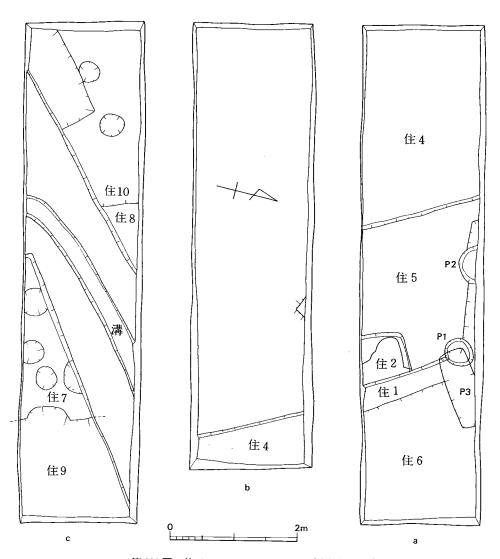
2 仲田Ⅲ-4トレンチ (図版110-1・2)

仲田 $\Pi-4$ トレンチは 2×8 mのトレンチ3 個を連接して発掘した。遺構を確認した段階で図・写真撮影等のために若干掘下げたのみなので実体不明な点が多いが,住居跡と考えられるものを $1\sim10$ 号,柱穴・土壙墓をP1 \sim P3と便宜的に命名した。中央のトレンチでは遺構の重複が繁雑をきわめ面を正確に確認するにいたらなかった(第182図)。いま調査の所見をまとめると次表のとおりになる。

	遺構の性格	発掘の深さ	出土土器の時期	時期の推定
1号 2号	方形住居跡 "	約 10cm 約 5 cm	終末,6号のものと思われる中期 土器数点を含む 中期壺片を含む	終末中期
3号	<i>"</i>	約 3 cm		?
4号	"	約 5 cm	終末,中期土器を若干含む	終末
5号	?	未 掘		中 期
6号	方形住居跡	未 掘		中期

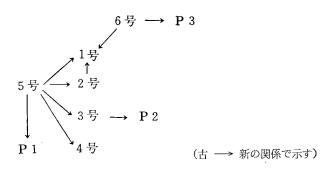
表8 仲田Ⅲ一4出土遺構一覧表

7号	"	約 5 cm	終末と中期を含む	終 末
8号	"	約 5 cm	終末,中期土器が一部まざるが10 号のものと思われる	終末
9号	?	未 掘	100000000000000000000000000000000000000	中期
10号	方形住居跡か	未掘		中期
P 1	柱穴			
P 2	柱穴			
Р 3	土壙墓と考えられる。	未 掘		
		<u> </u>		

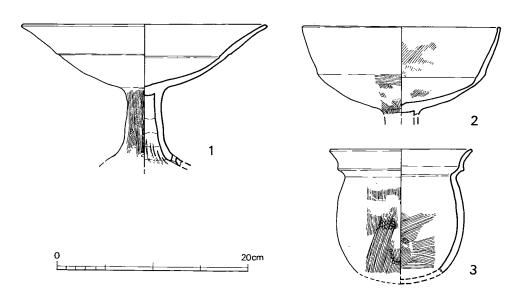


第182図 仲田Ⅲ—4 a b c トレンチ実測図 (1/60)

又切合い関係は次のとおりである。



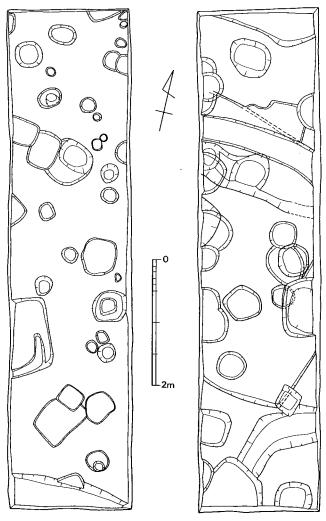
出土遺物は遺構を完掘していないので、ほとんどが遺離上面の包含層出土のものであるが、 図示するに耐えないような小片が大部分である。中期後葉~末の土器と弥生終末の土器 が多い。特記すべきは、遺構を面として把えるにいたらなかった中央のトレンチのほぼ中央にあたる部分で、一般的には弥生終末と考えられている高坏(第183図1)、土師器と考えられている高坏(第183図2)、二重口縁壷(第183図3)が伴出しており、問題となる弥生終末期の土器と土師器の分類にせまり得る遺構の存在が期待できた。この点については第2次調査以後の仲田地区の調査成果に待ちたい。



第183 図 仲田Ⅲ一4出土土器実測図 (1/4)

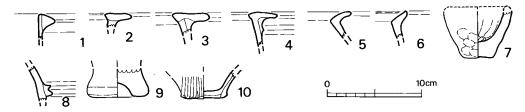
3 柿木-3トレンチ

柿木-3では2×8 mのト レンチ2本を南北に設定し、 南側のものを b, 北側のもの をfトレンチとした。 bトレ ンチでは住居跡1棟分と多数 のピットを検出したが, 前期 後半および中期初頭の土器が 若干みられたほかは, 中期後 半~後期前半の土器が主体を 占めた。したがってこの地区 の遺構の多くは中期後半~後 期前半のものである可能性が 強い。住居跡内では,口縁・ 底部など若干の中期初頭の土 器(185図1・9)の混入が みられたが,他は中期後半の 土器と後期前半の土器であっ た。しかしながら住居跡に伴 なうピット内より出土した土 器は中期後半のものであり, 住居跡の時期は中期の可能性 が強い。



第184図 柿木3 fトレンチ実測図 (1/60)

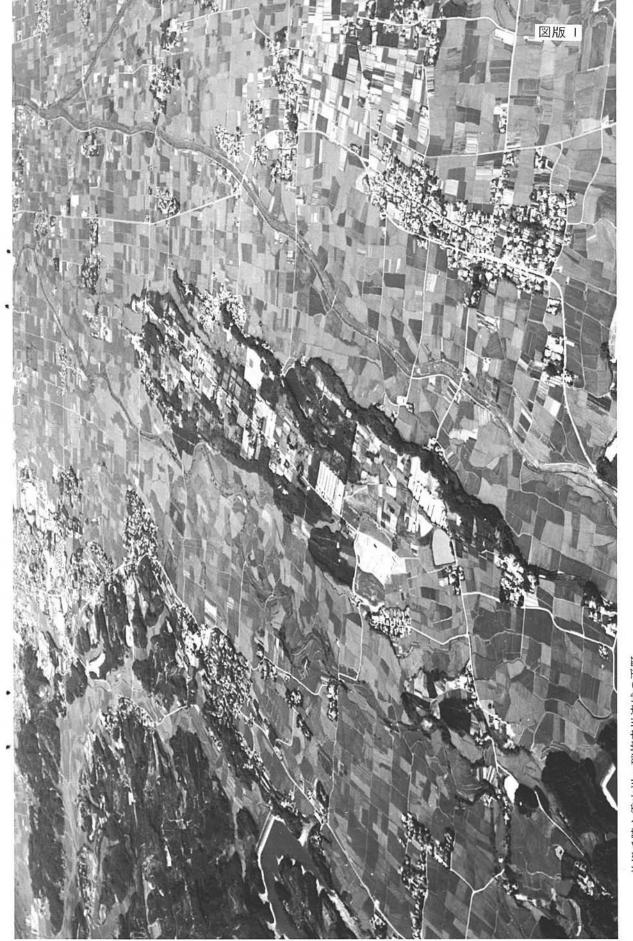
f トレンチでも多数のピットを検出したが、ここでも若干中期初頭のものがみられるが、他はすべて中期後半に属する土器であった。 (橋口)



第185図 柿木3 bトレンチ住居跡内出土土器実測図 (1/4)

- 註1 中村浩編「陶邑Ⅲ」(『大阪府文化財調査報告書』30, 1978)
 - 2 松岡史ほか「福岡県伯玄社遺跡調査概報」(『福岡県文化財調査報告書』36,1968)
 - 3 有光教一「朝鮮磨製石剣の研究」(『京都大学文学部考古学叢書』 2, 1959)
 - 4 「韓国美術五千年展」(朝日新聞社, 1976)
 - 5 註4に同じ。
 - 6 鏡山猛・斉藤忠・森貞次郎ほか「志登支石墓群」(『埋蔵文化財発掘調査報告』4,1956)
 - 7 原田大六「前原町文化財地名表」(1974)
 - 8 註7に同じ。現物は伊都国資料館に展示。
 - 9 飛高憲雄ほか「蒲田遺跡」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』33, 1975)
 - 10 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」(『日本農耕文化の生成』1961) 後藤直ほか「板付」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』35, 1976)
 - 11 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て(→)(二)」(『考古学雑誌』7 − 10・11, 1917)
 - 12 渡辺明夫「唐洲加志々遺跡」(『対馬』長崎県文化財調査報告17, 1974)
 - 13 森貞次郎ほか「有田古代遺跡発掘調査概報」(福岡市教育委員会, 1967)
 - 14 註3に同じ。
 - 15 鏡山猛「Ⅲ原始箱式石棺の姿相」(『九州考古学論攷』1972)
 - 16 松岡史「佐賀・福岡県の支石墓」(『考古学ジャーナル』161, 1976) の記載事項再確認。
 - 17 原田大六「福岡県石ケ崎の支石墓を含む原始墓地」(『考古学雑誌』38-4, 1952)
 - 18 原田大六「怡土の歴史」(『怡土小学校創立百周年記念誌』1977)
 - 19 橋口達也「甕棺の編年的研究」(福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』 XXXI, 1979)
 - 20 「竹戸遺跡」(『二丈バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』1980 福岡県教育委員会)糸島郡二丈町所在の竹戸遺跡で検出した弥生時代中期後半の円形住居では、3棟が重複し、古い順に1号住居古(外円410cm・内円205cm・8分割)、1号住居新(同307.5cm・205cm・8分割)、2号住居(同410cm・205cm・6分割)で模式図が作成できた。この報告では、製円と分割のみで、27.65cmの近似値からは言及はしていないが、上記の410cm×は27.65cm×15=414.75cmに近似している。
 - 21 上東・酒津系土器については、岡山県教育委員会の柳瀬昭彦氏から、前者は上東式土器そのものであること、後者は才の町 II 式に近いとの御教示を得た。

図 版



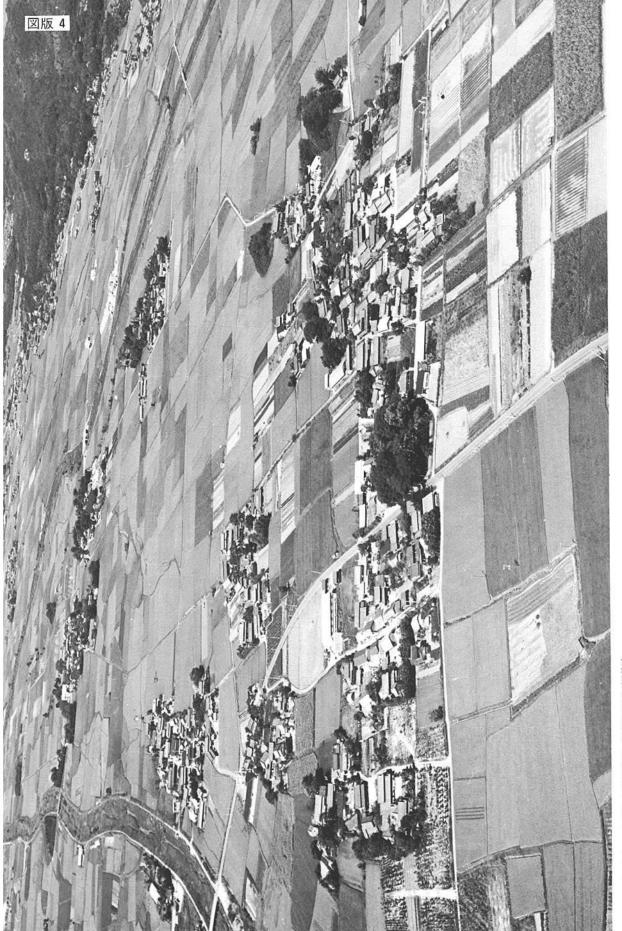
曽根丘陵と雷山川・瑞梅寺川流域の平野



瑞梅寺川・川原川と三雲遺跡($V_{8,000}$) (昭和38年撮影)



端山古墳・築山古墳以北の三雲遺跡(1/4,000)(昭和38年撮影)



南上空から見た三雲遺跡(昭和49年撮影)





I 石ヶ崎支石墓付近 2 石ヶ崎地区トレンチ







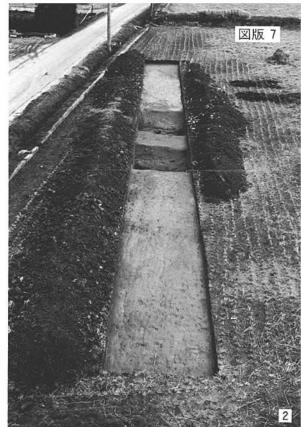


- Ⅰ 大テキⅢ西地区トレンチ(東から)
- 3 三の坪Ⅱ地区トレンチ(南から)

2 大テキⅢ東地区トレンチ(西から)

4 ノマ・マイタ地区トレンチ (西から)

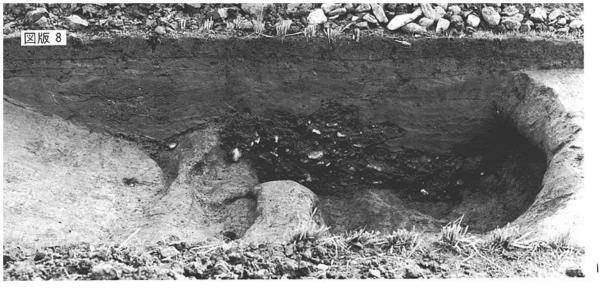




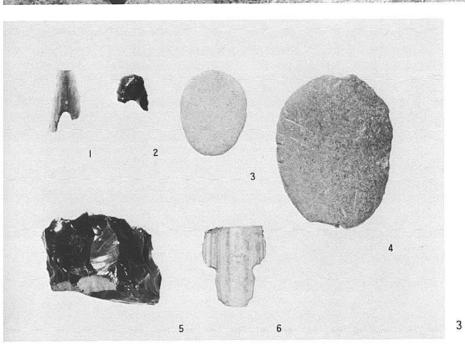


Ⅰ ノマI-16トレンチ(北から) 2 ミソノ18トレンチ(西から)

3 ミソノ18トレンチ検出溝(南から)







- | ミソノ18トレンチ南壁東溝土層断面
- 3 ミソノ18トレンチ溝出土遺物

2 ミソノ18トレンチ北壁西溝土層断面





2

三雲加賀石支石墓→

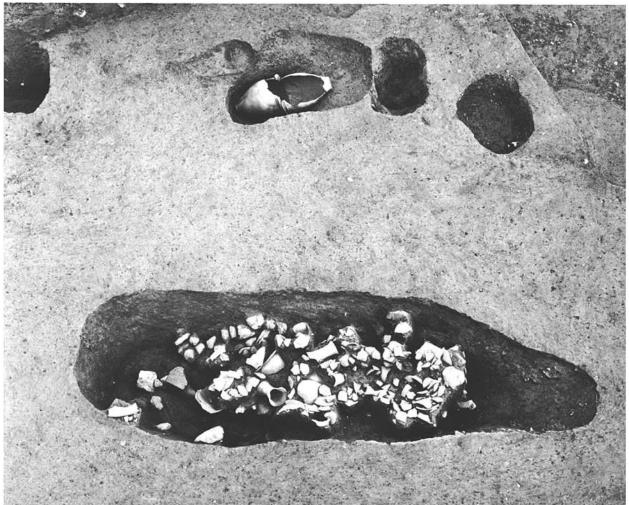
井田御子守支石墓原位置





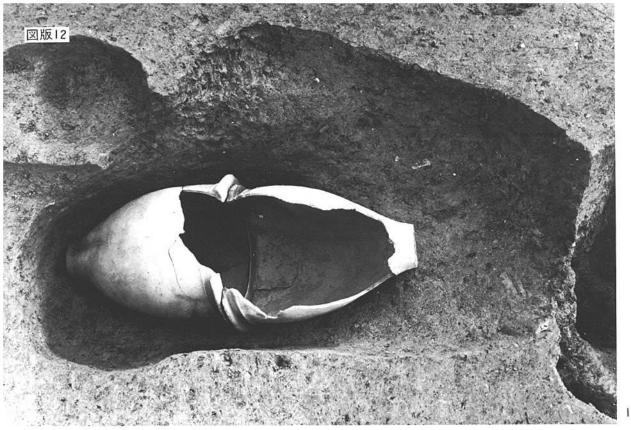
Ⅰ 郡の後Ⅳ-2~4発掘区(東から) 2 同(西から)





Ⅰ 郡の後Ⅳ-2~4弥生前期土壙

2 甕棺と土器溜土壙





Ⅰ 郡の後Ⅳ-2~4小児甕棺墓

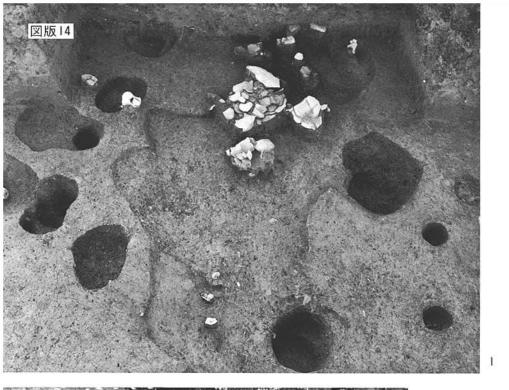
2 甕棺北土器溜土壙下層





Ⅰ 郡の後 Ⅳ -2 ~ 4 2 号住居跡

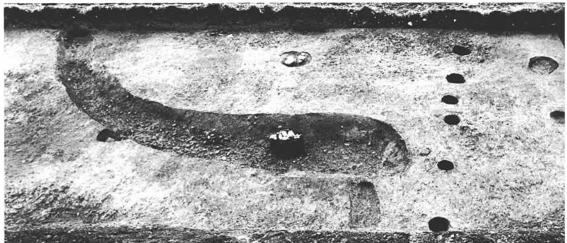
2 3号住居跡の位置





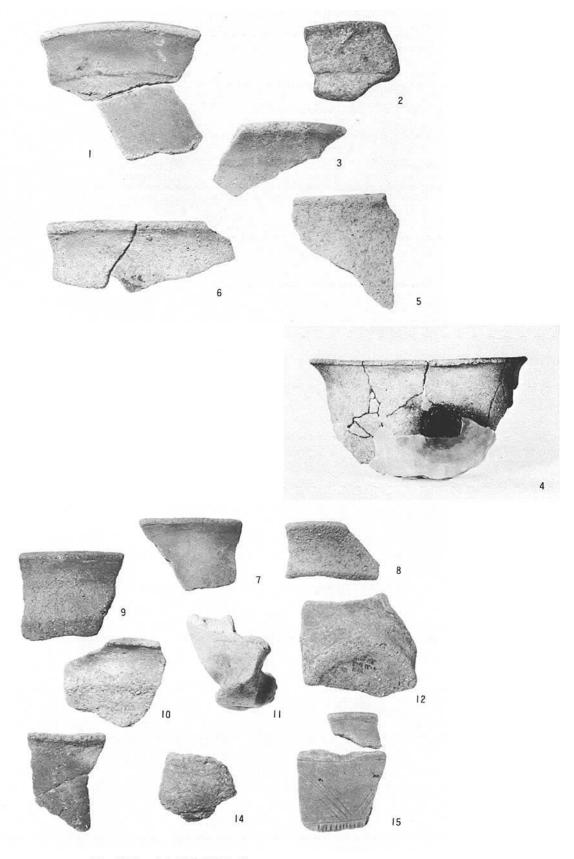
- Ⅰ 郡の後Ⅳ-2~4土器溜
- 2 南北小構



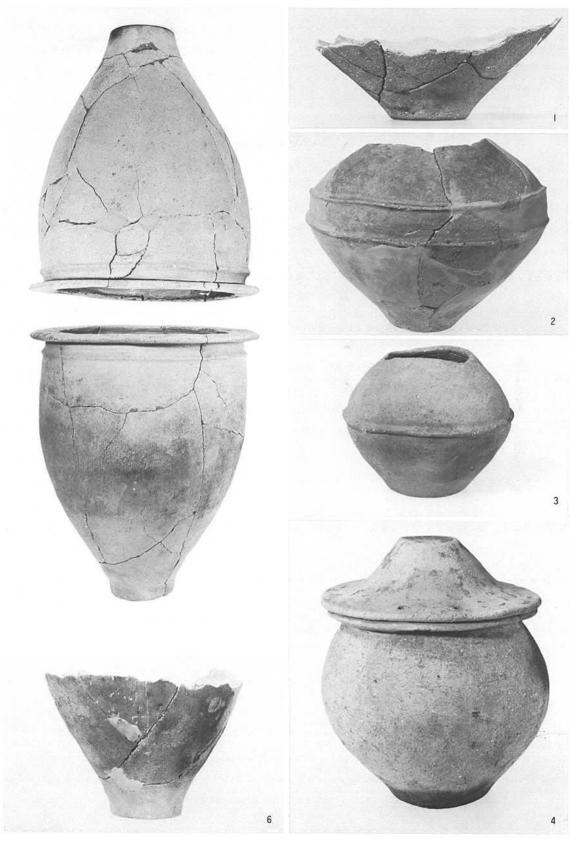




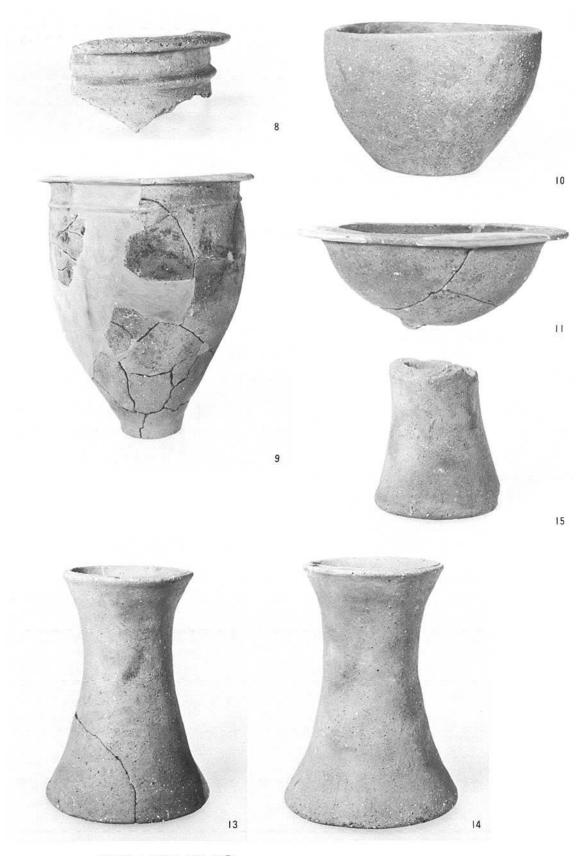
- Ⅰ 郡の後Ⅳ-2~4 1号住居跡 2 周 溝(南から)
- 3 周溝内土器出土状態



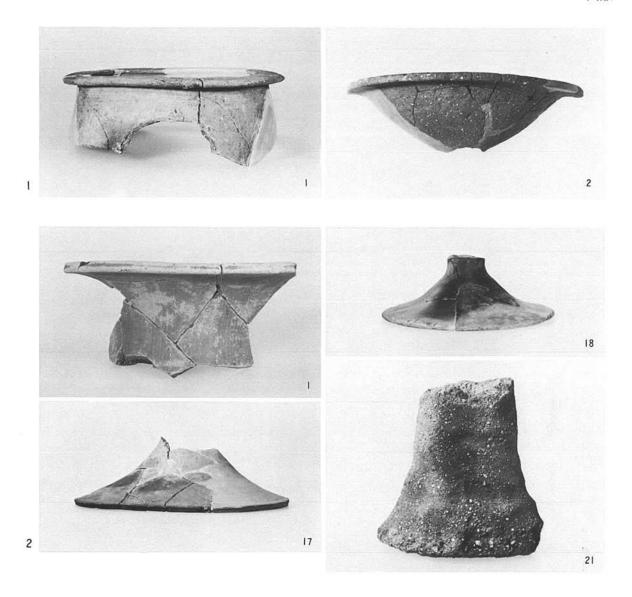
郡の後Ⅳ-4土壙状遺構土器

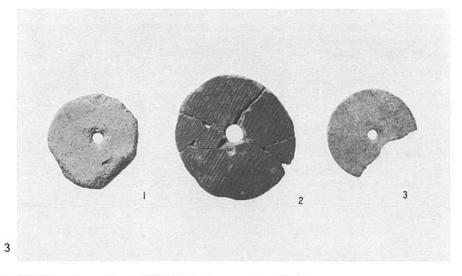


I 郡の後甕棺 2 土器溜土壙土器①



郡の後土器溜土壙土器②

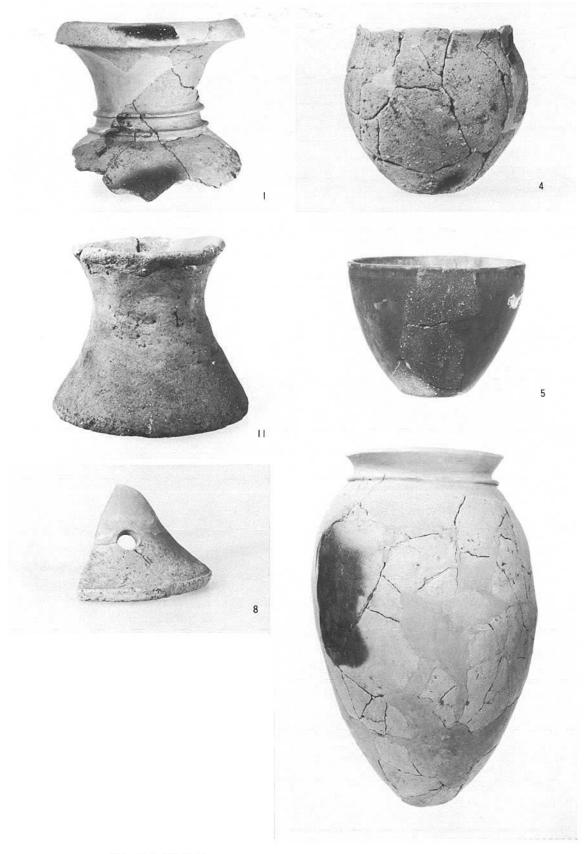




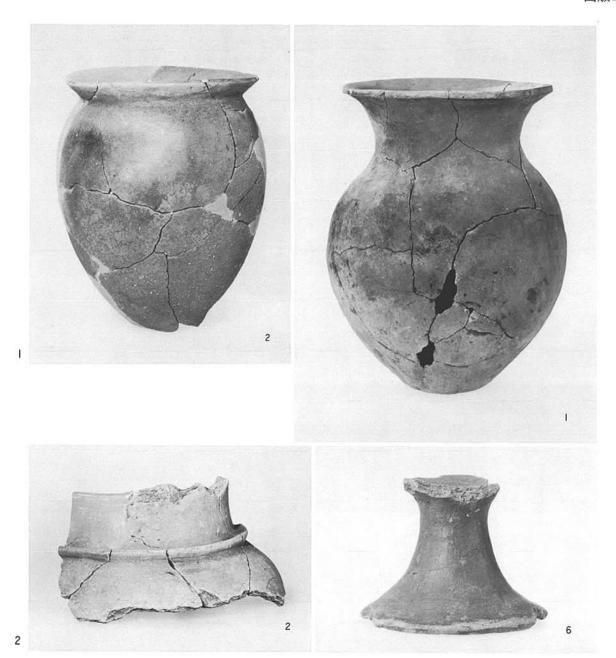
1 2 号住居跡土器

2 3号住居跡土器

3 紡錘車

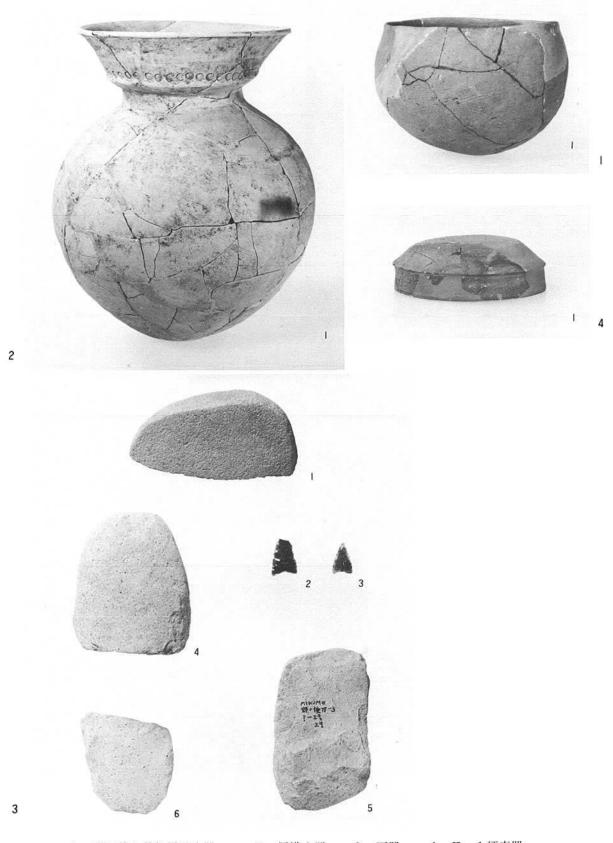


郡の後土器溜土器



1 土器溜土器

2 小溝土器



I 郡の後1号住居跡土器

2 周溝土器

3 石器

4 II-1須恵器





Ⅰ 加賀石 I - 1 支石墓

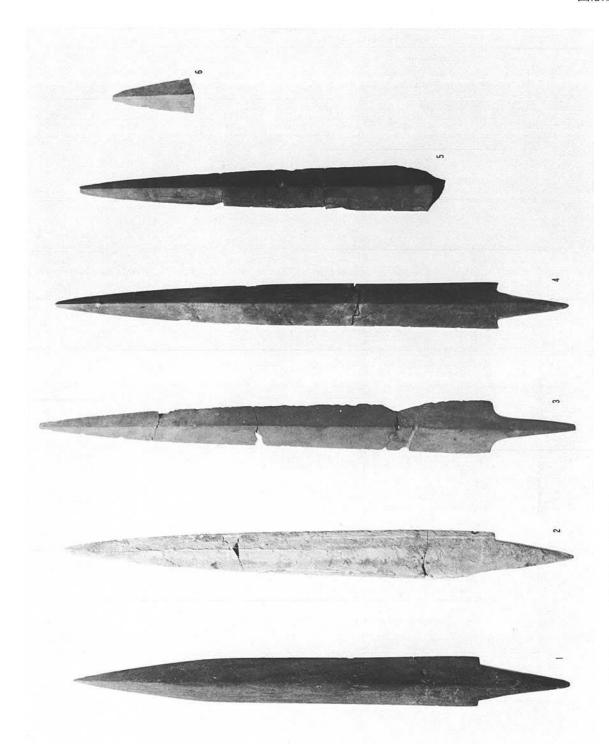
2 支石墓下部敷石土壙と磨製石鏃

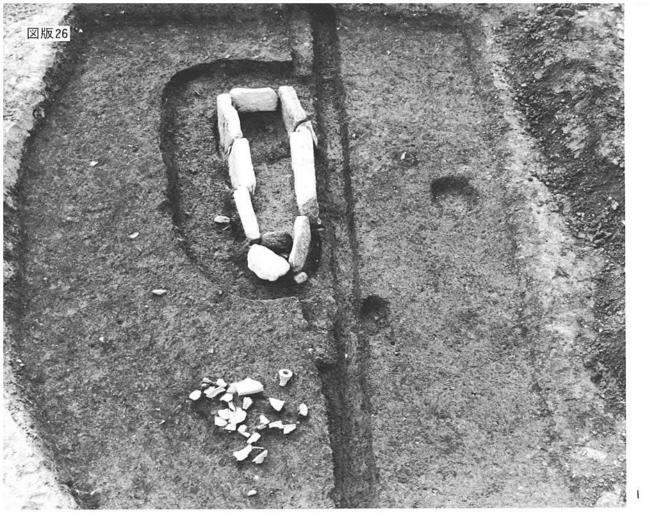


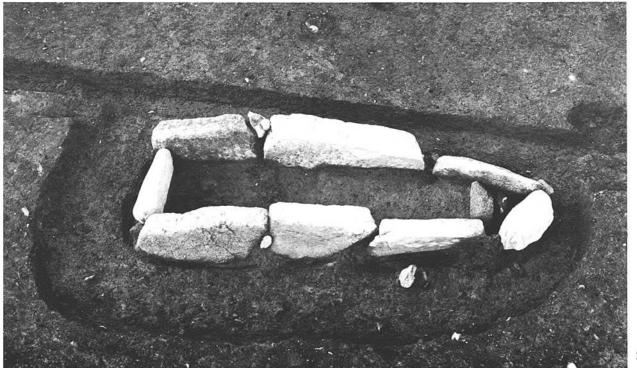


支石墓下部敷石土壙

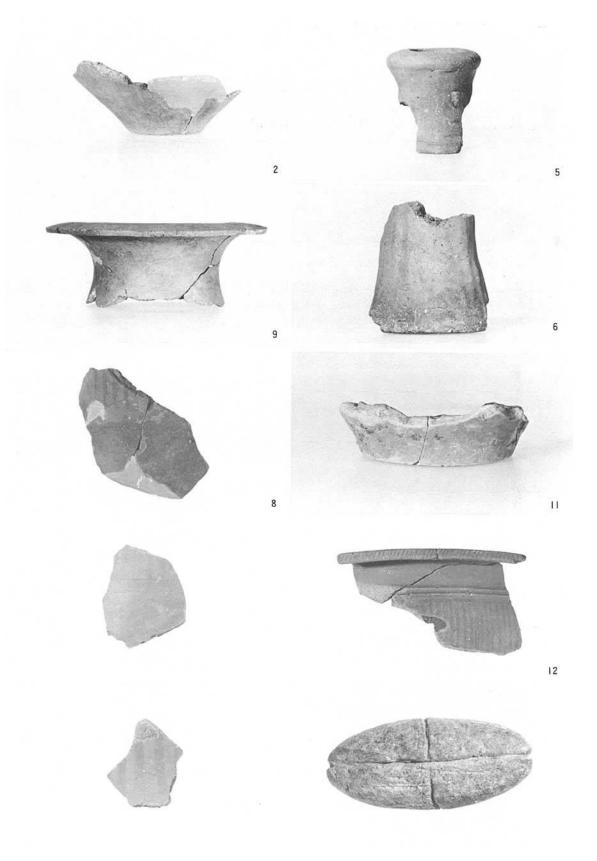
2 磨製石鏃出土状態







Ⅰ 加賀石 I - 5 石棺墓(東から) 2 石棺墓(南から)



加賀石 I - 5 石棺墓周辺土器と石錘

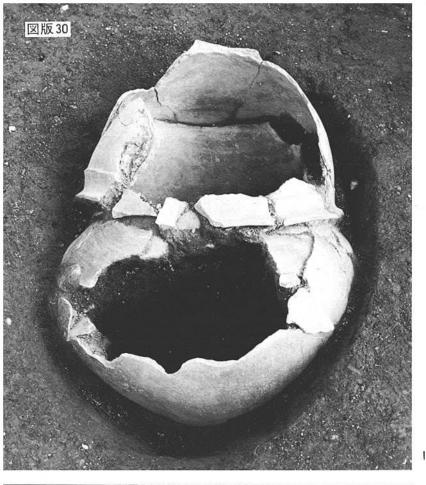
I-10トレンチ (西から) Ⅰ-8トレンチ (東から) 加質石 I - 7 - 10トレンチ (東から)





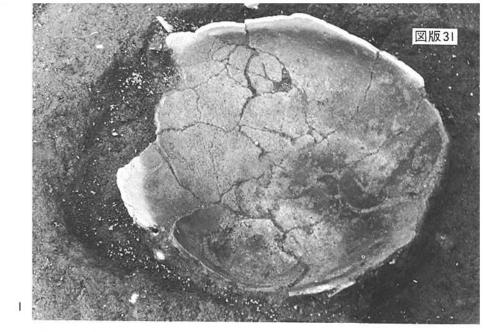
I 加賀石 I −9トレンチ全景(西から)

2 I-9甕棺墓群





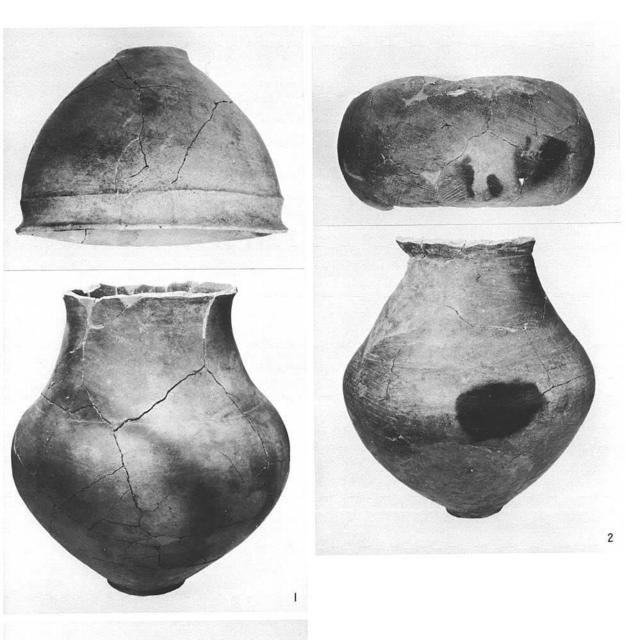
- 1 号甕棺墓
- 2 2号甕棺墓

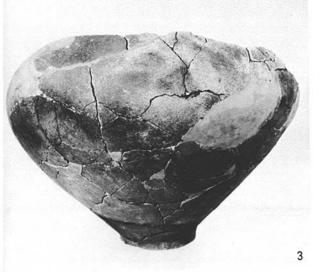




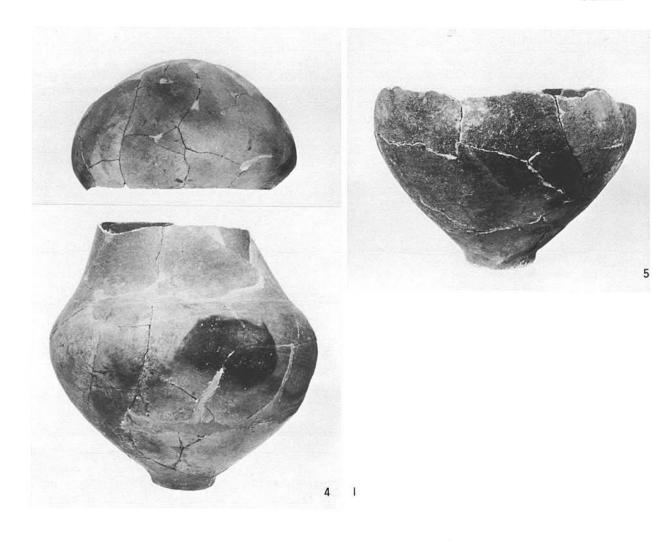
- 1 3号甕棺墓
- 2 4号甕棺墓
- 3 5号甕棺墓

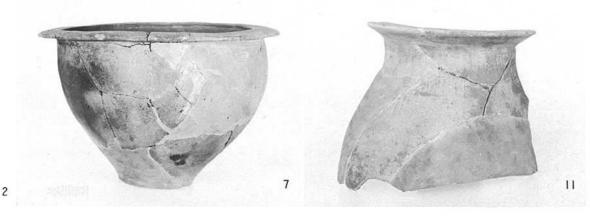






加賀石 I-9 I-3号甕棺



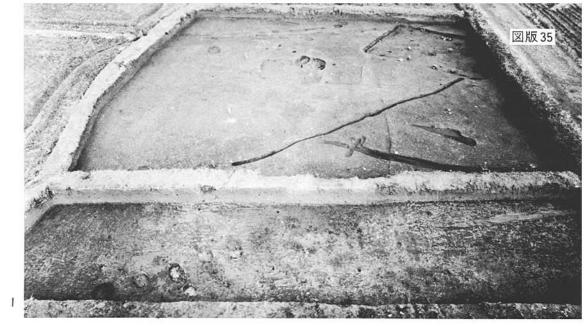


Ⅰ 加賀石 I - 9 4 · 5 号甕棺 2 I -10土器溜土器





I 加賀石 I -23 1 号住居跡 2 1 号住居跡内土器出土状態

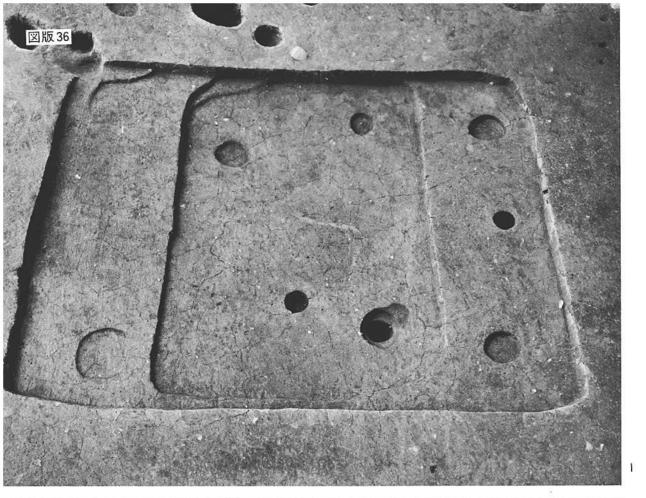




Ⅰ 加賀石 I −22・23 第 3 層遺構全景 (西から)

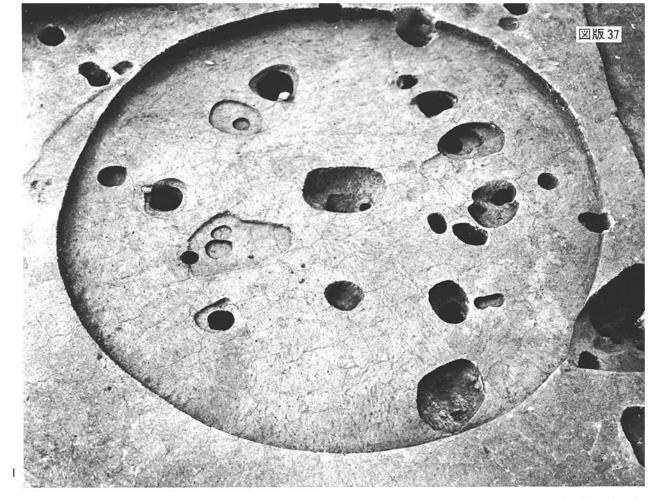
- 2 2 号住居跡
- 3 2号住居跡中央土壙







3 号住居跡 2 加賀石 I -22・23 第 4 層遺構全景(西から)





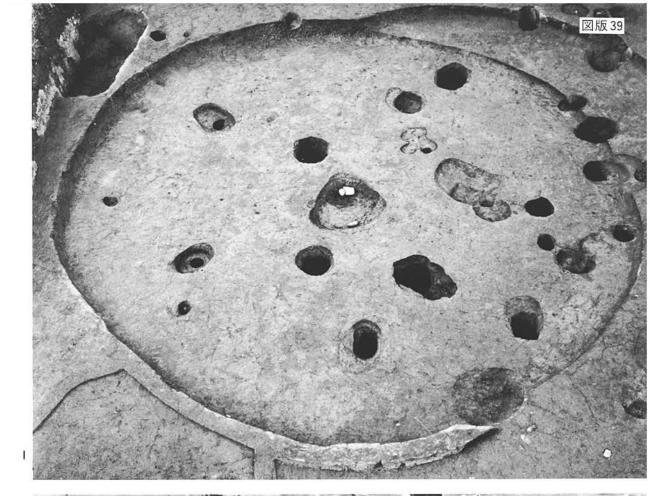
4 号住居跡 2 加賀石 I -22・23第 5 層遺構全景(南東から)





I 5 号住居跡

2 加賀石 I -22・23第5 層遺構全景(西から)





I 6号住居跡

2 7号住居跡





Ⅰ 加賀石 I -22・23第5層遺構全景(東から)

2 8号住居跡



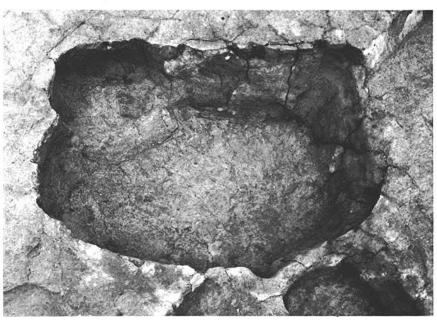


Ⅰ 加賀石 I -22・23第 6 層遺構全景(西から)

2 10号住居跡







- I 10号住居跡柱穴
- 2 11号住居跡
- 3 1号貯蔵穴



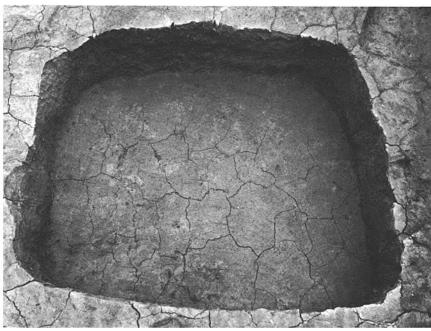




- 1 2号貯蔵穴
- 2 3号貯蔵穴
- 3 4号貯蔵穴

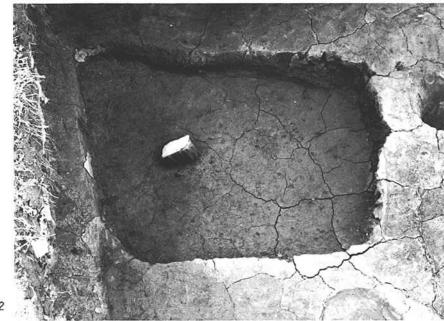




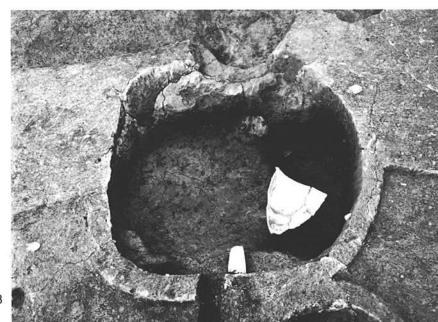


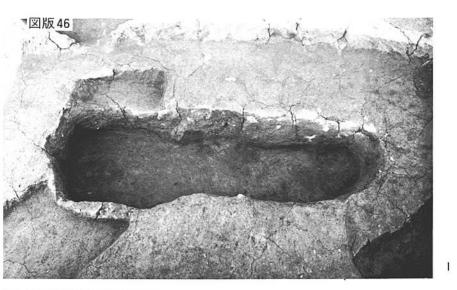
- 1 2・5 貯蔵穴
- 2 6号貯蔵穴
- 3 7号貯蔵穴





- 8号貯蔵穴9号貯蔵穴
- 3 P51





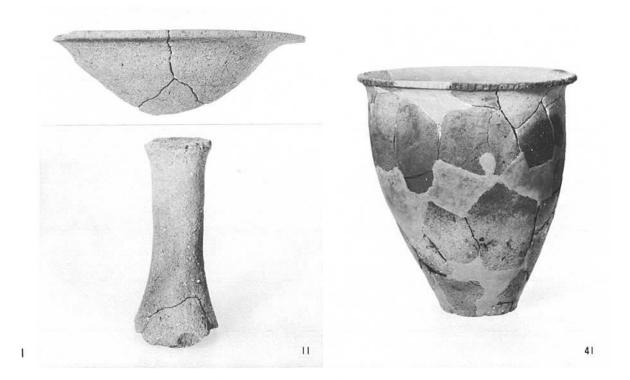


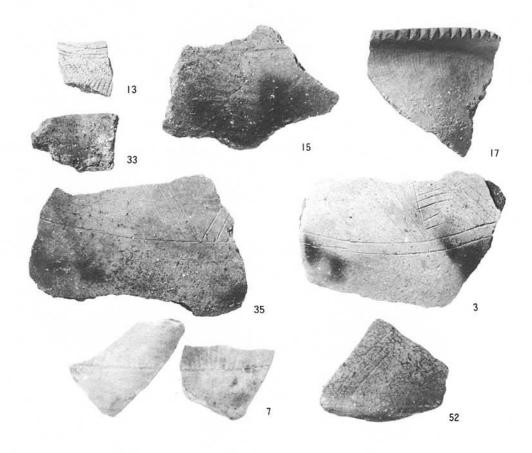


Ⅰ 1号土壙墓

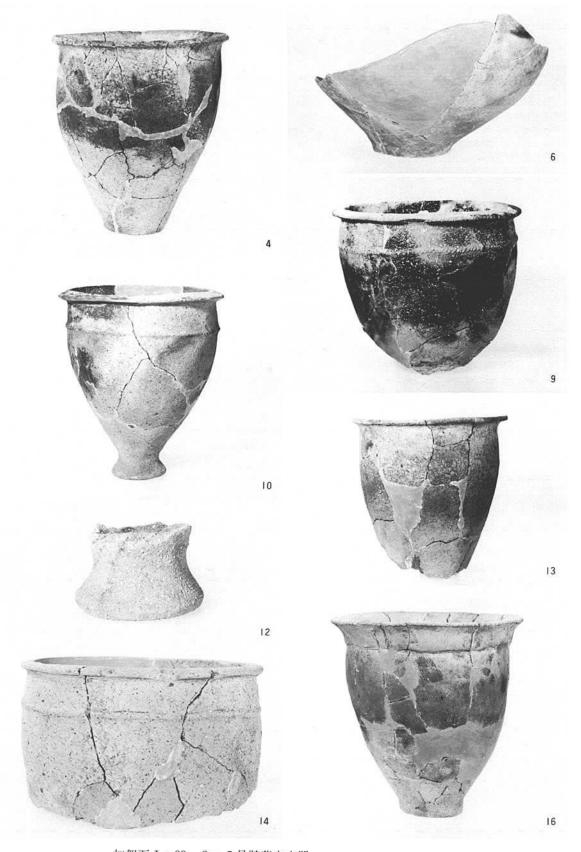
2 号土壙墓

3 P6 · P45

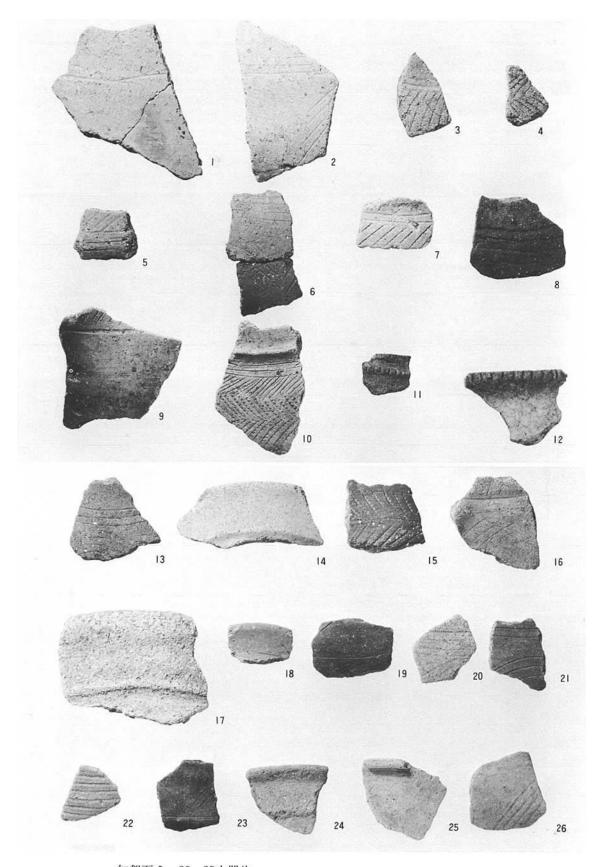




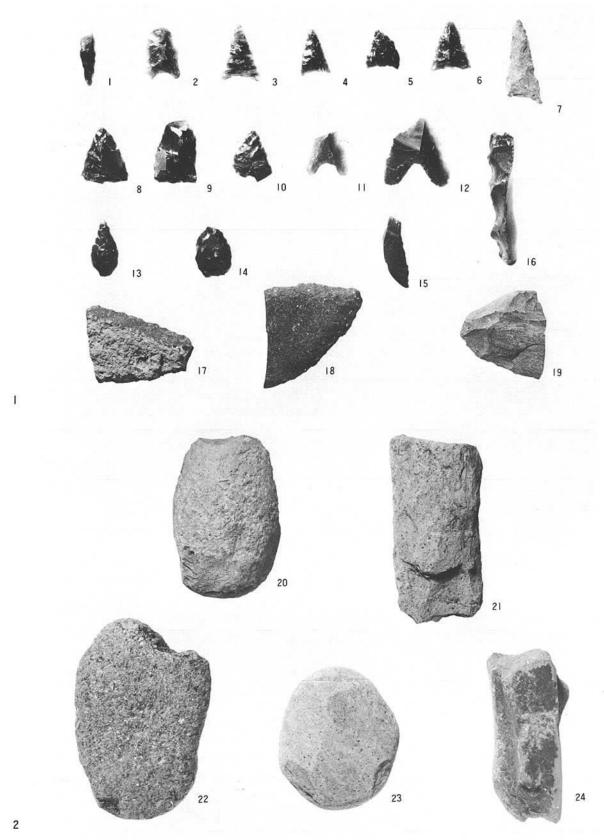
Ⅰ 加賀石 I -23 5 · 10号住居跡土器 2 住居跡·貯蔵穴土器



加賀石 I ~23 2~5号貯蔵穴土器

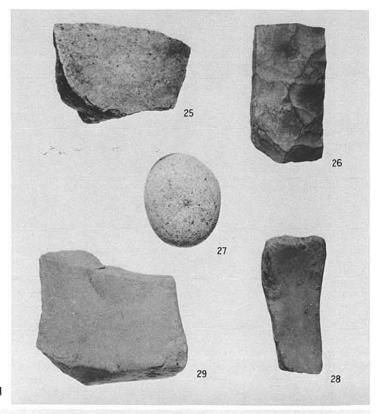


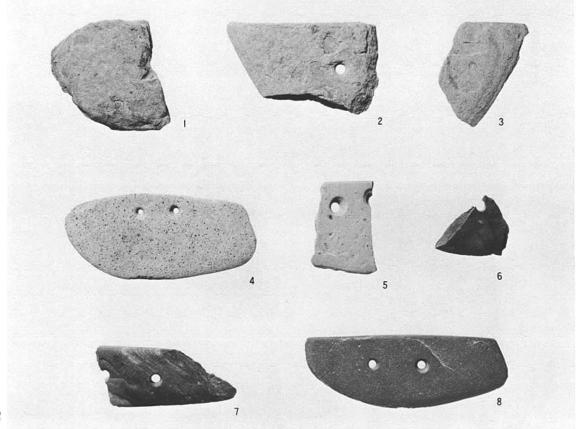
加賀石 I -22·23土器片



1 加賀石打製石器

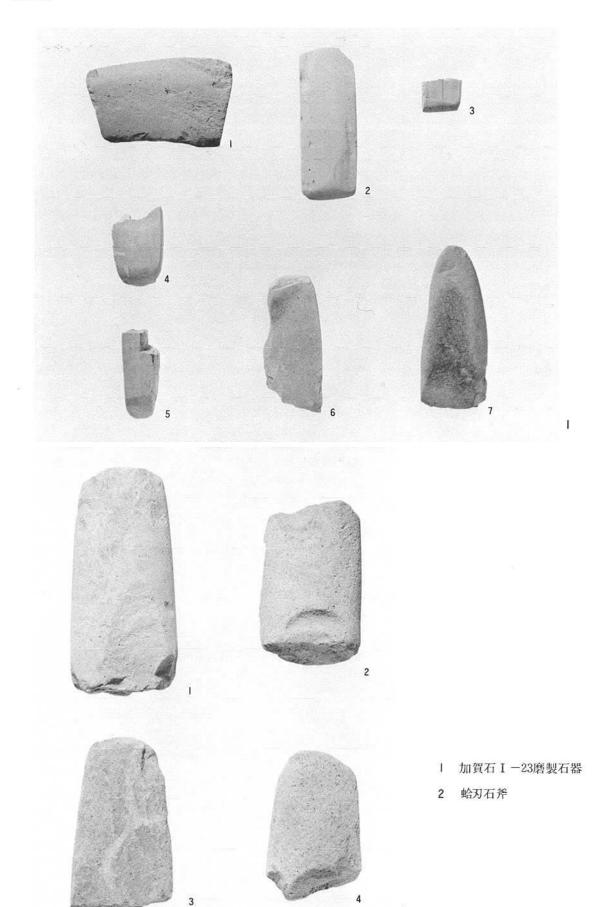
2 加賀石石器

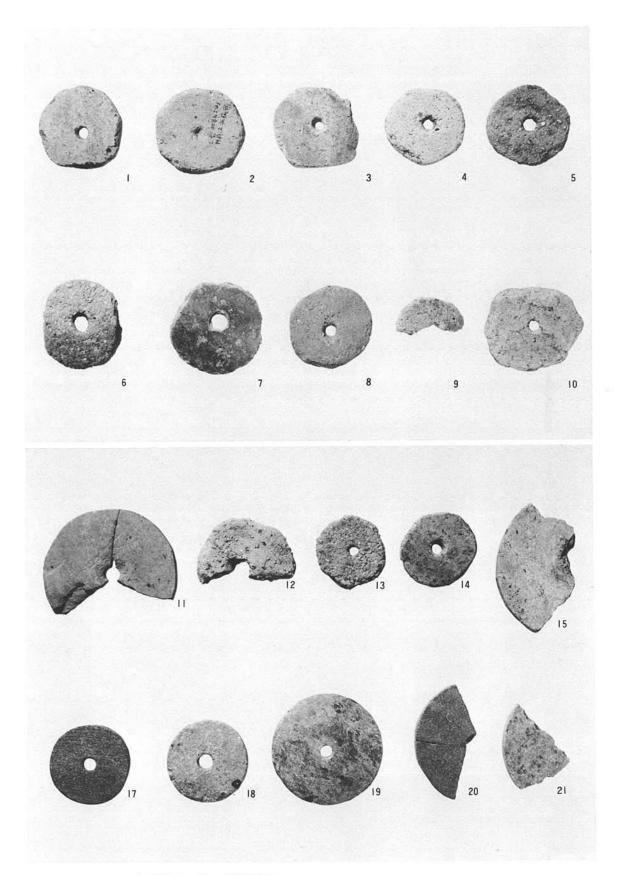




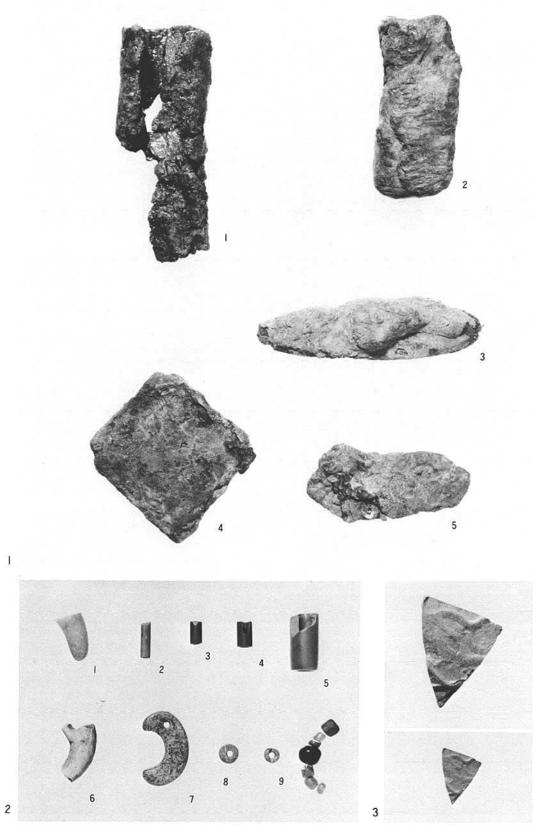
I 加賀石 1 -23石器

2 加賀石 I -23石庖丁





加賀石 I -21~23紡錘車



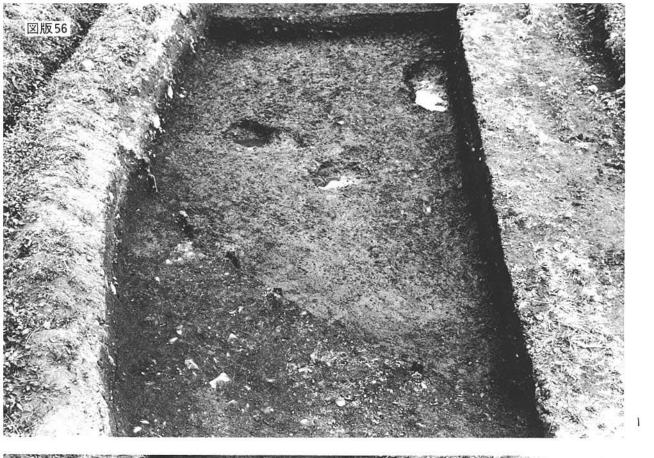
I 加賀石 I −23鉄器 2 玉類 (実大)

3 鏡片 (実大・2倍)





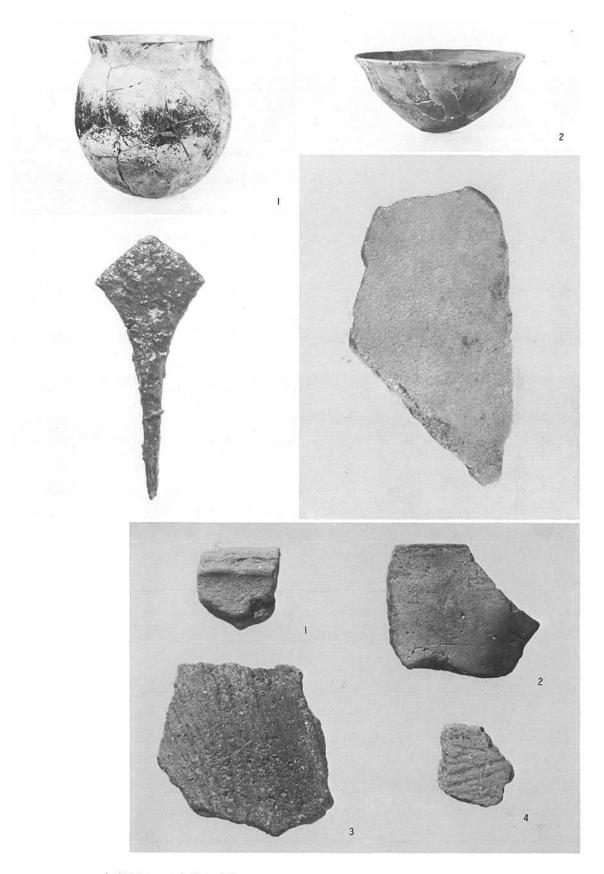
- Ⅰ 加賀石 I −1トレンチ(西から)
- 2 I-1トレンチ(東から)



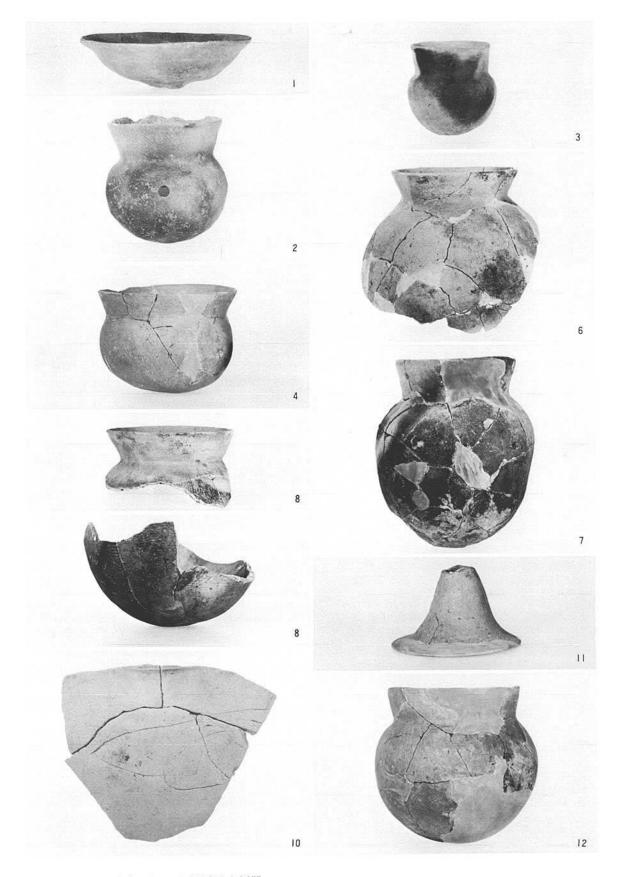


Ⅰ 加賀石 I -1 住居跡

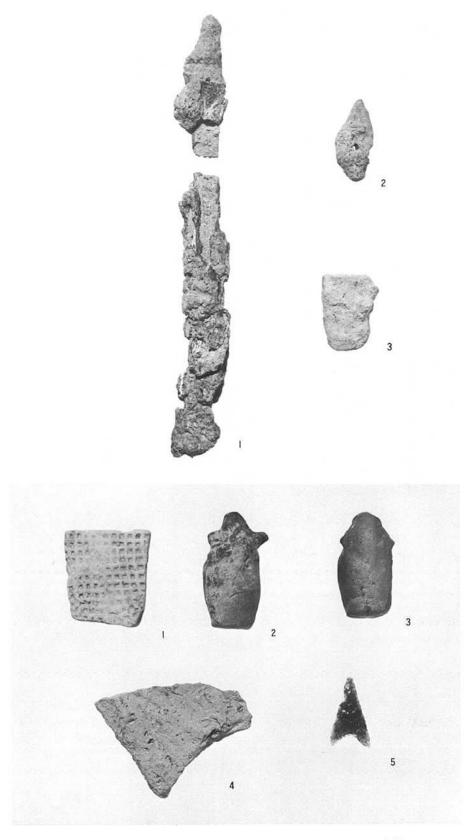
2 I-1土壙とピット



加賀石 I-1 住居跡遺物

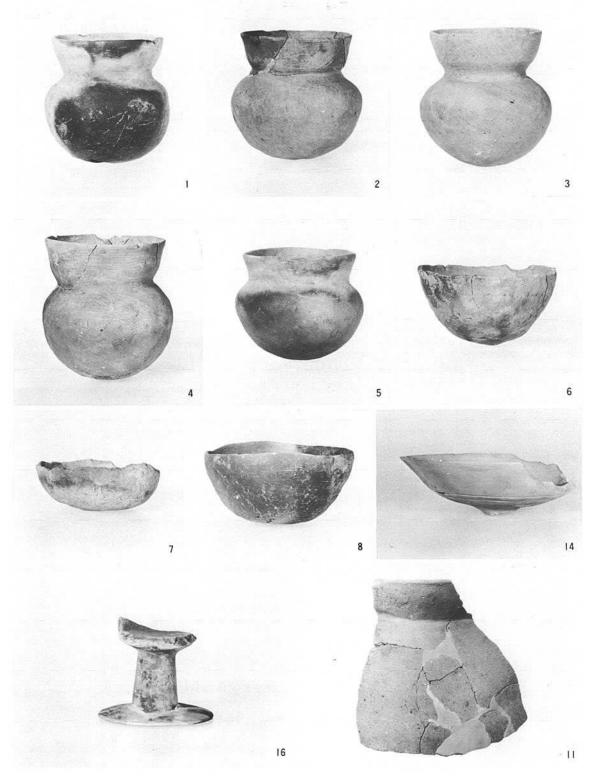


加賀石 I - 8 住居跡土師器

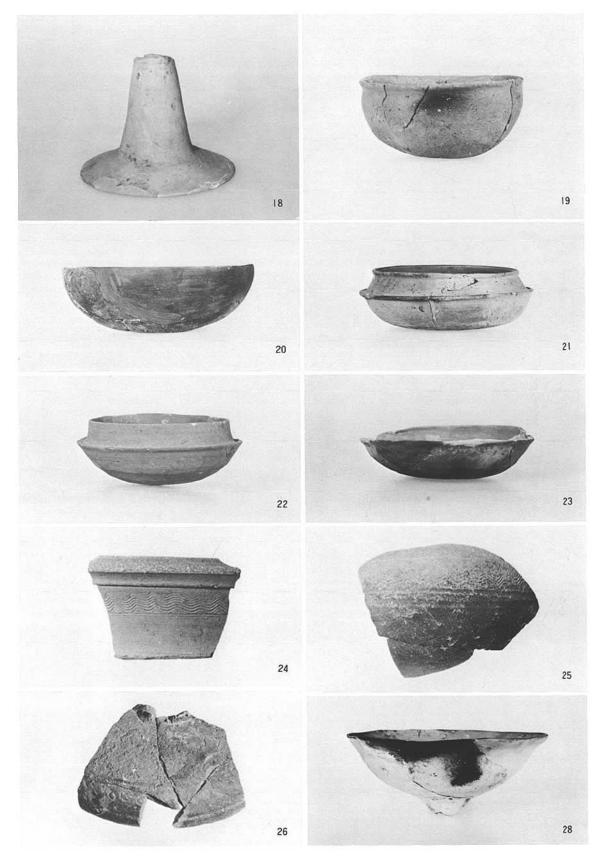


I 加賀石 I − 8 住居跡鉄器

2 I-7~9遺物



加賀石 I -23 1号住居跡土器

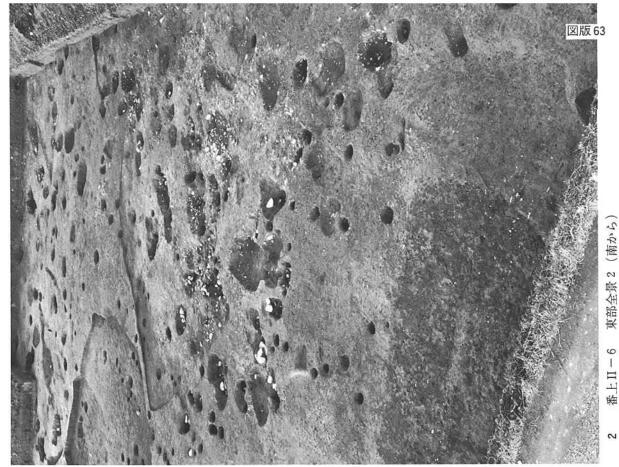


加賀石 I -23 土師器・須恵器





I 番上付近空中写真 1 (南から) 2 番上付近空中写真 2 (東から)





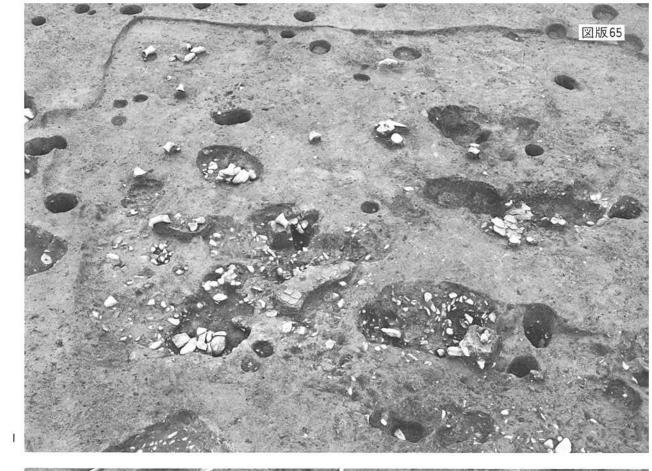
6 東部全景1 (北から)





Ⅰ 番上Ⅱ-6 西部全景1 (西から)

2 番上Ⅱ-6 西部全景2 (東から)





Ⅰ 番上II-6 1号住居跡(南東から)

2 番上Ⅱ-6 1号住居跡 遺物出土状態









- Ⅰ 番上Ⅱ-6 2号住居跡 (西から)
- 3 2 号住居跡土壙

- 2 2号住居跡遺物出土状態
- 4 3号住居跡遺物出土状態



- Ⅰ 番上Ⅱ-6 4~6·10号住居跡
- 2 4号住居跡
- 3 5号住居跡(北東から)



.

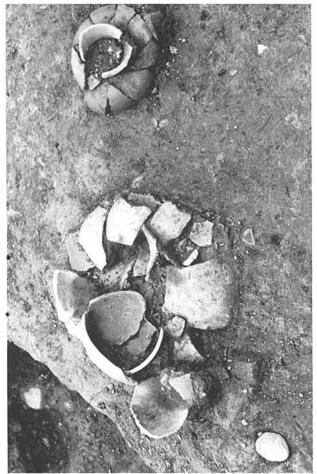


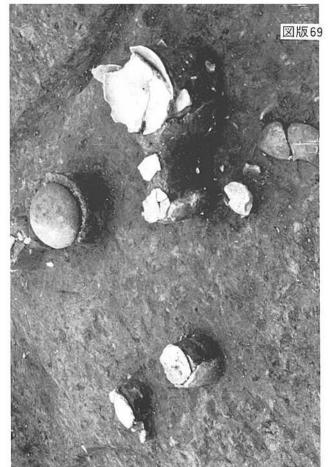




Ⅰ 番上II-6 6号住居跡 遺物出土状態

2 完掘後の6号住居跡(南東から)

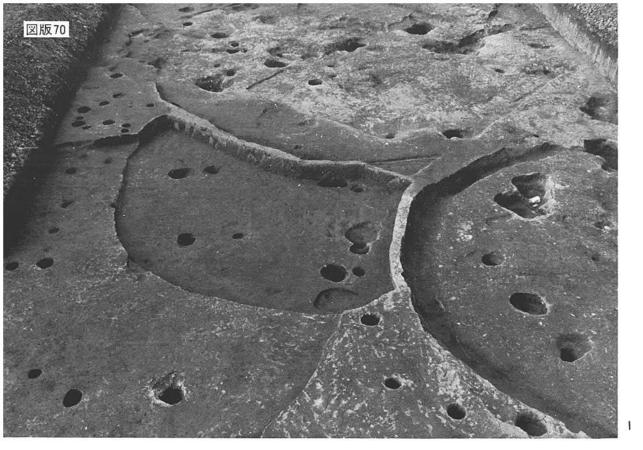






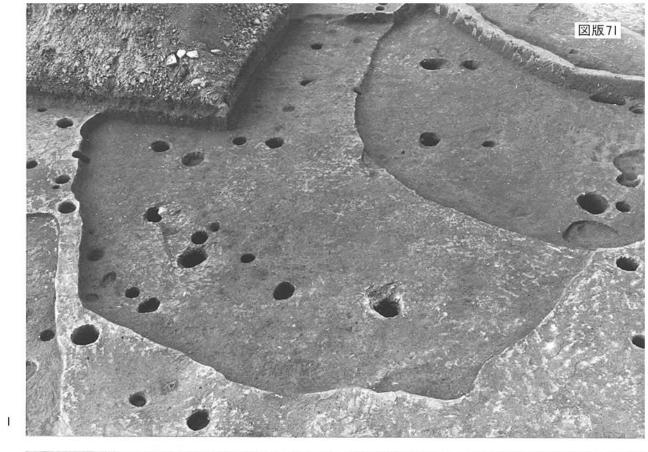


6 号位居跡 滑物出土状態 近号



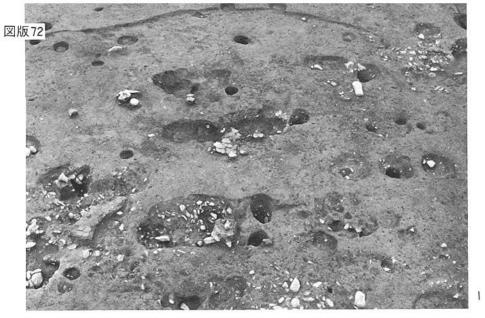


Ⅰ 番上 II - 6 9~14号住居跡(東から)
2 14号住居跡(東から)





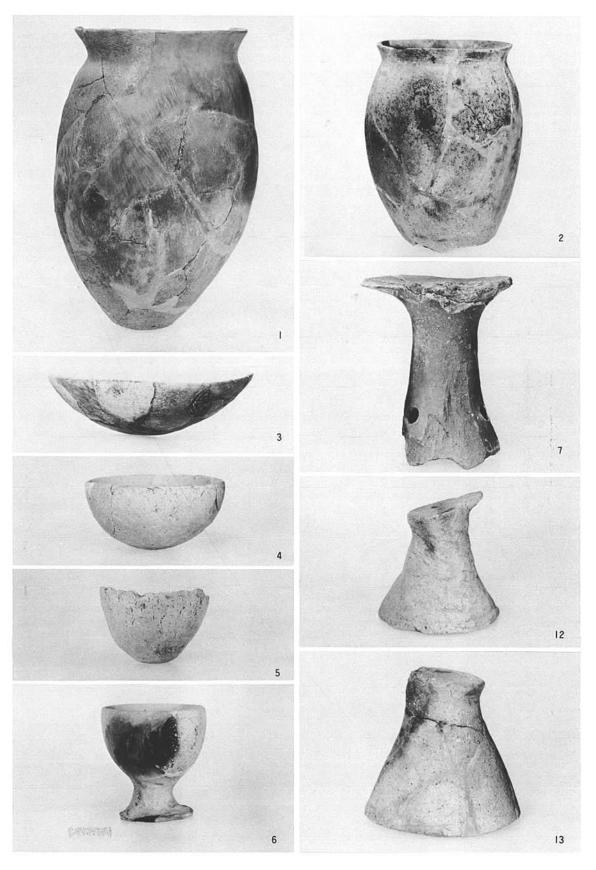
Ⅰ 番上II-6 15号住居跡 (東から)
2 16号住居跡 (南東から)



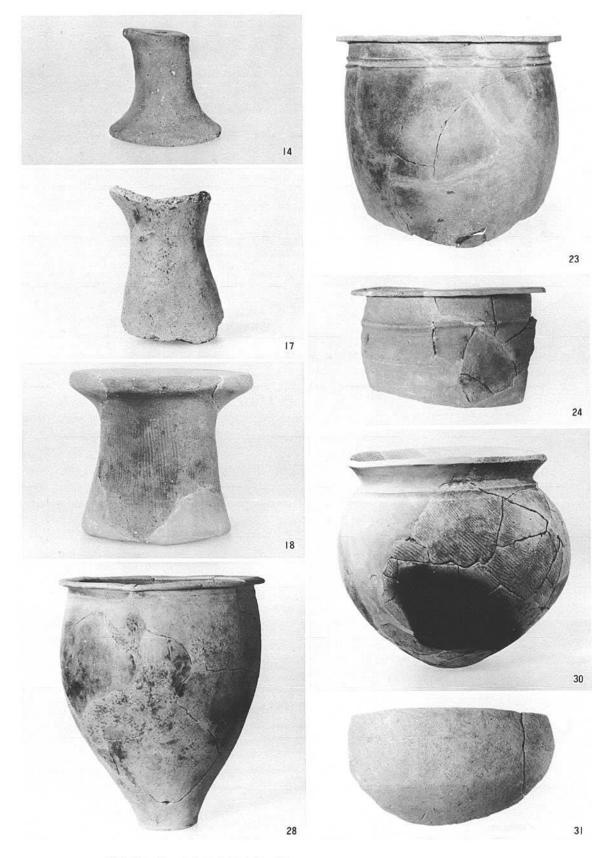




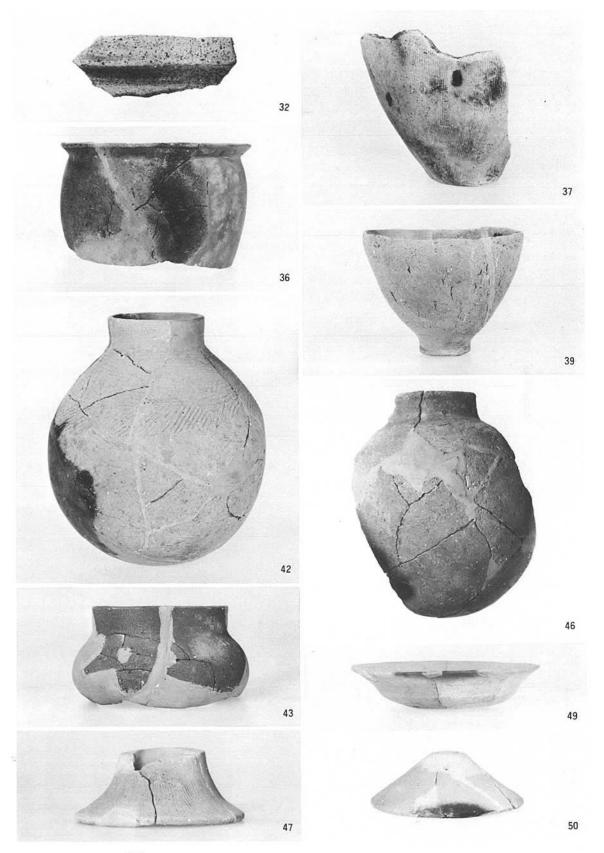
- Ⅰ 番上Ⅱ-6 17号住居跡(南から)
- 2 18号住居跡(南から)
- 3 19号住居跡(南から)



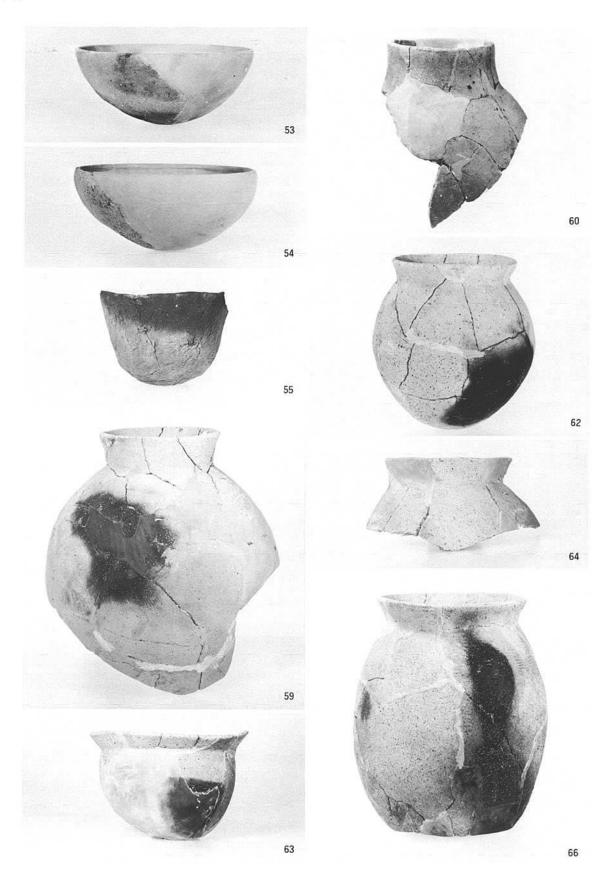
番上II-6 1号住居跡出土土器



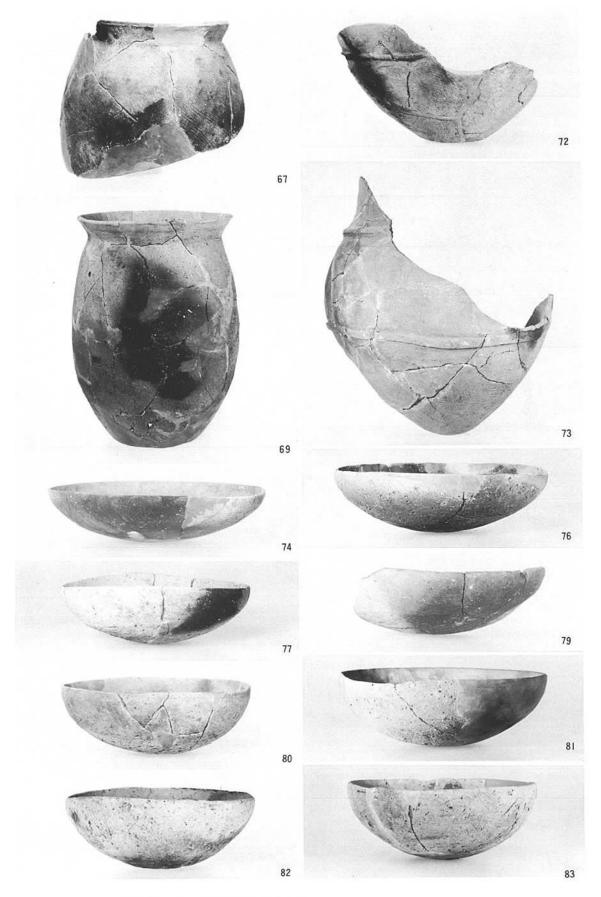
番上II-6 1·2·3·4 号住居跡出土土器



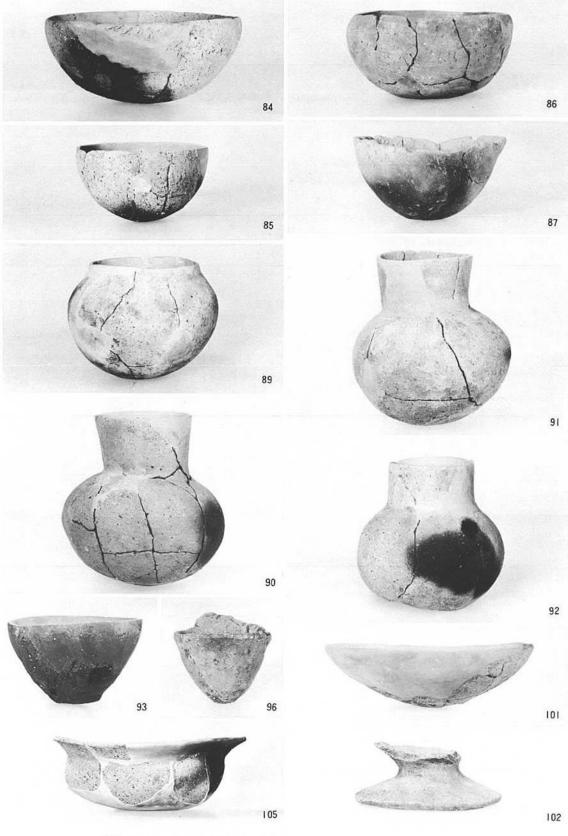
番上II - 6 5号住居跡出土土器



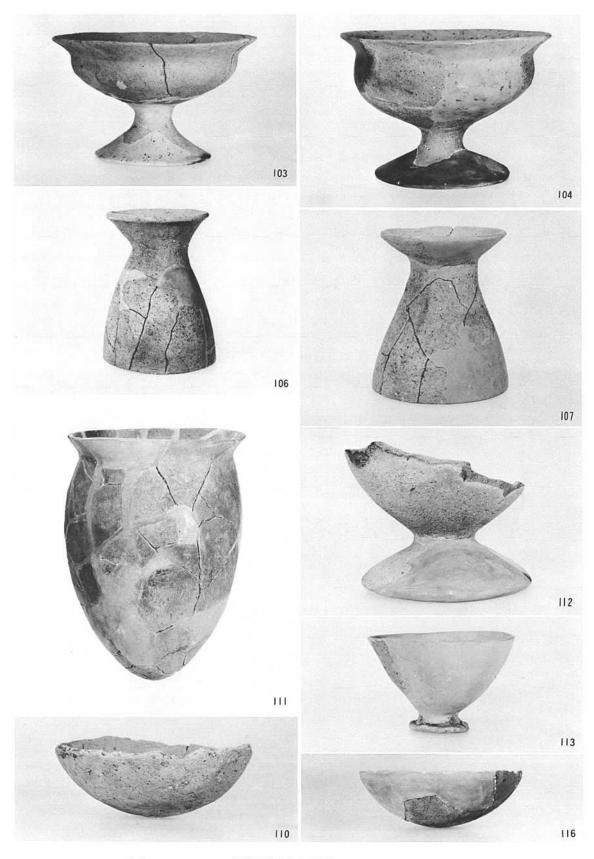
番上II-6 5·6号住居跡出土土器



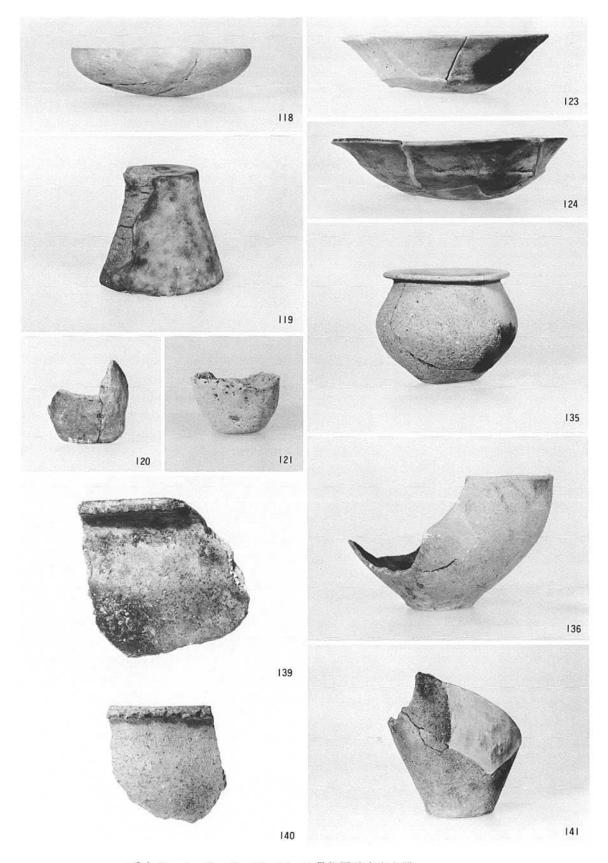
番上II-6 6号住居跡出土土器



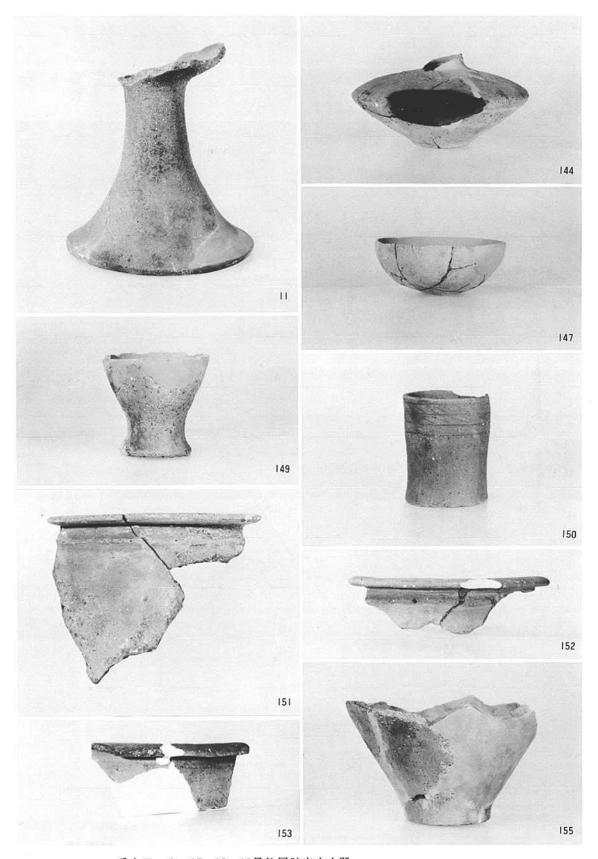
番上II-6 6号住居跡出土土器



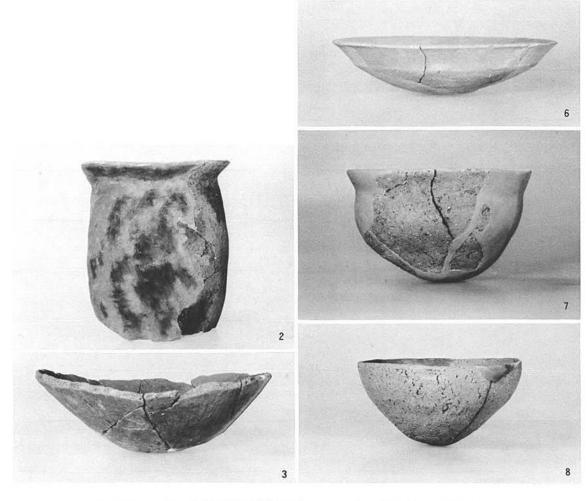
番上II-6 6·7号住居跡出土土器



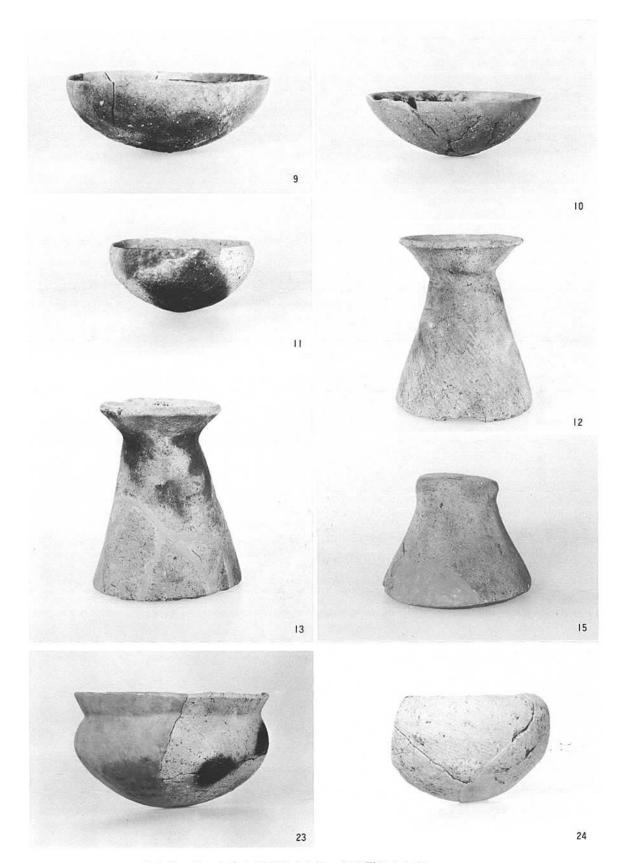
番上 II - 6 8 · 9 · 12 · 14 · 15号住居跡出土土器



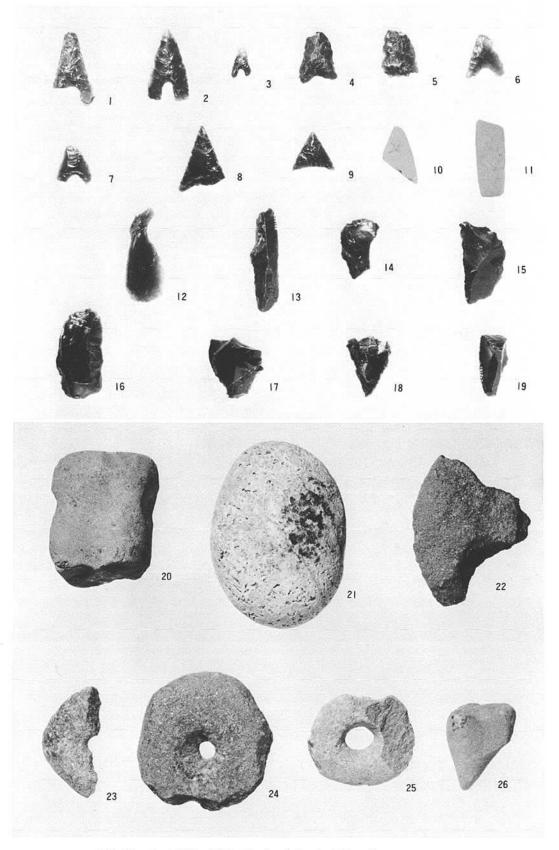
番上II-6 17·18·19号住居跡出土土器



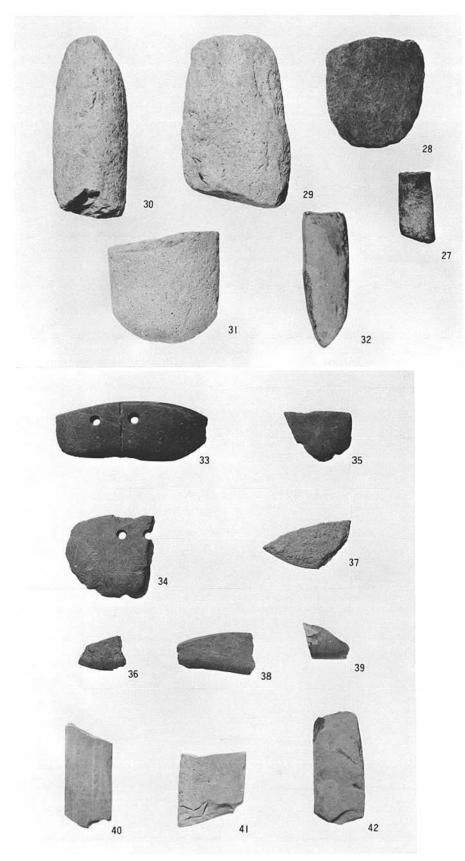
Ⅰ 番上 II - 6 1 号土器溜(東から) 2 1 号土器溜出土土器



番上II-6 1号土器溜出土土器・包含層出土土器

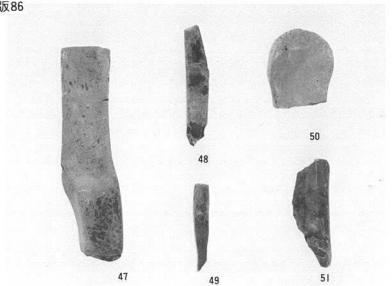


番上II-6 石鏃・削器・敲石・すり石・環状石斧

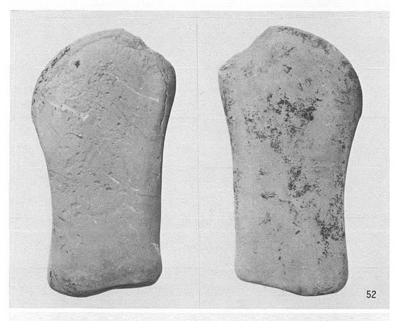


I 番上II-6 石斧

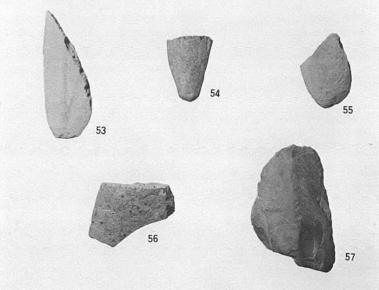
2 番上II-6 石庖丁・石鎌・石斧



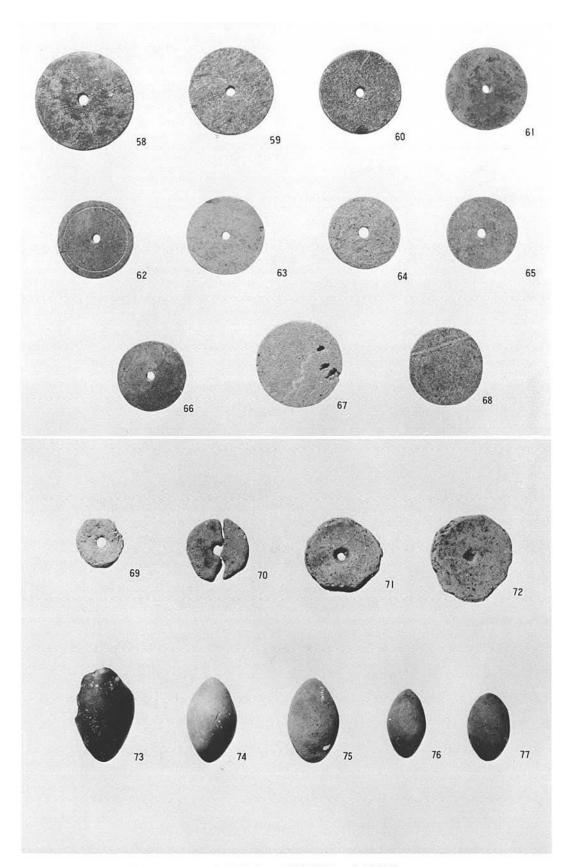
Ⅰ 番上II-6砥石



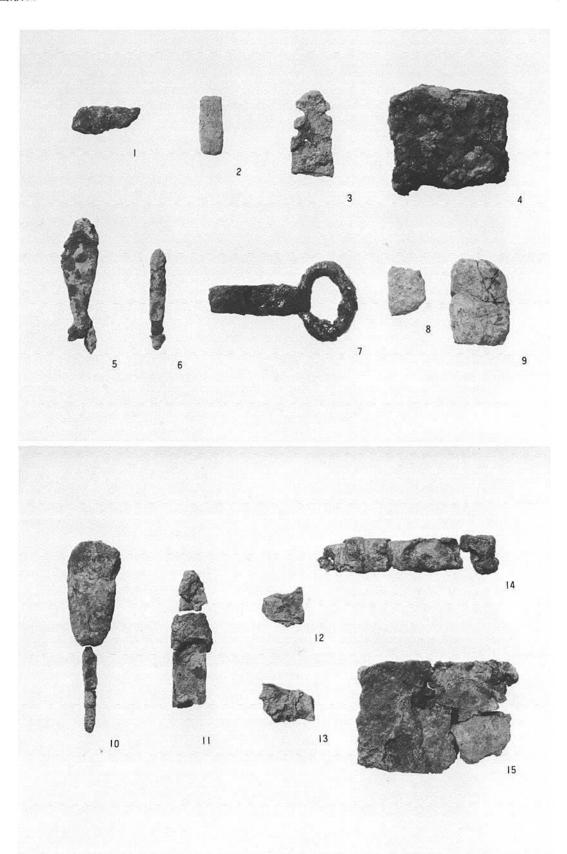
2 番上II-6 砥石



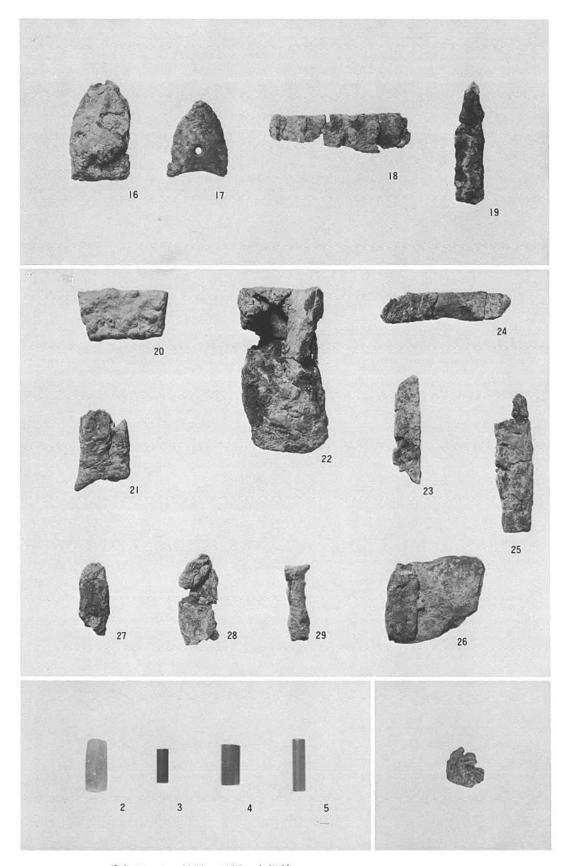
3 番上II-6石剣・石戈



番上II-6 石製紡錘車・土製紡錘車・土製投弾



番上II-6 鉄器



番上II-6 鉄器・玉類・水銀滓



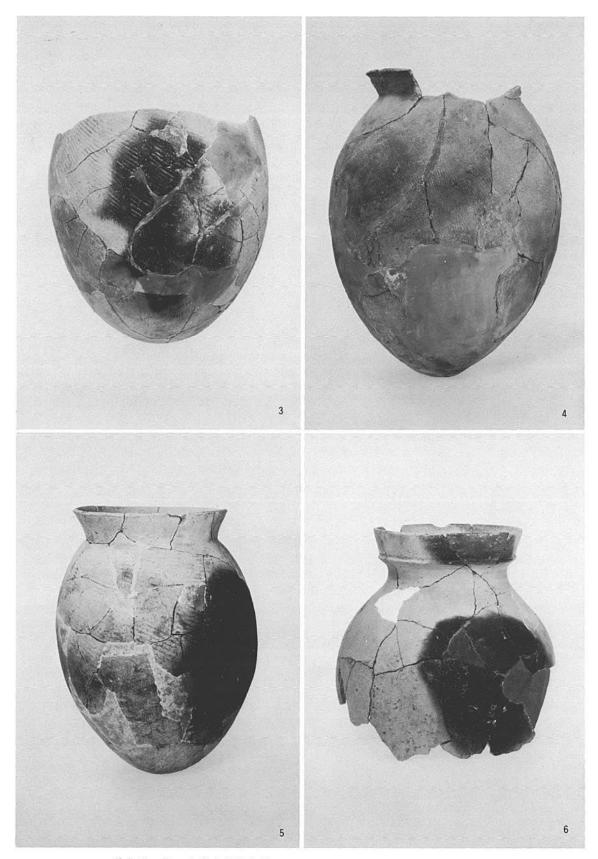


Ⅰ 番上II-6 2号土器溜 2 土器溜下石積

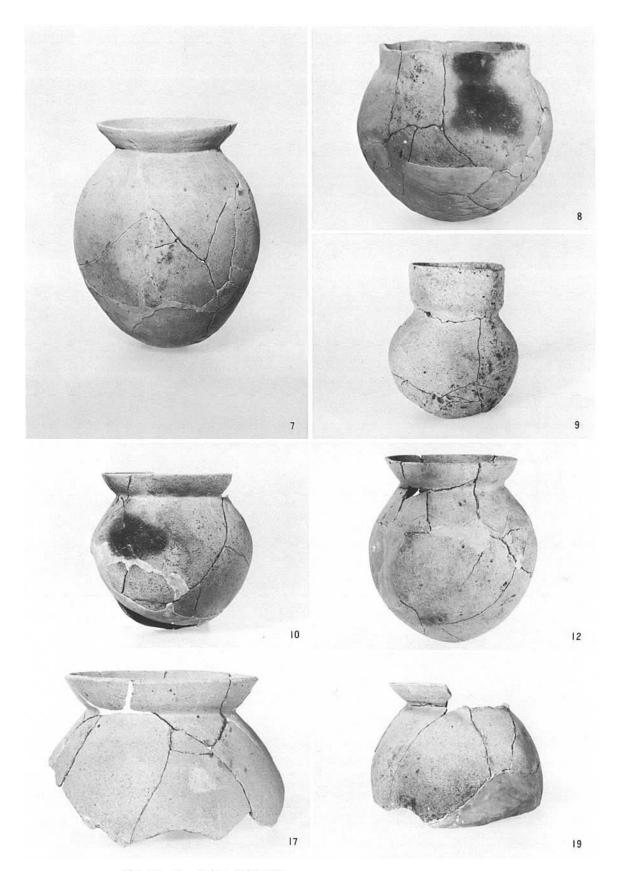




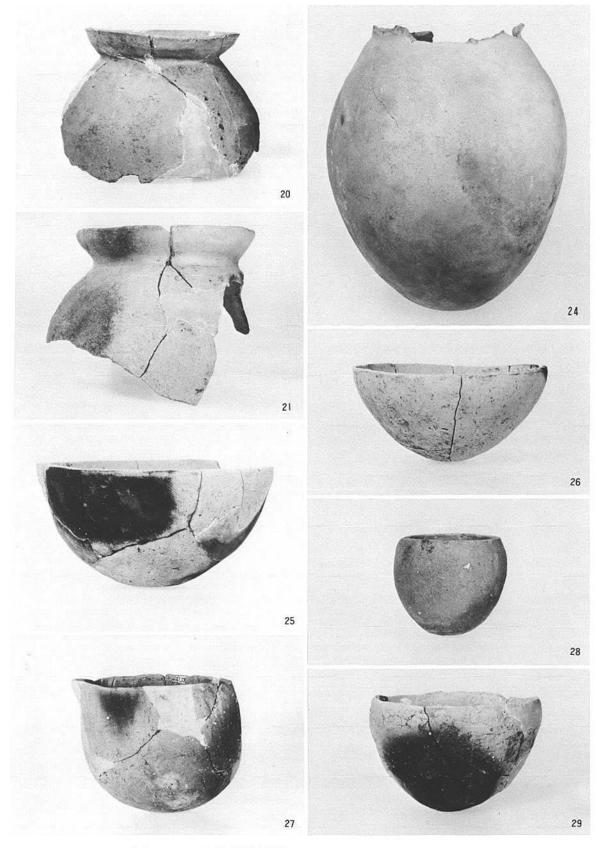
番上 II - 6 3 号土器溜 2 2 号土器溜土器



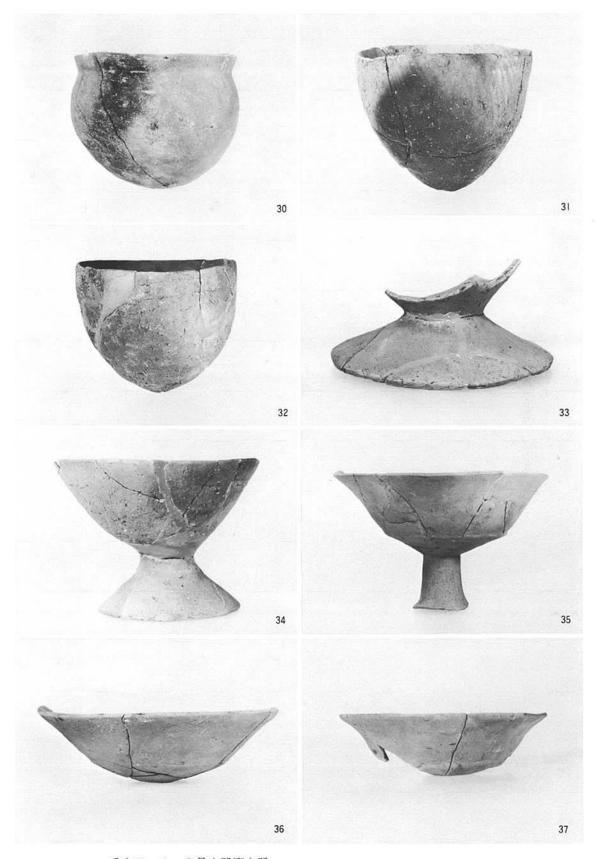
番上II-6 2号土器溜土器



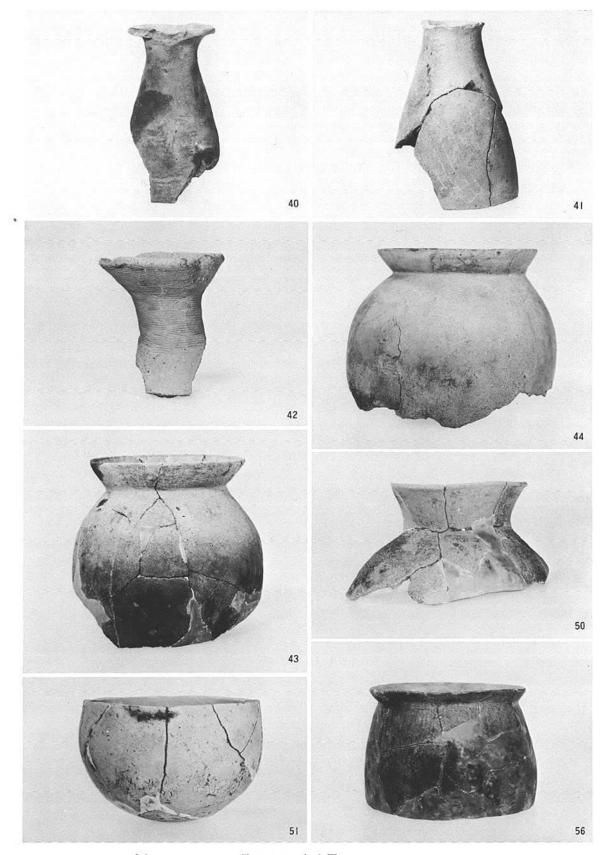
番上II-6 2号土器溜土器



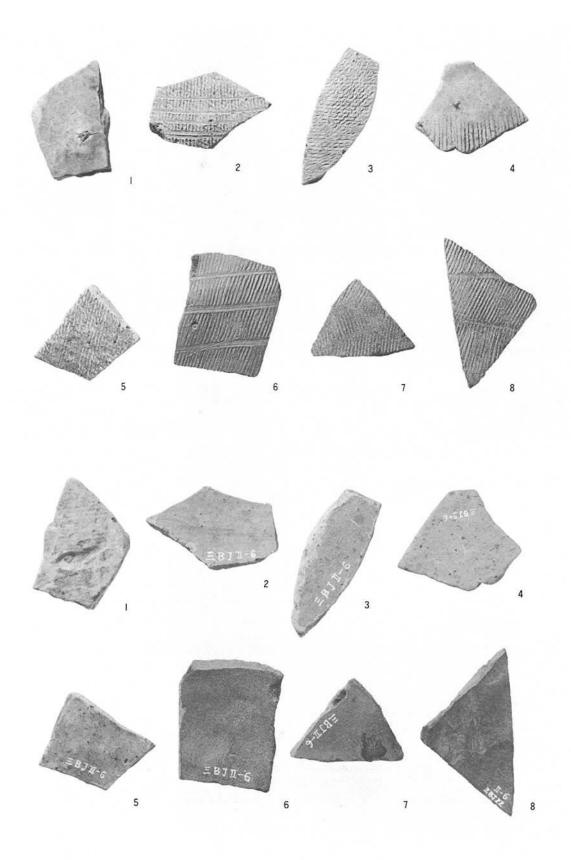
番上II-6 2号土器溜土器



番上Ⅱ-6 2号土器溜土器



番上II-6 2・3号土器溜・包含層土器



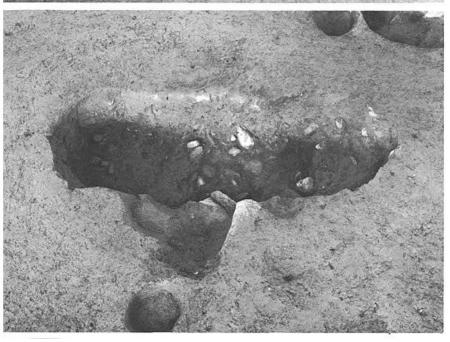
番上Ⅱ-6 陶質土器 (下は内面)



8

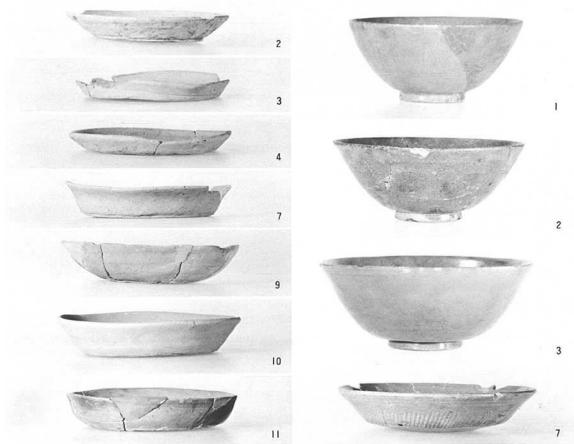


2



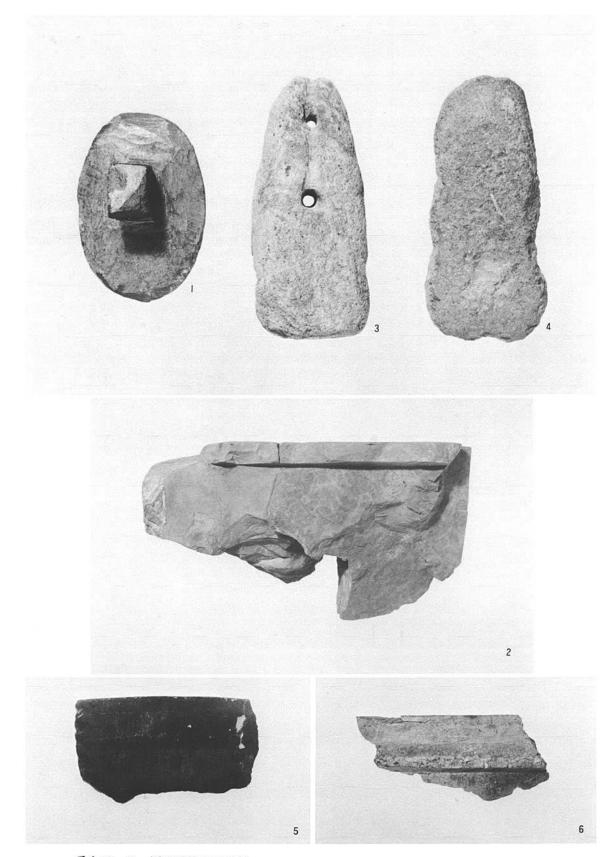
- Ⅰ 番上Ⅱ-6 1・2号土壙墓 (南西から)
- 2 1号土壙墓(北西から)
- 3 2号土壙墓(南東から)



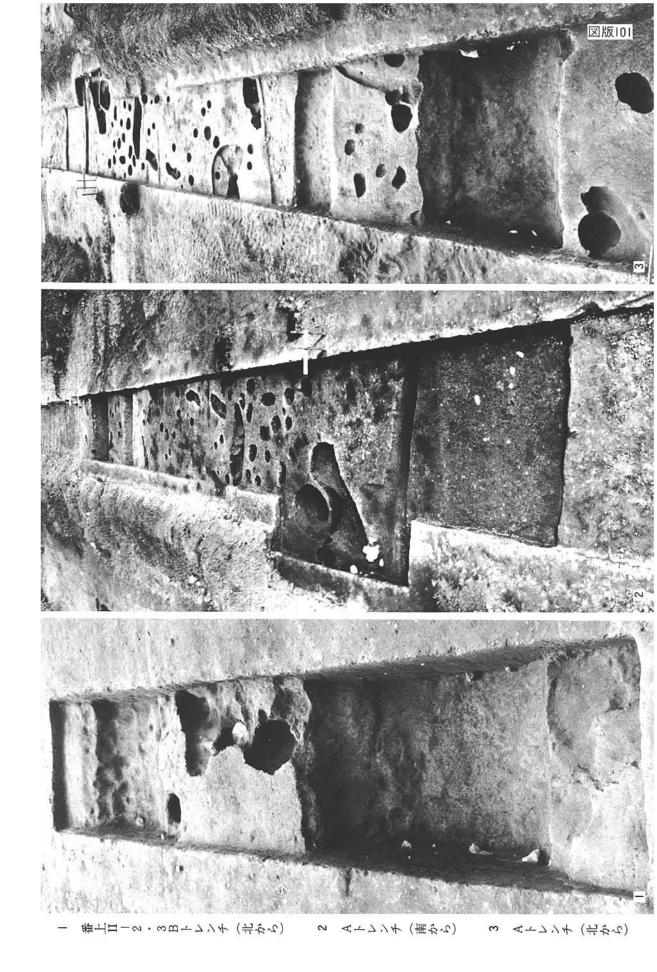


Ⅰ 番上Ⅱ-6 3号土壙墓(南から)

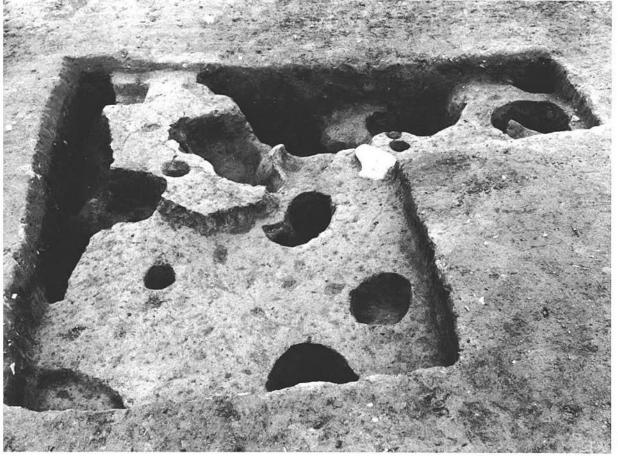
2 土師器・磁器



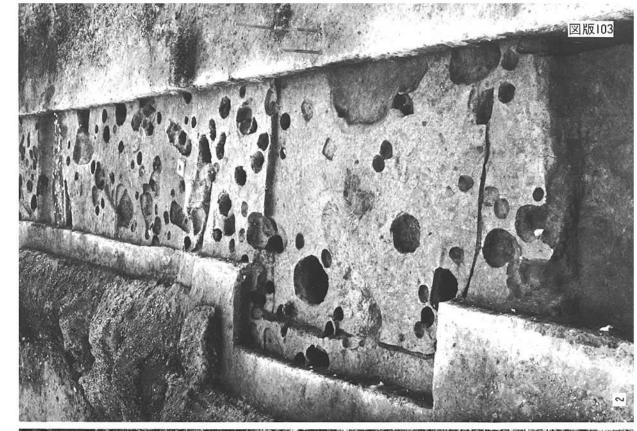
番上II-6 歴史時代の石器類

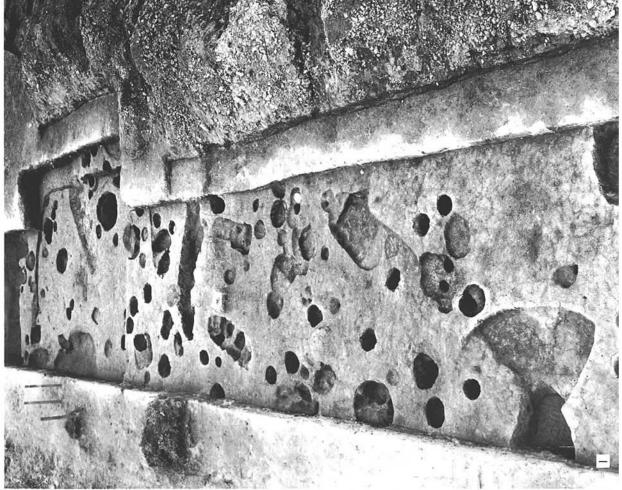






(1) 番上II-2 Cトレンチ (2) 同上





- Aトレンチ下層 (南から) o 同上 (北から)



- Ⅰ 番上Ⅱ-3溝Ⅰと住居跡
- 2 住居跡全景





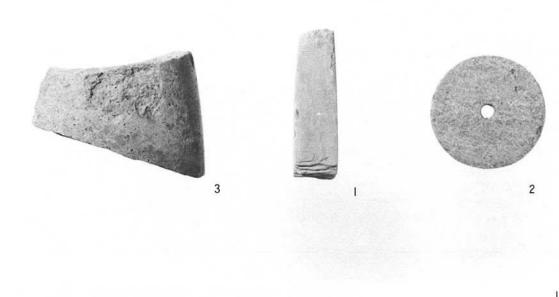


I Aトレンチ井戸・土壙墓・溝2 2 Aトレンチ土壙墓





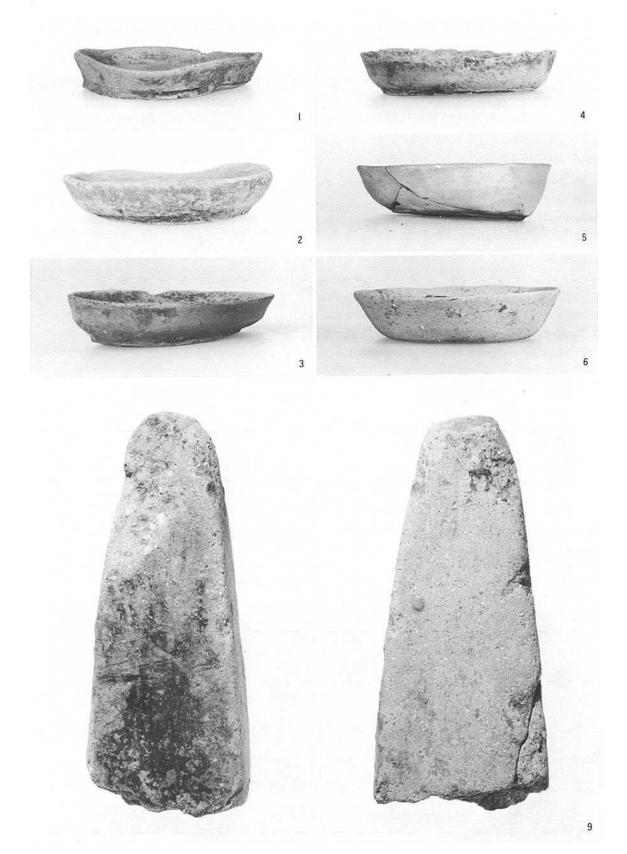
I Aトレンチ井戸 2 同上



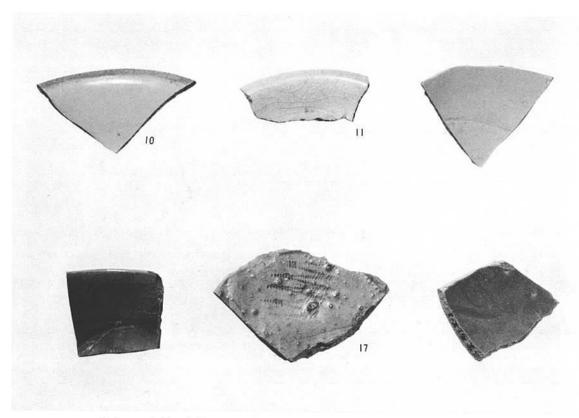


2

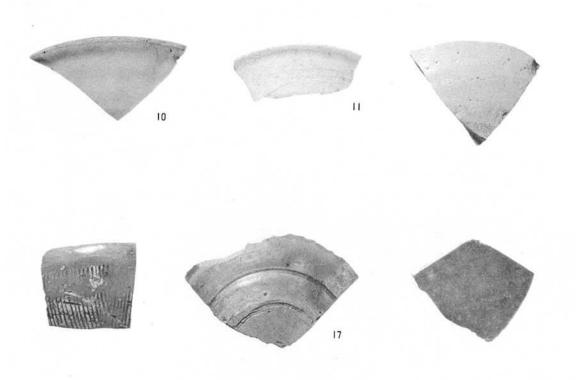




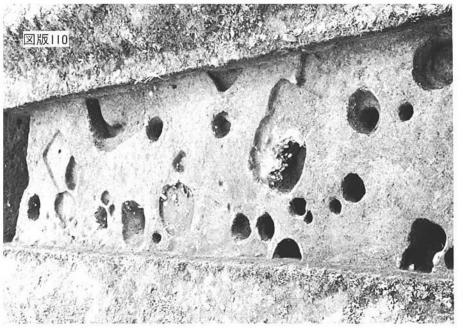
Cトレンチ土師器 (1~5)・Aトレンチ井土土師器 (6)・溝4支脚



Cトレンチ輸入中国陶磁器 (内面)



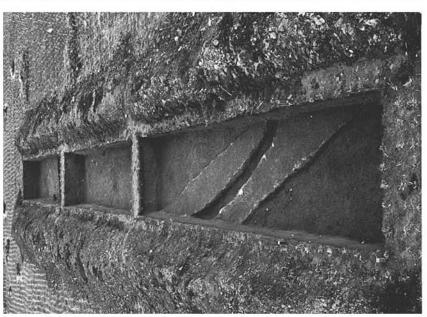
同上(外面)



3



0



1 仲田皿-4トレンチ(西から)2 仲田皿-4aトレンチ 3 柿木-3トレンチ

福岡県文化財調査報告書第58集

昭和55年3月31日

発 行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6-29

印刷川島弘文社

福岡市東区箱崎埠頭 六丁目 4 一 4

三雲遺跡 I 付図

第 4 図

第 5 図



